

ISSN : 1346-0676

The Japan Branch Bulletin

The Dickens Fellowship

XXX



ディケンズ・フェロウシップ日本支部
年報 第30号

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

年 報

第 30 号



The Japan Branch Bulletin
The Dickens Fellowship

XXX
2007

***The Japan Branch Bulletin
of the Dickens Fellowship***

No. 30

ISSN : 1346-0676

Edited by Eiichi Hara and Yuji Miyamaru

Editorial Board

Keiji Kanameda	Ryota Kanayama	Eiichi Hara
Yumiko Hirono	Toyoko Matsumura	Midori Niino
Toru Sasaki	Fumie Tamai	Shiro Yamamoto

Typeset by Yuji Miyamaru

Published annually by the Japan Branch of the Dickens Fellowship
Department of English Literature
Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University
Kawauchi 27-1, Aoba-ku, Sendai, Miyagi-ken, 980-8576 Japan
Tel: +81-(0)22-795-5961
<http://www.soc.nii.ac.jp/dickens/>

©2007 The Japan Branch of the Dickens Fellowship

目次

巻頭言

ディケンズ生誕 200 周年に向けて 原 英一 1

論 文

『ピクウィック・ペーパーズ』の福音主義的側面 吉田 一穂 3
『オリヴァー・ツイスト』における「眠り」について 渡部 智也 16
フランス革命期を描く小説の歴史性
—『二都物語』と『ラ・ヴァンデ』を中心に 矢次 綾 31

書 評

ディケンズ (原作) 土屋啓之助 (監督)
テレビ放映 / DVD ボックス『さすらいの少女ネル』 宮丸 裕二 42
エリザベス・ジェイムズ (著) 高橋裕子 (訳)
『図説チャールズ・ディケンズ』 廣野 由美子 51
Malcolm Andrews, *Charles Dickens and His Performing Selves:
Dickens and the Public Readings* 松本 靖彦 56
Osamu Imahayashi, *Charles Dickens and Literary Dialect* 堀 正広 63
Jane H. Berard, *Dickens and Landscape Discourse* 三宅 敦子 69
田中孝信『ディケンズのジェンダー観の変遷 —中心と周辺のせめぎ合い』
. 中村 隆 72
G・M・ヤング (著) 松村昌家・村岡健次 (訳)
『ある時代の肖像 —ヴィクトリア朝イングランド』 宇佐見 太市 76
川本皓嗣・松村昌家 (編)『ヴィクトリア朝英国と東アジア』 . . . 井野瀬 久美恵 80

Fellowship's Miscellany

『ディケンズ鑑賞大事典』の刊行を終えて 西條 隆雄 86
The CD's CD-ROM Was Not Built in a Day 松岡 光治 91
二人の先哲 寺内 孝 96
Dickens Glossary 清水 英秋 103
ディケンズの作品におけるイジメの問題 松岡 光治 108

News and Reports

第 101 回ディケンズ・フェロウシップ国際大会 西條 隆雄 123

2006 年度 秋季総会	・ ・ ・ ・ ・	131
2007 年度 春季大会	・ ・ ・ ・ ・	137

特別寄稿

Dickens and Gad's Hill Place	・ ・ ・ ・ ・ Takeshi Terauchi	145
ディケンズと素人演劇活動 —演劇活動と創作の新領域	・ ・ ・ ・ ・ 西條 隆雄	159
ディケンズの速記と人物造形	・ ・ ・ ・ ・ 松本 靖彦	171
慈善活動家としてのディケンズ —ユーレイニア・コテージへの評価	武井 暁子	183

ディケンズ・フェロウシップ日本支部規約	・ ・ ・ ・ ・	201
『年報』への投稿について	・ ・ ・ ・ ・	203

お詫びと訂正	・ ・ ・ ・ ・	204
--------	-----------	-----

追悼 フィリップ・コリンズ教授	・ ・ ・ ・ ・ 西條 隆雄	205
村山敏勝博士	・ ・ ・ ・ ・ 宮丸 裕二	207

フェロウシップ会員の執筆業績 (2006 ～ 2007)	・ ・ ・ ・ ・	210
------------------------------	-----------	-----

お問い合わせ先	・ ・ ・ ・ ・	215
役員一覧	・ ・ ・ ・ ・	215

『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』総索引		
「出版掲載順」	・ ・ ・ ・ ・	216
「執筆者順」	・ ・ ・ ・ ・	238

編集後記	・ ・ ・ ・ ・	262
------	-----------	-----

CONTENTS

Editorial

Towards the Bicentenary of Dickens's Birth	・ ・ ・ ・ ・ Eiichi Hara	1
--	-----------------------	---

Articles

The Evangelical Aspect of <i>The Pickwick Papers</i>	・ ・ ・ ・ ・ Yoshida Kazuho	3
Sleep in <i>Oliver Twist</i>	・ ・ ・ ・ ・ Tomoya Watanabe	16
Historicity of the French Revolution Novels: <i>A Tale of Two Cities</i> and <i>La Vandée</i>	・ ・ ・ ・ ・ Aya Yatsugi	31

Reviews

<i>Wandering Girl Nell</i> , based on Dickens, dir. Keinosuke Tsuchiya	・ ・ ・ ・ ・ Yuji Miyamaru	42
Elizabeth James, <i>Charles Dickens</i> , trans. Hiroko Takahashi	・ ・ ・ ・ ・ Yumiko Hirono	51
Malcolm Andrews, <i>Charles Dickens and His Performing Selves: Dickens and the Public Readings</i>	・ ・ ・ ・ ・ Yasuhiko Matsumoto	56
Osamu Imahayashi, <i>Charles Dickens and Literary Dialect</i>	・ ・ ・ ・ ・ Masahiro Hori	63
Jane H. Berard, <i>Dickens and Landscape Discourse</i>	・ ・ ・ ・ ・ Atsuko Miyake	69
Takanobu Tanaka, <i>The Transition of Dickens's View of Gender: Conflict between the Centre and the Margin</i>	・ ・ ・ ・ ・ Takashi Nakamura	72
G. M. Young, <i>Victorian England: Portrait of an Age</i> , trans. Masaie Matsumura and Kenji Muraoka	・ ・ ・ ・ ・ Taichi Usami	76
Koji Kawamoto, and Masaie Matsumura, eds., <i>Victorian Britain and East Asia</i>	・ ・ ・ ・ ・ Kumie Inose	80

Fellowship's Miscellany

Editing The Reader's Encyclopedia of Charles Dickens	・ ・ ・ ・ ・ Takao Saijo	86
The CD's CD-ROM Was Not Built in a Day	・ ・ ・ ・ ・ Mitsuharu Matsuoka	91
To the Memory of my Dear Two Professors: Shigekiyo Kawahara and Sylvère Monod	・ ・ ・ ・ ・ Takashi Terauchi	96
Dickens Glossary	・ ・ ・ ・ ・ Hideaki Shimizu	103
Bullying in the Works of Dickens	・ ・ ・ ・ ・ Mitsuharu Matsuoka	108

News and Reports

The 101st International Dickens Fellowship Conference in Philadelphia	・ ・ ・ ・ ・ Takao Saijo	123
---	-----------------------	-----

Annual General Meeting of the Japan Branch 2006	・ ・ ・ ・ ・	131
The Japan Branch Spring Conference 2007	・ ・ ・ ・ ・	137

Special Guest Articles

Dickens and Gad's Hill Place	・ ・ ・ ・ ・ Takashi Terauchi	145
Dickens and Amateur Theatricals: Their Effect on his Novel Writing	・ ・ ・ ・ ・ Takao Saijo	159
Characterization as a Result of the Use of Shorthand in Dickens's Writing	・ ・ ・ ・ ・ Yasuhiko Matsumoto	171
Dickens and Charity: An Evaluation of Urania Cottage	・ ・ ・ ・ ・ Akiko Takei	183

Agreements, Japan Branch of the Dickens Fellowship	・ ・ ・ ・ ・	201
In Memoriam		
Professor Philip Collins	・ ・ ・ ・ ・ Takao Saijo	205
Doctor Toshikatsu Murayama	・ ・ ・ ・ ・ Yuji Miyamaru	207
Publications by Members of the Japan Branch, 2006–2007	・ ・ ・ ・ ・	210
Index of the <i>Bulletin</i> , No. 1 (1978) – No. 30 (2007)	・ ・ ・ ・ ・	216

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 (2006-2007)

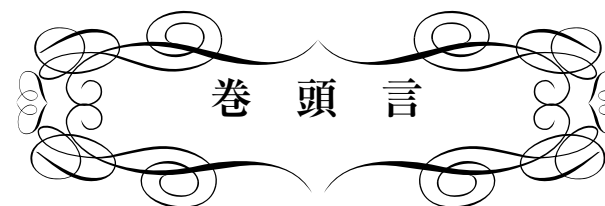
2006 年度秋季総会
日時：2006 年 10 月 7 日 (土)
場所：東北大学 川内南キャンパス
文科系総合研究棟 11 階会議室

プログラム

開会 (14:00 ~ 14:10)
開会の辞 日本支部長 原英一 (東北大学教授)
議事 (14:10 ~ 14:45)
進行 日本支部長 原英一
研究発表 (14:50 ~ 15:50) 司会 田中孝信 (大阪市立大学教授)
渡部智也 (京都大学大学院生) 「*Oliver Twist* における「眠り」について」
大森幸享 (甲南大学大学院生) 「『二都物語』論—カーターの自己犠牲にみる自意識の働き」
講演 (16:30 ~ 17:50) 司会 原英一 (東北大学教授)
西條隆雄 (甲南大学教授) 「ディケンズと素人演劇活動」
閉会 (18:00)
閉会の辞 日本支部長 西條隆雄
懇親会 (18:30 ~ 20:30) 会場：東北大学 勝山館

2007 年度春季大会
日時：2007 年 6 月 9 日 (土)
会場：東京理科大学 野田キャンパス 大講義棟
プログラム

開会 (13:50 ~ 14:10)
開会の辞 日本支部長 原英一 (東北大学教授)
研究発表 (14:10 ~ 15:30) 司会 金山亮太 (新潟大学准教授)
Karen Ohshima (大島カレン; 島根大学准教授) 「The Muddled State of Education and Relationships in *Hard Times*」
加藤匠 (明治大学非常勤講師) 「『完全なるイギリスの主婦』を目指して—*Our Mutual Friend* から考えるディケンズの女性表象」
講演 (15:50 ~ 17:40) 司会 松村豊子 (江戸川大学教授)
松本靖彦 (東京理科大学准教授) 「ディケンズの速記と人物造形」
武井暁子 (山口大学准教授) 「慈善活動家としてのディケンズ—*Urania Cottage* の関わりを中心に」
懇親会 (18:15 ~ 20:30) 会場：東京理科大学大学 カナル会館



Editorial

ディケンズ生誕 200 年に向けて
Towards the Bicentenary of Dickens's Birth

日本支部長 原 英一

Eiichi HARA, Honorary Secretary to the Japan Branch

日本支部がその総力をあげて取り組んでいた『ディケンズ鑑賞大事典』が
ついに出版された。日本支部の実力を証明するものであり、今後長い期間にわ
たって日本でのディケンズ研究の基礎となることだろう。編集の中心になって
多大の貢献をされた西條隆雄前支部長に対して、支部会員を代表して心からの
感謝を捧げたいと思う。

このような大事業を完成したばかりであるが、ふと気づくとディケンズ生
誕 200 年にあたる 2012 年が近づきつつある。私の手元に 1970 年 6 月号の『英
語研究』という雑誌がある。当時、研究社から出ていたもので、この号は「デ
ィケンズ没後 100 年記念号」だった。開いてみると巻頭には小池滋氏と川本静
子氏の対談が載っている。写真もあるが、当然のことながらお二人ともたいへ
ん若い。小池氏は『幸せな旅人たち』というピカレスク小説論ですでにその才
能を認められており、川本氏は『イギリス教養小説研究 — 紳士から芸術家へ』
を間もなく上梓しようとする頃で、イギリス小説研究の最先端を走る俊英同士
だった。あらためて対談を読みながら、このお二人の研究が日本のディケンズ
研究に寄与するところが実に大きかったことを感じる。私自身もさまざまな形
で影響を受けた。その他にも、この記念号には、没後百年を記念してコラムな
どの記事が満載されており、見開きになっているディケンズ関係年表などはコ
ンパクトによくまとまっているので、講義のときに何度も使用させていただ
いている。当時学生としての私にとって、小池氏も川本氏もはるか雲の上の存在でし
かなかったが、ディケンズは読み始めていた。最初に読んだのが『オリヴァー・
トゥイスト』だったのか『大いなる遺産』だったのか記憶が判然としないのだ
が、アートフル・ドジャヤーやジョーの英語に四苦八苦していた。ディケンズの
原文をいきなり読もうとする無謀な行為に私を駆り立てた要因は二つあったよ

うに思われる。一つは、デイヴィッド・リーンがこの2作品を映画化したものを高校生のときに観て、大いに感銘を受けたことである。もう一つは、没後百年という記念すべき年にめぐり逢ったことだったのだろう。大学院に進学して本格的にディケンズ研究に取り組み初めてみると、英米でも記念論文集や書籍がいろいろと出版され、ディケンズ研究が大いに盛んになっていたことを知ったのだった。

それから37年という月日が流れた。先日、チャールズ・ディケンズ博物館理事長のポール・シュリッケ氏から、2012年に向けての準備について、電子メールが届いた。すでにさまざまな行事が計画されており、それらの調整を行うため、ディケンズ博物館ではワーキング・グループを発足させて、ウェブサイト (<http://www.dickens2012.com>) もたち上がったとのこと。シュリッケ氏によると、同年開催の第106回ディケンズ・フェロウシップ国際大会の開催場所はディケンズ生誕の地ポーツマス、開催時期は夏季と予定されている。一つ注意しなければならないのは、この2012年がロンドン・オリンピックの年でもあることだ。しかもオリンピックは7月27日が開会式という予定だから、もし開催時期が重複すると、ロンドンとその周辺では宿泊場所を確保するのがかなり困難になるだろう。ポーツマスがどのような状況になるかは分からないが、今から入念に準備する必要があることは間違いない。オリンピックと生誕200年祭をどちらも楽しみたいという会員諸氏も、いろいろ作戦を練らなければならないだろう。決して気の早い話ではない。

お祭りもとても楽しみではあるけれど、没後百年のことを思い出してみると、英米で、いや世界中で、ディケンズの再評価がまたまた活発になることが十分に予想される。この30数年間は、文学批評・研究が理論の隆盛によって大きく変容し、それに伴ってディケンズの批評・研究もさまざまに展開、進展してきた。(ディケンズ批評の歴史は『ディケンズ鑑賞大事典』にまとめられている。)日本支部の会員たちも、英米の学術誌に論文を発表するようになり、この流れに重要な貢献をしてきている。国際性、認知度という点で、日本のディケンズ研究は一世代前とは大きく変わっているのだ。このような状況を背景として、日本支部としても2012年に向けて、単なるお祭りだけではなく(フェロウシップの精神からしてももちろんこれも欠かせないが)、学問的事業を企画してもよいのではないだろうか。具体的には論文集などが考えられる。本格的なものを作るためにはかなりの時間を要することが予想されるから、来年あたりから準備にとりかかる必要があるだろう。会員諸氏のご意見やご提案をいただきたいと思う。

この一年間に日本支部は二人の大きな存在を失った。昨年の秋季総会が仙台で開催されていたちょうどその頃、村山敏勝氏が病に倒れていた。村山氏は学問研究へののめり込み方が桁外れの人だった。これからの日本支部を担う人材をここで失ったことは私たちにとって大きな損失である。さらに、つい最近、間二郎氏の訃報が届いた。言うまでもなく間氏は日本支部を長年にわたって支えてきた方であり、『我らが共通の友』(ちくま文庫)の翻訳など多くの貢献をされてきた。お二人の冥福を祈りたい。

『ピクウィック・ペイパーズ』の福音主義的側面

The Evangelical Aspects of *The Pickwick Papers*

吉田 一穂

Yoshida KAZUHO

序

『ピクウィック・ペイパーズ』(1837)は、チャールズ・ディケンズの最初の小説で、チャップマン・アンド・ホール(Chapman and Hall)社によって1836年4月から1837年11月まで(1837年6月は除く)、シーマー(Robert Seymour; 1798–1836) [Part 1 と Part 2], バス(Robert William Buss; 1804–75) [Part 3], ブラウン(Hablot Knight Browne; 1815–82)の挿絵つきで出版された。

『ピクウィック・ペイパーズ』はウォルター・アレン(Walter Allen)が述べているように、ディケンズの作品の中で最も注目し値する作品の一つであり、多くの人々にとってディケンズの序論とも言える作品であり、快活さ、にぎやかさ、慈善の心が見られる(Allen 20)。一方で、アンガス・ウィルソン(Angus Wilson)が、「部分的にはあまりにもお粗末な箇所があり、全体としては、今世紀の大人の読者が読みそうなものとはおよそかけ離れている」(Wilson 115)と指摘しているように、支離滅裂で拙劣な部分があることは否めない。グラハム・スミス(Grahame Smith)は、シーマーの自殺の後、ディケンズが不安定な気持ちになっていて、彼の不安がピクウィック氏の人物描写における拙劣な表現の原因であることを指摘しているが(Smith 47)、作品が支離滅裂に感じられる原因は、やはり、作品が即興の産物であったことにある。『ピクウィック・ペイパーズ』の場合、出版社から依頼がきたのが1836年2月10日、それを2月16日に受諾して、2月18日には書き始め、3月31日に第一号の刊行となったので、他の作品のように十分な計画と構成を整える時間がなかった。このことが作品のでき具合に影響を与えていることは間違いないが、支離滅裂な部分はあるものの、『ピクウィック・ペイパーズ』が全く統一感を欠いた作品でないことは明らかである。ダレスキー(H. M. Daleski)が指摘しているように、¹ 作品には後の作品に見られる社会批判の側面がある(Daleski 38)。それだけでなく、読

者に対する影響力ということを考えると、作品に教訓性があることを見落としてはならない。ディケンズは、巧みなストーリーテリング、すなわち、挿話や父と息子のテーマなどを用い、作品を通して読者に教訓を与えていると考えられるのだ。挿話や父と息子のテーマを通して作品を考え、教訓性を読み取る際、浮かび上がってくる作品の側面がある。それは、作品に福音主義的側面があることだ。福音主義派とは、1785年頃にメソディストが英国国教会から分離した後も、国教徒として留まった人々をいう。福音主義運動は、宗教的な一勢力として、1790年代から1830年代にかけて最も重要なものであった。福音主義が掲げる道徳的規範、忌避すべきもの、厳格な規律、人間がなすべき務めへの献身は、ヴィクトリアニズムと言ってもよく、社会に独特の道徳的気風を付与した。オールティック (Richard D. Altick) は、福音主義が、想像力を刺激して現実の知覚を誤らせると信じられていたがゆえに、小説を禁書目録の筆頭に挙げていたと述べる一方、ディケンズの『ピクウィック・ペイパーズ』が現れたとき、世俗的な小説に対する福音主義派の抵抗は緩和された、と指摘している (Altick 191)。ただオールティックはなぜ『ピクウィック・ペイパーズ』が現れたとき、世俗的な小説に対する福音主義派の抵抗が緩和されたのか詳述していない。これは、作品の中に福音主義的側面があるからではなかろうか。また、ロバート・ニューサム (Robert Newsom) は、『ピクウィック・ペイパーズ』の中心的テーマとしてクリスマスを読み取り、ゲイブリエル・グラブ (Gabriel Grub) をディケンズ初期の作品に見られるスクルージ (Scrooge) と考えているが (Newsom 67)、作品の福音主義的側面について具体的に述べていない。

本論文では、『ピクウィック・ペイパーズ』を挿話や父と息子のテーマから考え、作品の教訓性と教訓性から垣間見られる福音主義的側面について述べてみたい。

1.4 つの挿話

作品の教訓性を考えるにあたり、無視できない部分がある。それは作品に多く見られる挿話である。スミスは、『ピクウィック・ペイパーズ』は全てのディケンズの小説の中で最も挿話の多い作品である、と述べている (Smith 164)。作品においてそれぞれの挿話は全く関係がないというわけではなく、教訓性を持つという点で、関連性がある。もともとピクウィック・クラブの通信部は、彼らの旅行・調査、風俗習慣の観察、その冒険すべての正確な報告、地方の風景や地方におけるかわりあいがひきおこす物語と記録をすべて、折りにふれて、ロンドンのピクウィック・クラブに提出することを任務としているが、第2章でピクウィック氏がジングル (Jingle) に自身のことを説明しているように、

彼が「人間性の観察者」(‘an observer of human nature’; 11) であることを忘れてはならない。ディケンズが挿話を提示することの意味は、「人間性の観察者」であるピクウィック氏が物語に接することにより、人間性を考察するだけでなく、読者へ教訓を与えていることにあると考えられる。ここでは、4つの挿話について考えていきたい。

まず、第3章における陰気なジェミー (dismal Jemmy) によって語られる「旅役者の物語」(‘The Stroller’s Tale’) について考えてみたい。ジェミーが話す男は、低俗なパントマイムの役者で、常習の飲んだくれであった。彼は、放蕩で体を弱らせ、病気でやせおとろえる前の元気なころ、そうとういい俸給を受け取っていたが、酒場に通い続けることにより職にありつけず、パンにもこと欠く状態になる。ジェミーは、「もし彼が注意深く慎重な男だったら、彼は長い年月とはゆかずとも、少なくとも数年間は、それを受けつづけることができたでしょう。というのも、こうした人たちは、若死にするか、体を使いすぎて、生活のただひとつの資本になっている体力を永久に失ってしまうからです」(35)、「もし、彼が同じ道を進み続けたら、手当てを受けぬ病氣と絶望的な貧乏が彼の身を襲うことは、死それ自身と同じように、確実なことでした」(35)と語るが、ジェミーの語りは挿話において重要な意味を持っている。なぜならば、ジェミーの語りは、男の末路を暗示しているだけでなく、酒で身を滅ぼす危険性をも読者に訴えているからだ。ジェミーは男の病床を見舞い、彼の様子を読者に伝える。男は夢遊病者のようになり、劇場と居酒屋についてうわごとを言ったり空想したりし、発作を起こして死んでいく。妻を殴り、妻と子供に飢えの苦しみを味わわせたことに罪の意識を感じ、妻に復讐され殺されると感じている男の姿は、酒で身を滅ぼすと家族でさえ信じられなくなり、不幸になることを暗示している。「旅役者の物語」において、ディケンズは、酒は人生を愉快にさせるものである一方で、限度を超すと、人生や家庭を崩壊させてしまう危険性を持っているので、自制心が必要であることを示している。

次に第6章でピクウィック氏一行にディンダリー・デル (Dingley Dell) の牧師が話す「囚人の帰還」(‘The Convict’s Return’) について考えてみたい。牧師が語るのは、エドマンズ (Edmunds) の息子ジョン・エドマンズ (John Edmunds) についてであるが、牧師が父親のエドマンズが家族にもたらす悲劇についても語っていることを見落としてはならない。父親のエドマンズは、むつつりした、あらあらしい気質の悪人で、なまけ者で放縦、むごくて兇悪な性格を持っていて人々に避けられていた人物である。彼もまた、陰気なジェミーが語る役者のように、酒に溺れ、家族はその被害を受ける。息子のジョンは、自分のために、困窮していながら、父親からの虐待、暴力を忍んでくれて

いたにもかかわらず、母親の心を顧慮せず、墮落して世から捨てられた人間と仲間になり、盗難事件を起こし、逮捕され、拘禁され、裁判にかけられ、死刑の判決をくだされる。その後減刑を受け、14年間の流刑になるが、流刑地に行く前に、監獄の中庭に立って毎日毎日、愛情と懇願で強情な自分の息子の心をやわらげようとしていた母親が病気になって倒れる。牧師は、心にふりかかった懲罰が冷淡と無関心を装っていたジョンを狂乱状態に追いやったと説明するが、両者が監獄の壁にはばまれ会えないので、母親の赦しと祝福を監獄にいる息子のところへ持ってゆき、息子の厳粛な悔恨の保証と赦しをねがう熱烈な気持ちを彼女の病床へもたらす。母親は間もなく死ぬが、ジョン・エドマンズは14年間の刑期が終わると、生まれ故郷に帰ってくる。注目に値することは、牧師が教会に入ったジョンが見る聖餐台を説明するにあたり、「彼が子供としては尊敬し、大人としては忘れてしまった十戒をその前で何回もくり返して唱えた聖餐台」(48)と説明することである。ディケンズは、すでに母親の愛情を裏切り向こう見ずな生活を送っていたジョンについて説明する際、「人間性とは悲しいもの」(‘Alas for human nature!’; 76)と述べているので、十戒を持ち出すことにより、ジョンが十戒に背いていること、あるいはこれから背くことを印象づけている。ジョンは、父親と再会するが、父親にステッキで顔を激しく打たれたので、「おやじー悪魔め!」(‘Father-devil!’; 81)と言い、喉をつかみ絞め殺してしまう。すなわち、ジョンは、十戒の「あなたは盗んではならない」(Exodus 20:15)だけでなく、「父と母を敬え」、「あなたは殺してはならない」(Exodus 20:12-13)に背いたことになるのだ。牧師は最後に、この事件の後、ジョンが本当に心を改め、後悔し、謙虚になったと説明するが、この物語は、父親の存在がいかに子供に影響を与えるかを示しているだけでなく、いかなる状況にあろうと、子供は更生できるということを読者に教えている。また、神の律法に背いて神との正しい関係から墮落してしまった人間でも、悔い改めることにより、更生が可能であることを示している。ジョンの父親は、子供を殺す否定的な父親であるが、ディケンズはこの物語によって、子供を教育し、良心を呼びさます父なる神が存在することを印象づけていると考えられる。罪深い人間がいかに救われうるかを読者に示しているこの挿話は、救いは改心と神の意志への服従によって達成されるとする福音主義を思い起こさせる。

付け加えておきたいことは、ディケンズが「旅役者の物語」だけでなく「囚人の帰還」においてもヴィクトリア朝時代における酒の問題を取り上げていることである。より有害でないレクリエーションが都市のスラム街や工場都市で手に入らないとき、労働者の男性も女性も、泥酔することに唯一の慰めを見出していた。当時の犯罪報道は、過度の飲酒に起因した身体傷害や明白な謀殺に

まで及ぶ、残虐事件であふれている。² その道徳的な悪影響は別にしても、過度の飲酒は労働者の生産性を低下させ、常習欠勤を増大させるものであった。それゆえ、道徳的理由と実用主義的理由が一体となって、宗教団体は果てしない一連の絶対禁酒運動を支持したのである(Altick 184-85)。厳格な福音主義は風俗改善の一環として、飲酒の習慣が蔓延することを防ごうとした。特にメソディスト派は、アルコール依存症が労働者に深刻な影響を与えているとして、禁酒を訴えた。サム・ウェラー(Sam Weller)の義理の母親は、メソディスト派に入れ込んでいて、禁酒協会の月例会に出席している。³ ディケンズは自身の作品の中で禁酒を訴えてはいないが、⁴ 二つの挿話において、主に道徳的理由から酒の害を読者に訴えていると考えられる。

次に第11章でピクウィック氏が読むディングリー・デルの老牧師の原稿「狂人の手記」(‘A Madman’s Manuscript’)について考えてみたい。「狂人の手記」は、精神異常者の独房で書かれたものであるが、狂人は、彼の病気の進行を説明するだけでなく、病気が遺伝性のものであると説明する。狂人は、狂気の子孫に伝える運命をもった不幸な子を妻が死ぬ前に生み落とすかもしれないと考え、彼女を殺す。女性の兄弟のうちで一番傲慢な男が、妹が別の男を愛していたにもかかわらず、妹をむりやり狂人と結婚させようとした立役者であった。その男は、狂人の金と妹の悲運により陸軍の将校となったが、狂人の富を奪おうとした計画の主謀者であった。狂人は、傲慢な兄に対し、「この悪党め、お前のことはわかっていたのだ。わたしはわたしに対するお前のひどい陰謀を知っていたのだ。お前がむりに彼女をわたしと結婚させる前に、彼女の心は他の男と結ばれていたのをわたしは知っているのだぞ」(145)と言い、妻の兄を殺そうとするが、捕えられ、監禁状態に追いやられる。見落としてはならない点は、原稿の終わりのところに、説明が書かれていることである。その説明によると、不幸な男は、若いころに精力の使い方をあやまった有害な結果の一つの例であり、若い時代の考えなしな放縦・放蕩・道楽が熱病と狂乱状態を生み出したのであった。ジョン・R・リード(John R. Reed)は、「狂人の手記」について狂人が後悔していず、自身の行動を親ゆずりの性格のせいになしようとしていることに注目しているが(Reed 71)、責任を否定することにより、狂人が地獄のような状態に陥っていることは明らかである。彼は、恐怖につきまとわれ、哀れみを受けず、良心が欠如しているがゆえに残りの人生を幻覚症状で閉じこめられたようになっていて、これから先ますます悪い状況になるよう運命づけられている。「狂人の手記」の特徴は、「囚人の帰還」と同じように、親の子供に対する影響を暗示している一方で、極限的状况を見せることにより、狂人の絶望的状况は、たとえ親の影響があったとしても成長過程において、個人が良心と

自助努力により人生における諸問題を解決できる可能性を示していることにある。老牧師の説明、すなわち、狂人が放縦・放蕩・道楽により、自ら狂乱状態を招いたという説明は、「囚人の帰還」と同じように、牧師が説明することにより、教訓性を持つことになる。牧師の役割の一つは、父なる神の存在を伝えることであるので、ディケンズは、牧師に語らせることにより、父なる神の価値規範と良心の重要性を訴えているかのようである。また、牧師の説明は、無節制、放蕩生活に対し厳格な福音主義を示しているかのようでもある。

次にウォードル (Wardle) によってピクウィック氏に語られる「墓掘り男を盗み去った鬼たちの話」(‘The Story of the Goblins Who Stole a Sexton’) について考えてみたい。ゲイブリエル・グラブはふきげんで、片意地の無愛想な男で、柳細工の酒のびん以外の誰ともつき合わない男であった。グラブは、ある少年が陽気なクリスマスについての歌を歌っているのを耳にし、腹を立て声を抑えさせるためカンテラで彼の頭をたたく。ゲイブリエル・グラブは、夜の墓掘り仕事を終え休憩するが鬼が現れ、「クリスマス・イブにお前は何をしているのか?」、「他の人間が陽気な気分にいるとき、誰が墓をつくりそれを楽しんでいるのだ?」(400) と言い、少年が陽気になれ、自分が陽気になれないからと言って、その少年を嫉妬のこもった悪意でたたいた男を知っていると言う。鬼の王さまは、何枚かの絵を見せる。楽しそうな一家の様子、子供の死、子供の死後もけなげに陽気に暮らす人々を示した後、鬼の王さまが「お前はみじめな男だよ!」(403) と言ってゲイブリエル・グラブを蹴つとばした後、他の鬼たちも彼を蹴つとばす。鬼たちの行動は、明らかにゲイブリエル・グラブの生き方に対する懲罰の意味を持っている。鬼の見せる光景は、彼に多くの教訓を示す。ゲイブリエル・グラブは、一生懸命に働き、無知であっても貧困であっても陽気さを失わず、逆境に負けず、けなげに生きている人たちがいることを学び、他人の楽しみと陽気さにガミガミ怒る彼自身のような人間が、美しい地上の一番きたない雑草であることを学ぶ。ゲイブリエル・グラブは改心し、生まれ変わった人間になるが、重要なことは、鬼が『クリスマス・キャロル』(1843) においてスクルージを改心に導いた精霊のごとき役割を果たしていることである。リードは、『ピクウィック・ペイパーズ』の挿話の中に罪と赦しのパターンを見てとっている (Reed 71)。ゲイブリエル・グラブの話の特徴は、彼自身の父親は現れないが、鬼が父親のごとく彼に懲罰をもたらし、改心に導くことである。「狂人の手記」の狂人は、狂気を遺伝の責任にし、教えを学ぶことなく、自らまねいた地獄にとどまったままである一方 (Reed 71)、ゲイブリエル・グラブの話は、彼自身が学び改心するがゆえに救いがあると言える。

2 父と息子のテーマ

ここで、『ピクウィック・ペイパーズ』に見られる父と息子のテーマに目を向けてみたい。先に述べた「囚人の帰還」と「狂人の手記」だけでなく、『ピクウィック・ペイパーズ』において顕著なことは、ディケンズの自伝的部分が見られることである。その自伝的部分とは、ディケンズ自身のマーシャルシー (Marshalsea) 監獄と父親の記憶である。ディケンズの父親 (John Dickens) は、生来陽気な人で仕事熱心であったが、経済観念に乏しい人であった。1824 年 2 月 20 日とうとう 40 ポンドの借金が払えないために、父親は逮捕され、マーシャルシー債務者監獄に投獄されてしまった。この前に、チャールズは 12 歳でストランド (Strand) のハンガーフォード・ステアーズ (Hungerford Stairs) にあったウォレン (Warren) 靴墨工場へ働きに行っていたが、父親が投獄され、家族と離れて靴墨工場で働かなければならなかったことは、鋭敏で学問で身を立てようとしていた少年に、筆舌に尽くし難い苦悩と絶望感を与えたのであった。このとき受けたディケンズのトラウマ (傷痕) は、生涯彼の心につきまとうことになった。ディケンズのこのときの心境は、『デイヴィッド・コパフィールド』(1850) においてデイヴィッドが語るマードストーン=グリンビー (Murdstone and Grinby's) 商会でこきつかわれる下働き小僧という地位からくる屈辱感や情けない気持ちに読み取れる。靴墨工場でのディケンズの体験は、ディケンズがいかに家庭が重要であるか、また、父親の存在がいかに家庭の中で重要であるか、子供の立場から知るきっかけとなったできごとであったと考えられる。

ディケンズのマーシャルシー監獄と父親の記憶は、形を変え『ピクウィック・ペイパーズ』に現れていると考えられる。第 21 章の挿話「奇妙な依頼人に関する老人の話」(‘The Old Man’s Tale about the Queer Client’) において、マーシャルシー監獄は次のように描写されている。

In the Borough High Street, near Saint George’s Church, and on the same side of the way, stands, as most people know, the smallest of our debtor’s prisons, the Marshalsea. Although in later times it has been a very different place from the sink of filth and dirt it once was, even its improved condition holds out but little temptation to the extravagant, or consolation to the improvident. The condemned felon has as good a yard for air and exercise in Newgate, as the insolvent debtor in the Marshalsea Prison. (284)

この引用において、老人は、浪費家にとってマーシャルシー監獄がいかに居

心地の悪い場所であるかを伝えている。ディケンズは、老人の言葉を通して自身の父親とかつての記憶を復元しているかのようだ。ただディケンズは、かつての記憶を利用しているものの想像力により全く別の話を作り出している。

ヘイリング (Heyling) は、債務者監獄に入れられている間、息子と妻のメアリー (Mary) の死に直面する。妻が死んだ日の夜、ヘイリングは、神をおそろしい誓いの証人にし、妻の死と息子の死の復讐に献身することを誓う。ヘイリングは、親の財産が手に入るにより監獄から自由になるが、自身を監獄に投げこみ、妻と息子が慈悲を求めたとき、家から追い払った人物、すなわち、妻の父親に対する復讐計画を実行する。ヘイリングは老人の息子が海で溺れているのを見るが、助けず見殺しにするだけでなく、弁護士を使い、老人を破産に追いこみ、彼を死に追いやる。

この話では、幼い息子は、父親の影響を受け死んでしまうので、父親が釈放されなかったら、自身もそうになったかもしれないというディケンズの悲劇的ヴィジョンを感じさせる一方で、父親がいかに家族に影響を及ぼすかを示している。しかし、もっと重要なことは、ヘイリングが復讐心を持ち続けることにより、コントラストという観点からメイン・プロットと無関係ではないと考えられることだ。ピクウィック氏もまたフリート (Fleet) 監獄に入れられるが、彼は復讐を実践するヘイリングとは対照的に「赦し」を実践する。もともとピクウィック氏の投獄は、バーデル (Bardell) 夫人の誤解によるものである。ピクウィック氏は、「白雄鹿旅館」で靴みがきをしていたサミュエル・ウェラー (Samuel Weller) に注目し、彼を従者にすることを決め、その決意を女主人バーデル夫人に告げようとするが、彼女は結婚の申し込みだと勘違いしてしまう。その結果、ピクウィック氏は婚約破棄によりバーデル夫人に訴訟を起こされ、損害賠償と訴訟費用を支払わないことにより、フリート監獄に投獄されてしまう。フレッド・カプラン (Fred Kaplan) は、「フリート監獄におけるピクウィック氏の監禁は、ジョン・ディケンズの監禁と平行する部分はあるが、それを超越するものである」と指摘しているだけでなく、「ピクウィック氏は意識して道徳的な誠実さをつらぬくがゆえに、彼の自由の喪失は、より遠大な自由への上昇である」(Kaplan 83) と述べている。カプランが述べているように、ピクウィック氏は、損害賠償と訴訟費用を支払わないことにより、精神的自由を獲得するが、それ以上に重要なことは、彼が「復讐」に走らず「赦し」を実践することである。彼は自身を監禁状態へ追いやったバーデル夫人を赦し、彼女の訴訟費用を払うだけでなく、レイチェル・ウォードル (Rachael Wardle) のロマンティックな感情につけこみ、彼を欺いた悪党ジンゲル (Jingle) をも赦し、彼を更生させる。自身の子供時代の痛ましい経験について経済的に無能力な父親

の責任だと感じていたディケンズは、過去のできごとを作り変え、ピクウィック氏を周囲にとっての理想的父親にしている。それだけではなくディケンズは、ピクウィック氏の描写を通して、愛の実践の重要性和罪深い人間が改心できる可能性を示している。

メイン・プロットにおけるピクウィック氏の役割は、ピクウィック氏の行動を通して示される。このことは、『リトル・ドリット』(1857)において、「マーシャルシー監獄の父」と呼ばれていたウィリアム・ドリット (William Dorrit) とピクウィック氏を比較してみると明らかである。莫大な遺産の相続人となり監獄を出たウィリアムは、伯爵や侯爵とばかり付き合ったせいか娘たちにも實際上立派な立居振舞ができるよう望むが最も簡単な父親らしいことができない。彼は上品さへの夢のため、二人の子供の気質を損なうこともいとわないからだ。一方でピクウィック氏は、監獄を出た後、事務弁護士であるパーカー (Perker) にすすめられ、ひそかにアラベラ・アレン (Arabella Allen) と結婚したナザニエル・ウインクル (Nathaniel Winkle) と彼の父親との間を取り持つ。パーカーは、ピクウィック氏に息子のウインクルの将来の遺産相続の見込みは、父親のウインクル氏が前に変わらぬ親愛の情で彼の身を考えることだけにかかっていることを言う。また、パーカーは、父親のウインクル氏はピクウィック氏を、ある程度、息子の保護者・忠告者と考えてもよいこと、父親のウインクル氏に直接口頭で、できごとの全貌と自分がとった役割を知らせるのがピクウィックの当然するべきことであると言う。ここで、パーカーが言う言葉「保護者」(‘guardian’; 665) としてのピクウィック氏の役割に注目したい。ウインクルには実際の父親がいるので、ピクウィック氏の作品における役割は、救済手段としての役割であると言っている。

ディケンズは、第36章でピクウィック氏が読む文章「ブラダッド王子の伝説事実談」(‘The True Legend of Prince Bladud’)において、父と息子のテーマを扱っている。ラッド (Lud) 王には一人の息子がいるが、彼は王子を隣国の王の娘と政略結婚させようとする。しかし、王子はすでに恋におちいりアテネの貴族の娘と婚約していたのであった。ブラダッド王子は、父王にこのことを打ちあけるが、父王は怒りに怒り、息子を高い塔の中に閉じこめる。後に塔から出てさまよい歩いていた王子は、自身が結婚したいと思っていた貴族の娘がすでに同じ国の貴族と結婚したことを農夫から聞き、悲しみにくれる。彼は、「私の放浪がここで終わってくれたら！見当違いの希望と捨てられた愛情を私がいま嘆いているこのありがたい涙が、いつまでも平和に流れ続けたら！」(511)と言う。彼の願いは聞きとどけられ、異教の神々は、彼の願いをかなえる。王子の足もとで大地が開き、彼はその割れ目の中に沈み、その後すぐ、彼の頭上

でそれは永遠に閉ざされ、地面を通して彼の涙が湧きあがり、その後ずっとそれが噴き出しつづけることとなる。さらに、この手記の最後には、「今日にいたるまで連れ合いを得ることができなかったたくさんの初老の男女、それを得ようとしている同じくらいたくさんの若い人たちは、鉱泉水を飲むために、年々バス（Bath）におもむき、それから多くの力づけとなぐさめを得ている」（511）と書かれている。

この箇所は、父親との関係において不幸になった息子の話の後に続くことにより、ピクウィック氏の行動に影響を与える可能性がある。彼は、ひそかにアラベラと結婚したウィンクルと父親の間を取り持つが、「ブラダッド王子の伝説事実談」から影響を受けることにより、不幸な若者を救おうと考える可能性があるのだ。ディケンズは、父親により子供がいかに影響を受けるか、父親が子供を生かしもし殺しもすることを示すだけでなく、父親の犠牲とならないように、ピクウィック氏を救済手段として用いたと考えられる。救済手段としてのピクウィック氏を考えると、浮かび上がってくるのが「父なる神」としての役割である。例えば、旧約聖書において羊飼いの少年ダビデ（David）は、神によってイスラエルの第2代目の王として選ばれたにもかかわらず、サウル（Saul）王は自分の地位を奪ってしまう者だとしてダビデを捕らえにかかる。逃亡生活の間、ダビデは神を信頼し、困難を乗り越える。逃亡生活においてダビデの支えとなったのは、「父なる神」の保護である。

ディケンズはこのような保護者である「父なる」神としての役割をピクウィック氏に与え、救済手段として彼を用いたのではなかろうか？ またディケンズは、ピクウィック氏の行動を通して人間の理想的生き方、すなわち、他者の幸福に寄与する生き方を提示していると考えられる。⁵

ヴィクトリア朝時代において、福音主義が人々の思想に大きな影響を及ぼしていた。聖書の言葉が毎日家庭で目にされ、耳にされていた（家庭礼拝と聖書の朗読が、ヴィクトリア朝の家庭生活の日課に対して福音主義者たちのなした主要な貢献である）というだけではなかった。聖書からの引用が、教会や礼拝堂での説教に、日曜学校での学課に、平日の祈祷や信仰復興運動の集会での礼拝に、貫流していたのである。宗教の言語はまた、学校の中の言述に影響を与えた。ヴィクトリア朝の民衆教育の大部分は、非国教徒と英国国教会の宗教団体によって行われていた。その結果として、ごく幼い頃から、社会のあらゆる階級で、家庭においても学校においても、ヴィクトリア朝の人々は、今日ではほとんど想像も及ばないほど、聖書の言語と物語になじんでいたのである（Altick 191-92）。オールティックが指摘しているように、福音主義は、プロテスタントの敬虔主義の一種であり、教理や礼拝の形式よりも、むしろ人々の生

き方を重視した。人々は、来世の準備としての人生に関心を持っていた。聖書はこの上なく文字通りに解釈され、行為の最高の手引きであった（Altick 165-66）。作品におけるピクウィック氏の行動は、登場人物の救済手段であるだけでなく、人間はいかにしたら救われるかを明示する意味があるのだ。

結び

以上、『ピクウィック・ペイパーズ』の教訓性と教訓性から垣間見られる福音主義的側面を考えてきたが、ディケンズのいくつかの挿話は、メイン・プロットと無関係ではないと言える。「陰気なジェミー」、「囚人の帰還」は、父親が身持ち悪く生活すると、家族や子供に悪影響を及ぼす可能性を示していて、いかに父親の役割が大切か、また父親が正しく家族を導く必要性を読者に教えてくれる。作品においてディケンズは、マーシャルシー監獄に投獄された父親と自身の辛い過去の記憶を効果的に用いていると考えられるが、「狂人の手記」では親ゆずりの性格の責任にし、自ら狂乱状態を招いたことを反省していない狂人を示すことにより、また「墓掘り男を盗み去った鬼たちの話」では、改心するゲイブリエル・クラブを示すことにより、人間はいかなる父親を持とうと自身の人生を自分で変えたり作ったりできる可能性を示している。一方でディケンズは、「奇妙な依頼人に関する老人の話」では復讐に走るヘイリングを示し、メイン・プロットでは対照的に赦しを実践するピクウィック氏を示すことにより、人間の理想的生き方を提示している。ディケンズは、自身の記憶を作り変えることにより、読者に父親や境遇がいかなるものであろうと、人間は自分自身で人生を作り上げる責任があることを示している。さらに「ブラダッド王子の伝説事実談」の後、救済手段としてピクウィック氏を用いることにより、実際の父親がどうあろうと「父なる神」が存在し救いがあることを印象づけているように思われる。「狂人の手記」の牧師の説明は、無節制、放蕩生活に対する福音主義の厳格な側面を示しているようであるが、「囚人の帰還」と「墓掘り男を盗み去った鬼たちの話」では、改心によって人間は救われることを教えている。このことは、ディケンズがその生涯において売春婦や囚人の更生に関心を持っていたことを思いおこさせる。福音主義者たちは、人々の生き方に関心を持つ一方、人道主義的関心を持っていたが、⁶ ディケンズは、『ピクウィック・ペイパーズ』において福音主義の両方の側面を描き出していると考えられる。後に『リトル・ドリット』（1857）でディケンズは福音主義者たちの運動の中の安息日遵守主義がアーサー・クレナム（Arthur Clennam）の精神を束縛するものであることを示し批判的である。一方でディケンズは、前期の作品『ピクウィック・ペイパーズ』において、福音主義の厳格な側面を示しつつも改心

や救済の可能性を示している。このことから、『ピクウィック・ペイパーズ』は、ディケンズの福音主義の人間を更生させる力や人道主義的社会改革への期待の片鱗を窺わせる作品である、と言っていいだろう。

注

- ダレスキーは、『『ピクウィック・ペイパーズ』における社会批判は、激しいものではないかもしれないが、後の作品を考慮に入れると、我々は、社会批判の暗示が作品に含まれていることに気づかざるをえない』と述べている。ダレスキーは、『『荒涼館』では完全な確信になったが、ドッドソン (Dodson) やフォッグ (Fogg) のような人物が社会を腐敗させる原因になることをディケンズは理解する途上であった』、また、『『リトル・ドリット』においては理解していたが、債務者監獄がそれを許容する社会の縮図であるかもしれないと理解する途上であった』と考えている (Daleski 38)。
- 当時の犯罪報道に関し、でっち上げられたセンセーショナルな事件が多かったことがヘンリー・メイヒュー (Henry Mayhew) の *London Labour and the London Poor* で言われているが、一方でメイヒューは、*The Morning Chronicle Surveyor of Labour and the Poor* で飲酒が犯罪の原因になっていること、酔っぱらった労働者階級が犯罪を犯す可能性が高かったことを指摘している (Mayhew 40)。クライブ・エムスリー (Clive Emsley) は、飲酒の悪影響について、1834 年の *Parliamentary Paper (Select Committee on Inquiry into Drunkenness)* に、監獄や牢獄船 (hulks) が被収容者であふれかえっていて、飲酒により酔っぱらうことによる異常な道徳的墮落が犯罪の一因であると書かれていることに注目している (Emsley 66)。ドナルド・トマス (Donald Thomas) は、12～14 歳の少女が売春や犯罪に走る家庭内の原因として、死や海外における軍務による父親不在により母親が働きに出なければならず、娘を十分に監督できないことを挙げている。さらにトマスは、少女が犯罪を犯す一因として飲酒を挙げている (Thomas 86)。
- 自らが飲んだくれであるのに、連合グランド・ジャンクション・エベニーザ禁酒協会 (The United Grand Junction Ebenezer Temperance Association) に出席し、禁酒を促進させようとするスティギンズ (Stiggins) は偽善者と言っていい存在である。
- ディケンズは『ボズのスケッチ』の「ジン・ショップ」(‘Gin Shops’) の末尾で、貧困な労働者階級に蔓延する飲酒の悪弊をひどく嘆き、「ジンを飲むことは英国の大いなる悪徳である」と述べている。『ピクウィック・ペイパーズ』では、第 19 章で冷えたパンチを飲んで酔っぱらったピクウィック氏は、ボールドウィッグ (Boldwig) 大尉により獣柵に入れられてしまう。ボールドウィッグ大尉に対し、監禁の罪で裁判を起こしてやる、と言うピクウィック氏に対し、ウォードルは冷えたパンチを飲みすぎたせいだと言われるかもしれないので、やめるように言う。このことにより、ディケンズは酒が冷静な判断力を失わせる可能性があることを示している。しかし、ウォードルの言葉の後、ピクウィック氏が上機嫌になり、居酒屋で水割りブランデーを皆に注文することから、ディケンズは酒を娯楽として楽しむことが捨てがたいことも描き出している。このことから、ディケンズが飲酒の楽しみを認めながらも、飲みすぎると悪影響を及ぼすので、限度が必要だと考えていたと思われる。
- オールティックは、説教師スティギンズの人物描写をディケンズの福音主義者に対する風刺ととらえている (Altick 200)。自身を迫害を受けている聖者だとし、同情を集め水道料金を人々から受け取る彼は、福音主義的観点から改心すべき人

物であると言っていい。ピクウィック氏は行動によって他者の幸福に寄与していることから、スティギンズとは対照的な人物である。

- 福音主義者たちの広範囲にわたる人道主義的な関心は、彼らを促して多くの博愛主義的・伝道的組織を創設させた。「零落した良家の女性たちのための婦人連合会」、「うらぶれた、善良な性格の、貧しい、貧弱な、老寡婦および独身女性救済のための婦人友愛協会」、「売春婦に臨時保護施設を提供することによって公衆道徳を維持するための保護協会」、「貧民孤児、特に立派な両親の血を引く者たちの収容と教育のためのロンドン孤児院」、「ヘルニアを起こした貧民の救済のための全国ヘルニアバンド協会」、「若い女性を田舎と友人たちのもとへ帰郷させる協会」、「(「仮死状態にある人」を蘇生させるための) 投身者救助会」など、福音主義者たちはあらゆる不測の事態を取り扱う団体を持っていたようである (Altick 180–81)。福音主義における人道主義の顕著な成果は、ウィリアム・ウィルバーフォース (William Wilberforce, 1759–1833) の奴隷制反対に見られる (Altholz 273)。クラパム・セクト (Clapham Sect) の有力会員であったウィルバーフォースは、1787 年に奴隷貿易廃止協会を設立し、1823 年には奴隷制反対協会を設立した。工場と炭鉱での労働時間を制限する運動を指導したシャフツベリー (Shaftesbury) 卿 (1801–85) がアングリカンの福音主義者だったことも見落としてはならない (サイクス 150–53)。

引用文献

- Allen, Walter. “The Comedy of Dickens”, in *Dickens 1970*. Ed. Michael Slater. London: Chapman, 1970. 3–27.
- Altholz, Joseph L. “Evangelical Movement”, in *Victorian Britain: An Encyclopedia*. Ed. Sally Mitchell. London: Garland, 1988. 272–74.
- Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas*. New York: Norton, 1973.
- Daleski, H. M. *Dickens and the Art of Analogy*. London: Faber, 1970.
- Dickens, Charles. *The Pickwick Papers*. New York: Oxford UP, 1987.
- Emsley, Clive. *Crime and Society in England 1750–1900*. London: Longman, 1996.
- Grant, Allan. *A Preface to Dickens*. London: Longman, 1984.
- Kaplan, Fred. *Dickens: A Biography*. London: Johns Hopkins UP, 1998.
- Mayhew, Henry. *The Morning Chronicle Surveyor of Labour and the Poor: The Metropolitan Districts*. Firlie: Caliban, 1980.
- Newsom, Robert. *Charles Dickens Revisited*. New York: Twayne, 2000.
- Reed, John R. *Dickens and Thackeray: Punishment and Forgiveness*. Athens: Ohio UP, 1995.
- Smith, Grahame. *Charles Dickens: A Literary Life*. London: Macmillan, 1996.
- Thomas, Donald. *The Victorian Underworld*. London: Murray, 1998.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Harmondsworth: Penguin, 1970.
- オールティック, リチャード・D. 『ヴィクトリア朝の人と思想』。要田圭治／大嶋浩／田中孝信訳, 東京: 音羽書房鶴見書店, 1998 年。
- サイクス, ノーマン. 『イングランド文化と宗教伝統』。野谷啓二訳, 東京: 開文社, 2000 年。

『オリヴァー・ツイスト』における「眠り」について

Sleep in *Oliver Twist*

渡部 智也

Tomoya WATANABE

1. 序

数多く存在するチャールズ・ディケンズの伝記の中で、自らも作家であるピーター・アクロイド（Peter Ackroyd）によって書かれた *Dickens* は、厳密な研究書とは呼び得ないものの、ディケンズ研究家の間でも興味深い文献の一つと考えられている。アクロイドはこの中で、初期の名作『オリヴァー・ツイスト』にはディケンズの最愛の義妹メアリー・ホガース（Mary Hogarth）の死という体験が様々な形で現れていると具体例を挙げながら論じている。そしてその経験がディケンズに自らの原初体験（少年時代、家族と離れてウォレン靴墨工場で働かされたこと）をも思い起こさせ、作品に大きな影響を与えた、と述べた上で、続けてこう述べている。

This is not to suggest that such chapters or passages are uniquely determined by Dickens's experience of Mary Hogarth's death [. . .] but rather that certain aspects of Dickens's creative imagination were thereby strengthened or aroused. That is why there now develops in *Oliver Twist* a constant sense of the need for sleep, for forgetfulness, for that blessed slumber 'which ease from recent suffering alone imparts'. (Ackroyd 243)

つまりは、メアリーの死によって想像力を刺激されたディケンズは、この作品の中で繰り返し、現実を忘れさせてくれる眠りの必要性を描いていたというのである。この指摘は様々な点で注目し値する。というのも、一つには、これまであまり研究がなされていないものの、彼の言うように、この作品には眠りの要素が非常に多く含まれているからだ。

そもそもディケンズは眠りに強い関心を持っていた作家である。例えばよく知られていることだが、『ピクウィック・ペーパーズ』において、彼はジョー（the

fat boy）という、いわゆる無呼吸性症候群をわずらうキャラクターを登場させている。¹ またジョーの描写に限らず、あらゆる作品において彼は様々な睡眠障害を描いている。ジョン・コズネット（John Cosnett）はその事実を指摘するとともに、ディケンズの描写の正確さについて論じている（Cosnett 264–67）。これらの事実は、一つには彼の観察力の鋭さを示すものと言えるが、それと同時に、彼が眠りに対して非常に強い関心を抱いていたことを示す好例と言えるだろう。

またそのような先見性に加え、彼が積極的に「眠り」に関する専門的な知識を得ようとしていたことから、眠りへの関心の高さは伺える。彼の蔵書の中には当時の夢や眠りの大家、ロバート・マクニーシュ（Robert Macnish）の著書 *Philosophy of Sleep* も含まれていた。デイヴィッド・パロイシアン（David Paroissien）は、ディケンズがこの本から得た知識を実際に『オリヴァー・ツイスト』において活用していると述べている（Paroissien 101, 217）。

このようにディケンズは眠りに強い関心を持っており、作品からもその興味の強さが感じ取れる。ではディケンズが、アクロイドが述べているところの「眠りの必要性、すなわち忘れることの必要性」を『オリヴァー・ツイスト』の中で描いているのは、単にメアリー・ホガースの死の影響を反映しただけなのだろうか？ それとも何か目的があってそのような眠りを描いているのだろうか？ 本稿は、『オリヴァー・ツイスト』における眠りの描写を考察し、眠りが作品中で重要な役割を果たしていることを明らかにする。

2. 主人公オリヴァー・ツイストの眠り

『オリヴァー・ツイスト』に登場する様々な人物の中でもっとも頻繁に眠るのは、主人公のオリヴァー・ツイストである。この事実は、本作における眠りに関連する言葉の使用数にはっきりと表われている。眠りに関する言葉は、物語全体では135回使用されているが、そのうち57回がオリヴァーに関して用いられているのである。² この57回という数値は全登場人物の中で一番の値であり、二番目に多いサイクスでも18回であることを考えれば、他を圧倒する多さである。ではオリヴァーはなぜそれほど頻繁に眠るのだろうか？ この章ではオリヴァーの眠りのパターンを分析し、その意味を探ることを試みる。

オリヴァーの眠りがかくも多く現れる一つの理由としては、彼が移動するごとに眠り込むという特徴を持っていることが挙げられる。例えば物語の前半、教区役人バンブル氏によって、それまで生活してきたマン夫人の救貧院分院から救貧院へと連れて行かれたオリヴァーは、すぐに救貧院のベッドで眠り込む。

Oliver bowed low by the direction of the beadle, and was then hurried away to a large ward: where, on a rough, hard bed, he sobbed himself to sleep. What a noble illustration of the tender laws of England! They let the paupers go to sleep! (11-12)

このように、彼は最初の環境の変化を経験した直後に眠り込んでいるのである。救貧院分院を離れる際、彼は初めて ‘a sense of his loneliness in the great wide world’ (10) という孤独感に苛まれる。さらに眠り込む直前には、救貧委員会の面々の高圧的態度にショックを受けて涙を流している (‘weeping bitterly’; 11)。従ってここで彼が眠るのは、‘sobbed himself to sleep’ という表現からも明らかのように、移動にともなうこれらのショックを眠りによって忘れ、癒すためなのだ。アクロイドの言う、現実を忘れさせてくれる眠りが早速現れているのである。

同様のことは、この後救貧院から厄介払いの形でサワベリー氏の元へ奉公に出された際にも当てはまる。店に連れて来られたオリヴァーは、サワベリー夫人によって食事を与えられ、寝床へ案内される。

‘your bed’s under the counter. You don’t mind sleeping among the coffins, I suppose? But it doesn’t much matter whether you do or don’t, for you can’t sleep anywhere else. Come; don’t keep me here all night!’ (30)

棺桶と棺桶の間で寝かされる、というこの場面は非常に印象的であり、彼を待ち受ける過酷な生活を暗示させるが、彼はそのような場所で眠り込む。³ この後眠り込むまでの間に、彼は見知らぬ場所にたった一人であるために、「酷い憂鬱感」(‘dismal feelings’; 30) に悩まされる。憂鬱感を感じた後に眠るという事実は、救貧院での眠り同様、ここでも眠りが彼に現実逃避の場を与えていることを示している。

その後、先輩徒弟ノア・クレイボールへの暴力沙汰が元で店を飛び出たオリヴァーは、ロンドンへ向かう。道中、一人ぼっちになった彼は、次のように眠り込む。‘he was cold and hungry, and more alone than he had ever felt before. Being very tired with his walk, however, he soon fell asleep and forgot his troubles’ (51)。この場面でもまた、彼がサワベリー氏の店を出るという移動、環境の変化を経験した後に眠りが現れている。そしてこの眠りによって、彼は「困難」、すなわち寒さ、飢え、孤独、そして疲労といったものを「忘れて」旅を続けることができたのである。

このように、小説の前半部分だけを見ても、オリヴァーが移動の後に眠ると

いう描写が我々の目を引く。確かに、移動の後に眠ること自体は非常に自然な行為と思われる。ましてやオリヴァーは子供である。過酷な移動、環境の変化によって、並みの大人以上に疲労を感じ、そのせいで度々眠り込むのは当然とも言えるだろう。実際、同じく旅をする子供を描いたディケンズの『骨董屋』においても似たようなパターンの眠りが見られる。例えばネルが祖父とともにロンドンを脱出したその日、一日中歩いて疲労困憊の二人は百姓屋のベッドで眠り込む (‘slept that night at a small cottage’; OCS 123)。そして次の日、再び旅を続け、親切な一家に助けてもらった後、荷馬車の上で眠りに落ちる (‘she fell asleep, for the first time that day’; OCS 126)。さらに歩いてコドリンやショートと同じ宿屋に泊まることになった際も、やはり眠っている (‘sunk into a deep slumber’; OCS 132)。このように、移動することで疲れた主人公が眠りに落ち、その結果体力気力を回復して旅を続ける、ということ自体は自然と言える。しかし『オリヴァー・ツイスト』の場合、単なる自然の行為以上のものが、その眠りの描写からは感じられる。というのも、その中にディケンズの意図が伺えるからである。このことは、オリヴァーがフェイギンのアジトに行く場面以降、強く感じられる。ロンドンで出会ったアートフル・ドジャーによってフェイギンのアジトに連れて行かれたオリヴァーは、そこで手厚い歓迎を受ける。

Oliver ate his share, and the Jew then mixed him a glass of hot gin and water: telling him he must drink it off directly, because another gentleman wanted the tumbler. Oliver did as he was desired. Immediately afterwards he felt himself gently lifted on to one of the sacks; and then he sunk into a *deep* sleep. (58; 斜体は筆者による)

フェイギンはオリヴァーに食べ物と飲み物、さらには眠る場所を与えてくれる。オリヴァーはそれらのものを全てありがたくいただき、眠りにつく。ここでも移動の直後、眠り込んでいるのである。注目すべきは、オリヴァーの眠りに関する表現(上記引用中の斜体部分)である。ここで初めて ‘deep’ という、眠りの質、深さを表わす形容詞が付いている。一見何ということはない表現に思われるが、これ以降度々現れる形容詞付きの眠りの場面を見ていくと、実はこのような形容詞の有無が非常に重要であることが分かる。

この後、オリヴァーはドジャーらと外出した際にスリと間違われて逮捕され、ブラウンロー氏の家で保護されることとなるが、そこでもまた彼の眠りが現れる。

The darkness and the deep stillness of the room were very solemn; as they brought into the boy's mind the thought that death had been hovering there, for many days and nights, and might yet fill it with the gloom and dread of his awful presence, he turned his face upon the pillow, and fervently prayed to Heaven.

Gradually, he fell into that *deep tranquil* sleep which ease from recent suffering alone imparts; that calm and peaceful rest which it is pain to wake from [...].

It had been bright day, for hours, when Oliver opened his eyes; he felt cheerful and happy. The crisis of the disease was safely past. He belonged to the world again. (78-79; 斜体は筆者による)

ここでオリヴァーは眠る前、ここしばらくこの部屋に「死」が立ち込めていたことを感じ取り、恐怖から、一心に神に祈りをささげている。しかしその後、「深い静かな眠り」に落ち、目覚めると、彼はその死の恐怖からは一転、‘cheerful and happy’ になっているのである。眠る前後で全てが180度良い方向に変わるというこの場面からは、彼がこの眠りによって肉体的精神的な癒しを得たことがはっきりと感じられる。さらに、‘He belonged to the world again’ との記述により、この眠りによって「彼が生き残った」という事実が強調されている。このようにオリヴァーはここでも移動後にぐっすりと眠り込み、自らの体力気力を回復するのである。

その後オリヴァーは再びフェイギン一味に捕まってしまう、アジトに連れて行かれるが、その際も彼は以下のように描かれる。

Master Bates [...] led Oliver into an adjacent kitchen, where there were two or three of the beds on which he had slept before [...]. But he was sick and weary; and he soon fell *sound* asleep. (117; 斜体は筆者による)

再びオリヴァーは、突然の大きな環境の変化にショックを受け、‘sick and weary’ な状態にあったため、すぐにぐっすりと眠り込んだのである。

そしてサイクスに連れられて強盗に入り、失敗してメイリー夫人に助けられる場面でも彼はやはり「深い眠り」に陥っている。

Stepping before them [Rose and Mrs Maylie], he [Mr Losberne] looked into the room. Motioning them to advance, he closed the door when they had entered; and gently drew back the curtains of the bed. Upon it, in lieu of the dogged, black-visaged ruffian they had expected to behold, there lay a mere child: worn with pain and exhaustion, and sunk into a *deep* sleep. (209; 斜体

は筆者による)

銃弾に傷ついたオリヴァーは、‘worn with pain and exhaustion’ と、その大いなる疲労の存在が明記されている。その疲労ゆえに彼は眠り込み、再び癒しを得て生き延びるのである。

このようにオリヴァーはフェイギンのアジトに到達以降、度々 ‘deep sleep’ のように、眠りの深さを表す形容詞が付いた眠りに陥っている。そしてこれらの深い眠りが現れる起点となる4つの移動は、物語の中で非常に重要な意味を持つ移動である。何故ならこれは単なる物理的移動にとどまらず、彼の暮らす世界の変化をも意味するものだからだ。アーノルド・ケトル (Arnold Kettle) が指摘しているように、この作品は ‘the contrasted relation of two worlds – the underworld of the workhouse, the funeral, the thieves’ kitchen, and the comfortable world of the Brownlows and Maylies’ (Kettle 130) というパターンから成り、オリヴァーがその二つのかけ離れた世界を行き来することで物語は進展する。従ってオリヴァーが深い眠りに落ち込む4つの箇所は、オリヴァーの遍歴の転換点なのである。そのような重要なタイミングにおいてはオリヴァーに深い眠りを与え、それ以外の場面においては並みの眠りを与えている、という事実から、ディケンズが意図的にオリヴァーの眠りを描いている、と考えることができるだろう。

ではこのように移動後に一貫性を持って眠りを描く目的は何か？それは、この作品の主要なテーマと密接に関わっている。ディケンズは『オリヴァー・ツイスト』の第三版の序文でこの作品の目的について、‘I wished to show, in little Oliver, the principle of Good surviving through every adverse circumstance, and triumphing at last’ (xxxviii) と述べている。言い換えるならば、善を体現する存在であるオリヴァーが、悪人たちのもたらす逆境を「生き抜く」ことで初めてこの目的は達せられることになる。従って、環境の変化によってオリヴァーが更なる危機に陥るとき、絶えず眠りが現れ、彼に癒しを与えているのは、彼を生きながらえさせるというディケンズの目的を反映したもののなのである。

このことは、先ほども挙げた『骨董屋』の例と比較するとより鮮明になる。オリヴァー同様、ネルも当初は移動のたびに眠り込んでいる。しかし、オリヴァーが終始一貫して眠りを得ているのに対し、ネルの眠りは物語が進展するにつれ変質していく。例えば彼女の旅の後半、アイザック・リストが祖父だけでなく、恩人であるジャーリー夫人の金をも狙っていることを知った夜、彼女は眠ろうとする。しかし、‘But who could sleep – sleep! who could lie passively down, distracted by such terrors?’ (OCS 329) とすぐに眠れない様が描かれる。さらに、

旅の終わり近くでも疲れて眠り込むが（‘fell into a slumber’; *OCS* 348）, 直後に ‘It was not like sleep’ (*OCS* 348）と描かれ、また目覚めた後は ‘Much weaker’ (*OCS* 348）と描写され、彼女が体力気力を回復させてくれる ‘sleep’ を得られなくなったことがはっきりと読者に伝えられるのである。両者の眠りの描写の違いは、作品のテーマを完遂するために、オリヴァーが逆境を生き抜かねばならぬのに対し、ネルは最終的に死なねばならない、その違いを如実に示すものと言えるのではないだろうか。オリヴァーの眠りは、作品構成上不可欠なものなのである。

3. サイクスの眠りと不眠

オリヴァーの眠りが物語のテーマと密接に関わっているというのは、既に見た通りである。同様のことが、オリヴァーと敵対する悪人たちの眠りからも伺える。ビル・サイクスはフェイギン一味の中で中心的な役割を果たす、血の気の多い悪党であるが、彼の眠りに関する言及の回数は、オリヴァーについて二番目に多い18回である。しかし、それはそのまま、彼がオリヴァーのように良い眠りを得ているということを意味するものではない。端的に言えば、オリヴァーという善を体現する存在が、眠りによって逆境を生き抜くのと正反対に、悪党サイクスは、不眠を通じて死に至るのである。

順を追って見ていこう。オリヴァーを奪還した後、サイクスはフェイギンとともに、メイリー夫人の家への押し込み強盗の計画を立てる。仕事のメンバーとしてオリヴァーを借り受けることをフェイギンに同意させ、よい気分になったサイクスはものすごい勢いで酒を飲み出し、ついには ‘he fell over the box upon the floor, and went to sleep where he fell’ (140) と眠り込む。そのオリヴァーを家に引き取り、自分の言うことを聞くようにとどやしつけた後、彼は ‘let’s have some supper, and get a snooze before starting’ (147) と述べ、実際すぐに眠り込む。そして盗みの現場に向かった後、近くのアジトで仲間のクラキット、バーニーと合流すると、そこでも再び一眠りする（‘a short nap’; 155）。さらに、強盗計画が失敗に終わった後に再び登場する際には、‘Mr William Sikes, awakening from a nap, drowsily growled forth an inquiry what time of night it was’ (277) と描かれ、彼が作戦失敗後に逃げ帰り、ナンシーにずっと看病されていたという事実が明らかになるとともに、この場面の直前まで、彼が眠っていたことが示唆される。そして彼は様子を見に来たフェイギンに対して悪態をつき、当面の生活のため、ナンシーに金を取りにやらせるが、その際には、‘I’ll lie down and have a snooze while she’s gone’ (283), ‘Mr Sikes, meanwhile, flinging himself on the bed, and composing himself to sleep away the time until the young lady’s return’

(283), ‘[Sikes] resumed the slumbers which her arrival had interrupted’ (286) と彼が眠りにつこうとする様が繰り返し描かれる。ここでは弱りきったサイクスがこの後復活することを考えれば、オリヴァーが眠ることで逆境の中を生き抜くことができたのと同様に、サイクスもまた、眠ることで厳しい状況を生き抜いたように思われる。

これらの例を見ると、サイクスは度々眠りの癒しを得ているように思われるかもしれない。しかし、その中身はオリヴァーが得ていたものとは程遠いものである。というのも、上で挙げたサイクスの眠りの場面の大部分で、‘nap’, ‘slumber’, ‘snooze’ など、‘sleep’ 以外の、むしろ「浅い眠り」を意味する言葉が用いられているからである。⁴ ‘sleep’ が使われるのは最初の例しかなく、しかもそれは酒を飲んで眠る場面であり、酒のおかげで ‘sleep’ できた、という印象が強い。従って、彼は度々眠りを得ているように思われても、その眠りの質はオリヴァーのものと比べて明らかに落ちるのである。

この時点ではそれでも眠りを得ているサイクスであるが、この後大きな変化を遂げることとなる。彼は、自分たちの悪事を密告しようと決意した愛人ナンシーによってアヘンを飲まされ、以下のように眠らされる。

Sikes, locking her hand in his, fell back upon the pillow: turning his eyes upon her face. They closed; opened again; closed once more; again opened. He shifted his position restlessly; and, after dozing again, and again, [...] was suddenly stricken, as it were, while in the very attitude of rising, into a deep and heavy sleep. (288)

ここではサイクスがアヘンによって徐々に深い眠りに落ちていく様が細かく描かれているが、中でも彼の眠りが初めて ‘deep and heavy sleep’ と表現されている点は注目に値する。サイクスの ‘deep sleep’ は、ナンシーがこっそり入れたアヘンによってもたらされている。つまりこの眠りは初めて彼の意思に反して起こった深い眠りであり、いわば眠りが彼を裏切った形になっているのだ。この眠りの裏切りは、彼を取り巻く状況の一大変化の前触れとなっている。回復した彼は、フェイギンからナンシーの裏切りを聞かされて激怒し、家に帰って彼女を殺害してしまう。しかし、殺人を犯して以降、彼はほとんど眠りを得られなくなる。オリヴァーの深い眠り同様、サイクスの深い眠りもまた、彼にとっての転換点に現れているのである。

ロンドンから逃げ出したサイクスはその道中、眠ろうとするが、すぐに起き上がって歩き出す。‘he laid himself down under a hedge, and slept. Soon he was up again, and away’ (349–50)。ここで ‘slept’ の直後に ‘soon’ という語が入ら

れていることで、彼の眠りの短さが強調されている。その後歩き続け、疲れ果ててしまうものの、それでも何とか静かな村にある小さなパブにたどり着いたサイクスはそこに入り込み、疲れからか眠りかける。ところが突然現れた男によって、その眠りを覚まされてしまう。‘The robber [. . .] had almost dropped asleep, when he was half wakened by the noisy entrance of a newcomer’ (350–51)。サイクスにとってさらに悪いことに、この男はしみのついたサイクスの帽子を取り上げ、自分のしみ取り薬の宣伝を始める。「たとえこのしみが血でも」という台詞に恐れたサイクスは狂乱して暴れ、パブを飛び出ることとなる。この場面でサイクスが自らの殺人を思い出させられ、恐怖が蘇っているのは明らかだろう。眠れないことで恐怖が蘇る、というこの場面には、眠りによって「忘れる」という恩恵をサイクスが失っていることが如実に表われている。そして上記の ‘almost dropped asleep, when’ という表現からは、もしこの男さえ存在しなければ、サイクスは眠って精神と肉体を回復させることができた、ということが感じられ、ディケンズはこの男を登場させることで、意図的にサイクスを不眠状態にしようとしている、とさえ感じられるのである。

サイクスの不眠状態はこの後も続く。一度彼は、‘a long, but broken and uneasy sleep’ (355) を得るものの、‘uneasy’, ‘broken’ という語が示すように、彼を休める機能は果たせていない。そのような苦しい精神状態の中で、彼は「ロンドンに戻るという自暴自棄な決断」(‘the desperate resolution of going back to London’; 355) を下し、そこで大捕り物を演じた後、ナンシーの目の亡霊におびえ、足を踏み外した拍子に首を吊って死んでしまう。いわば、眠りの裏切りとその後の不眠から全てが悪い方向に進み、死に至るのである。間接的に、不眠が彼の死を招いた、とも言えるのではないだろうか。まさにオリヴァーとは正反対のパターンがここに見受けられる。

この箇所以外でも、逃走中のサイクスの不眠はたびたび言及されている。語り手はサイクスがナンシーの目の亡霊を恐れだした際、次のように述べている。

Let no man talk of murderers escaping justice, and hint that Providence must sleep. There were twenty score of violent deaths in one long minute of that agony of fear. (353)

ここで、比喩として ‘sleep’ が使われている点は注目に値する。この前半部分は、ディケンズの殺人者に対する激しい批判であるとともに、サイクスの不眠を強く思い起こさせる表現と言える。

一方この箇所の後半部分に関して、パロイシアンはマクベスがバンクォーの

亡霊を見た直後に述べる台詞との類似を指摘している。⁵ また逃走中に、恐怖を振り払おうとサイクスが消火活動に精を出す場面が描かれるが、その際にも、‘he bore a charmed life’ (355) と、『マクベス』を想起させる表現が使われている。さらにフィリップ・コリンズ (Philip Collins) は、不眠になり、そしてナンシーの目の亡霊に取り付かれたサイクスについて、‘Sikes [. . .] recalls Macbeth’s ‘terrible dreams’ and his vision of Banquo’s ghost’ (Collins 299) であると述べ、サイクスとマクベスの類似を指摘している。前述の表現における ‘sleep’ の意図的と思える使い方と、マクベスとサイクスの類似は、『マクベス』の台詞、‘Macbeth does murder Sleep’ (2.2.36) を喚起させ、それだけ一層彼の不眠状態と苦しみを強調していると言えよう。

サイクスのように、殺人者が不眠になる、ということ自体は、ディケンズ作品には比較的によく見られるパターンである。例えば、『バーナビー・ラッジ』におけるラッジ、『マーティン・チャズルウィット』のジョーナス・チャズルウィット、そして『我らが共通の友』のブラッドリー・ヘッドストーンなどがそれに当てはまる。しかし、彼らとサイクスには大きな違いがある。それは、サイクスは殺人を行う前、浅いながらも度々眠りを得ていたのに対し、それ以外の殺人者は、最初から眠りを得る描写がほとんどなされていない、ということである。例えばラッジは物語が始まった時点で既に殺人を犯していることもあり、最初から眠りに見放された存在として描かれる (‘to have nothing in common with the slumbering world around, not even sleep, Heaven’s gift to all its creatures’; BR 140)。ジョーナスも、殺人直前に殺人を示唆する夢を見るものの、自らを ‘light sleeper’ (MC 559) と呼ぶように、眠る場面はほとんど描かれていない。ブラッドリーも同様である。従って他の殺人者と異なり、サイクスからは、自らを愛する無実の女性を殺す、という極悪非道な行為を行うことで悪の階段を登りつめ、それに伴い不眠が悪化した、という事実が強く感じられる。

このように、一貫して善の原理を体現し、絶えず眠り込むオリヴァーとは対照的に、悪人サイクスは良い眠りを得られず、挙句の果ては殺人者となることでより厳しい不眠へと陥り、死に至る様が描かれているのである。善と悪の対立、そして善の勝利 (悪の敗北) というテーマを、ディケンズが眠りによって巧みに描き分けている、その一例と言えるだろう。

4. 眠らぬフェイギン

本稿ではこれまで純真無垢なオリヴァーの眠りと、殺人者サイクスの眠り (及び不眠) について論じてきた。しかしこの小説にはもう一人、眠りに関して論じる上で扱うべき重要な人物がいる。すなわち、悪魔的な人物、フェイギ

ンである。この物語において、全ての悪を陰で操っているのはフェイギンである。彼にとっては、サイクスさえも自らの目的を達成するための道具の一つに過ぎない。彼は自分自身のことを、‘me, who with six words, can strangle Sikes as surely as if I had his bull’s throat between my fingers now’ (183) と述べ、自分が悪の世界でサイクスよりもはるかに上に位置する存在であることを示唆している。さらに、ディケンズは『オリヴァー・ツイスト』を書き終えようとしていた時、フェイギンについて、親友のジョン・フォースター (John Forster) に、‘such an out and outer that I [Dickens] don’t know what to make of him.’ (Forster 87) とこぼしている。これらの事を考えれば、フェイギンの邪悪さはサイクスのそれをはるかに凌ぎ、また彼こそがこの作品における悪を象徴する存在である、と言えるだろう。

そのように邪悪なフェイギンの眠りは、オリヴァーやサイクスの眠りとは全く異なる点で非常に特徴的である。すなわち、オリヴァーやサイクスと異なり、フェイギンは作品中で全く眠る場面が描かれない人物なのである。ディケンズはこの、フェイギンが少しも眠らないという事実を、眠っている他の登場人物と眠らないフェイギンとの対比によって強調している。しかも、彼はただ眠らないだけでなく、別の人物の眠りを巧みに利用し、自分に有利になるように取り計らっているのだ。以下、具体例を見てみよう。サイクスと押し込み強盗の計画を立てた際、上機嫌になったサイクスは酒を飲み、眠り込む。それに対し、フェイギンは眠るそぶりなど少しも見せず、さらにはサイクスが眠っている隙にこっそりと彼を蹴っ飛ばし (‘bestowing a sly kick upon the prostrate form of Mr Sikes’; 141), 日ごろの恨みを多少なりとも晴らす。その後フェイギンは、その強盗計画が失敗したと聞いてやってきたマンクスと、アジトで内密の話をしようとする。その時アジトにはクラキットと子供たちがいたが、‘Toby Crackit was asleep in the back-room below, and that the boys were in the front one’ (186) と記述されるように、彼らはぐっすり眠っており、そのおかげで目ざとい彼らに盗み聞きされることなく、マンクスと秘密の会談を行っている。極めつけはナンシーの裏切りが判明した直後である。

It was nearly two hours before day-break; that time which in the autumn of the year, may be truly called the dead of night; when the streets are silent and deserted; when even sounds appear to slumber, and profligacy and riot have staggered home to dream; it was at this still and silent hour, that Fagin sat watching in his old lair, with face so distorted and pale, and eyes so red and bloodshot, that he looked less like a man, than like some hideous phantom,

moist from the grave, and worried by an evil spirit. (342)

この描写では、フェイギンが他の人々が皆寝静まったような時刻に一人、ナンシーの裏切りに対処する計画を練っている際の恐ろしい様子が描かれている。町の様子を描くのに ‘slumber’, ‘dream’ といった語が比喩的に使用されていることが、逆に彼だけが眠っていない、という事実を際立たせていると言えるだろう。その後やってきたサイクスに、彼はノアの口を通してナンシーの裏切りを伝え、サイクスにナンシーをどうにかするようけしかける。この場面でノアは、ナンシーを見張ってきた疲れのため、眠っているのである。フェイギンがノアを起こしてナンシーのことを語らせようとする際、繰り返し、‘sleeper’, ‘sleepy’ といった単語が使用されるが、それはノアの睡眠状態を示すとともに、少しも眠らないフェイギンの不気味さを強く印象づけているのである。

さらにここでも彼はノアの眠りを巧みに利用している。

‘A gentleman and a lady that she had gone to of her own accord before, who asked her to give up all her pals, and Monks first, which she did – and to describe him, which she did – and to tell her what house it was that we meet at, and go to, which she did – and where it could be best watched from, which she did – and what time the people went there, which she did. She did all this. She told it all every word without a threat, without a murmur – she did – did she not?’ cried Fagin, half mad with fury. (345–46)

フェイギンはナンシーの裏切りの内容を1つ1つ列挙し、サイクスの怒りを掻き立てる。この後、その場面を実際に見てきた、というノアが眠そうに、‘That’s just what it was!’ (346) と言った事で、フェイギンの話の信憑性は高められ、そのおかげでサイクスの怒りはより一層高まることとなる。しかし、実際にナンシーがやったことと、ここでフェイギンが述べている彼女の行為との間には、実は大きな開きがある。まずフェイギンは、ナンシーが仲間全員を売るようにと言われた、と述べているが、実際のところブラウンロー氏は、ただマンクスを引き渡すようにと言っただけである (‘put Monks into my hands, and leave him to me to deal with’; 339)。またナンシー自身もかろうじてマンクスを引き渡すことにのみ同意しただけで、特に「もしマンクスが何も吐かなければフェイギンを引き渡してくれ」と頼まれた際には、‘I will never do it!’ (338) と述べて、かたくなに拒絶しているのである。この事実を考えれば、彼女が「不平もこぼさずに」(‘without a murmur’) 仲間を売った、というのが事実ではないことは明

らかだろう。このようにフェイギンがここで述べるナンシーの裏切り行為と、実際にナンシーが行った事との間には大きな差異がある。そしてこのような違いが生まれた理由は、フェイギンが意図的に情報を操作したためなのである。彼の目的は、邪魔になってきたサイクスと裏切り者ナンシーを同時に処分することであり、そのためにはサイクスにナンシーを殺させるのがもっとも効率的な方法である。しかし、もしノアに見てきた通りのことを話させた場合、ナンシーが彼らを守ろうとしていたという、彼にとっては余計な事実についてまで言及してしまい、サイクスの決意を鈍らせる可能性が否定できない。事前にノアに、ナンシーを実際以上に悪く言うよう頼んでおくという手もあるが、それはノアの信用の置けない性質を考えれば危険で使えない。そこで、フェイギンはノアの寝ぼけた状態を利用して、実際に見てきたことについて彼に語らせるのではなく、自分で脚色した彼女の行為を列挙し、寝ぼけたノアにはただその話に同意させることで、ナンシーの裏切り行為を自分に都合の良い形で誇張してサイクスに伝え、彼の怒りを頂点にまで掻き立てることに成功したのである。このようにフェイギンは、自分は眠らずに眠る他者の眠りを利用し、自らの地位を保つ悪魔的な人物なのである。

ところが興味深いことに、このように決して眠らないフェイギンが、最後の最後ですがりつくのは、その「眠り」なのである。全てが明らかになった後、フェイギンは捕まり、死刑判決を受ける。死の恐怖に恐れおののくフェイギンは、ついに頭がおかしくなる。しかし獄中の彼は、‘awake, but dreaming’ (392) と描かれるように、頭が朦朧としているものの、眠りを得ることはできない。これは、この場面のモデルとも言える、『ボズのスケッチ』の中に収められた ‘A Visit to Newgate’ における死刑囚の描写とコントラストをなす。この死刑囚は、少なくとも疲労困憊で眠り込み、牢獄を脱出する夢を見る。しかし、フェイギンはそれすらもできないのである。‘A Visit to Newgate’ における囚人が、眠りによって一時的とはいえ、死に直面しているという現実から目をそむけることができたのに対し、フェイギンはそれすらできない。これはサイクス同様、フェイギンが「眠りによって辛い現実を忘れる」という眠りの効能を失っていることをはっきりと示している。それまでは不眠から利益を得てきた人物が、逆にその不眠に苦しめられるのである。そのような状態で、彼はオリヴァーとブラウンロー氏の訪問を受ける。マンクスから渡された書類のありかを聞かれたフェイギンは、オリヴァーになら話す、と述べ、オリヴァーに打ち明け、さらにこっそり次のように告げる。‘Say I’ve gone to sleep—they’ll believe *you*. You can get me out, if you take me so. Now then, now then!’ (394)。フェイギンはここで、「自分が眠ってしまったことにしてくれれば、外に出られる」と述べてい

るが、少し考えればこの台詞が非論理的であるのは明らかだろう。確かに、フェイギンの頭がおかしくなっているということをより具体的に示すための台詞とも考えられる。しかし、これまで全く眠らなかった彼が初めて自らの「眠り」について言及した、という点を考えれば、もっと重要な意味が込められていると考えるのが自然だろう。この後あっさり看守に捕まった際に、彼が必死に暴れ叫んでいるように (‘He struggled with the power of desperation, for an instant; and, then sent up cry upon cry’; 395)、ここで彼は生き延びようと懸命にあがいていると思われる。その「生」への最後のあがきの際に、‘sleep’ という言葉を使って逃げ、生き延びようとしたというのは、彼が本能的に「眠っている、といえれば命が助かる」という考えを持ったことを意味しているのではないだろうか。最後の最後になって、彼はこれまで自らがよりどころとしてきた不眠ではなく、オリヴァーを助けてきた眠りに頼ったのである。言い換えれば、この場面では、眠らないことで他者を支配し、悪の世界に君臨してきたフェイギンが、眠ることで逆境を生き抜いてきたオリヴァーに対し、敗北を宣言したのに他ならない。つまりこの台詞は、悪に対する善の最終的な勝利を象徴的に示すものなのである。

5. 結び

本稿で考察してきたように、ディケンズは『オリヴァー・ツイスト』において眠りを用いてオリヴァーを生きながらえさせ、一方でサイクスを不眠に陥れることで死に追いやり、「眠らない」フェイギンには最後の最後で、それまで得たことのない眠りを求めさせて、悪の敗北を強調している。このように眠りと不眠を巧みに使い分けることで、ディケンズは善と悪の対立、そして善の最終的勝利、という物語の主要なテーマを鮮やかに表現しているのである。

注

* 本稿は、2006年10月7日に東北大学で開催されたディケンズ・フェロウシップ日本支部総会において行った研究発表『*Oliver Twist* における「眠り」について』に加筆、修正を施したものである。なお、『オリヴァー・ツイスト』からの引用は全て Steven Connor 編集の、Everyman Paperback edition (London: Dent, 1994) によるものである。括弧内にはそのページ番号を挿入した。また、それ以外のディケンズ作品からの引用には、ページ番号に加え、作品名の省略形を記した。省略形は以下のとおり。BR: *Barnaby Rudge*, OCS: *The Old Curiosity Shop*, MC: *Martin Chuzzlewit*。

1 ジョーは元々単にこっけいな人物と考えられていたが、1956年にC・シドニー・バーウェル (C. Sidney Burwell) らの研究によって、彼が『ビクウィック症候群』と呼ばれる、一種の「無呼吸性症候群」という睡眠障害に冒されていることが明らかになった。彼らは医学的な見地からジョーの眠りの描写を考察し、肥満と眠

気、赤血球増加と大食といった事実を結びつけたのである (Burwell 811-18)。従ってディケンズは、医学的な解明が行われるおよそ1世紀以上も昔の段階で、そのような病気の存在に気がついていたのである。

- 2 ここで言うところの「眠り関連語」とは、‘sleep’, ‘slumber’, ‘doze’, ‘nap’, ‘dream’ といった言葉である。なお、例えば ‘dream’ には「眠り」と関わる意味での「夢」以外に、「将来の夢」というような意味として使われる場合もあるが、そのような事例はすべて除外した。また今回の調査には、*The Victorian Literary Studies Archive* 内の Hyper-Concordance を使用した。以下にその URL を記す (<http://www.victorian.lang.nagoya-u.ac.jp/concordance/dickens/>)。
- 3 パロイシアンによると、実際に多くの教区の奉公人たちは不潔で悪臭の漂う地面で寝かされ、当時酷く虐待を受けていたとのことである (Paroissien 72-73)。従ってこの棺桶の間に寝かされるという描写は、オリヴァーが奉公人になったからといって全く彼の置かれた状況が改善されたのではなく、彼の命はまだ危険にさらされている、という事実を強く感じさせる。
- 4 *The Oxford English Dictionary* によれば、‘nap’ は ‘a short or light sleep’, ‘slumber’ は ‘a light or short sleep’, ‘snooze’ は ‘a sleep, a nap’ と説明されており、これらはいずれも普通の ‘sleep’ よりも浅い眠りのイメージを内包する言葉である。
- 5 パロイシアンはこの場面が『マクベス』の ‘but now they rise again./ With twenty mortal murders on their crowns’ (Shakespeare 3.4.80-81) を思わせる、と述べている (Paroissien 264)。

引用文献

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1990.
- Burwell, C. Sidney, Eugene D. Robin, Robert D. Whaley, and Albert G. Bickelmann. “Extreme Obesity Associated with Alveolar Hypoventilation: A Pickwickian Syndrome.” *American Journal of Medicine* 21 (1956): 811-18.
- Collins, Philip. *Dickens and Crime*. 3rd ed. London: Macmillan; New York: St. Martin’s, 1994.
- Cosnett, J. E. “Charles Dickens: Observer of Sleep and Its Disorders.” *Sleep* 15.3 (1992): 264-67.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. Ed. Donald Hawes. London: Dent, 1996.
- . *Martin Chuzzlewit*. Ed. Patricia Ingham. Harmondsworth: Penguin, 2004.
- . *Oliver Twist*. Ed. Steven Connor. London: Dent, 1994.
- . *The Old Curiosity Shop*. Ed. Paul Schlicke. London: Dent, 1995.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Vol.1. London: Dent, 1948.
- Kettle, Arnold. *An Introduction to the English Novel*. Vol. 1. London: Gainsborough, 1951.
- Paroissien, David. *The Companion to Oliver Twist*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1992.
- Shakespeare, William. *Macbeth*. Ed. Kenneth Muir. London: Methuen, 1953.

フランス革命期を描く小説の歴史性 —『二都物語』と『ラ・ヴァンデ』を中心に—

Historicity of the French Revolution Novels:

A Tale of Two Cities and La Vendée

矢次 綾

Aya YATSUGI

フランス革命は人々の歴史意識を呼び覚まし、¹ 内外の思想に影響しただけではなく、19世紀に隆盛を極めた歴史小説にも恰好の題材を提供した。その証拠に、英仏の主要作家が第一共和制崩壊までのフランス革命期を題材に描いた小説として、バルザックの『ふくろう党』(*Les Chouans ou la Bretagne en 1799*, 1837)、トロロブの『ラ・ヴァンデ』(*La Vendée*, 1850)、ディケンズの『二都物語』(1859)、ユゴーの『九十三年』(*Quatre-vingt-treize*, 1874)などを挙げることができる。革命期の人々が「友愛か死か」という二者択一を共和主義者によって強要されたように、² これらの小説の主要人物は共通して、混乱の時代を背景に、生死を賭けた選択を迫られている。もっとも、上に挙げた英文学の二作は仏文学の二作よりも歴史小説としての評価が従来から低い。とりわけ『ラ・ヴァンデ』はトロロブの「最低の作品」(Hall 112)と見なされ、ルカーチの『歴史小説論』、アンドリュ・サンダーズの『ヴィクトリア朝の歴史小説』、ハリー・ショアの『歴史フィクションの形態 — スコットとその後継者たち』といった歴史小説論では言及されてさえいない。それは、これらの二作において人物の選択と革命期を象徴する思想との関わりが仏文学の二作よりも希薄であること、そして、各々の作者がおそらく無意識的に19世紀のイギリスの状況を過剰に反映させている箇所が見られることなどによると考えられる。20世紀末にヒストリオグラフィック・メタフィクションが一潮流を創るなど、過去の歴史的な出来事 — それが起こった日付と場所と共に一般的に認識されている過去の出来事 — を扱う小説が多様化した現在において、歴史小説を論じるのに、ルカーチが課した「個人の運命と歴史の一般的な運動との有機的な繋がりを描出する」という命題を

評価基準にするのは偏狭であろう (Lukács 20)。描き込まれた過去に向けて読者の意識を喚起する小説を広く歴史小説と呼びたいと思うが、そう考えるにしても、特に『ラ・ヴァンデ』は王党派の反乱が起きた 18 世紀末という過去に読者を誘うだけの歴史性が乏しいように見える。

だからといって『ラ・ヴァンデ』は取り上げるに足る小説ではないと断ずることはできない。一つには、齋藤が述べているように、『ラ・ヴァンデ』を引き合いに出すことによって、ディケンズがフランス革命のどのような側面に着目して『二都物語』を描いたかを意識することができる (齋藤 20)。二点目として、スコットに刺激されて多くの小説家が歴史小説を描いた文学史的背景において、フランス革命とその余波が本国フランスと隣国とでいかに物語られたかを比較検討するための題材の一つにすることができるからである。本稿では、『ラ・ヴァンデ』が批評の対象にほとんどない理由を検証した上で、『二都物語』も合わせて、以上に挙げた第二点目について考察したい。その際に、トロロブとディケンズがそれぞれ創造したアンチ・ヒーローのドゥノー (Adolphe Denot) とカートンに着目する。なぜなら、彼らは革命期を背景に生死を賭けた選択を迫られると同時に、19 世紀半ば以降のイギリスの精神的動向を暗示しているからである。

1. 『ラ・ヴァンデ』における王党派の視点

結論を先に述べるなら、18 世紀末のフランスにおける動乱という過去の出来事に向けて読者の意識を喚起する歴史性が『ラ・ヴァンデ』において乏しい要因は、王党派に固定化された視点にある。ディケンズがカーライルの『フランス革命』(*The French Revolution*, 1837) に影響されて『二都物語』を執筆したように、トロロブはヴァンデ軍統率者の夫人が描いた『ラロシュジャ克蘭侯爵回顧録』(*The Memoirs of the Marquise de La Rochejaquelein*, 1815。以下『回顧録』と略記) に強い影響を受けて『ラ・ヴァンデ』を執筆した。³ ディケンズがカーライルに傾倒しすぎたために、領主権と封印状の濫用を除いて、フランス革命の原因を飢えや困窮の問題に限定しているように、トロロブは『回顧録』を信頼しすぎたことにより、王党派以外の視点を全くと言っていいほど考慮に入れていない。また、トロロブは革命を嫌悪するヴィクトリア朝中期の読者を意識し過ぎたあまり (Fleishman 177)、革命勃発の必然性やその意義についての言及を避けている。⁴ さらに、トロロブは、ジャコバン派指導者ロベスピエールを描く第 23 章および第 24 章と主に 1815 年のパリの様子を描く最終章とを除いて、ヴァンデの王党派が革命前の秩序を踏襲する姿を描くのに終始したために、フランス革命が招いた混乱を表現しているという印象が薄い。これ

は、ディケンズが『二都物語』で日常化したカーニヴァルを描くことによって、未曾有の歴史的混乱を表現したのと対照的である。⁵ 『ラ・ヴァンデ』には、王制が廃止され、キリスト教が否定されたことによる道徳的な亀裂が見られないのだ。例えば、民衆は共和政府の徴兵制度に反発し反乱を勃発させる (20–24) ことがあっても、軍制の中で民衆が貴族に従うのは当然のことと見なしている。その傍証であるかのように、御者のカトリノー (Jacques Cathelineau) は、レスキュール (Charles de Lescure) をヴァンデ軍將軍に推す際に、その理由の一つとして、軍人として訓練された貴族にこそ將軍としての資格があることを挙げている (159)。⁶ また、本格的な戦いを前にジェローム神父 (Father Jerome) が共和国政府に対する戦いは神の意思と説くのを始めとして (47)、キリスト教はヴァンデ軍の精神的な支柱としての役割を果たし続ける。以上より、『ラ・ヴァンデ』の読者は絶対王政以前の諸侯の覇権争いの一端を垣間見ているような印象を度々受けるのである。

主要人物の視点に賛同するのがトロロブの特徴という指摘の通り (Mullen 218)、三人称の語り手の視点は王党派のそれと一致している。その一例として、共和制発足という歴史の転換について語り手が述べたコメントを挙げよう。

patriotism in France began to totter, and that, from that time, Paris ceased to be a fitting abode for aught that was virtuous, innocent, or high-minded; but the steady march of history cannot stop to let us see the various lights in which the inhabitants of Paris regarded the loss of a King, and the commencement of the first French Republic. (7)

「パリは高潔で志高き者に相応しい住みかではなくなった」という部分に呼応するかのよう、カトリノー亡き後のヴァンデ軍將軍ラロシュジャ克蘭 (Henri Larochejaquelin) は「もはやパリは我々が住むべき場所ではない」と述べ (16)、同志と共にヴァンデ地方の領地へ戻っていく。この例の他にも、語り手は、ヴァンデ軍が行った虐殺行為には触れないなど王党派に肩入れしている。⁷ ヴァンデの女性たちも王党派の兵士たちと同じ視点を共有している。ラロシュジャ克蘭の妹アガサ (Agatha) は、思慕の情を寄せるカトリノーの死を、王権奪回という大義名分を持つ戦いにおける高貴な死と見なし、その死を悔いていないと彼の母親に対して明言する (376)。要するに、革命勃発後も旧制度の秩序と倫理観が生き続け、王党派以外の視点がほとんど示されないのが、『ラ・ヴァンデ』の世界である。『ラ・ヴァンデ』は、『二都物語』第三部がパリを舞台にしているのに対し、地方を舞台にしている。そうした相違もあって、

読者は歴史の転換期を迎えた人々が描かれているという印象を受けにくいのである。

より正確に言うならば、駆け出しの作家であったトロロプが歴史小説の題材としてヴァンデの反乱に着眼したのは、『回顧録』そのものではなく、それを英訳したスコットが英語版の序文に記したコメント — 「ヴァンデ軍が起こした内戦は、フランス革命における最も興味深い出来事の一つである」 — に感銘を受けたためである (Hall 112)。ただし、このようにヴァンデの反乱を評したスコットの本心を、トロロプは理解していないように思える。なぜなら、スコットがこのように評価したのは、彼自身が小説の中で採用しているのと同じ国内における被植民者としての視点を『回顧録』に見出したからだ。⁸ それにも関わらず、トロロプの描写には、フランス西部というケルト的な土地柄が持つ中央政府に対する反発が見られない。そのためか、『ラ・ヴァンデ』に登場する農民はイギリスの自作農のように見えることがある (McCormack xi)。トロロプはスコットから歴史小説の題材に関して表面的な示唆を受けたに過ぎないのである。ユゴーが同じくヴァンデの反乱を題材にしている『九十三年』と読み比べても、トロロプの認識不足は瞭然として明らかだ。なぜなら、ユゴーは『九十三年』第一編などで農民がゲリラ戦を展開する特異な自然環境を描くと同時に、ヴァンデ軍を率いるラントナック (Lantenac) をブルターニュ公、すなわちブルターニュというフランス国内の異郷の王と位置づけ、反乱が起きた地方の中央政府に対する反発の根強さを構築しているからである。

2. ドゥノーの葛藤

以上のように、『ラ・ヴァンデ』の人物たちは絶対王政期の倫理観を保持している。その中でドゥノーだけが個人的な感情に従って行動した結果、君主主義と共和主義という 1790 年代初期に分立した二つの主義の間を行き来することになる。君主主義と共和主義に限らず、二つの主義もしくは主張の間で揺らぐ人物像は、本稿冒頭で挙げたその他の小説にも見られる特徴である。王制やキリスト教が提示していた倫理的基準が革命によって破壊された結果、人々は革命前には不要だった倫理的決断を自分自身で行うことになった。ピーター・ブルックスは、このような決断をする人物を劇化する際に「表象の過剰と、人物たちの意識に影響する強力な道徳的主張」という要素が表出すると指摘して、これを「メロドラマチックモード」と呼び (Brooks xiii)、革命期をこのモードが誕生した時期と見なしている。まさしくドゥノーは、革命期に対峙した主義の間を彷徨しながら、「メロドラマチックモード」を体現する人物なのである。

とはいえ、ドゥノーは自分を拒絶したアガサへの個人的感情から二つの立場

の間を行き来したのであって、君主主義と共和主義がそれぞれ依存する原理に影響されたわけではない。これはユゴーの『九十三年』やバルザックの『ふくろう党』において人物たちの葛藤と時代の提供する主義とが密接に関係しているのと大きく異なっている。『九十三年』における元僧侶で厳格な共和主義者のシムルダン (Cimourdain) と共和国軍の指揮官で元貴族のゴーヴァン (Gauvain) は、共和主義者として果たすべき役割と人道的な見地 (もしくは個人的な愛情) から取るべき行動とが相矛盾しているために葛藤する (第 3 部第 6 編第 2 章～第 7 編第 2 章)。そして、ゴーヴァンが共和主義ではなく人道的な立場から下す倫理的選択こそ、ユゴーの考える、フランスが未来に向けて下すべき決断である。ヴァンデの反乱の約 6 年後を描く『ふくろう党』では、共和政府の密偵ヴェルヌイユ (Marie de Verneuil) とふくろう党の首領モンローラン (Montauran) が、愛し合いながらも各々の政治的な立場ゆえに葛藤を強いられる (第 31 章)。バルザックは、両者が最終的に迎える破滅的な死の中に、第一共和制と反革命運動双方の行き詰まりを描き込んでいるのだ。要するに、ユゴーとバルザックは革命期に優勢だった主義を象徴する人物たちが葛藤する姿を描き、その葛藤を革命の進展と密接に関連づけているのである。

ヴァンデ軍と共和国軍の間でのドゥノーの揺らぎには、思想的もしくは政治的背景との関連性がほとんど見られない。小説家のヒュー・ウォルポールが 1920 年代に『ラ・ヴァンデ』再評価の動きを見せているが、彼が評価の理由として挙げているのは、ドゥノーの臆病な気質がうまく描かれていることに加え、ドゥノーと彼を巡る人物たちが陥った心理状態に普遍性が見られることである (Walpole 40–41)。ウォルポールはこれらの点を実証するために、ドゥノーが共和政府の司令官サンテル (Antoine-Joseph Santerre) と共にラロシュジャ克蘭家の居城を襲撃し、拘束したアガサと対面する場面を挙げている。この場面でドゥノーは征服者としての自分の力を誇示しながらも、アガサと目を合わすことができない (258–59)。これはウォルポールの指摘に従うなら、ドゥノーの臆病さのゆえということになるが、彼がアガサに向けた言葉の中で「俺の剣は祈りの言葉よりも強力だ」と述べていることを考慮するなら、その心の動揺には、彼が自分を拒絶した女性にただ復讐するのではなく、共和国軍の一員として彼女を殺害しようとしていることが大きく影響している。そんなドゥノーの複雑な心境を目の当たりにしているために、サンテルは、自分がまさに遂行しようとしている任務 — ラロシュジャ克蘭家の城を破壊し、その家族を殺害するという任務 — がパリの群衆を扇動して殺戮行為へと駆り立てることや、国王の処刑に立ち会うことよりも困難だと感じるのである (259–60)。要するに、ヴァンデ戦争の一場面という背景があるからこそ、ドゥノーのアガ

アンビヴァレンス
サに対する思慕と憎悪が混在した両価感情や、彼を巡る人物たちの心理状態が劇的に描かれていると十分に考えられる。

ドゥノーがアガサに復讐するために、共和国政府の一員としてラロシュジャ克蘭家の居城を襲撃しなければならない理由として、身分制度や家族制度に対するドゥノーの複雑な反応を読み取ることもできる。架空人物のドゥノーは資産家だが、出自が明らかでない孤児として設定されている（11）。ラロシュジャ克蘭家で育てられた彼は、アガサとの結婚によって名実共に貴族の一員になれたはずだった。彼の経歴と将来への希望は、大いなる遺産の見込みを得てジェントルマンになり、エステラとの結婚を夢見たピップのそれと類似している。しかも、ピップが労働者階級の一員としての過去から逃れ、ジェントルマンであることに固執したように、ドゥノーも上流階級への帰属意識が強い。例えば彼は、将来の妻になるはずのアガサが弾薬を扱い、貴婦人らしい白い手が汚れることへの嫌悪感や（52）、御者のカトリノーが将軍に選出されることへの抵抗感をあからさまに示している（169）。ドゥノーのこのような側面は、共和制樹立による身分制度の崩壊ではなく、19世紀半ばのイギリスにおける階級の流動性を象徴しているのである。フランス革命期を題材とする小説に19世紀的な人物を描き込むのは、フランス革命期を生きる人間に対する作者の無理解を暗示する否定的な要素と言えらる。実際に、トロロプはヴァンデ地方に関する自分の無知を自伝（*An Autobiography*, 1883）の中で率直に認めている（Hall 112; McCormack viii）。それでも、懐疑的な孤児のドゥノーが、貴族の嫡男ラロシュジャ克蘭のアンチテーゼとして描かれて作品に心理的な深みを与え、ホールによる「一方的な聖人伝」という『ラ・ヴァンデ』に対する酷評を退けるのに、一役買っていると考えられる（Hall 112）。清廉潔白で人を疑わないラロシュジャ克蘭はカトリノー亡き後のヴァンデ軍将軍として後世に名を残す実在の人物で、共和主義的な平等の精神を受け容れたかのように、カトリノーを将軍として認めるのにやぶさかではない。そのようなラロシュジャ克蘭に対して、ドゥノーはその名前（Denot）が否定性もしくは陰性を連想させるように、アンチ・ヒーローの役を担っているのである。

3. カートンの選択

『ラ・ヴァンデ』のドゥノーに相当する『二都物語』のアンチ・ヒーローは、カートンである。カートンは自分がルーシーに愛されるダーネイに対極にあると考え、自分自身に嫌悪感を抱いている。カートンがそのような感情を露呈させるのは、ダーネイがスパイの嫌疑をかけられた裁判の後で、自分の姿を鏡に映し、以下の台詞を吐く場面である。

why should you particularly like a man who resembles you? There is nothing in you to like; you know that. Ah, confound you! What a change you have made in yourself! A good reason for taking to a man, that he shows you what you have fallen away from, and what you might have been! Change places with him, and would you have been looked at by those blue eyes as he was, and commiserated by that agitated face as he was? Come on, and have it out in plain words! You hate the fellow. (89)⁹

引用最終行の「おまえ」が憎んでいる「あの男」は、理想像から転落してしまった自分自身ではなく、そうなるはずだった自分を具現しているダーネイを指すと解釈できるが、ディケンズは cartoons の否定的な自己認識を表出させることにより、彼が18世紀末というよりも19世紀半ば以降に心情的に属していることを暗示しているとも考えることも可能である。このような cartoons の特質は、弁護士仲間のストライヴァーとの比較からも明らかだ。ストライヴァーは、「誰の中にも誰の話にも割り込んでいく」食欲さと（83）、「努力する人」（striver）という名前が暗示するように、ヴィクトリア朝的な自助の精神を戯画的に体现する人物である。一方の cartoons は彼に比べれば自分など「存在しないも同然」と自嘲的に考えている（94）。しかも、ストライヴァーが百獣の王ライオンに喩えられる一方で、cartoon は腐肉を漁るジャッカルに喩えられている。これらをストライヴァーと cartoons 各々の自己像だと解釈するなら、cartoon は自身をジャッカルと見なすことによってメランコリーの傾向を示していると言える。そんな cartoons の先達者は前作『リトル・ドリット』の自己否定的な主人公クレナムである。クレナムはペットに惹かれる自分の気持ちを抑えるために「幸福感にも傷心にも無感覚であること」（第1巻第16章）を望むのだ。クレナムと cartoons が示す自我不在による無気力は、彼らの後継者である『互いの友』のレイバーンに至って、19世紀末の特徴である倦怠感へと推移する。スマイルズが『自助論』（*Self-Help*, 1859）を出版して好評を博したのと同年に出版された『二都物語』の中で、ディケンズは世紀末の倦怠感を読者に予見させ、ヴィクトリア朝の肯定的な時代精神である自助の精神のアンチテーゼを提示しているのである。¹⁰ もっとも、『二都物語』がフランス革命期を描く歴史小説であることを考慮するなら、ディケンズが cartoons を通して19世紀的な精神の動向を示唆することは、卓見ではなく、歴史小説家としての逸脱だと解釈されるであろう。また、cartoon が19世紀的な人物であることは、サンダーズの指摘する『二都物語』の評価が低い理由 — ディケンズにとって歴史は現在ほど差し迫った問題ではなかったこと（Sanders 95） — の傍証の一つだと捉える

こともできる。

ディケンズは、カートンがダーネイの死刑判決前夜にパリの街を彷徨する場面において、彼の無気力と、恐怖政治下の民衆を革命輪舞や虐殺行為へ駆り立てる感情とを関連づけている。カートンは彷徨を始める前に、ダーネイの身代わりとして死ぬ決意を既に固めている。その証拠として、カートンがダーネイと入れ替わる際に必要なバーサッドの協力を取り付けていることと (317)、彷徨の途中で「イエスのたまいけるは、われは復生なり」という彼が (John 11:25) 断頭台上に上がる際に唱える (389) 聖書の一節を思い出していることが挙げられる (325, 326)。彷徨の最後にセヌ河岸に至ると、カートンは渦が海の方へ流されていくのを見て「俺のようだ」と呟く (327)。ボールドリッジによれば、革命や暴徒を象徴する海へ流される渦と自分自身とを重ね合わせる彼の呟きは、死して救済者になろうとしている彼の道程と、「友愛か死か」のスローガンの下で個人的な主義主張を廃した集団として「この世のユートピア」を目指す革命の取る道程とが、相等しいことを示している (Baldrige 648-49)。しかし、カートンが、共和主義者の提示する「友愛か死か」という二項対立の中でのみ意味を成す「友愛」を否定するために、残された選択肢である「死」を選んでいと解釈するなら、彼が渦に重ね合わせた自分は、自発的に「死」を選ぼうとしているその段階での自分ではなく、無気力に流されるままに生きてきた過去の自分ということになるだろう。カートンが共和国政府の提示する「友愛」を否定しようとしていることは、マネット家のために尽力し、その行く末を憂えて涙するロリーを「本当の友人」と呼び、ロリーが体现するものこそを真実の友愛と見なしていることから明らかである (320)。以上のように考えた場合、ディケンズはカートンに「友愛か死か」という二項対立の「死」を選択させることによって、共和国政府が提示する「友愛」の偽善性を暴いている。そして、民衆が個人的な意思を捨て革命という時流に同調している状態と、カートンが意思を持たず怠惰に生きていた時の状態との間には奇妙な類似点があることを仄めかしているのである。

4. 歴史的な出来事からの距離

ディケンズとトロロプは『二都物語』と『ラ・ヴァンデ』の主要人物に19世紀的な気質を付与すると同時に、革命によって従来の倫理的基準が破壊された中で、主要人物が革命勃発前には不要だった倫理的決断を行う姿を描いている。『二都物語』のカートンは共和国政府の提示する「友愛」を否定して「死」を選ぶ。その一方で、『ラ・ヴァンデ』のドゥノーは援軍の大將としてヴァンデ軍に回帰し、ヴァンデ軍の指揮官にドゥノーを選出するのを阻んだレスキュ

ールも (167) 感嘆する働きをした後に戦死する (412, 425)。王党派の視点から描かれた『ラ・ヴァンデ』において、ドゥノーの回帰は取るべき倫理的決断である。

カートンやドゥノーと動揺に、『ふくろう党』のヴェルヌイユとモントーランや『九十三年』のゴーヴァンも、決断の結果として命を落としている。要するに、バルザック、ユゴー、ディケンズ、トロロプは共通して、人間の一度だけの生が歴史の流れにいかにして対抗するかを例証しようとしたと言えるが、英文学の二人の小説家と仏文学の二人の小説家とでは描き込んだ歴史との距離の取り方に違いがある。バルザックは小説の結びとして、かつてのふくろう党員の1827年における姿を描いているが、1827年は『ふくろう党』出版のわずか10年前である。すなわち、バルザックはふくろう党員が未だ存命し、彼らがゲリラ戦を繰り広げた時代を、過ぎ去った過去として片付け難い段階で『ふくろう党』を執筆した。『ウェイヴァリー』(Waverley, 1814)に副題「約60年前の歴史物語」(“’Tis Sixty Years Since”)を付すことによって60年以上前の出来事を歴史と見なしたスコットの影響力が大きかった19世紀に、バルザックは新たな歴史観—現在に限りなく近い過去も歴史とする見方—を提示しているのである。これは、政治体制が目まぐるしく入れ替わる歴史の只中にあったバルザックが、時間の流れについて独特の感覚を獲得していたことを仄めかしている。ユゴーは『九十三年』に描き込んだ歴史と自分自身との関係を考察している。彼は自身が1848年以降に取った政治的立場を『九十三年』に色濃く映し出しているのだ。メールマンによれば、かつて王党派だったユゴーは、六月事件をきっかけに思想的転身を図って共和主義者になり、革命勃発以後の歴史を再検討した (Mehlman 45-46)。その一環として『九十三年』を執筆し、人道主義的な共和主義者のゴーヴァンの姿にフランスの未来を託したのである。ユゴーは、共和主義よりも人道的な見地を優先したために処刑されるゴーヴァンに、処刑に際して「共和主義万歳」と叫ばせる (第3部第7編第6章) ことにより、共和主義者が人間性を身につけて再生することへの希望を表明しているのである。

それに対して、英文学の二人は共に、各々が描いてきた歴史と彼ら自身との距離を置こうとしている。ディケンズは、カートンがルーシーの息子として再生し、新たな歴史を形成するであろうことを仄めかしているが (390)、カートンをパリではなくロンドンで再生させることによって、革命のその後の展開とは距離を取っている。トロロプは1815年を描く『ラ・ヴァンデ』最終章に、ドゥノーがヴァンデ軍に再合流する際の同行者で、後にふくろう党員として反革命運動を繰り広げたブルーム (Auguste Plume) を登場させ (438)、ヴァン

デ軍敗北後の反革命の歴史を辿っている。そして、小説最後の段落で執筆時期の1848年の視点から第二共和制が発足するまでの歴史を総括しているが、トロロブは一定の時間が流れたことを表現することによって、ヴァンデの反乱から距離を置いた自分の立場を示唆している。彼等の姿勢は、ヴィクトリア朝中期の人々がフランス革命に対して取った態度の一つを象徴していると考えられるだろう。

注

- 1 ルカーチは『歴史小説論』(1937)において、フランス革命とナポレオン戦争がヨーロッパの人々の歴史認識に与えた影響の大きさを指摘している (Lukács 23)。
- 2 フランス革命のスローガン「自由、平等、友愛」における「友愛」は、恐怖政治期になると、「しからずんば死」を付け加えた「友愛か死か」という「兄弟か敵か」を見極める二項対立の中で用いられることが多かった (David 145)。
- 3 トロロブ同様にスコットを敬愛したバルザックの『ふくろう党』の方が『ラ・ヴァンデ』よりも歴史小説としての評価が高い (Mullen 220)。その理由は、本稿で述べたように、『ラ・ヴァンデ』よりも『ふくろう党』の方が歴史的危機の全体像が伝わりやすいためであろう。
- 4 ヴィクトリア朝中期の人々はフランス革命を嫌悪し、同規模の混乱がイギリスでも起きるのではないかと懸念していた (Gorniak 26)。
- 5 『二都物語』におけるカーニヴァルの日常化については矢次 1-2 頁を参照。
- 6 『ラ・ヴァンデ』からの引用は下の引用文献に挙げたオックスフォード版から。
- 7 実際にはヴァンデ軍は虐殺行為を行っている。彼らが500人以上の市民を殺害したマカクル (Machecoul) の虐殺は、反革命軍の残虐さの典型として共和主義者によって語り継がれた (Schama 692-93)。
- 8 スコットの被植民者意識についてはカーを参照 (Kerr 3)。
- 9 『二都物語』に関する引用は下の引用文献に挙げた2003年発行のペンギン版から。
- 10 ブリッグスは、『自助論』に加え『種の起源』(*On the Origin of Species*) や『自由論』(*On Liberty*) 等が出版された1859年をヴィクトリア朝の転換期と見なし、心理学者で性科学者のエリス (Havelock Ellis) の言葉を引用して、「種々の既成概念に対して人間精神が奮起を促された年」と述べている (Briggs 306-07)。

引用文献

- Baldridge, Cates. "Alternatives to Bourgeois Individualism in *A Tale of Two Cities*." *Studies in English Literature* 30 (1990): 633-54.
- Briggs, Asa. *Victorian People: A Reassessment of Persons and Themes, 1851-67*. 1954; Harmondsworth: Penguin, 1995.
- Brooks, Peter. *The Melodramatic Imagination: Balzac, Henry James, Melodrama, and the Mode of Excess*. 1976; New Haven: Yale UP, 1995.

- David, Marcel. *Fraternité et Révolution Française, 1789-1799*. Paris: Aubier, 1987.
- Dickens, Charles. *Little Dorrit*. 1855-57; Harmondsworth: Penguin, 1985.
- . *A Tale of Two Cities*. 1859; Harmondsworth: Penguin, 2003.
- Fleishman, Avrom. *The English Historical Novel: Walter Scott to Virginia Woolf*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1971.
- Gorniak, George. "The English Revolution." *The Dickens Magazine* 3.4 (2005): 26-28.
- Hall, John N. *Trollope: A Biography*. Oxford: Clarendon P, 1991.
- Kerr, James. *Fiction against History: Scott as Storyteller*. 1989; Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- Lukács, Georg. *The Historical Novel*. 1937. Trans. Hannah and Stanley Mitchell. 1962; London: Merlin, 1989.
- McCormack, W. J. "Introduction." *La Vendée*. Oxford: Oxford UP, 1994.
- Mehlman, Jeffrey. *Revolution and Repetition: Marx, Hugo, Balzac*. Berkeley: U of California P, 1977.
- Mullen, Richard. *Anthony Trollope: A Victorian in his World*. London: Duckworth, 1990.
- Sanders, Andrew. *The Victorian Historical Novel 1840-1880*. 1978; New York: Palgrave, 2001.
- Schama, Simon. *Citizens: A Chronicle of the French Revolution*. 1989; New York: Vintage, 1990.
- Shaw, Harry E. *The Forms of Historical Fiction: Sir Walter Scott and his Successors*. 1983; Ithaca: Cornell UP, 1985.
- Trollope, Anthony. *La Vendée*. 1850; Oxford: Oxford UP, 1994.
- Walpole, Hugh. *Anthony Trollope*. London: Macmillan, 1929.
- 齋藤九一. 「ディケンズの『二都物語』とトロロブの『ラ・ヴァンデ』」, 『ディケンズフェロウシップ日本支部年報』第25号 (2002年): 19-28 頁.
- 矢次綾. 「『二都物語』におけるカーニヴァル — 革命空間の集団および個人」, 『中部英文学』第26号 (2007年): 1-13 頁.
- バルザック, オノレ・ド. 『ふくろう党』. 桑原武夫他訳. 東京: 創元社, 1961 年.
- ユゴー, ヴィクトル. 『九十三年』. 辻昶訳. 東京: 潮出版, 2003 年.

書 評

REVIEWS



チャールズ・ディケンズ原作，土屋啓之助監督，
藤川桂介・朝倉和泉脚本，

ダックス・インターナショナル制作

名曲ロマン劇場『さすらいの少女ネル』

(Wandering Girl Nell, a cartoon based on the novel by Charles
DICKENS, Directed by Keinosuke TSUCHIYA, Screenplayed by
Keisuke FUJIKAWA and Izumi ASAKURA,
produced by Dax International)

(テレビ放映，全 26 話，東京 12 チャンネル，1979 年 10
月 25 日～1980 年 5 月 1 日放送；DVD ボックス，アイ・
シー・エフ，7 枚組，649 分，2005 年 8 月，
本体価格 25,935 円)
ASIN: B0009UZ4OI

(評) 宮丸裕二
Yuji MIYAMARU

我々が 19 世紀のヴィクトリア朝の文化に関心を持つように，仮に来世紀の世界が今日の日本の文化に深い学術的関心を持ってしまったとしたら，資料の膨大さゆえ，その際の研究作業の困難は実に想像を絶する．ヴィクトリア朝に英語で出版された小説は 3 万種を数えるというが，それでも今日の芸術作品の膨大さの前には比較にならない．ディケンズの小説『骨董屋』も，それを元に制作され約 30 年前にテレビで放映された『さすらいの少女ネル』も，共に大衆に向けた娯楽として作られ，その時の大衆の意識を写し出す鏡である点では同じでも，後者が埋もれるのは文化の絶対量によるものと言えよう．この DVD がどれほど売れているかは怪しいところで，学術書と違って図書館の購入を期待できないし，どういう層が買っているのかはよく分からない．勿論子ども向けに作られているが，購入するのはきっと今日の子どもではあるまい．同時に，本作はあまり広く知られているとは言えない．それでも，こうした作品を我々が目にすることができるのは，DVD という媒体が安価に多種の作品を複製する

ことを許したお陰と言えよう．

それほど日陰にありながら，ディケンズ作品の日本におけるほぼ唯一の映像アダプテーションという側面を持つ．舞台にはディケンズの物語が再現されても，映画でディケンズ作品が作られたことがない日本では，これだけがディケンズの映像化であると共に，最も日本らしい映像化をなした作品とも言える．例えば，舞台や映画以上に登場人物の人種差を無化しやすい点一つをとっても，これはアニメーションの利点と言えるからだ．原作がヴィクトリア朝を写す一つの鏡であるのと同様，本作でもプラスが「耐え難きを耐え，忍び難きを忍び……」と言い（第 12 話），殴られて眼鏡が飛んで「メガネ，メガネ……」と手探りをする辺り（第 1 話），本作も当時の日本を移す一つの鏡である点では対等であるが，ここではそれぞれの背景となる時代特性との関わりよりも，原作があった上でのアダプテーション作品としての側面を考えて行きたい．

*

かやわく多感な少女ネルが店を差し押さえられた祖父トレントと二人で旅に出るというのは原作の設定と同じである．『ピクウィック・ペーパーズ』などと違ってディケンズが具体的な地名で旅程を挙げなかったため，未だにロンドンを出た後の二人の道のりや行き先は謎のままだが，方角やその他のヒントから，原作『骨董屋』では，北へ向かい，コヴェントリまで，ないし通過してバーミンガム辺りまで足を伸ばしただろうというのが有力な説であるが，それも時間と距離を考えると子どもの足では無理があるのではないかと言われることがある．ところが驚くなかれ，アニメーションのネルと祖父は，アイルランド島へ渡り，ほとんど徒歩のみをもって遥かベルファストを超え，島の北端まで踏破してしまうのだ．原作と違うのは，家を出て行ったお母さんを探す旅になっていることで，キルプへの借金からの逃亡よりもこちらが物語を進めるより大きな動機になっている．実際，キルプは借金を返済されてからも二人を追いつけ，その理由は考えるとよく分からないところまで来る．母を探して「パラダイス」という土地を探しつつ旅するネルは，いろいろな人との出会いを重ねるのであるが，人形作りが上手なネルは一話に一体の人形を作り，出会った人々に贈っては，歩を進める．また，旅するネルと祖父を，キットが追い，キットと同行する謎の男が追い，度々助けてくれるがその正体は分からない．やがて出会ったある人から聞いた「パラダイスは私の友人がやっているんです」という言葉から（第 23 話），これが大人によるある種の経営地所であり，相互扶助という意味ではホーソーやフーリエの言う理想共同体のようなものでもあり，一つの職業は一人までという意味ではロータリー・クラブのようなものでもある．旅の疲労からネルが体調を崩し，生死の

境をさ迷うことがクライマックスを形成しており、その点はまた原作と同じところである。ただし、ネルの容態を視聴者が心配して見つめるという構造はあるものの、ネルの内的な精神の苦悩を描き出し、ネルが主体的に死と対面するシーンとして描かれているのは原作との相違点である。

作品全体を支配する因果律は、「偶然の連続」である。偶然の多用をもって非難を受けたディケンズも顔負けの濫用で、ごく近くまで来ているキットらと出会えそうで出会えないというすれ違いは毎回であるし、知人にひょんなところで再会するのも一度や二度ではない。また、キルブラに追われてピンチに陥り、もうだめかと思われるや、アルセーヌ・ルパン風の警部が登場しネルたちが危機を逃れるというの、ほぼ毎回のパターンである。様々な人との出会いや別れに感動し、「どうしてこんなに素敵なことばかり次々に起こるのかしら」と表情を輝かせるネルなのであるが（第11話）、連続シリーズゆえに毎回視聴者をハラハラさせ、ドキドキさせ続ける必要がある結果、ネルらが潤沢なる偶然の恩恵の中を生きているからというのが一応の答えと言えよう。

人物造形について言うと、ネルのかよわさ以上に強調して脚色されたのが、祖父トレントの人物像である。孫と二人で旅する上で外の世界に対して肉体的な弱さを露呈するのはそもそも原作の段階から与えられた役割であるが、同時に原作が与えている、ネルに対しても見せる祖父の精神的な弱さが、ちょっと看過できないほどなのである。地図にもなく実在するかしないかも不明なパラダイスという場所を探してアイルランドへ渡るといふ無茶な行動を制止するのが大人に問われている見識というものであるが、ここでのおじいちゃんはそういう良識を見せる役割として登場しない。そもそも息子が病気になるのはお前のせいだと怒鳴ってネルのお母さんを家から追い出したのはこのおじいちゃんであったし、借金を作り出したことも、賭博に目が眩むことも、原作を忠実に再現している（第1話）。経済的にやむなく悪事を働こうとした人物に対して、自分が文無しの宿無しであることを柵に上げて、助言・箴言を与えることを辞さない（第8話）。ネルが養子になる機会を目の前にしながら断念するのは祖父まで養うキャパシティを許されなかったからであるし（第6話）、ついには、旅路にて喧嘩した末に孫を殴りつけ、一人荒野に放り出すという見境のなさを見せる（第15話）。おじいちゃんといっても実質はまだ若いのか、その老成しているはずの年齢では抑えきれないと思しき肉体が表に立ち、蝶ネクタイながら背中にはバックパックを背負い込むというアスレティックな風貌にその分裂は既に現れている。多くのシーンで力の限り疾走するし、あるいは馬車に飛び乗る雄姿を披露し、牢に閉じこめられた際にはそれを腕力のみで破壊し、脱獄を果たす（第15話）。つまり、血気盛んながら自分を制御するところまで老成

できていないおじいちゃんが、旅を続ける上で相当なお荷物になっているのである。この点、子どもの無垢が大人を導くというディケンズのロマンティズムを忠実に汲み取っている。

ただし、肉体派ということでは実はネルも負けていなくて、家の真ん中を通った梁を引っ張り出して水車を止めて人命を救助するという豪腕を見せているが（第16話）、これも少女の持つ無垢性の前には肉体をさえも従えるという思想の表れと納得することができる。病床で死に瀕する少年に「私と一緒に飛びましょう」という催眠術師のようなネルの一言をもって、二人は鳥になって飛べてしまうというの、精神性が物理的事情をも超えて優先する世界観のあり方を示している（第7話）。結果、失速して墮ちてしまい、「元気づけようと思ってやったのに……」と嘆くネル自身、欲すれば飛翔できるという能力を当然視し、疑うところが微塵もない。

以上をまとめて原作と比較するに、原作『骨董屋』から『さすらいの少女ネル』へと移入されているのは、弱き少女と祖父が逃げる旅という大筋の設定と、少女の命の危機を皆で見守るという構図のみと言えるし、またその点に限っては可能な限り忠実に、あるいは過剰なまでに再現していると言うことができるだろう。

＊

さて、ディケンズ唯一のアダプティションである本作は、1970年代の段階でのディケンズの受容のあり方を跡付ける作品としての意義を持つのであるが、それにしても、外国文学を原作とした児童向けアニメーションの制作背景そのものが日本の世界文学受容を垣間見させる意味で非常に興味深い題材である。ここに当時の大人の海外文学理解と海外文化理解が視覚的に残されていると同時に、ある世代以降の子どもの物語受容には活字媒体よりも映像媒体が大きな影響力を持ってきたことは否定できないし、活字文化である文学にしても映像による語り直しに大きく道を譲ってきているからである。

本作を手がけたダックス・インターナショナルは、『まんがはじめて物語』シリーズ（1976～91年）などで知られる、主に実写とアニメーションを組み合わせた作品を得意としていたが、これは設立した丹野雄二が元々日活で映画監督をしていた関わりと考えられる。丹野は本作品でも企画を担当している。「キリン名曲ロマン劇場」シリーズは、『野ばらのジュリー』、『巴里のイザベル』、『金髪のジェニー』（1992～93年に日本アニメーションがリメイクを制作）、続けて本作と、1979年の一年の間に立て続けに放映した4作品のみから成る。従って、『アルプスの少女ハイジ』、『フランダースの犬』、『母をたずねて三千里』などを世に送り出した「カルピスこども劇場」（後の「世界名作劇場」、「ハ

ウス世界名作劇場」；1969年～）などと比べると小規模にして、短命、無名なシリーズになるが、児童用アニメーションの伝統というところで「カルピスこども劇場」やその他の作品と、そう変わらぬ作りになっているところはいくつもある。母を訪ねるネルの姿は、頼りない子どもの旅という意味で、『母を訪ねて三千里』（1976年）のマルコと容易に重なるし、おじいさんと少女の閉じた環境は『アルプスの少女ハイジ』（1974年）と共通性を持つし、キットと会えそうで会えないのは1976年から二年間にわたってテリーとすれ違いを続けたキャンディと同じなのである。そうしたアニメーションの伝統に当てはまる作品をディケンズから選ぶとき、ある意味で『骨董屋』が最もぴったりと来る要素を備えていたということなのだろう。

脚本は、円谷プロで多くの特撮テレビの脚本を書いた藤川桂介と、『太陽にほえろ』や『魔法使いサリー』などを手がけてきた朝倉和泉（朝倉千筆）の二人が、ほぼ交代で書いている。一つの不思議は、彼らが脚本を書く際に何を底本としたのかである。ディケンズの原作を英語で読んだのだろうか。朝倉は津田塾で英文を学んでいるからあり得ない話でもないが、しかし作品に時々出てくる横文字を見ていると、どうやらそれは疑わしい。小切手の表面に‘A plyvate bank-card’と書いてあり、パン屋の軒先には‘Barkary’という文字があり、キルプの会社の看板は‘Kilp’s Company’である。地名の‘Monaghan’に「モナガン」という読みを当てているし、ジョーンズさんの表札は‘Mick Jorner’であるし、その子どもは男の子でありながら「ジル」である（第16話）。また、ペンダントの中の肖像をどうやら写真であると考えて作っている節もあることを思うと（第11話）、歴史的知識に怪しいところも感じられる。こうしたことは脚本家の仕事の範疇を出るのかも知れないが、「テーマズ川」という読みなども考えると、恐らく英語を読んで直接作り出した脚本とは考えにくい。やはりなんらかの翻訳ないし再話を元になっていると思われる。当時は初の完訳である北川悌二訳（1977年）が出版されたばかりであるが、恐らくこれを原典としたのではないことは、北川訳の「クウィルプ」が本作では「キルプ」となっていることだけをとっても明らかだろう。仮に「キルプ」が子どもに発音し易いための変更と考えたとしても、北川訳の「ブラス」、「ジャーリー夫人」が、アニメーションではわざわざ「プラス」、「ジャーレイ夫人」と単純化とは思えないカナが振られていることの説明は難しい。かといって、まさか、松本泰・松本恵子訳『少女瑠璃子』（「ディケンズ物語全集」（1935～36年）第4巻）ではあるまい。ここは、戦後、北川訳までに上梓された、池田宣政、村岡花子、喜多謙らをはじめとする七つの児童用書籍のいずれかを元にしたと考えるのが自然だろう（同様に、大江健三郎が「キルプ」としたこともこの辺りに原因を

求めることができそうだ）。そうした翻訳・再話の経緯は、佐藤宗子氏の『『けなげ』の多義性』（『千葉大学教育学部研究紀要』第52巻（2004年））に詳しい。恐らくタイトルからするに、中でも新川和江の『さすらいの少女』（1958年）あたりが直接の原典ではないかと思われるが、告白すると私はこれを直接手にして検証していないので明言することができない。ただ、上記「プラス」、「ジャーレイ夫人」などの綴りを辿るだけでも特定はそう難しくはないだろう。

*

いずれを原典にしたにせよ、本作を見ていて気づくのは、作り手が『骨董屋』のみならず、可能な限りで広くディケンズの世界を示そうという姿勢があることで、原典だけから全てを語れないところを認める必要があるだろう。本作に登場するエピソードのどこまでがディケンズの原作に取材していて、どこからが偶然の類似かという線を引き出すことは容易ではないが、類似を類似のまま列挙するのならいくらでも挙げることができる。キルプの屋根の上の逃亡劇は『オリヴァ・トゥイスト』のサイクスに重なるし、死んだかに見えたキルプが生きている次第は『バーナビー・ラッジ』か『エドウィン・ドルードの謎』から借用しているかも知れない。謎の男が老人に見えて実は若者だったという、さながら無茶な設定も、当時既に『爐邊の蟋蟀』が翻訳されていたことを考えるとディケンズとの因果関係を考えるべきなのかも知れない。また、弁護士が痛い目に遭うこと、マルコム・アンドリュースが論ずるいわゆる‘grown-up children’がここに登場する点も、ディケンズの作品を参照した結果か、もしくは参照せずともディケンズの一作品に沿って世界観を再構築する際の必然的なりゆきとして出てくる共通点なのかも知れない。また、子どもを使った泥棒が出てきたり（第17話）、ネルを仲間に引きずり込んで盗みの練習をさせるに至ってはどうか偶然とは言えまい（ただしオリヴァよりもネルの方が悪いことをしている自覚がある点が興味深い）。足が付かぬようにハンカチからインシヤルの刺繍を取るところまで『オリヴァ・トゥイスト』と同じであるし、「指先の芸術」という言い回しも借りている。この様に『骨董屋』という一作品を元にしながら、ディケンズ作品全体の世界観を紹介しようとした形跡が見られるのであり、これは、活字を超える物語の担い手となりつつあった映像を用いながらも、文学の遺産をいくらかでも子どもに手渡して行こうとする、作り手の熱意だろう。

*

同じく、これもディケンズに沿って作品を作ろうとすると必然的に付随する側面なのかも知れないが、本作に出てくるのはおよそ良い人ばかりである。厳密に言うと性質が良いながらも弱い人々である。前掲の通り、弱い人間の筆頭がおじいちゃんなのであるが、その他の人物も、等しく弱いが故に悪事に走ろ

うとする。そこへ現れたネルを見ていて自ら反省し改心するという、反復である。つまり、ネルを触媒に、人間がいかに良いものでありうるかを教えてくれる。唯一の例外は、夜な夜な酒場へ出かけてゆくトレントを見てまた賭博にはまったかとネルが疑うも、実は小遣い稼ぎに酒場でエプロンをかけて皿洗いをしていたのを見て、ネルの側で自らの猜疑心を反省をしたというものだが（第22話）、これはそもそもを思えばおじいちゃんの自業自得であって、見る者の心が動かされるのはおじいちゃんが経た人間的成長に対してである。こうして出会う人、出会う人がネルのお陰でその本来の良き性質を開花させる中、本作に登場する本当に悪い人物といえるのはおよそキルプ一人だけだ。

結果的に人間の善性の賛美に終わるこうした世界観は、人間の良い面だけを見て他の面を見ないナイーヴな人間観を持つ人が見たって得心がゆく。翻って、本作が「甘ちゃんデナイーヴで浅薄な楽天主家ディケンズ」という日本で珍しくないディケンズ観を助長した可能性だってあるかも知れない。しかし、この世界観は、人間性に決定的な悪を見出す人が見ても、また違和感を感じるものではないのである。つまり、世界は最初からバラ色で良いものであるとは一言も言っていないのであって、その開始点があるかないかで、バラ色を理想と掲げることの意義も違ってくる。人が悪に染まり、世界が崩壊していることを見つめた上で、そこに善が現れてこそ、その善が価値を持つのであり、こうした世界を示すことができるのはおよそ物語という表現形式だけなのではないだろうか。ここに見る万人に弱さや悪を見る勧善懲悪というスタイルは、本作に限らず、またアニメーションに限らず、従来の子供用のテレビ番組がほんの少しの例外を除いて、非難を承知で一貫して採ってきた方針である。その予定調和の世界観は、単純な分かりやすさを持つと共に、善を最終的に肯定し、ためらわず理想を理想として是認する健全さを保証していたのである。本作を経た直ぐ後に、1980年代を曲がり角として、シニシズムに染まる世界を考えると、ある種の時代の成熟を見ると同時に、善を善として掲げにくくなるし、是認すべき理想を失う時代を迎えたことを看過できない。その時代潮流に乗っている点で、子ども向けの媒体も例外ではなくなる。本作に見る種類の勧善懲悪も、消えはしないが主流ではあり得なくなった。ここ30年間というのは、ディケンズ的な世界観を受け入れる素地がある時代であったのかどうか、そのことは、活字離れという現象以上に実は大きな問題かも知れない。

＊

さて、最後に原作と本作に橋渡しをするさらなる要素、すなわち暴力、性、グロテスクという、あまり今日では子ども向けとされない価値について考えてみたい。本作はまだ昭和という悠長な時代に作られたせいか、子ども向けにこ

うした要素を排除しようという配慮が見られない。相手の首を締めたり、襟を持って締め上げたり、家にオイルをまいて放火しようとしたりと、バイオレンスのシーンは枚挙にいとまがない（放火はさすがに酷いと思ったのか、ネルが制止するが、それでも家は瓦解し屋内の人が潰される）。あるいは子ども相手に、ナイフをのど元に突きつけたり、馬で引いて樹に吊し上げたりもする。キルプの死は実際に壮絶であるし、ネルもまた死と対峙する経験を「このままだと本当に死ぬわよ」（第21話）というセリフに込めている。オープニングでは遊園地のジェットコースターから猫が落ちるが、このシーンは今日なら各地での事故の被害者の心情に配慮してカットされることであろう。あるいは、何をおいても一番のバイオレンスは、1秒間に3回を超える回数の点滅が画面一杯に4.5秒間を軽く超えて続くことかも知れない。

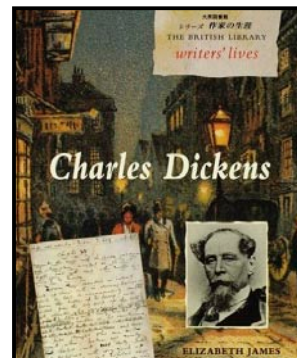
性についても、完全に排除ということにはなっていない。今日であれば、子ども向けのものとあれば、性の要素は完全に除去するか、ないしは過剰に強調されて社会問題の種となるかのどちらかだろう。かよいネルの場合、その扱いは微妙である。悪人に追われ続けるネルは、例えば、騙されてサーカスに売られそうになったりするが、本当ならもっと悪いことをしそうなのであるし、大人はそう思いながら見る。つまり、ネルは性的欲望の対象として決して言及されないが、そう呼ばないだけで性的欲望の対象という見方がいつでも無理なく当てはまるというあり方をするのである。追跡の理由を失っても追い続けるキルプのサディズムには性的な動機を見て無理は生じない。また、キルプと違い、直接的な動機として結婚するという期待を持ってネルを追うプラスにも、これが現れている。プラスはなぜかトランスジェンダーな喋り方をするのだが、「あのかわいいネルちゃんをまた追えるなんてゾクゾクしちゃう」、「追い回せるなんてワクワク」（第15話）。「僕のかわいいネーメルちゃん」、「な～るほど、寝込みを襲うんですね」（第16話）、「ネーメルちゃん。よくも脅かしてくれたわね。おしおきしてやらなくちゃ。かわいいお尻をペンペンしてや～るよ～」（第21話）と、追跡の動機づけに性が見え隠れするのだ。トレントが、謎の男やキットをネルから遠ざけておこうとするのも、口には出さなくともネルが既にセクシュアルな存在であり得ていることに気づいてのことであろう。

性そのものは空洞で、しかしどこまでも性的である扱いというのは、子ども向けのアニメーションゆえの婉曲表現かと思いきや、考えてみたら少女に対する性的倒錯は原作の物語動機としても、語り出しから最後まで実に大きな働きをしていたことに気づくのである。そうすると、性そのものには蓋をして近づかず、性的なるもののみを道具に人物造形や人物の関係を充実させて行くヴィクトリア朝との共通点を想起させずにはいない。ただ、性というものがそもそ

も比喩ならば、これがヴィクトリア朝の読者にも、あるいは本作の視聴者たる子どもにも、性的対象たるネルがエロティックに映ってしまう危険があるわけだが、そこがいかにか回避されているかというのは一つの興味深いからくりである。

原作『骨董屋』に現れるグロテスク表現はディケンズ作品の中でも際立っている。本小説が奇人変人びっくり人間ショー的な趣きを持つのは、そもそも同時代の現実世界に乱立していたフリーク・ショウの一種類として、異世界を覗き見る見世物小屋の一つとして、小説『骨董屋』が存在していたからだとは、レズリー・フィードラーが説明してくれている通りだろう。ただし、その見世物小屋の中で進む物語は必ずしも荒唐無稽ではないのである。『さすらいの少女ネル』にはフリーク・ショウ的な趣きは移植されていない（むしろ、ジャーレイさんに、懐かしい母の面影を見るところでもない設定になっている）。しかし、アニメーションの造形美が持つ畸形性には、フリーク・ショウと共通する機能を見ることができるかも知れない。

畸形が群れをなす中での、しかしながら写実的な物語進行という根本的な矛盾が原作にあり、いびつにして魅惑的な世界を受け入れた者だけがその物語に同行することができるという鉄則がある。考えたら人とも思えぬアニメーションの造形美を受け入れて人と見なし、どんなものかいてもその存在自体に驚いてはいけないうし、人が死にかねないバイオレンスをコミカルな表現と見なし、物語を享受するというようなところに、実は性の問題の根本もあるのかも知れない。すなわち、そこは性的なものに溢れていて、それによる刺激もあり、タブーもあるが、性的なものを遊ぶ営みがあるだけなのだろう。そうした子どもにおける性的なものの遊び方はディケンズが既に物語の動機づけに利用している。従って、小説の中で畸形に囲まれるネルも、アニメーションの中のネルも、性的対象であらねばならないし、同時にどこまで行っても大人が現実世界に見る意味でのエロティシズムは備え得ないのだろう。すると、これが『骨董屋』以外の作品を原作に選んでいたなら、そのアニメーション作品は子どもに見せても良いものになったかどうか、ちょっと分からないのである。



エリザベス・ジェイムズ著、高橋裕子訳
『図説チャールズ・ディケンズ』

Elizabeth JAMES, *Charles Dickens*,

trans. by Hiroko TAKAHASHI

(128 頁, ミュージアム図書, 2006 年 12 月,
本体価格 2,900 円)

ISBN: 4944113609

(評) 廣野由美子

Yumiko HIRONO

本書は、British Library から 'Writers' Lives' シリーズの一卷として出版された Elizabeth James, *Charles Dickens* (2004) の邦訳である。訳者高橋裕子氏は、フランドル・オランダ・イギリス等の美術を専門とする西洋美術史研究者であるが（イギリス関連では、『ヴィクトリア朝万華鏡』、『イギリス美術』などの著書がある）、翻訳も得意とするらしい。訳文はこなれた日本語で読みやすく、ことに対応する原文と和文の分量がほぼ等しく、原書と翻訳の該当ページが一致している点など、見事な技である。一方、訳注をほどこすといった文学研究者ならではの仕事は、本書には見られない。訳者による付記は数行のみで、ディケンズ作品の翻訳が岩波・ちくま文庫から出ているという情報と、日本語による研究書 3 冊のリストを挙げるに留められていることが、いささか寂しい。しかしその理由が、訳者自身の文学上の知識不足によるものなのか、あるいは訳者に自由裁量の余地を与えないという出版社側の編集方針によるものなのかは、評者には判断が及ばない。

大判ではあるがわずか 128 頁という比較的薄い本書には、写真・絵画などの視覚資料がふんだんに収められていて、図版がかなりのスペースを占めている。実際、最初に手に取ったとき、これはどういう種類の本なのかと首を傾げた。ミュージアム図書が表題に「図説」という一語を加えていること（そして、美術専門家に翻訳の仕事を委ねていること）からもうかがわれるように、本書は図版を主体とした解説書なのか、それとも、大英図書館がシリーズ名を「作家の生涯」と銘打っているからには、あくまでも伝記を主体とした作家研究なのかと。ところが本書には（原書も確認したが）、シリーズの企画方針というものがどこにも書かれていない。しかし、実際に中身に目を通して見て、本書が図版資料としても評伝としても、両面において価値のある良書だということがわかった。

まず、図版資料としての側面から見てみよう。本書には、青年期から晩年

に至るまでのディケンズの肖像画や写真（他の人物の中に交じったものも含めて全8点）をはじめ、関連する人物やゆかりの場所、建造物等の写真や絵画が数多く収められている。また、ディケンズの手書き原稿や創作ノート、書簡、関連の印刷物の写真など、文学研究のうえでも貴重な資料が豊富に含まれる。そのほか、当時の風景や文化、社会など、ディケンズが生きた世界を彷彿とさせる絵画なども織り込まれている。それゆえ本書は、「見る」だけでも、ディケンズへの興味を喚起するガイドブックとしての役割を果たす。

次に、評伝として見ても、本書はコンパクトながらよくまとまっていて読み応えがある。作品解釈にはほとんど踏み込んでいない点など、物足りない面もあるが、作家の生涯を紹介することがシリーズの趣旨であるとするならば、それは著者の想定内のことだったのかもしれない。ともかく、ディケンズ像をくっきりと浮かび上がらせる点において、本書は成功していると言えるだろう。ことに優れているのは、ディケンズと一定の距離を保ち続けているそのバランス感である。著者エリザベス・ジェイムズは、ディケンズ^{びいき}の伝記作者に見られがちのように、彼にとって不都合な事実を隠したり弁解じみた潤色の仕方をしたりするようなことはせず、かといって、偉大な作家の人生上の汚点を暴いて得意がるようなこともない。その客観的態度は、ディケンズの周囲の人物に対しても公平に向けられる。

たとえば、ディケンズの母エリザベスといえ、少年時代の悪夢のような靴墨工場体験から、父ジョンがやっとなチャールズを解放してくれようとしたとき、息子を工場に留まらせようとして、その心を踏みにじったというエピソードが有名で、無頓着で愚かな母親というイメージが一般に定着している。本書でも、「私を職場に戻すことに母が熱心だったことを、私はその後決して忘れなかったし、忘れることもないだろう。忘れられないのだ」と、後年ディケンズがフォースターに語った言葉が引用されているが、彼が終生母を許そうとしなかったという事実が示されるに留められ、むしろこの経験が、ディケンズを強く頑なな、そして「批判に対してひどく敏感」で「猛烈に自信が強く、言い出したら後に引かない人間」にしたという側面が強調される。エリザベスが「きれいで快活な」女性であったことや、幼少期のディケンズに勉強の手ほどきをした熱心な母親であったという事実も、ここには公平に記されている。そもそもジョンが負債者監獄に投獄されたのは、エリザベスの愚にもつかない学校経営計画の破綻のせいであるというような記述さえ、間々見かけられるが、ジェイムズはそれが、破産に直面した夫を見て「今こそ自分が『何とかする』ときだ」と、エリザベスが不承不承到達した決断であったとしている。学校の案内状を配ったものの、生徒がひとりも来なかったという失敗は、ブロンテ姉妹も経験

していることであり、評者はむしろ、ディケンズの母親が、学校経営を思いつくほどの教養と資格を有する人物であったことに、新鮮な驚きを感じる。のちに功なり名遂げたディケンズが、大邸宅で派手なパーティーを催していたとき、上機嫌の息子の前で「まるで彼を怒らせるのを恐れるかのように、控え目に振る舞っている」両親の姿を見たという人物の証言が挙げられている箇所などからは、立派すぎる子供を持った凡庸な親の悲哀がそこはかとなく漂ってくると同時に、ディケンズの怖さが伝わってくる。

妻キャサリンとの結婚生活の行き詰まりにまつわる事情は、ディケンズの人生のなかでも、もっとも暗い影を落とした部分である。世間の中傷に躍起になったディケンズが、妻との別居に関して自分を弁護する声明を『家庭の言葉』ほか、さまざまな刊行物に発表したり（掲載を断った『パンチ』の出版社と縁を切り、主筆者と絶交したという熱^{いき}り立ち方も、ディケンズらしい）、誤って公表されることになった知人への手紙のなかで、結婚生活の破綻の責任をすべてキャサリンになすりつけ、精神障害者呼ばわりまでして、彼女の母親としての無能さをなじったりしたことに関しては、「ディケンズの振る舞いはひどいものだった」とジェイムズも評している。しかしジェイムズは、この「望まれざる妻」（Hebe Elmsleyの著書名）を声高に弁護することもなく、ただ夫と別居後キャサリンがいかに振る舞ったかを耽々と記述することによって、彼女の人柄を滲み出させる。キャサリンは、自分に対する夫の激しい攻撃に対してはじめは抗議したものの、それ以上の弁明はしようとせず、死ぬまでの20年間静かに暮らし、「いつまでもディケンズのことを思い続け、業績を追い、本が出ればそれを読んだ」。そして、ドラマ化されたディケンズの作品を初日に観劇して涙し、ディケンズからの手紙を宝物として大切にし、死ぬ前に娘に託したという。たとえ彼女が、ディケンズの言うとおりの愚鈍な女性であったとしても、誠実な奥ゆかしい人物であったことは確かであろう。ディケンズほどの責任感と正義感の強い人物が、20年余りも連れ添った女性に対して、このような卑劣な振る舞いに及んだからには、そこにはよほどどうにもならない——おそらくエレン・ターナンへの恋情といったような単純な理由では説明がつかない——感情があったのだろう。それは、無能な妻や子供たちに対する苛立ちや幻滅を克服する余裕がないほど、ディケンズの心が忙しさのあまり荒み疲れていたことを示しているのではないかと、本書を読んで評者は改めて思った。この本には、当時のキャサリンの拡大写真（1852年撮影）が収められているが、若いころの肖像に見られる可憐さは跡形もなく、（こう言うと語弊があるかもしれないが）10人の子供を産み育てたならかくもあろうかと思われるようなくたびれ肥満したその姿を見ると、ディケンズの重い心持が推し量られるよ

うな気もする。「キャサリンは快活ではなかったし、特に聡明でもなかった。人なかで目立つほうでもなく、絶え間なく輝き続ける夫には到底太刀打ちできなかった」というジェイムズの解説は、この夫婦の相性の悪さに根本的な破綻の原因があったことを、簡潔に示している。

ディケンズが、少年時代の不遇や初恋の失恋の痛手をもとに強固な人格を形成し、断固たる意志力と自信によって猛烈に仕事に没頭し、新聞記者から小品の物書きへ、そして長篇小説作家、有力雑誌の編集責任者、自作公開朗読者、社交界の寵児となり、大西洋の両岸で絶大な名声を博するに至るまで、一気に成功の頂点へと駆け上がっていった輝かしい経緯は、本書にも鮮やかに描き出されている。貧しい人々に対する同情心や社会の悪弊を糾弾する批判精神によって注目を集めるのみならず、その抜群のユーモアのセンスや溢れる活気、得意の物真似や演技力によってつねに人々を楽しませる才能の持ち主であったディケンズが、いかに魅力的な人物であったかもわかる。

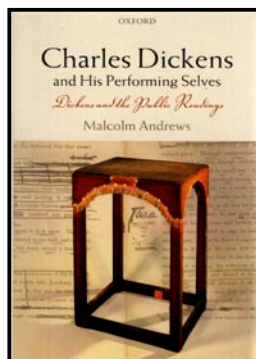
他方、その「輝き」の所々に潜んでいる陰の部分にも、ジェイムズはざらりと触れる。マライア・ビートネルに恋をしていた4年間、「ほかのことは何一つ考えられなかった」と自ら認めるディケンズが、薄情な恋人に振り回され、「幾晩も眠れないままに、恋人の家の周りを行ったり来たり」してうろつき回っていたというような無様な挿話も紹介される。「一躍有名になったことに有頂天になったあまり、ディケンズは実行不可能な仕事のスケジュールを立てて」しまい、そのあげく見返りの少ない仕事の約束を破棄しようとして、出版社との間に争いを引き起こすこともあったという。なかなか折れようとしなないベントリーとは、あらゆる関係を断ち切るなど、ディケンズは強者の立場で強硬手段に出ることも少なくなかったようだ。「虫の居所が悪いと、ディケンズの目はまるで『危険信号』のようにぎらぎらと光り」周囲の人々を怯えさせたとか、ディケンズに会った多くの人々は彼の鋭い知性を評価したけれども、なかには彼の「『品のない』高笑いや、めかしこんだ身なりに顔をしかめる人たちがいた」ということなども、評者は初めて知った。創作にのみりこみ虚構の世界に心を奪われているディケンズの態度は、家族の立場から見ると、「私たちよりも頭の中の子供たちのほうが父にとってはもっと現実的だった」と言わしめるような側面があったことにも触れられる。そして頂点へと登りつめるにつれ、表向きの華やかさとは裏腹に「私生活では、彼はますます人と距離を置くようになり、古い友人たちの多くと疎遠になって……出来るだけ長い時間をネリー（エレン）と過ごす」ようになり、「一人、また一人と、息子たちは父親の期待に応え損ない、家を遠く離れた土地で出世の道を捜すようにと促されて」去って行ったとあるように、孤独の色を深めてゆく。

しかし、このような陰の部分が書かれているにもかかわらず、本書からはディケンズの魅力がじゅうぶん伝わってくる。むしろ公平に隠さず書かれているからこそ、つまり、先にも述べた本書の「バランス感」ゆえに、説得力を帯びて魅力が確実に伝わるのである。あるいは、光と陰があるからこそディケンズの生涯は面白いのだと、言い換えることができるかもしれない。最後に、いささか脇道に逸れることになるかもしれないが、なぜディケンズの生涯が面白いのかという評者なりの説明を、以下付け加えておきたい。

評者はよく、ディケンズ（1812-70）とドイツの作家ゲーテ（1749-1832）とを比べてしまう。時代もずれているし、国も生まれ育ちも、作品世界もまったく違うにもかかわらず、両者には共通のイメージがあるからだ。天才的な作家、国民的な人気を博する文豪で、多作であるうえに、創作以外の領域にまで手を出したがる（ディケンズの演劇・公開朗読活動、ゲーテの自然科学研究・行政活動など）有り余るエネルギーの持ち主であること。司法関係の世界から文学の道へと入ってゆき、社会的成功を極めたこと。情熱的で、女性にまつわる挿話が賑々しく、なかでも有名な失恋談があること（ディケンズがウィンター夫人となったマライアに再会して、「太った愚かしい中年女」となった彼女に失望したという挿話は本書でも紹介されているが、ゲーテが『若きウェルテルの悩み』のヒロインのモデル、シャルロッテ・ケストナーと44年ぶりに再会したという話も、トーマス・マンの小説化によって有名である）。女性に対して様々な種類の愛情を抱きえたのにもかかわらず、結婚生活に関する評判が芳しくないこと。晩年に十代の女性に熱を上げ、かなり手痛い目にあったらしいこと。現状に行き詰まると、国外に逃亡し充電して帰って来るという行動パターン等々。つまりは、一般に言うところの、どうにも手に負えないタイプの男性である。

しかし、以上の比較のうえに立ってなお、評者にはディケンズのほうがはるかに魅力的な作家であるように思える。ディケンズがいれば陰から這い上がって光を求めたのに対して、日向に照らされ続けたゲーテの生涯には、「かげり」というものがほとんどない。ゲーテはあっけらかんとして隠し事が無いのに対して、ディケンズは隠し事や謎だらけだ。晩年のディケンズの写真を見ると、どれも堂々たる風貌にもかかわらず、その表情に言いしれぬ疲労と焦燥感が表れているように見える。ゲーテが『ファウスト』を完結させ、なおかつ（言い伝えによれば）「もっと光を」と言い遺して大往生したのに対し、ディケンズは過労に倒れ、エレンとともに鉄道事故にあったちょうど5年目の不吉な日に、最後のミステリー小説を未完のまま遺して死んだ。この違いは、究極的には「調和」の精神を求めたゲーテと、ジェイムズが言うところの「『何かが足りない』

という漠然たる思い」にたえず駆り立てられ続けたディケンズとの、根本的相違を象徴しているかのようである。伝記には、最期まで公開朗読での「喝采の嵐」と孤独な「虚脱状態」との間を行き来し続けた悩めるディケンズの姿が描かれている。しかし、まさにそういう光と陰の中から生まれてきた作品であるからこそ、私たちはディケンズの文学に魅せられるのではないだろうか。



Malcolm ANDREWS, *Charles Dickens and His Performing Selves: Dickens and the Public Readings*

(xiv+331 頁, Oxford University Press, 2006 年 10 月,

本体価格£40.00)

ISBN: 0-19-927069-4

(評) 松本靖彦

Yasuhiko MATSUMOTO

ケント大カンタベリー校教授で、『ディケンジアン』の編集主幹をされているマルカム・アンドリュース氏の最新刊が出た。待望の「公開朗読」論である。アンドリュース氏の紹介は不要だろう。研究者として幅の広い活躍をされているばかりでなく（英文学だけでなく美術関連の御著書もある）、ディケンズ作品の朗読者としても長年活動されていて、日本でもその優れた技量を何度か披露されている。

これはもう言っても仕方のないことなのだけれども、ディケンズの公開朗読を一目観て、そして聞いてみたかった、と思わず溜息をつくときがある。もしも本当にタイム・マシンがあったならば、ヴィクトリア朝のイギリスに行って…などと夢想してみたりもする。いや、これほど幼稚な発想でなくとも、「ディケンズの公開朗読は実際どんな感じだったのだろう」と、時空の彼方に思いを馳せたことのあるディケンジアンは少なくないはずだ。ディケンズの公開朗読について調べることが、たまらなく刺激的で、また切ないのは、彼の公開朗読が、直接的な体験としては既に完全に失われたものであるからだ。でも、それが分かっているからこそ余計に、ディケンジアンたちは、永遠に失われた朗読者ディケンズの肉声、眼の輝き、しぐさ等に思いを馳せては、溜息をつくことになるのである。本書 *Charles Dickens and His Performing Selves* の最大の魅力は、

我々に「もしも自分がディケンズの公開朗読の会場にいたとしたら…」という夢を束の間みせてくれることである。これは、当代屈指のディケンズ研究者であり朗読者である著者が、緻密かつ堅実に事実と証言を積み上げることによって、ディケンズの公開朗読とは何であったか、詳しく教えてくれるだけでなく、活字というメディアで最大限可能な限り、ヴァーチャルに「追体験」させてくれる本なのである。

読み始めてみて、「これは小説仕立てか!？」とちょっと驚いた。本書の本論部分は6章から成るが、最初と最後、そして第5章の直後に短い読み物が挿入されている。「読み物」とはいっても、無闇に想像を膨らませてはいない。事実を元に淡々と綴られた、ドキュメンタリー映像のような記述だ。最初の「読み物」‘A Premiere: New York, December 1867’は、ディケンズがニュー・ヨークに着くところから、待ちわびた聴衆の前に彼が姿を現し、朗読を始めるところまでを描いているが、読んでいて興奮した。プログラムが始まる前の会場の人いきれ、ガス灯に照らされた舞台中央に置かれた机、静かに高まる期待と興奮、そして漸く登場したディケンズが舞台中央に立ったときの、会場の張り詰めた空気…などが、アンドリュース氏の精密で具体的な筆致によって生々しく再現されているからだ。ディケンズが舞台に姿を現し、聴衆（読者）に挨拶をして、その夜の朗読会が始まる場面が、本書の「幕開け」に用いられているわけである。続く本論部分でアンドリュース氏は、「公開朗読」というジャンルそのものをとりまく状況から始めて、ディケンズの（有料）公開朗読が孕んでいたさまざまなパラドックスや問題点をじっくりと考察し、また公開朗読ツアーの物質的な側面（舞台照明器具、小道具、台本など）にも触れながら、着実に彼の公開朗読の核心へと迫っていく。その「核心」とは朗読のパフォーマンスそのものであり、また「比類なき（‘inimitable’）」ディケンズその人のことでもある。ディケンズの公開朗読についての詳細な分析の直後には、‘Sikes and Nancy’の公開朗読を再現した読み物が続く。つまり、ディケンズの公開朗読者としてのキャリアの絶頂が、本書におけるクライマックスでもあるのだ。そして、本書を締めくくる短い読み物が、‘Finale: London, March 1870’。ディケンズの公開朗読の、いわば最終章にあたる場面の紙上再現ドラマである。よく知られた ‘from these garish lights I vanish now for evermore, with a heartfelt, grateful, respectful, and affectionate farewell’ という台詞をもって、ディケンズが精魂を傾けた（むしろ生命を燃焼し尽くした、といってもよいだろう）公開朗読活動には遂に終止符が打たれる。その瞬間、客席から溜息が漏れたことにアンドリュース氏は触れ、その僅か12週間後にディケンズの人生も幕を下ろしたことを一言言い添えて、本書も終わる。アンドリュース先生、憎い演出をされるなあ、と思う。尚、3

篇の読み物には、本論部分でアンドリュース氏が検証したポイントが随所に盛り込まれている。本書を読むにあたっては、最初は本論部分だけ読んで、最後に読み物を楽しんでもよいだろうし、通読の後、読み物部分を再読してもよいだろう。本書のメインは、むしろ公開朗読を再現した3篇の読み物の方で、残りは長い解説なのだ、と考えても面白いだろう。

では、以下に本論の内容を紹介したい。

第1章 ‘A Community of Readers’ は、本書全体の基調となる論点を提示している。それは、公開朗読においてディケンズは、常に聴衆との間に心の通い合う強い絆を築き上げようと努力していた、ということである。「築き上げる」とはいつても、彼は有料の公開朗読を始めるまでの20年以上に渡って、読者との間に特別な親しい関係を作り上げていた（これには分冊刊行という出版形式も寄与している）。従って、読者との絆という点からみると、ディケンズの文筆と公開朗読の目的には連続性があったといえるし、また公開朗読において彼がやろうとしたことは、文筆を通じて得た読者との関係をより確かなものにする事だったといえる。この点は、アンドリュース氏が2002年4月13日に日本大学文理学部人文科学研究所主催講演会において、‘Dickens as Actor-Reader-Writer’ の題で講演された内容に通じている（『年報』第25号の関田氏によるレポートを参照されたい）。しかし、本書においてアンドリュース氏は、ディケンズと読者（聴衆）との絆、そして、ディケンズの執筆と公開朗読との間の連続性を論の主軸としながらも、彼の公開朗読が孕んでいた様々な緊張を詳らかにして、公開朗読というプロジェクトそのものに内在するドラマチックな問題点について論じている。

結論からいえば、公開朗読によって、ディケンズと彼の読者（聴衆）との絆は強まったといえるし、彼はそれまで以上に彼らの「親しい友」となることに成功した。しかし、ディケンズは当初、自分が有料公開朗読をすることによって、作家としての自分が育んできた、読者との間の親しい関係が損なわれはしないか、と懸念していた。当時、他の芸術に比べて演劇の地位は低かったので、「朗読」だとはいつても、舞台の上で他の人格を「演じる」度合いが強ければ強いほど、彼の紳士としてのリスペクタビリティは危険に晒されることになる。なぜなら、ピューリタンの見地からすると、「演じる」ということ自体が欺瞞であり、また、（社会において、また日常の中で）自分たちに割り当てられた役割を固守しようと努めていた中産階級の人々も、演劇に対してのガードが堅かったからである。紳士たるもの、家庭で家族や親しい友人たちに朗読するのはオーケーだが、舞台上で他の人物に成りきって金を稼ぐのはまずい。そこで、公開朗読には数々の矛盾が生じる。朗読は本来 domestic な場所で行われるからこそ、朗読者と聞

き手の間に親密さや一体感が得られるのだが、ディケンズは、それを public な空間に持ち出し、ビジネスとして成功させながらも、客とは「親しい友」になりたいと思っていたのだ。しかし、逆にいえば、ディケンズが社会的ステータスを温存しながら、自分の作品世界を「板にのせる」手段としては、「朗読」という枠に徹する以外なかったのである。

第2章 ‘Reading, Reciting, Acting’ では、前章で提示された論点を受け、公開朗読が孕んでいた矛盾と、その中でディケンズが聴衆との絆をどのようにして強めようと努めたかが、さらに詳しく論じられる。まず、本来 private なものである朗読と public な劇場空間との間には対立があるとはいっても、実際は彼の愛読者の多くにとって、「ディケンズ」は共同体的な体験として存在していたということが指摘される。要するに、1人で作品を黙々と読むというより、皆で「聞いたり」、「観たり」して楽しむ読者が多かったということであり、ということは、ディケンズは公開朗読を始めるずっと前から、private な行為と public なそれとの間の境界を取り払っていたことになる。朗読者としてのディケンズもまた、劇場に集まった聴衆たちに、人目を憚らずに自由に泣き笑いするように一つまり、寛いだ私的な空間にいるのと同じ振る舞いを一求めた。つまり、ディケンズ作品を消費することにおいては、彼が作家としてデビューした当初から private と public は互いに侵食し合っていたのである。従って、元々 public に共有されていた作品を舞台で朗読するにあたっての本当の問題は、公私の別ではなくて、パフォーマンスの種類だった。端的に言えば、acting ではなくて、あくまで reading である必要があったのだ。では、公開朗読でのディケンズは果たして「役者」だったのだろうか、それとも「朗読者」だったのだろうか？ この問いに対してアンドリュース氏は、舞台中央に置かれた机の意味と、朗読台本（とその校訂プロセス）の分析を通じて、「厳密に言えば、そのどちらでもなかった。ディケンズの朗読が独特の（sui generis）ものだったから。」という答を出している。また、アンドリュース氏は、ディケンズの朗読台本を基にして、彼が実際にどのような朗読をしたか、また公演を重ねるに従って、彼のパフォーマンスがどのように変化していったか検証している。

第3章の主題は ‘Impersonation’ であり、ディケンズ芸術の根幹には彼の impersonation への猛烈な欲求があったという指摘から始まる。これは、ディケンズの子ども時代にまで遡る、「小説」だとか「公開朗読」というジャンルなどよりも、はるかに根源的なものである。フォースターはディケンズについて、‘what he desired to express he became’ と述べているが、彼は「作家」をやろうが（彼は登場人物を演じながら小説を執筆した）、朗読をやろうが（芝居をやろうが）、一環して別な人格を演じたいという思いに突き動かされてきたのだった。小説

の内容にも、彼の impersonation への関心は表れている。例えば、孤児のオリヴァーはフェイギンの一味と上品なブラウンローの世界との間を行ったり来たりしているが、それによってディケンズは、アイデンティティとは本質的なものではなく、社会的構築物であることを示唆している、とアンドリュース氏は指摘する。この章の最後では、ディケンズの公開朗読のモデルとなった マシューズ (Charles Matthews) の公演 ‘At Homes’ を扱っている。複数の役柄をとっかえひっかえ次々に演じ分けた点だけでなく、紳士が客間に友人を招いているという舞台設定においても、観客との間に親密な関係を築くのに成功していた点においても、マシューズはディケンズの公開朗読の原型といえる。ディケンズの impersonation の考察からみえてくるのは、彼が自分のアイデンティティは1つではない (だから潜在的に大勢の人間になることができる) という意識をもっていたということと、この自己の「分裂性 (fissility)」を彼が創造的に利用した、ということである。

ディケンズは、現代ならロック・スターがやるような大規模な全英ツアーや、アメリカ遠征ツアーをやり遂げた。彼の公開朗読ツアーの実態に迫るのが、第4章 ‘Celebrity on Tour’ である。まずは、ツアーに必要な設備の説明 (机、小道具のペーパーナイフや照明装置など)。それから、スタッフの面々と朗読会の実際の段取り、そして、ツアー中のディケンズに関する解説が続く。朗読ツアーに関しては、面白い本が既にある (1866 年から公開朗読のマネージャーになった George Dolby による貴重な実録が残されているし、Raymund Fitzsimons の *Charles Dickens Show: An Account of his Public Readings, 1858–1870* のように楽しく読める本もある) が、この章では、朗読ツアーに関連する基本的情報が、順序立てて整理されているので有難い。この章の最後の部分では、アンドリュース氏の論がスリリングな展開をみせる。ツアー中のディケンズは、1,000 人、2,000 人という聴衆の前に身を晒した朗読会の時以外は、ほとんどの場合ホテルの一室に独りで引きこもった。アンドリュース氏は、この private な自己のあり方と、public なそれとの間の極端な対照に言及し、そのような分裂を生み出したツアーの合間に、ディケンズはフラヌールの ‘flexible alter-ego’ といえる、*The Uncommercial Traveller* の語り手を生み出したのだ、と述べる。ディケンズは朗読会の舞台の上では、夜毎多数の役柄を演じたわけだし、彼は生産的に (そして芸術的に) 自己を分裂させることができたようである。自分の中から多数の人格を紡ぎ出すことができたディケンズが、公開朗読以上にその才能を発揮できた場はない、とアンドリュース氏は論じている。

第5章 ‘Performance’ では、朗読会でのディケンズのパフォーマンスそのものの分析がなされている。ディケンズの声、しぐさ、表情、語り口、聴衆との

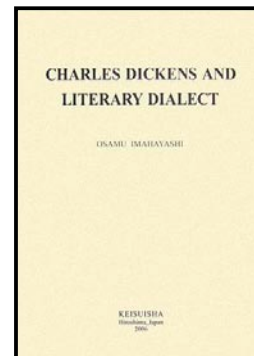
関わり方などが実際どのようなものだったか、極めて具体的に記述されている。多くの証言からすると、彼の声やしぐさは概ね「朗読」の範疇に留まる、抑制の効いたものだったらしい。その一方で、当時の「朗読」の範を越えているという理由でディケンズを批判している記録もある。しかし、ディケンズは、前例のない、全く新しいものを創り出そうとしていたのだから、そのような批判を基に彼のパフォーマンスの内容を云々することはできない。彼のパフォーマンスにとって致命的なまでに重要だったのは、聴衆との関係であった。平たく言えば、聴衆の「乗り」が良ければディケンズも完全燃焼したのだった。ディケンズの公演は毎回違ったものだったので、1つとして同じ朗読はなく、彼の公開朗読の全貌を伝える単一の公演記録などない、とアンドリュース氏は述べている。朗読者ディケンズは夜毎ガス灯の照明を浴びながら、舞台の上で「今」を生きていたのだなあ、と思わされる。

第6章 ‘A “New Expression of the Meaning of my Books” ’ の内容を端的に言えば、公開朗読はディケンズの作品と人物そのものに新たな光をあてることになった、ということである。有料公開朗読会という新しい試みは、つまるところ何だったのかという、本論の総括でありながら、同時に本格的なディケンズ論になっている。朗読会の聴衆にとって最大の驚きは、作者自身の朗読を聞く (観る) ことによって、ディケンズの作品がそれまで想像し得なかったくらいリアルなものとして迫ってきた、ということだった。「ディケンズの登場人物なんて、外的特徴から作られたカリカチュアにすぎない」という、バジョット (Walter Bagehot) の批判は、‘Sikes and Nancy’ の公演によって反駁されるのである。朗読者のディケンズの性格には、ウィルソン (Edmund Wilson) の ‘Dickens: The Two Scrooges’ ばりの、相反する2つの性質の間の葛藤がみられる。しかも、この葛藤はただ一通りではなくて、様々な表れ方をする。例えば、「軍人のように秩序を重んじる性質」対「気まぐれで独創的な性質」とか、「アポロンの性格」対「ディオニソスの性格」など。ディケンズも、自分の性格の二重性には言及しているが、彼の人格が潜在的に2つには収まりきらない複数性や流動性をもっていたことを、アンドリュース氏は示唆している。舞台というのは、このアイデンティティの複数性や流動性に身を委ねることが許されていた空間だった。そして、公開朗読というのは、ディケンズが、自分の気まぐれな性質や、フラヌールの徘徊したい (単一の自己から抜け出して他の者になりたい) という欲求を解放し、都市の群衆と一体化することのできる場であった。そこでは、彼はリスpekタブルな著名人としてのペルソナを投げ捨てることができ、その体験は彼を生気づけたのだった。だが、その一方で公開朗読の成功は彼の名声をいやましに高め、朗読への過度の熱中が彼の寿命を縮めることにもなっ

た（これも公開朗読の孕むパラドックスである）。舞台の上で、自己を様々な人物へとバラバラに分裂させて見せながらも、ディケンズは、彼が執筆においても目指していたように、イギリスの社会をひとつにしようとしたのだった。評者の勝手な要望としては、ディケンズと聴衆の間の sympathy と、メスメリズムとの関係—これについてアンドリュース氏は「よくわかっていない」としか言っていない—について、もう少しほじくっていただきたかった。

本文に劣らず重要なのが、巻末の付録として所収されている、ディケンズの公開朗読の日程表である。1853年12月の慈善公開朗読から、1870年ロンドンでの‘Farewell Tour’に至る全ての朗読会の日付と場所、演目名が記載されたリストは20ページ以上に及ぶ。コリンズ (Philip Collins) による未発表の草稿も参照しているとのことである。

公開朗読の本格的な学術的研究は、コリンズの手になる *Charles Dickens: The Public Readings* に端を発するが、本書は碩学コリンズの業績を土台にして、Robert Garis の *Dickens Theatre: A Reassessment of his Novels* や Paul Schlicke の *Dickens and Popular Entertainment* などの、ディケンズの公開朗読や演劇性に関する（いわば定番の）重要な研究をふまえ、近年の研究成果（例えば Deborah Vlock の *Dickens, Novel Reading, and the Victorian Popular Theatre*）も消化した、「公開朗読」研究書のまさに決定版といってよい。（ただ、巻末に Bibliography があれば有難かった。）もちろん、読んでみれば、これが単に公開朗読だけを扱った本でないことはすぐにわかる。それとも、包括的なディケンズ論に繋がらない公開朗読研究などあり得ないことを著した本なのだ、とでも言おうか。いずれにせよ、これは「公開朗読」という枠から切り込んで、ディケンズの‘inimitable’で‘sui generis’な部分を丹念に言語化した、斬新なディケンズ論なのである。日本にもファンの多いアンドリュース先生の、ディケンズ研究の集大成でもある本書は、今、特別「公開朗読」について調べる気はない、という方にも一読をお勧めしたい本である。



Osamu IMAHAYASHI,
Charles Dickens and Literary Dialect
(xii+197 頁, 溪水社, 2006 年 9 月,
本体価格 4,000 円)
ISBN: 4874409385

（評）堀正広
Masahiro HORI

本書は、広島大学大学院文学研究科准教授今林修氏による、2005 年度広島大学において受理された博士論文を刊行したものである。本書はタイトルが示す通りディケンズの作品中における文学方言 (Literary Dialect) についての論考である。文学方言とは、文学作品の中で作家が登場人物の地域や階層を示すことによって人物描写の手段として用いるもので、具体的には臨時使用の綴り字、非標準的な文法形式、特異な語彙などの使用によって行われる。この文学方言は、現実にその地方や階級で使用される生の方言を土台にはいるが、作家によって選ばれる方言の特徴やそれによる誇張の仕方には違いがある。

英米文学における文学方言の研究としては、ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer; 1340?–1400) が *The Canterbury Tales* のリープ (Reeve) の使う北部方言によって、英文学史上、最初に方言による人物描写や性格付けを行った作家と位置づけたラルフ・エリオット (Ralph Elliott) の *Chaucer's English* (1974: 393) やウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare; 1564–1616) の劇中人物の階級方言と地域方言と個人語の関係を扱った G・L・ブルック (Brook) の *The Language of Shakespeare* (1976) の最終章、トーマス・ハーディ (Thomas Hardy) (1840–1928) における方言と人物描写を分析したレイモンド・チャップマン (Raymond Chapman) の *The Language of Thomas Hardy* (1990) の第 8 章、廣岡英雄の *Thomas Hardy's Use of Dialect* (1983)、そしてマーク・トゥエイン (Mark Twain; 1835–1910) の文学方言も収集し、分析したロバート・ラムジー (Robert Ramsay) とフランシス・エマソン (Frances Emerson) の *Mark Twain Lexicon* (1938) などがある。

チャールズ・ディケンズに関する文学方言研究の先行研究については、本書の序論において述べられている。まず、1889 年のヴィルヘルム・フランツ (Wilhelm Franz) の論文 ‘Die Dialektsprache bei Ch. Dickens’ をディケンズの地域方言についての最初の研究であるとしている。ディケンズにおけるアメリカ方言の研究に関しては 1927 年のルイーザ・パウンド (Louise Pound) の ‘The

American Dialect of Charles Dickens' を最初の論文と位置づけている。その他のディケンズの作品に見られる文学方言研究として、K・J・フィールディング (Fielding)、山本忠雄、スタンリー・ガーソン (Stanley Gerson)、ブルック、田中逸郎、ノーマン・ペイジ (Norman Page) 等をあげ、研究内容を簡潔に記述している。

本書は6章からなっている。第1章は、どこの地域方言が、どの作品で使われ、どの人物が使っているかをディケンズが参照したと思われる辞書に言及しながら記述している。第2章は、話し言葉である地域方言を書き言葉である小説の中で表記するために、ディケンズはどのような綴り字の工夫をしているかを明らかにしている。第3章では、方言使用の慣習的な使い方と実験的な使い方を分析している。第4章では、生の方言と作品中での本当らしさに伴う問題を論じている。第5章では、ディケンズの方言使用について、階級方言と地域方言との関係やイギリス英語とアメリカ英語の関係を文体的、社会言語学的な視点から論じている。最終章である第6章は、最も多くの頁数が割かれていて、*Nicholas Nickleby* (NN), *Hard Times* (HT), *David Copperfield* (DC), *Great Expectations* (GE), *American Notes* (AN), *Martin Chuzzlewit* (MC) における方言を語彙の面から徹底的に調査している。

それでは、各章の内容についてももう少し詳しく見ていきたい。

第1章 'Provenance and Source' では、どの地域方言がどの作品のどの人物が用い、ディケンズはその方言知識をどのようにして取材し、どの方言辞書や参考書を参照したかを詳述している。扱われている作品は、NN, DC, HT, AN, MC である。一例を挙げると、HT の項では、方言はマンチェスターあるいはランカシャーのプレストンで、出典はJ・コリアー (Collier) の *The Miscellaneous Works of Tim Bobbin, Esq.* (MW; 1818) であり、方言の話し手は、ステイブン・ブラックプール (Stephen Blackpool) とレイチェル (Rachael) である。コックニー (ロンドン方言) は、階級方言としての位置づけのため、調査対象から省かれている。従って、*Pickwick Papers* (PP) のサム・ウェラー (Sam Weller) や *Oliver Twist* (OT) のフェイギン (Fagin) やサイクス (Sakes) 等は省かれている。

第2章 'Spoken and Written' では、話し言葉としての方言を書き言葉である作品の中で記述する際にディケンズはどのように行ったかを探っている。まず、英語のアルファベットで実際の発音を表記することの難しさをブルック、バーナード・ショー (Bernard Shaw)、チャップマン、ジュリアン・フランクリン (Julian Franklyn) を引用して説明した後、ディケンズの工夫を 'prairie' のアメリカ英語と 'nearly' を意味するヨークシャー方言 'nighbut' の二つの例を通して明らか

にしている。

第3章 'Characterization and Experiment' では、ディケンズの方言の記述として慣習的なものと実験的なものに分類して詳細に調査している。まず、アルファベットによる慣習的な方言表記の例として NN のヨークシャー方言を話すジョン・ブラウディー (John Browdie) が挙げられている。たとえば、'another' の強勢のある母音はヨークシャー方言では [u] となり、ディケンズはアルファベット 'o' を重ねて 'anoother' と表記している。アポストロフィーによる方言の表記例として、HT のランカシャー方言を話すステイブン・ブラックプールを扱っている。ディケンズの実験的な試みの一つに、大文字を使ってアメリカ英語の発音を表記する方法がある。そのやり方は、三つのタイプに分けられている。一つ目は 'ac-Tive' (MC 538) のように、弱い強勢、あるいは強勢のない音節が強く読まれる場合の表記のために大文字が使われる。二つ目は、'as-TONish' (MC 535) のように強勢のある音節を強調するため。三つ目は、不定冠詞を 'A' や 'An' と表記して弱形を強形として発音するアメリカ英語の表記に使われる例である。

ディケンズは単語の一部をイタリックにしてアメリカ英語の発音を表そうとした (honour)。ハイフンを使ったアメリカ英語表記の試みもディケンズの工夫である。著者はディケンズのハイフン使用に関しては、二つのグループに分けている。第1音節に強勢を持つ単語の場合 (en-gine) と第2音節に強勢を持つ単語の場合 (ex-citement) に分けて論じている。他に、弁別記号、ダッシュ、コロンの、セミコロンの句読点によるディケンズの工夫が論じられている。

このような地域方言は、人物を特徴づけるための手段として用いられている。たとえば、DC においてハム・ペゴティ (Ham Peggotty) とペゴティ氏 (Mr. Peggotty) はどちらも東アングリアの方言を話しながら、ハムは 'Mas'r Davy bor' と言うが、ペゴティ氏は 'Mas'r Davy' とだけ言って bor を加えない。このような方言による人物描写に関して、著者は R・クワーク (Quirk) の考えを援用して、ディケンズの文学方言は 'individualization' と 'typification' の役割を果たしているとしている。

第4章 'Realism and Verisimilitude' では、まず、ディケンズがいかに日常的に方言を観察する鋭い観察者であったかをフォースター (Forster) の記載やディケンズ自身の手紙から引用して論じている。次に、当然方言を使用しているはずのオリバー・ヤリジー (Lizzie) のようなヒーロやヒロインの標準語の使用に言及しているが、ブルックなどからの引用のみで、残念ながら、著者の考えは十分な説明がなされていない。

次に、HT においてランカシャー方言を話すステイブン・ブラックプー

ルの方言は、19世紀半ばの実際のランカシャー方言とどの程度類似し、一貫しているかを短母音、長母音、二重母音、その他の母音そして子音を、*MW*, *Dialect of South Lancashire (DSL)*, *English Dialect Grammar (EDG)*, *The English Dialect Dictionary (EDD)*, *The Oxford English Dictionary (OED)* の辞書を利用して詳細に調査比較している。結論として、ディケンズは、一般的に批判されるほどは一貫性を欠いていない。むしろ、ディケンズは忠実に実際の方言を写し取り、一貫して使用していることが明らかにされている。

‘Stylistics and Sociolinguistics’ と題する第5章では、*DC* の一人称の語り手デイビッド (David) と *GE* の一人称の語り手ピップ (Pip) の視点を通して記述される、文学方言に関する文体論的分析と、*MC* や *OT* などの作品にみられる地域方言と階級方言、イギリス英語とアメリカ英語に対する社会言語学的分析が行われている。

文体論の視点からまず、全知の語り手としてデイビッドやピップは会話中の方言に対して、地の文において説明や注解を加えている点を指摘している。次に、「溺死する」を意味する、‘drowned’ はベゴティ氏の言葉では ‘drowndead’ と記述されている。ムーア (Moor) の *Suffolk Words and Phrases* に記載されているように東アングリヤ方言では ‘drowndead’ と表記されることはあっても ‘drowndead’ とされることはない。これはハムやエミリー (Emily) の父の死に対するデイビッドの驚きを反映している。‘drowndead’ も ‘drowndead’ も両者は発音の面では同じではあるが、視覚的には、‘drowndead’ には、‘-dead’ の視覚的な効果があるとしている。興味深い指摘である。ディケンズは ‘meshes’ に関してはピップに、兄夫婦と同じようにケントなまりの地域方言を使用させているが、階級方言を示す定冠詞の同化 (th) は使わせていないと、著者は述べている。

次に、様々な作品中のアメリカ人の非標準英語と英国の労働者階級の人々や方言を話す人々の英語を文法の面から比較している。扱われている表現は、‘an’t’, ‘know’d’, 主格の ‘me’, 関係代名詞として ‘as’, 不定冠詞 ‘a’ を伴う ‘ing’ 形, ‘flat adverb’ (形容詞の形態で副詞を表す, 単純形副詞) である。

第6章 ‘Provincialisms and Americanisms’ では、ディケンズの作品中に扱われている地域方言やアメリカ英語の用例を *EDD*, *OED*, *MW*, *DSL*, *A Glossary of the Lancashire Dialect* などの辞書を使って徹底的に調査されている。扱われている表現は、まず *NN* では、ヨークシャー方言として、‘afeard’ (i. e. ‘afear’), ‘afore’ (i. e. ‘before’), ‘to gang’ (i. e. ‘to go or walk’), ‘gin’ (i. e. ‘if’), ‘daft’ (i. e. ‘silly’, ‘stupid’), ‘I reckon’ (i. e. ‘I think’) である。次に、*HT* のランカシャー方言として、‘afore’, ‘ahind’ 及び ‘ahint’ (i. e. ‘behind’), ‘awlung’ (i. e. ‘along’), ‘ere’ (i. e. ‘ever’), ‘fair faw’, ‘fewtrils’, ‘fratch’, ‘fratch’, ‘fro’ 及び ‘fra’, ‘haply’,

‘hetter’, ‘hey-go-mad’, ‘hotter’, ‘hummobee’, ‘lad’, ‘lass’, ‘leetsome’, ‘liefer’, ‘leefer’, ‘moydert’, ‘mun’, ‘nigh’, ‘nighbut’ や ‘nigh’bout’ 及び ‘nobbut’, ‘sin’, ‘Strike o’ day’ などである。*DC* における東アングリヤ方言として、‘afeard’, ‘arize’, ‘bahd’s neezing’, ‘Beein’ 及び ‘Beein’, ‘bor’ 及び ‘bor’, ‘clicketten’, ‘dodman’, ‘dyke’, ‘fare’, ‘fisherate’, ‘hull’, ‘inquisition’, ‘kiender’, ‘lorn’, ‘mavish’, ‘Mawther’, ‘mort’, ‘muck’, ‘poppet’, ‘wimick’ が詳細に調査されている。*GE* のケント方言は ‘afeard’, ‘afore’, ‘mesh’, ‘oncommon’ があげられている。

最後に、*AN* や *MC* にみられるアメリカ英語について、*OED*, *The Century Dictionary*, *Webster’s Third International Dictionary of the English Language*, *A Dictionary of American English*, *A Dictionary of Americanisms* を使って綿密に調査されている。調査されている語句は、まず、ヴィクトリア朝中期においては古語もしくは方言だったがアメリカでは継続して用いられている表現として、‘fall’ (秋), ‘I guess’, ‘I reckon’, ‘I expect’, ‘raise’, ‘tonguey’ である。次に本来はアメリカで使われた表現として、‘calculate’, ‘compensation’, ‘dander’, ‘junior’, ‘locate’, ‘location’, ‘locofoco’, ‘rile up’, ‘sawyer’, ‘snag’, ‘snap’, ‘strike’, ‘That’s a fact’ が扱われている。アメリカ起源のスラングとして、‘catawampously’, ‘chaw up’, ‘ring-tailed roarer’, ‘tall’ が挙げられている。最後に大変興味深い例として、基本的な意味は英米で同じではあるが、意味の拡大や縮小などが起こり、イギリス英語とは異なった使い方がされている場合である。たとえば、「調整する、整える」という意味を表す ‘fix’ は、アメリカ英語では意味の拡大が行われ、(1)「髪や服を整える」、(2)「食卓の用意をする」、(3)「処理する」、(4)「健康になる」、(5)「人を懲らしめる」の意味でも使われる。同様な例は次のものである。‘yes’ (2種類), ‘right away’, ‘go ahead’, ‘possible’。

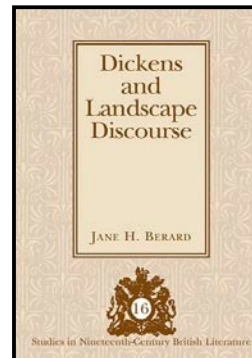
以上のように、本書はディケンズの作品中に見られる文学方言を文献学的な立場から徹底的に調査し記述している。若干所感を述べたい。

英語の母語話者でも19世紀の英国の方言を扱うことは容易な研究ではないはずである。そのような研究テーマに対して、母語話者ではない日本人が果敢に挑んだことをまず評価したい。ディケンズの作品中の方言に関して、ディケンズが使用したと思われる辞書を丹念に調査し記述したことは、今後のディケンズにおける文学方言研究に重要な資料を提供したことになるであろう。ただ、用例の大半は *DC*, *GE*, *HT*, *MC*, *AN*, *NN* に限定され、網羅的な方言研究とは言いがたい。また、ロンドン方言を階級方言として扱っているのも、サム・ウェラー、フェイギン、サイクス、ルーシー (Lucy)、ギャファー (Gaffer Hexam) などの人物達の文学方言に関しては、本研究では十分に論じられてい

ない。ロンドン方言に関しては、マックラム (McCrum) et al. の *The Story of English* (1986: 275–76) によると、最近のコックニー研究では、サム・ウェラーが使う ‘v’ と ‘w’ の発音の交替は十分な証拠はなく、ディケンズの創作だと結論づけているが、これに関してはどのように考えるか。また、最近の社会言語学では方言 (dialect) という場合は、地域方言や階級方言だけでなく、性別 (sex dialect), 年齢 (age dialect) などを含む。このような文学方言はどのように扱われているのか。このようないくつかの課題は残されているように思う。今後の研究を期待したい。

日本の優れたディケンズ研究の多くが日本語で書かれているために、残念ながら、欧米の研究者の目に触れることができず、評価の善し悪しに関わらず、議論の対象になることはまれであった。しかし、本書は英語で書かれ、日本のディケンズの言語研究を世界に発信した。この姿勢は多に賞賛したい。

最後に、本書で扱われた文学方言研究も含めて、作家の言語文体研究について一言述べたい。本研究のような作家の言語文体研究は、しばしば文学研究や文学批評と切り離して考えられることがある。しかしながら、シェイクスピアの文学の独創性は言語の独創性を切り離しては考えられないように、ディケンズ文学における言葉の独創性もまた、ディケンズ文学世界の重要な側面である。この点では、本書におけるディケンズの文学方言の研究は、間違いなくディケンズの文学世界の一端を地道に根気よく明らかにしようとした労作である。また、日本が世界に誇るディケンズ研究者である故山本忠雄博士は、しばしば文学作品における文学研究と語学研究の問題に触れ、ディケンズの文学を抽象的な思想や心理分析や美的な構成のみから論じたり、文学から遊離したディケンズの背景や実人生を探るやり方では、ディケンズという小説家の言語と文学を完全に解明できないと言明され、言語と文学を二分するのではなく、両方を射程に入れたディケンズ研究が必要であることを説かれている (『言語活動と imagination』(1963), 『Dickens Land』(1968))。40 年前に語られた言葉ではあるが、自戒の意味を込めて改めて玩味したい。



Jane H. BERARD, *Dickens and Landscape Discourse*
(Studies in Nineteenth-Century British Literature 16,
188 頁, Peter Lang, 2006 年 11 月)
ISBN: 0820450049

(評) 三宅敦子
Atsuko MIYAKE

この研究書は著者によれば評価の分かれるディケンズの作品『マーティン・チャズルウィット』を、新歴史主義批評の立場からランドスケープ (landscape) というテーマのもと評価を試みるものである。しかしながら「ランドスケープ」という日本語に訳すのも一筋縄ではいかないキーワードに着眼し「私たちが新歴史主義者として『文化の詩学』と定義しようとしているものに対してディケンズの貢献を付け加えたい」という意気込みのあまりか (9), 全体的に著者の主張ばかりが先走り、やや荒削りでバランスの悪い、声ばかりが大きい研究書という感が否めないのである。その理由を以下に述べてみたい。

まず、この研究書の出版は 2006 年であり ‘Acknowledgments’ でも著者が書いているように着想そのものがその数年前であること、また「ランドスケープ」というテーマそのものが比較的新しいテーマであるにも関わらず、巻末の ‘Bibliography’ にあがっている文献の大半が 1980 年代に出版されたものになっている。その上「ランドスケープ」という語の定義もはっきりとはしない。著者は歴史と作品を結びつける場としてこの語を用いたいようなのだが、単なる「風景」という意味で使っていると思われる個所もある。作品そのものからの引用も *The Oxford Illustrated Dickens* を使用しているようなのだが、著者がわざわざ自らの立場を新歴史主義者であると明言するのであるならば、やはり Everyman 版も文献リストにあげて欲しいものだし、せめてどこかで言及があってもよさそうなのである。また引用形式が MLA 方式に従っていることも理由の一つなのだろうが、いわゆる註 (Notes) が一切ない。そのために全体的に説明不足で、どの著書や作品からの引用なのかということや、どういう論理の展開でそのような解釈が導き出されるのか等が不明瞭な個所が散見される。

次に目次を見ればこの研究書は大きく二つのパートに分かれている。‘The Framing of Martin Chuzzlewit’ と題された 3 章からなる Part One と ‘Martin Chuzzlewit Framed’ という題でまとめられた 2 章からなる Part Two の二部立て

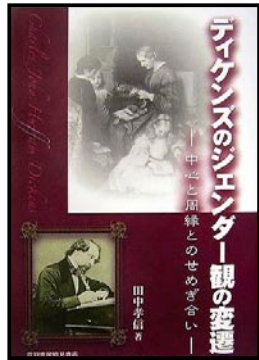
であることから考えて、この研究書は言ってみれば『マーティン・チャズルウィット』論であるはずなのに、この作品の詳細な分析がわずかしかない。全体としては180ページ未満の研究書で『マーティン・チャズルウィット』に関する詳細な分析は50ページちょっとである。もちろんこれは著者が新歴史主義者であるという表明と無関係ではないだろう。新歴史主義批評では作品外のコンテクストの検討が大変重要であるからだ。しかし残念なことに、ここでもアンバランスな印象を与える要因が潜んでいる。著者は‘Introduction’で「ランドスケープ」に着目してこの作品を考えるには新歴史主義批評が最適であると述べ、自分が用いる方法は「H. Aram Veaser や Catherine Gallagher, Stephen Greenblatt, Roger Sell, William Palmer, と Mary Poovey がここ最近に発展させた複数のアプローチを部分的に修正しブレンドしたもの」(5)であり、同時に「それとなくフーコーの権力の概念やリオタールの言語ゲーム理論を参考にしている」と詳細に自らの立場を表明している(9)。ところが、後半の作品分析や‘Conclusion’では‘New Historical methodology allows readers to [. . .]’(169)や“New Historicism facilitates”(124)という表現、また‘New Historicism enables a stronger reading in association with the times and with Dickens contexts and landscape discourse’といった文章で大雑把に持論をまとめようとする姿勢が見られるのだ(126)。実際に著者は自分の解釈がフェミニズム批評やマルクス主義批評の枠内に入るものであると主張し(9)、後半の作品分析の章では‘sexuality’, ‘capitalism’, ‘other’, ‘class exploitation’といったキーワードを繰り返すものの、これらの語が『マーティン・チャズルウィット』という作品の分析において具体的に何を示すのかについて何の説明も解説もない。そのため読者は自分の頭の中に既に入っている登場人物やその人間関係に関する知識を総動員しない限り理解がおぼつかないだろうし、総動員したところで推測にとどまってしまう。結果として、著者の主張が雲をつかむような論であるというような読後感が残ってしまうのだ。

この手のバランスの悪さは、『マーティン・チャズルウィット』とあわせて検討される文献の選択についてもいえる。著者はその立場上、文学作品のみならず文学以外のテキストも考慮に入れそのネットワークの中で『マーティン・チャズルウィット』を再考する必要性を認めつつも、言及される他のテキストは、ディケンズの書簡と他の作品(『骨董屋』、『ドンビー父子』、『子どものための英国史』、『アメリカ紀行』)と、ディケンズとも交友のあったジョン・ブリトン(John Britton)による風土記でディケンズも所有しその価値も認めていた『イングランドとウェイルズ的美』(*The Beauties of England and Wales*; 第15巻のウィルトシャーに関する箇所)が主なものである。著者

は‘Acknowledgements’で‘How Dickens and his Victorian culture interacted with and read such an important part of their landscape and their past functioned first as the impetus of my research and the brainchild of this little book’(ix)と述べているが、ならば、当時の評論、また舞台となっているウィルトシャーやアメリカのランドスケープに関するディケンズとは一見無関係の文献などもリサーチの対象にしてくれたら、もっと説得力があったのではないかと思う。

また残念なのは、著者はこの『イングランドとウェイルズ的美』や『アメリカ紀行』に関してPart Oneでそれぞれ章を設けて詳細に述べているにも関わらず、それらがPart Twoの作品分析の章とうまく関連付けられていないため、‘Landscape is an integral part of Dickens’ imagination and immensely significant to his fiction and to his readers’(169)と結論付けられてもピンと来ないのである。ただ新歴史主義批評の立場と聞けば、何か鮮やかな手つきでこれまで知らなかった文献のネットワークの中に作品を置くことで、その新たな読みを展開してくれるのだろうと常に予想してしまうこちら側にも問題があるのかもしれない。実際のところそのような知的驚きを提供することは至難の業であることを、こちらでも承知しているからだ。

「人のふり見て我がふりなおせ」という陳腐な諺が身にしみて感じられるのはこのような瞬間だろう。裏表紙によればこの著者は、‘publish or punishment’という研究文化の先進国アメリカのロードアイランド大学で英語を教えているらしい。以前は‘Coordinator of Arts and Sciences and Online Learning’というポジションに就いていたともある。英語教育やオンライン教育に研究時間を盗られる日々の中でやはり業績作りに追われているのだろうか。文学理論もこなせ、新しい作品解釈の提供者であることを出版という形で表明する必要に駆られていたのだろうか。研究書をパッチワークの作品に喩えるなら、どんなに大きなパッチワークであっても、まずはそれを構成する複数の小さなブロックを丁寧に作成しなければならない。その際には全体の色彩や図柄を念頭に置きながらの効果的な布の配置と地道で細かい針仕事が必要だ。どんなに斬新で派手な図柄であっても、結局のところ美しいパッチワークを支えるのが丁寧に施された精緻なステッチであるように、成功する研究書を支えるのは丁寧に精緻な作品分析なのかもしれない。



田中孝信著、『ディケンズのジェンダー観の変遷
— 中心と周縁のせめぎ合い』

Takanobu TANAKA, *The Transition of Dickens's View of
Gender: Conflict between the Centre and the Margin*

(434 頁, 音羽書房鶴見書店,
2006 年 10 月, 価格 4,200 円)

ISBN: 4755302293

(評) 中村隆

Takashi NAKAMURA

『大いなる遺産』を論じた本書第 9 章で, 著者は, スマイルズ流の「資本主義の精神」に基づく「真のジェントルマン」像について言及し, その「下部構造に勤労, 節約, 正直, 周到」があると述べている (273)。興味深いことに, この真のジェントルマンの構成要素は, 本書と著者の下部構造にも相通じるものである。

まずこの著者の「勤労」とは何か。それは, 2005 年の学位論文 (広島大学文学博士) に結実する, 本書に所収された 15 本の高品質な論文を書くのに費やされた時間と労力を指す。膨大な先行研究を貪欲に呑み込み, たちまち自家葉籠中にしてしまう氏の勤勉ぶりはまさに瞠目に値するが, それを端的に例証するのが, 巻末に挙げられた参考文献である。主として英語文献である Secondary Sources だけを取っても, その数は 218 点にのぼる。本書のもととなった論文の出版時期は 1989 年から 2004 年までで, その経過時間は 16 年である。218 点を 16 年間で読むには, 1 年あたり, 13 ~ 14 点の英文研究書と英語論文を営々と, しかも正確に読まねばならない。

第 2 の「節約」とは何か。ここでは, 「節約」は禁欲の意味を付加して, 華美・派手・虚飾などの対語として捉えるべきだろう。本書を貫く田中氏の筆致は, 奢りも高ぶりもなく, 常に新しい理論 (たとえばパトリシア・インガム, ヒラリー・ショーのフェミズム批評やセジウィックのクィア理論など) の動向や先行研究への目配りを怠らない。そして, あたかも桑の葉を食む蚕のように, 虚飾を排し, 静かに着実に, 先行研究とディケンズの作品を分解吸収し, 自己の「読み」を提示するのである。

第 3 の「正直」の徳目については, すでに述べた。つまり, 先行研究はしっかり押さえながら, しかし, ことさらに理論を前面に押し出すことなく, 著者は, ただヒタヒタと作品に肉薄し, 篤実なテキスト解釈を拠り所として, 必要に応じて, 従来の批評の軌道修正を図る。その結果, たとえば, 第 6 章では, 「聖

女」エイミーに内在する「セクシュアリティ」を読み込むことで, ヒリス・ミラーやライオネル・トリリングの定説に明確な反論を提起する。最後の徳目の「周到」さについては, 16 年に渡って書き継がれてきた論文の主題が首尾一貫し, 一本の博士論文にピタリと嵌るという周到な計画性に尽きる。

さて, 以下, 点描的になるのはお許しいただくとして, 本書における個々の議論を概観することにする。

第 1 章の, クウィルプは「見る」ことに全力を注ぐ人物であり, 他方, ネルは「見られる」人物であるという洞察は示唆に富む。「見る」行為は, 権力への志向を暗示するが, 「異質なもの」であるクウィルプの眼差しは, 獣性或攻撃欲動と結びつく。ジェントルマン支配の体制を破壊しえるエネルギーを内包するクウィルプは, その自殺的死によって最終的には封殺されるが, グロテスクで, おぞましい異質な何かに, ディケンズは終生, 魅惑され続けた。また, 著者によれば, 『マーティン・チャズルウィット』(本書第 2 章) で, 境界侵犯する「異質なもの」は, 女性というジェンダーである。その典型は, ヴィクトリア朝ボルノグラフィで「男根」を表象した「キュウリ」をむさぼり食うギャンプ夫人だ。

『ドンビー父子』(本書第 3 章) の「異質なもの」は, ヴィクトリア朝の人種観と帝国主義という枠組みにおいて捉えられる。バグストック少佐の召使である「原住民」は, 家父長的な社会において, 女性と同様に, 隷属的な位置を与えられるが, この絶対と思われる主従関係にヒビを入れ, 流動化させるのが, 「原住民」に顕在化する「性的欲望を持った男性」としての側面である。ドンビーの「奴隷」であるイーデイスの場合は, 性の欲望を露わにする男性 (カーカー) を拒絶することにより, 同時にまた自己の「セクシュアリティ」を解放することにより, 搾取し, 支配する男性への反抗を示す。

第 4 章で著者は, 1857 年に現実に起きた殺人事件 (裕福な建築家の娘マデリンによる恋人殺し) と, タルキングホーン殺しというフィクションとが切り結ぶ偶然ではない一致に注目し, 「立派な家柄のお嬢さん」と「殺人者」は相いれないという当時の父権的中産階級の言説を論証する。次章の第 5 章では, 『ハード・タイムズ』が俎上に上げられ, 中心と周縁, 感性 (空想) と理性 (事実) 等の二項対立を梃子として, 家父長制に異議を唱える「女たちの反乱」の相関図が俯瞰される。

続く第 6 章では, 忍従する家庭の天使, エイミー (リトル・ドリット) が, 自虐的で, 危険な反抗分子のミス・ウェイドと, ある共通項を有するという意外な逆説が提示される。なぜなら, エーリッヒ・フロムに倣えば, エイミーの利他心は, 他人のために尽くすことにより自己満足を得ようとする, 自己中心

的かつ自虐的な「神経症」と解釈できるからである。さらに、著者は、アーサーをちらりと見上げる時の「やや開き加減の唇」に(179), 22才の生身の女性、エイミーのセクシュアリティを鋭く指摘している。『二都物語』論でも前章同様に、対極的な2人のヒロイン、すなわち「牝虎」と形容されるマダム・ドファルジュと金髪の「家庭の天使」ルーシーの間に見られる逆説的な近似性が議論される。

2部に分かれる第8章では、「反乱する女たち」にあてられてきた照射の光は一転し、『ディヴィッド・コパフィールド』と『リトル・ドリット』のヒーローたちに向けられる。前者を扱う第1部は、ディヴィッドの抑圧された内面を、「分身」あるいは「自画像」として映し出す「鏡」としての「窓」のイメージについて詳述し、ディヴィッドの内面に抑圧されている「母子融合願望」を暴き出す。

『大いなる遺産』を扱う次章は、50頁にも渡る長大な章で、ディケンズ晩年の傑作とまさにがっぷり四つで取り組んでいる。ピップを取り巻く3人の悪女といえば、腕力と暴力でピップを育てた姉のミセス・ジョー、ピップの「宿命の女」エステラ、男への復讐心が生きる糧となっているミス・ハヴィシャムであるが、彼女らはすべて家庭の天使の反転であり「ジェンダーを破棄」し「母性を拒絶する女性たち」である(278, 303)。彼女らに見られる「母性愛」の拒絶が、服従することに快樂を見いだすピップの「マゾヒズム」を育み、ひいてはピップの「母性渴望」を招来したと述べる著者は、この心的傾向は、ディケンズが描出した若者たちのみならず、作家自身にも通底すると指摘する。次章の第10章では、フーコーの権力論と公衆衛生の言説を援用し、「監視」のシステムによって、「汚穢」と等価の下層階級が排除されるという『我らが共通の友』の基本構造が示される。他方、著者は、汚れた「テムズ河の申し子」リジーの階級を超えた結婚の中に(333)、従来のディケンズにはなかった「過激なまでの」反・体制的特質を見いだす(333)。

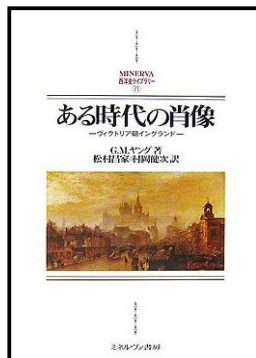
『エドウィン・ドルードの謎』を論じる最終章は、本書の掉尾を飾るにふさわしい出色の章である。阿片窟と中国(オリエント)についての文化史的背景の叙述、セジウィックを援用した男性の同性愛に関する考察、女性探偵の系譜研究、等々、それぞれの議論が説得力を持っている。著者は、オリエントは、境界の向こう側に横たわる異質な空間ではもはやなく、イギリス社会の中枢に内在化させられているという。オリエント(あるいは帝国・植民地)という項目は、エドワード・サイード以来、やや陳腐化した主題のようにも思われるが、幅広い知見と洞察に支えられた本章は、オリエントが、今なお豊かな鉱脈であるということを示す。

以上、勤勉な「真のジェントルマン」田中孝信氏の文字通りの労作を概観してきたが、最後に、いわずもがなの注文を1つ述べておきたい。氏が本書で開陳する議論は、新しい理論への目配り、先行研究の丹念な吟味、テキストの周到で綿密な分析など、すべて論文の基本を忠実に履行するものである。この優れた美質を了解した上で敢えていわせてもらうなら、氏が依拠するジェンダー理論に由来するであろうお決まりの用語の反復—たとえば、「家庭の天使」、ヴィクトリア朝の「家父長制イデオロギー」、女性の「セクシュアリティ」と「母性」、「宿命の女」、男性という「中心」と女性という「周縁」のせめぎあい、等々と、なおかつ、氏の勤勉さに由来するかもしれない非常にまじめな語り口との相乗効果で、どこを読んでも、いささか単調な同工異曲に聞こえてくるのである。無論、これは諸刃の剣ともいえ、主題の統一をする以上、避けられないことかもしれない。ただし、『エドウィン・ドルードの謎』を扱った最終章は、同工でありながら、豊富な知見に富み、読み応え充分だった。とりわけ、個人的には、この章での1860年代の「女性探偵」の系譜研究は、1頁ほどの長さしかないにもかかわらず、大いに興味をそそられた。

ところで、「女性探偵」に関し、氏は「探偵の資質を備えた女性を作り出したのが皆、男性作家なのだ」と述べている(356)。探偵は男性に帰属するもので、女性の探偵は、性の役割から見て、境界侵犯であると著者はいう。確かに名探偵は、ほとんどが男性である。しかしなぜ、探偵は男性でなくてはならないのか。氏が指摘する「女性探偵」の生まれた1860年代は、センセーション・ノベルの時代でもある。「探偵とジェンダー」あるいは「探偵と1860年代の英国小説」は開拓の余地のある興味深い主題だ。そこには、豊かな水脈が流れているような気がする。

書評対象図書及び評者の募集

『年報』の書評では、ディケンズ関係及びディケンズと関係の深いヴィクトリア朝文学・文化関係の書籍を扱っております。もちろん海外での出版物も対象です。取り上げるべき本がありましたらご推薦ください。また、評者についても自薦・他薦・著者本人の推薦のいずれでも歓迎ですので、支部長(編集担当)または年報編集補佐までお申し出ください。少なくとも国内で出版されたディケンズおよびヴィクトリア朝関係書籍はすべて取り上げたいと考えておりますが、評者の引き受け手がなく断念した場合もあります。ご協力をよろしくお願いします。



G・M・ヤング著，松村昌家・村岡健次訳

『ある時代の肖像』

—ヴィクトリア朝イングランド—

George Malcolm YOUNG, *Victorian England: Portrait of an*

Age, trans. by Masaie MATSUMURA, and Kenji MURAOKA

(Minerva 西洋史ライブラリー 71, 285 頁，

ミネルヴァ書房，2006 年 12 月，本体価格 4,000 円)

ISBN: 4623047547

(評) 宇佐見太市

Taichi USAMI

松村昌家氏と村岡健次氏という日本を代表する稀代の碩学による George Malcolm Young, *Victorian England: Portrait of an Age* (Oxford University Press, 1936) の邦訳がついに世に出た。待望の書である。訳者もさることながら著者も第一級の優れた知の巨人であり、訳者と原著者の絶妙の統合によって刊行された本書は、心もとない英文学的現実を生きる日本の英文学徒にとって、英文学研究のしかるべき道標となるにちがいない。とりわけヴィクトリア朝時代のイギリス文学専攻者にとっては、救世主的役割りを担ってくれるだろう。

実は G・M・ヤングの業績に関しては既に、日本の英文学研究の祖とも言われる斎藤勇氏が簡潔にして達意の文章で以下のように鋭く論評し、的確に評価を下している—「*Pocket Oxford Dictionary* (1924) には ‘Victorian’ という形容詞を説明して、Victoria 朝ぶりという意味のほか、‘out of date, antiquated’ と付け加えている。しかしそれに対する反動として、この時代の真価を認める傾向が生じた。G. M. Young (*To-day and Yesterday*, p. 243) などは、この時代に大きな意義を認め、そして Bagehot の論文 ‘The Emotion of Conviction’ (1871, reprinted in *Literary Studies*, II. 412–21) の終りの数ページを現代人にとって必読のものと称讃している」(斎藤勇著『イギリス文学史』改訂増補第五版，1974 年，391)。

またさらに続けて斎藤氏は、G・M・ヤングは「*Victorian England: Portrait of an Age* (1936) などにおいて文学をも大いに資料とする優秀な歴史家である」(同掲書，606) と、的を射た犀利な寸評を加えている。ヴィクトリア朝の文学・文化・社会を特に研究対象としている学究の徒は、斎藤勇氏のこの論弁を傾聴するに如くはないだろう。

G・M・ヤングに対する英文学者・斎藤勇氏の評価がいかに正鵠を射たものであったかは、歴史学の泰斗・村岡健次氏の筆になる本訳書の「訳者解説」が証左となるだろう。「自らの歴史観を表明した最終章の第三章は、迫り来る

ファシズムの嵐を予感しつつ、薄れ行くヴィクトリア時代の記憶を懸命に取り戻そうとする熱意に溢れ、私には本書の白眉とさえ思える。本書が今も古典と呼ばれる一つの理由はこの辺にもある、と言ってもよいのかもしれない」と村岡氏は口吻を洩らした後、ヤングの著書の特徴と意義について明確に次の如く論述する—「本書は今を去る七〇年前の一九三六年に出版された。そういう意味において、本書は、まさにその歴史の刻印のなかにある。(中略) 現代の私たちは、これら一九世紀の歴史のファクターのその後の展開と決着を承知しているが、当時のヤングにはそのことはわからず、したがって、これらの歴史的ファクターを完全に相対化することはできないはずなのである。だがにもかかわらず、本書が提示するヴィクトリア時代の歴史像は、一九五〇年代以降形成されてくる今日のヴィクトリア時代史の通説(中略)を先取りして、見事なまでにその主要な骨格を描き出している。(中略) 今日のジェントルマン資本主義をさえ先取りしていると言っていえなくはない。(中略) 本書が歴史書としてヴィクトリア時代史の古典とされる最大の理由は、それがこのように今日の通説の骨組みを最初に確立したからだ、と言ってよい」。

「本書が文学書であるよりは歴史書であるという性格に鑑み」、あとがきに相当する「訳者解説」はイギリス史が専門の村岡氏が担当したということで、英文学研究の権威・松村昌家氏はこの「訳者解説」の執筆には関わっていない。しかし、ヤングの *Victorian England: Portrait of an Age* に寄せる松村氏の熱き想いは、氏のエッセイ「何事も時がくれば」(『ヴィクトリア朝—文学・文化・歴史』，松村昌家教授古稀記念論文集刊行会編，1999 年，英宝社。523–40 頁所収) から一目瞭然である。

松村氏はまず、「ハンフリー・ハウスとともに、私の若い頃の記憶に鮮明に刻みこまれているのは、歴史学者の G・M・ヤングである」と、己の真情を吐露する。そしてヤングの *Victorian England: Portrait of an Age* を通じて初めてヤングに接した松村氏は、「ハンフリー・ハウスが社会事情や歴史を重視した文学者であったとするならば、ヤングは根っからの文学的体質をそなえた歴史家なのだ」という感慨を抱いたと言う。「ヤングの歴史概念は、まさに文学と歴史との融合の生きた見本のようにあって興味深く、また刺激的に思えてくる」と雄弁に物語る松村氏は、さらにタイトルの ‘portrait’ に関して、ジェイムズ・ジョイスの『若き芸術家の肖像』の場合の「肖像」と意味が重なるのではないかと思う、と述懐する。G・M・ヤングへの松村昌家氏の傾倒ぶりは、村岡健次氏に決してひけをとらないだろう。

こうした日本の二人の巨星によって成された偉業は、文学・文化・歴史の面からイギリスのヴィクトリア朝時代に広く関心を抱く人々にとっては、かけ

がえのない文化遺産となる。訳者のひとり松村昌家氏は上述のエッセイ「何事も時がくれば」のなかで、G・M・ヤングの原著は「読んですんなり理解できるような本ではない。文章も必ずしも平易でない上に、出典不明の引用や言及があまりにも多岐にわたっているために、何度も挫折感を味わわざるを得なかった」と、告白している。そして1977年のクラーク（George Kitson Clark）編注の新版のおかげで、「不明だった問題はほとんどが解決されるようになった」と心中を明かす。英文学の大家をしてこう言わしめたG・M・ヤングの難解な英文が、このたび二人の高名な学者によって日本語に訳出されたことを私は素直に喜ぶと同時に、知力、精神力の限りを尽くされたにちがいない斯界の権威に畏敬の念を抱かざるをえない。

私事で恐縮だが、本務校での所属が外国語教育をつかさどる組織であるため、往々にしてイギリスの教育システムについて他学部の同僚たちから尋ねられる。しかし恥ずかしいことにその実態を知らないままで、御茶を濁している。特に大学入学前のイギリスの中等教育システムに関してはお手上げである。ところが今回、この邦訳のおかげで、イギリスの中等教育の輪郭がおぼろげながらも浮かび上がってきた。それは主として13章と14章からだが、義務教育制度実施の背景、グラマー・スクールやパブリック・スクールの実情、女子教育の歴史的変遷、オックスブリッジの改革過程、そしてロンドン大学の成立などについて具体的な話が聞けた思いがする。その一連の記述のなかで特に面白いと感じたのは、オックスブリッジの教育理念であるリベラル・エデュケーションは、改革の波にもひるまなかったという件りである。そしてそこには著者G・M・ヤングの共感もこもっているような気がした。

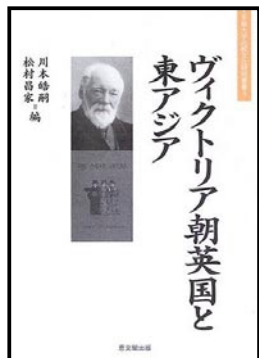
斎藤勇氏が、そして村岡健次氏が指摘したG・M・ヤングのヴィクトリア朝時代への思いが、いま私に英文学者・高橋康成氏のパーソナルな眩きを思い出させた。高橋氏は「座談会：英米文学研究・80年代」（『英語青年』第126巻第4号、1980年7月号）において、「近代西洋のヒューマニズムや、合理主義や、自我の概念を否定する構造主義以降の思考が、今日盛んになったのは一つの必然だと思うし、ほくもそれに強く惹かれるけれど、西洋近代は否定すればすむというものじゃない。それが存在しなかった、また今も存在しないかのような顔をして、通り過ぎることはできない。そのもつ矛盾や限界を、自分がどう受け止め、悩み、超えてゆくか、その過程自体が大事だと思うんです」と、己の研究姿勢を披瀝した（171）。ここで「西洋近代」を「Victorianism」に置き換えれば、まさにそれはG・M・ヤングの言わんとする学問姿勢にも通じるのではないかと思わざるをえない。理屈ではなく、生きている世間を相手に現実的に対応するという構えは、英文学にも歴史学にも共通する要諦ではなからう

か。

英文学者・川本静子氏が「ビクトリア朝のすぐあとに、前の時代のものの考え方や価値観を打ち破ろうとして、アンチ・ビクトリアニズムの運動が、小説にかぎらず芸術一般の分野で起こりました」と語る学術文化の地殻変動に関しては、1974年に大学院に入って19世紀英国小説を読み始めた私は正直なところ、そのことを実感せぬまま時を過ごしてきた（『英語青年』第123巻第6号、1977年10月号、306）。なぜならその頃はもうすでにヴィクトリア朝時代の評価はゆるぎないものとなっていたからである（余談ながら私たち世代がむしろ気に留めたのは、ポスト構造主義への時代の移ろいであった）。しかし今、松村昌家氏と村岡健次氏の手になる本訳書を前にして、アンチ・ヴィクトリアニズムの運動が吹き荒れるなか、ヴィクトリア朝時代の宗教・思想・文学の動向を読者に伝えんとしたG・M・ヤングの志操に頭が下がる思いである。これを機に、本訳書を通して今一度、ヴィクトリア時代研究を俯瞰したいものである。

本書の「注」が詳細で精緻なものであることは言うまでもないが、原本にあった「原注」と訳者による「訳注」の二種類の「注」が各章末に順序に従い記述されている。その際、比較的短い「訳注」は本文中に盛り込むという心遣いがなされているのは有り難い。また、訳者によって10葉の図版が挿入されていることも付言しておきたい。

第2版を出す際にG・M・ヤング自身によって書かれた「序文」（1952年）からもわかるように、ヤングの歴史を見る目は、或る特定の学理に縛られ、客観的事実のみを良しとしがちな歴史家のものとは幾分かがっている。彼は、教条主義とは逆の、非常に柔軟な思考を身につけており、現実の生身の人間に常に興味を抱き、彼らから得た証言を歴史解釈に活かす人のようなようである。それゆえ、ヤングによって描かれた時代像には、伸びやかな筆の力も相俟って、何ものにも拘束されない、自由闊達な趣がある。この伸びやかな精神風土を二人の巨匠は、余すところなく日本語に注入した。私たちはこの訳書を通じて、G・M・ヤングの学統に触れ、聲咳に接し、それによって閉塞感漂う英文学研究界に新風を吹き込もうではないか。



川本皓嗣・松村昌家編
『ヴィクトリア朝英国と東アジア』
Koji KAWAMOTO, and Masaie MATSUMURA, ed.,

Victorian Britain and East Asia

(大手前大学比較文化研究叢書, 262 頁,
思文閣出版, 2006 年 4 月, 価格 3,360 円)

(評) 井野瀬久美恵

Kumie INOSE

16 世紀, フランシス・ザビエルやルイス・フロイスら, 日本を訪れたイエズス会士は, そこに礼儀正しき人びとと豊かな精神文化を「発見」し, 好奇と敬意の念をかき立てられた。しかしながら, このとき東洋が西洋に与えた衝撃は, 工業化・都市化する「西洋」の胎内へと急速に消化・吸収されてしまい, やがて, 一方的に「東洋」を物語る西洋のまなざし, オリエンタリズムの登場により, 東洋-西洋間の衝撃のベクトルは大きく変質する。西洋近代が日本や中国に与えた衝撃は「ウェスタン・インパクト」とよばれ, 双方の人びとの感性や価値観を激しく揺さぶった。ウェスタン・インパクトのもとで「近代」を経験した日本を含む東アジア諸国にとって, 「近代化」とは西洋を「学習」するプロセスそのものであり, 今なお, 韓国や日本では, 歴史が西洋近代の経験に基づく理論や視点で語られることが多い。それをどのように脱するかを試行錯誤は, 日本における教科書問題, 日韓共同研究である「植民地近代」の議論などが示す通りである。

こうした試行錯誤のなかに本書を置くとうどうなるだろう。そんなことをぼんやりと考えながら, 本書を読みはじめた。文学や歴史学, 美学や思想などの専門家たちを中心に編まれた本書は, 東アジアのこの共通経験を, この経験と深く絡んだヴィクトリア朝英国の視点から見直そうとするものである。

本書は二部から構成され, それぞれ 4 本の論文, 合計 8 本の論文から成っている。まずは各論文内容を紹介しながら (そして, 時に若干のコメントを加えながら), 本書の提起する問題の所在を明らかにしていくことにしよう。

*

第一部では, 19 世紀後半, アジアとの接触のなかで生まれたイギリスの (広くは西洋の) 経験であるジャポニズムが, 多様な素材のなかで分析される。

「ムスメに魅せられた人々 — 英詩のジャポニスム」と題する川本皓嗣の論文では, 英米仏のジャポニズムを網羅的に概観したアール・マイナーの『英米文学における日本の伝統』(1966) のなかに散見される, 多様で新鮮な「日本

種」作品が議論の俎上にあげられる。「ゲイシャ」イメージと共存する「ムスメ」イメージのなかにヴィクトリア朝人が見たい日本を浮かびあがらせた論者は, 「貞淑でしとやかで清潔な日本女性」という言説に絡みつくとオリエンタリズムに目配りしつつも, そこに「帝国主義的な野心や驕りばかりではなく, (相手にとってしばしば迷惑であったとはいえ) 異国的なものへの純粋な憧れや敬意, さらに畏怖の念」(44) を汲み取ろうとする。ヴィクトリア朝人のジャポニズム理解を織り込んだ (多くが本邦初公開だろう) 邦訳が巧みである。

続く森道子「キプリングと日本」では, 旅の途中で二度日本に立ち寄ったノーベル賞作家ラドヤード・キプリングのジャポニズムを, ラフカディオ・ハーン (小泉八雲) と対比しつつ, その形と限界とが示される。植民地インドで生まれ, インド (あるいは同じインド省の管轄にあったビルマ) を描いた作品で知られるキプリングの日本観自体が貴重な「発見」といえるだろう。

イギリスからの (ある意味で一方的な) まなざしを扱ったこれら 2 論文に対して, 谷田博幸「交差する両洋の眼差し — アルフレッド・パーソンズと明治日本の水彩画」は, 日英のまなざしの交錯とそのありようを問おうとする。1892 年に 9 ヶ月間日本に滞在し, 明治 30 年代の日本における水彩画ブームと深く関わった英国の水彩画家パーソンズ。彼が日本の風景に見たものと, 彼に日本の画家たちが見たものとを合わせ鏡にして語られる論者の分析は, ジャポニズムの双方向性をみごと浮き彫りにして実に刺激的である。現代のイギリスですっかり忘れられたパーソンズの発掘に加えて, 彼の『日本印象記』(1896) と滞日作品展の出品リストをもとに, パーソンズの日本での旅程と絵画制作の概要を追った一覧表もまた, 日英交流的一幕を考えるうえで貴重な資料といえるだろう。

近代化・西洋化する明治日本に背を向け, ひたすら田園風景を描いた「花と庭園の画家」パーソンズ。彼のなかに, イギリスで失われた景観を求めるアルカディア願望を読みとった論者は, 一見オリエンタリズムとのみ理解されがちな彼の言説 — 「蒸気耕耘機」と「鋤」の対比 — に, この画家の日本への強烈なあこがれを認め, 単純なオリエンタリズム解釈に警鐘を鳴らす。それは, 上記, 川本論文が論じた「ムスメ」への視線分析とも重なる。

日本の風景のなかで交錯したオリエンタリズムとオクシデンタリズム — そんなパーソンズの絵画表現を支える精神や文化的・社会的土壌と無縁の日本の画家たちは, そこに技巧を見たにとどまる。「彼の水彩画の上で東西両洋の眼差しは交差し, 結局交わることはなかったのである」(108) という論者の結論はきわめて説得的であり, 後に述べる「東アジア」地域認識の再考とも関わる論点を提示しているといえる。

『『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』の東アジア — 日清戦争期の朝鮮報道を中心に』と題する松村昌家論文は、ジャポニズムに焦点を当てた上記3本の論文とはいささか趣を異にしている。同論文は、「東アジア三国間の最初の接点」(126)を作り出した出来事として日清戦争をとりあげ、この時期の絵入り雑誌に描かれた朝鮮に関する記述を中心に、ヴィクトリア朝英国が東アジアに注いだまなざしの一端を読み解こうとする。当時の宮廷で対立する王妃（閔妃）と国王高宗の父興宣大院君、その狭間で混迷を深める政治、疲弊する国民たち。政治に無力さを感じ、戦争に背を向けた国民が、1891年12月に布告された断髪令には激しい怒り露わにした。このコントラストのなかに、論者は朝鮮の運命を重ねていく。比較文学の豊かな知識を感じさせる終わり方が印象的だ。

第二部では、イギリスから東アジア諸国に「輸入」された啓蒙思想が取りあげられ、その移植をめぐる日本、中国、韓国ではどのような差が生じたのか、その差は何によるものなのか、などが考察されている。

平川祐弘「中村正直 — 洋学に転じた漢学者」では、ヴィクトリア朝英国を代表する知識人、サミュエル・スマイルズやJ・S・ミルの翻訳で知られる中村正直に焦点をあてて、その思想形成の裏側が問われる。「幕末維新の日本でもっともすぐれた漢学者といわれた」(159)中村は、西洋文明精神の研究という確固たる目的をもって1866年に渡英し、倒幕で留学資金が途絶えた68年に帰国した。この留学経験が彼に、古代中国を文明のモデルとする従来の儒学的思想を捨てさせ、ヨーロッパ起源の議会制民主主義こそ日本が学ぶべきモデルであると確信させたと論者はいう。キリスト教の神と儒教の天が同じだという当初の思い込みを払拭したのも、彼のイギリス経験だった。こうした分析を通じて、論者は、19世紀後半のイギリスと日本との倫理的な共感を指摘しているが、そこに想定される「日本特殊論」がいささか気になった。これについては後述しよう。

王曉範「ミルの *On Liberty* は明治日本と清末中国でどのように読まれたか — 中村正直訳『自由之理』と嚴復『羣己權界論』」では、そのタイトル通り、イギリス自由主義を代表する思想家、J・S・ミルの書を翻訳、紹介した日本・中国それぞれの知識人の訳文が比較される。翻訳にあてられる言語には、日中両国の歴史・文化の根本的な差異が反映される。国家権力を相対化しようとする中村に対して、嚴復は、文明化の原動力を国家に期待し、国民ではなく「国家の自由」を優先させる意図を訳文ににじませた。明治日本との比較において浮かびあがる清末中国の啓蒙思想形成の様子、その差が両国の国家機能の現状と関わっているという指摘などに興味をそそられる。

しかしながら、その分析にどこか物足りなさを感じるのはなぜだろうか。近年の研究では、明治期に大量の「和製漢語」が中国に伝わり、中国の新しい知の形成に強く影響を与えた実態が明らかにされつつある。イギリス（＝ミル）と日本（＝中村）、イギリス（＝ミル）と中国（＝嚴復）という二辺をつなぐ三角形の「もうひとつの辺」として、日中関係における学術概念のやりとりを組み込めば、中村と嚴復の翻訳作業、二人が訳した書物のゆくえはどのように読み直せるのか。本書が試みようとした東アジアの比較研究には、この「もうひとつの辺」が不可欠ではないだろうか。

安西敏三の「福沢諭吉におけるW・バジョット問題」では、中村正直とともに明治初期の思想に絶大なる影響を与えた福沢諭吉と、彼に大きな影響を与えたウォルター・バジョットの『英国憲政論』(1878)との関係が議論される。バジョットの憲政論を参照しつつ、独自に練り上げた福沢の日本憲政論が、『帝室論』とともに分析されるなかで、明治憲法制定期の問題もまた、あぶりだされてくるのである。

以上の3論文が対象にすえたミルやバジョットらに比べると、鈴木利章「文明史、G・G・ゼルフイとT・B・麻侯礼卿 — その前史」がとりあげるゼルフイの知名度は明らかに低い。イギリスに帰化したハンガリー人ゼルフイは、1879年、イギリス留学中の末松謙澄の要請を受け、日本人向けに西欧の歴史学研究を紹介する『歴史学』を著した歴史家である。同書は、翻訳はされたものの、出版されなかったという曰く因縁の書。この本から見える「ゼルフイ史学」もまた、イギリスではすでに忘却の彼方にある。論者は、帝国大学を中心とした明治期の官学アカデミズムの主流となったランケ史学とは異なる「ゼルフイ史学」の特質、それが明治日本の歴史学に与えた影響などについて、徳富蘇峰が学んだホイッグ史家、T・B・マコーリーと絡めて分析しており、日本における「学問としての西洋史学」の草創期を再考する貴重な論といえるだろう。

＊

まえがきに記されているように、本書は、ヴィクトリア朝イギリスが明治日本に与えた影響を、やはりイギリスを通じてウェスタン・インパクトにさらされた中国と朝鮮を含めて見直そうとする試みである。8本の論文が扱う内容はいずれも、明治日本という歴史的な文脈をはずさないものの、現代につながる歴史意識や美意識とも無関係ではない。その意味で、歴史認識に迷う現代日本に警鐘を鳴らす書との位置づけも可能だろう。

その一方で — いや、だからこそ、気になるのは、タイトルに選ばれた「東アジア」という言葉であり、この言葉が、その地域概念の形成を抜きにして、ほとんど無批判に使われている（ように思われる）ことである。「論者の大半

が問題にしたのは明治日本だから」などという言い訳は、この際なしにしよう。そうであれば、「ヴィクトリア朝英国と明治日本」というタイトルでよかったはずだ。そうではなく、むしろ、そのタイトルに収まりきれない論点を提示しようとしたことこそ、この論文集の意味もあるのではないか。奇しくも編者は、まえがきでこう述べている。「たとえいかなる形であるにせよ、これら四カ国〔英国・日本・中国・朝鮮〕間のつながりを多角的に語り合ってみよう」(2)と(傍点は引用者)。

論文集に「論文間の対話」が求められる以上、そして上記で紹介、指摘したように、松村、王両論文の論点とその問題点を本書全体で引き受けるためにも、「東アジア」という言葉にもう少し意識的であるべきではなかったか。たとえば、王論文に関して評者が先に指摘した問題点——日本、中国、韓国という三角形(ないしは英国を含めた四角形)を構成する「もう一つの(あるいはもう二つの)辺」の存在を、本書はどのように考えているのだろうか。

そもそも、「アジア」という言葉自体、ヨーロッパから与えられた呼称である。そこにさらに、「東アジア」という言説が登場するのはいつどのようにしてなのか。それは、「東洋(オリエント)」という言葉とどう違うのか、同じなのか。こうした問いかけは、「漢字文化圏、儒教・仏教文化圏、冊封体制」など、これらの地域の共通項を問題にするものではない。その点からすれば、超時代的な概念として使われることの多い「中華的世界秩序」とのつながりを、(意識的か無意識的かは別に)本書が排している点は評価されるだろう。

しかしながら、本書が「ヴィクトリア朝英国と明治日本」を超える試みであるならば、「東アジア」という認識がいつどのようにして形成されたのか、という問いかけは不可欠である。近年の議論によれば、「東アジア」という言説でこれらの地域が語られるようになったのは19世紀末、本書が扱うヴィクトリア朝時代である。この時代、「東洋」という言葉との微妙なずれを含めて、「東アジア」という地域概念は、西洋近代を中心に構築された国際関係のなかで創られたのである。本書が共同研究の成果である以上、こうした歴史認識がもう少し議論されるべきではなかっただろうか。たとえば、「東アジア」という地域概念と「東洋」という言葉との微妙な距離感の問題は、ジャポニズムというイギリスの経験とどのように絡むのだろうか。

さらに、この地域概念の形成と関連して、中国や朝鮮との比較において日本を特殊化する視線が論者の間で時折顔をのぞかせていることも気になった。すでに少し触れたが、平川論文が節題に掲げた「中国と異なる日本文化の特色とは何であったか」は、ともすれば、日本をアジアのなかで特殊化する考え方(あるいはその系譜)に通じる。しかも、この特殊化の目的が、多くの場合、ヨー

ロッパとの親近性を導き出すための言説であることを考えると、同論文が導き出した「英国と日本との倫理的共感」にも一定の留保が必要かもしれない。

こうした思考パターンを危惧する日韓の共同研究のなかでキーワードとされたのが、「植民地近代(colonial modernity)」という概念である。これは、いち早く西欧モデルの「近代化」をなし遂げた日本が、統治下に置いた朝鮮でも「近代化」を進めたとして、日本の植民地支配を評価しようとする「植民地近代化(modernization in colony)」と大きく一線を画する(宮嶋博史他編『植民地近代の視座——朝鮮と日本』岩波書店、2004年、xix)。それは、ヨーロッパ近代が牽引した(と考える)「近代」という時代そのものを問題化し、それが植民地の支配-被支配の相互関係のなかに顕在化するという見方に立った概念なのである。その意味で、アジア(そしてアフリカ)において、近代とはすべからず「植民地近代」だといえるかもしれない。そして、植民地の側から西洋近代を対象化しようとする議論のなかで、日本とヨーロッパとの親和性を引き出そうとする「日本特殊論」にも厳しい批判のメスが入れられてきた。とりわけ、現在の日韓関係、日中関係を考えた場合、こうした国境を超える共同研究の動きを無視して「アジア(あるいは東アジア)」を議論の俎上にあげることはもはやできないのではないだろうか。

以上は、そのタイトルから評者が本書に期待したことでもあるが、それは、けっしてないものねだりではないだろう。「東アジア」は、ヨーロッパを参照軸としない世界史の構築をめざすアジアの共同研究が、その突破口として考えている視角でもあるのだから——。「ヴィクトリア朝英国と東アジア」という問題設定には、「西洋と東洋」という単純な二項対立に陥ることなく、現在と過去を結ぶ対話の架け橋となる可能性がある。その意味で、本書が投げた一石が今後の学際的な議論のなかでどのように受けとめられるか、それが楽しみである。

Fellowship's Miscellany



『ディケンズ鑑賞大事典』の刊行を終えて

Editing *The Reader's Encyclopedia of Charles Dickens*

西條 隆雄

Takao SAJO

ディケンズ・フェロウシップ日本支部が全力を注いで編集した『ディケンズ鑑賞大事典』が今年5月に刊行された。いい出来栄で、読書子にうれしい話題を振りまいている。一緒に作業に取り組んでくださった編集委員、執筆者、暖かくサポートして下さった会員諸氏、そして南雲堂に感謝しつつ、編集のよろこびと苦闘を語ってみたい。

1. 企画のはじまりと編集委員会の設置

1999年1月に支部長職を引き受けたとき、前支部長の小池先生より「これまで貯めてきた300万円を新しい世紀の記念行事として何かに使ってほしい、多分出版などがいいでしょう」との提案を受けた。支部活動電子化の作業に忙殺されながらも、いったいどんな企画がもっともふさわしいだろうかと日々考えつづけていた。数人規模で書く研究書とか、デ

ィケンズについての随筆集では、支部として長いあいだ積み立ててきたお金を生かすことにはならない。専門家も一般読者もこれを読めばディケンズのすばらしさを理解することができるような書物ができれば、これほど適ったものはない。生涯と作品論はもちろん、想像力の源泉や朗読、演劇、ジャーナリズム活動も視野に入れた、国際レベルでディケンズを語ることでできる、いわば『ディケンズ手引書』のようなものは作れないであろうか。折りしも *The Oxford Reader's Companion to Charles Dickens* (1999)、次いで *The Cambridge Companion to Charles Dickens* (2001) が出たが、日本の読者にはこの両者ではまだまだ不十分、個別項目をもっともっと詳しく、かつ資料を示しながら解説したものでなければならぬ。

一見無謀に思えるこの企画も、支部創設後30年を経た今、その実現は

さほど難しくはあるまいと考えた。ただ、それには豊富な資料を手元にもち、直言しかつ献身的に働いてくれる編集委員を募る必要がある。幸い植木研介、原英一、佐々木徹、松岡光治氏がこの仕事を快く引き受けてくれたので、2002年12月に執筆要綱を作成し、30名の会員に執筆をお願いした。5名の編集委員はいずれも研究室を自分の仕事場にしており、したがって連絡に困ることはない。編集の方針を協議したり、原稿の点検とか抜け落ちた項目に対する目配りなどは電子メールを使ってほとんど瞬時に行うことができた。記述の正当さと『大事典』全体の均質さを保つことが編集の第一義であり、この考えを共有する編集委員会が設置できたのは成功への大きな一歩であった。

2. 取り上げる項目と内容

『大事典』の目指すところは、ディケンズの幅広い活動のすべてを網羅することであった。彼は作家としてあまりに有名であるが、それ以外に素人演劇活動をおこない、日刊新聞を創刊して『タイムズ』紙を震え上がらせ、自作を朗読し、週刊誌を編集刊行して大成功をおさめている。いわば、数人分の生涯を一身で生き、しかもその一つ一つに輝かしい成功を刻す、たぐい稀な人物であった。この巨大なディケンズ像を一目でとらえることができるよう、全体を6つの大項目（生涯、作品論、想像力の源泉、多岐にわたる活動、ディケンズ文学の広がり、ディケンズ批評

の歴史）に分け、その下にさらに小項目を入れてディケンズを詳しく解説することにした。

この多才な人間像をとらえるには多くの研究者の協力が必要であった。とくに「ディケンズとシェイクスピア」、「ディケンズとドストエフスキー」、そして「19世紀の大衆娯楽」についてはわが国の研究ではいまだ未成熟だと判断し、欧米の研究者にお願いした。一方、作品については、各作品ごとに批評史を記述し、作品のテーマ・特徴をうまく解説して、文芸批評用語に振り回されず、作品の魅力伝えることに重点をおいた。

また、この種の事典にありがちな「作品のあらまし」、「作中人物」、「地名」の解説などはすべて本体と同列におかず、CD-ROMに収めて付録とし、このほかに「ディケンズの家系」、「分冊出版表」、「作家の交友関係」、「ロンドン地図（1823, 1843, 1862年）」、「研究文献」等もいれて、本体に劣らぬ情報を大量に提供することにした。これによって『大事典』の本体を、付録とは別の、ディケンズのコアを語るものとして位置づけることができたかと思う。

3. 出版社の選定

もともとは文科省の出版助成を目指し、全原稿が出揃った時点で出版社と交渉するつもりであった。しかし出版社未定の企画に対して原稿を書くことはできないとの意見が出され、助成はその段階であきらめざるをえなかった。

出版社の選定は、企画が実るか実

らないかの試金石である。編者の意向が執筆者に無視されれば『大事典』の名とはほど遠く、個々の論文が独立し統一のない書物になってしまう。編者を介さずに執筆者が直接出版社と連絡を取りあう非は未然に防がねばならない。私は良質な編集、装丁、製本で名高い南雲堂の原信雄氏に手紙を書き、お会いして『大事典』の出版を打診した。最初は「原稿の寄せ集め」の類ではないかといぶかっていた彼も、企画の目的、取上げる項目、そして執筆・編集の方針を詳細に説明したところ、「前向きに考えましょう」と約束して下さった。ディケンズ・フェロウシップ日本支部の総会（2004年10月）で出版社名を公表したとき、ほとんどの人は「まさか」と思ったか、しばらく沈黙が流れた。かくして南雲堂の協力により、編集委員会は方針どおり編集作業をすすめることができたのである。

実際に組み始めてから完成するまでに、原信雄氏は踏むべきかずかずの手順と私の気づかぬ盲点を無言で教えてくださった。とりわけ完成前の数ヶ月は、私などの想定できぬめまぐるしい作業がつづき、彼の指示に従ってあれこれ奔走しているうちに、現在目にする美しい『大事典』が突如できあがっていたのである。いい出版社と編集部長に恵まれたことを感謝している。

4. 搬入の準備

CD-ROM に収めるロンドン地図3葉の著作権取得はうまく進んだものの、そのデジタル化は大変だった。原英

一氏も松岡光治氏もこれは自力では無理だというし、私にはデジタル化の知識も制作依頼をする業者の当ても無い。地図をはずす手もあるが、それでは大切な資料が一つ欠ける。財政的裏づけのないまま作業は何とか進めて行かねばならない。2003年の暮れにやっとある業者を見つけ、制作を依頼した。年明け早々に出来上ったが、高額な制作費を支払ったにもかかわらず、解像度を相当上げねば使い物にならなかった。やむなくそれをお願いしたが、データが大きくなればなるほど費用もかさむ。読者に一次資料を提供したいという自負だけが心の支えであった。障壁画のデジタル化を可能にする大型スキャナーが京都で開発された記事を新聞で見たのは、2004年4月末のことだが、すでに作業は終わっていた。

面倒な作業が一つ一つ片付く中で、原稿がほぼ集まった2004年5月、編集委員は原稿の中身の点検に踏みこんだ。同時に、執筆者が使用しているイラストの掲載許可をとり、委員会で急遽収録することを決めた「ディケンズとドストエフスキー」の論文の掲載許可をとり、そして天理図書館所蔵のディケンズ分冊本の表紙絵複製許可を申請した。

とりわけ「作品」の部に関しては、体裁、批評史の概略、テーマの解説などが各作品ごとに統一されているかどうかを確かめ、そうでない場合は訂正、加筆を求めた。30余点の原稿はその後執筆者と編集委員の間を何度か往復した。原稿点検には時間がかかる。ほぼ最終原稿が整った

2005年3月末、編集委員会は同志社大学の小会議室をお借りし、必要な文献をここに揃えて、3日間にわたる合宿会議を開いた。

この会議で見つかったいくつかの不備は再度執筆者と打ち合わせることにしたが、この時点でまだ1、2原稿の遅れがあり、すべてが出揃ったのは夏休み明けの9月であった。しかしこの時期で原稿搬入をしても、教科書等の出版で多忙を極める南雲堂に『大事典』最優先の指示をお願いすることはできず、年度内刊行は見通しがあやしくなった。

5. 印刷開始

2006年3月末に数ページのサンプル組みが3部とどき、これを比較検討して書物の体裁、1ページの行数、使用活字を決定すると、初校は早くも4月30日に刷り上った。これを執筆者に校正してもらおうと、再校は7月13日～27日（ここで「作品」の部に収めた地図がことごとくやり直しの指摘をうけ、オランダへ行く直前のこと、家内に「イラストレーター」を使ってすべて描き直してもらった）、三校は8月31日～9月4日と、急ピッチで『大事典』の形が整ってゆく。最終校正刷りが9月19日に届くと、この段階で全ページを確定し、以後はこれをいじらないことにした。この確定したページに従ってインデックス作成が開始される。あらかじめ個々の執筆者に作成してもらっていた索引を一本化して7項目に整理し終わると、これを最終校正刷りとともに原英一氏に郵送した。そして

南雲堂よりお借りした『大事典』のファイルをベースとして、単調だが厳密さを要求するこの作業を彼にやっていたいくことにした。

しかしこの段階で南雲堂より思わぬ不備を指摘された。執筆者の使う言葉がまちまちなので、誰か一人で全体を総点検してほしいというのである。二つ返事で引き受けたものの、見直すべき語句は相当多数に上り、ページの変更を伴わずにこれを統一してゆくのは骨が折れた。しかもこれはインデックスに連動する。原英一氏も同じ悩みを抱えていた。同じ概念が、言葉をたがえて同席しているのである。加えて、たまたま目を通したCD-ROM内にも本体との齟齬がいくつか見つかり、宮丸裕二氏を説得し、1ヶ月の猶予を与えて担当部分を見直してもらった。その間、奥付け、執筆者一覧、「あとがき」の作成にとりかかり、原英一氏からインデックスが送られてくると、直ちにその整理・訂正に集中し、年内に組版ができることを祈って南雲堂に送った。卒論・修論指導、博士論文査読に忙しい中をどうやって切り抜けたのかわからない。ともかく1月末にはインデックスの校正を終えた。終わるとすぐ宣伝パンフレットの文面作成、函のデザインがつづく。作業は果てるどころがない。

6. イラスト

用いた図版はすべて巻末に出所をリストするという南雲堂の意向を受け、各執筆者の用意した図版および編集委員が追加したものは、す

べて典拠を調べ、版權の必要なものについては所蔵する図書館・博物館に問い合わせ、複製許可をもらい原画のコピーを送ってもらった。幸い *Charles Dickens by Pen and Pencil* (1889-91) および Charles Dickens 版全集は個人でもっていたので、これを存分に利用できたのは有難かった。版權には無頓着な執筆者もいて、複製許可をもらってほしいとお願いすると使用をあっさり引込めた。また、許可を得ていると主張する人には正確を期してその証明書の提出をもとめたところ、「こんなにいいのか」と驚きつつそれをもらってくれた。しかし「イラストは任せます」という人が多かった。イラストの拾い出しは容易な作業ではない。もっている蔵書をすべてひっくり返してふさわしいものを見つけ、また不鮮明なものとは相当に差し替えをおこなった。

『大事典』の函にはマクリースの描いた肖像画 (1839) を使うことにし、2007 年 2 月に Charles Dickens 博物館に問い合わせたところ、館長から「これは私の管轄外なのでどうしようもありません。National Portrait Gallery でもらってください」との返事があった。急ぎ NPG と連絡を取り、何とか 4 月はじめに許可と原画のコピーが届いてホッとしたが、出来上がってみればなんと肖像画は函の表のみに使用すると思っていたのに裏表紙と背中にも使われていて、大至急、変更に対する是正策を尋ねた。さいわい 1.5 倍支払えば許可できるとの連絡をもらって安堵の胸をなで下ろ

したが、それは 5 月 23 日、配本の 2 日前のことであった。

一方見返しの地図は *The Oxford Companion to Charles Dickens* とは異なり、これも資料の一部、つまりロンドン中心部の地名や街路名が読めることを念頭においた。柏書房の無償掲載許可には深く感謝している。いくつかの作品は個別に地図を作成する手間も省けた。今のうちに CD-ROM をていねいに剥がして地図が利用できるようにしておくとい。

5 月に日本英文学会が開催された折、南雲堂の展示ブースに『ディケンズ鑑賞大事典』が並び、内容の濃さと美しい装丁が参加者の目を引いた。以前から作りたいと思っていた本がようやくできあがり、支部記念事業の名にふさわしい貢献ができたことを素直によろこんでいる。編集委員会を代表し、5 年の長きにわたり努力をおしまず『大事典』を完成させた編集委員の皆さんに感謝しつつ、その功績を讃えたいと思う。

なお、CD-ROM に入れた地図は次の 3 点である。

1. *A Guide through London and the surrounding Villages* (London: M. J. Godwin, 1823)
2. *A Street Map of London 1843* (Devon, UK: Old House, [originally published by Chapman & Hall], 1992)
3. *Stanford's Library Map of London and its Suburbs* ([1862]; Suffolk, UK: Harry Margary [in association with Guildhall Library London], 1980)

The CD's CD-ROM Was Not Built in a Day.

松岡 光治

Mitsuharu MATSUOKA



今から 5 年ほど前のこと。『ディケンズ鑑賞大事典』刊行の話が出たとき、ディケンズの作品に出てくる人名や地名の数は膨大であるから、主要なものに限定せざるを得ないだろうと思った。だが同時にこうも考えた。『大事典』に CD-ROM をオマケとして付ければ、人名や地名は網羅できるし、ディケンズと交友のあった人々、分冊出版や年譜や系図といった表の形になるもの、すでに相当な分量となっている国内外のディケンズ関連の文献、クリックして拡大・縮小できる地図、これらも電子媒体としてならば、いくらかでも格納できるだろう、と。それで、編集委員会から付録 CD-ROM の制作を任された筆者は、さっそく計画・立案に取りかかった — 辛酸をなめることになるとは思ってもせずに。CD-ROM の中身は、表紙と目次を兼ねるトップページ (index)、使用方法などを書いた手引き (readme)、データベースの全てを収めたフォルダ (data) の 3 つにすることに最初から決めていた。ファイルの形式についても、テキストはコピー＆ペーストと改竄を防止するために PDF で、画像はウェブ上で標準的な JPEG または GIF にしようと

思った。

CD-ROM 制作班は『大事典』本体の執筆者になっていない若手からということで、春秋に富んでコンピュータ操作に優れた 5 人を登用した。目次は 9 つの項目からなる。それぞれの項目は CD-ROM 中の 9 つのフォルダ、すなわち「粗筋」(18 人の日本支部会員によるコラボレーション)、「人物」(宮丸裕二氏)、「地名」(西垣佐理氏)、「交友」(野々村咲子氏)、「分冊」および「年譜」(武井暁子氏)、「系図」(矢次綾氏)、「文献」(筆者)、そして「地図」(『大事典』に不可欠なデータということで、制作班とは別に尽瘁していただいた西條隆雄氏) に対応している。

さて、この種の大辞典に一般読者が求める情報の中でトップに来るのは、作品の粗筋ではあるまいか。ディケンズの研究者 (あるいは大学の先生) にとって決して愉快なことではないが、悲しいかな、これは否定しがたい事実であろう。ひょっとすると一般読者の場合だけではないかも知れない。ディケンズの作品論を書いた数年後に、端役の人物や細かい粗筋が思い出せなくなっているのは、50 歳になっても天命を知らない

筆者だけであろうか。日本支部のホームページには、その開設時からディケンズの15作品についての梗概（主な登場人物と粗筋）があったが、利用させていただいた宮崎孝一氏の『ディケンズ — 後期の小説』（英潮社、1977）の『荒涼館』から『互いの友』までの梗概はやや短いということで、今回の『大事典』で各作品を担当された中村隆氏（BH）、廣野由美子氏（HT）、田中孝信氏（TTC）、筆者（GE）、松本靖彦氏（OMF）には、新たに作品の詳しい粗筋を書いてもらい、それをCD-ROMに収めた。学問の本道から見れば、作品の粗筋を読むのは邪道かも知れないが、それならば翻訳を読むのも同断である。少子化の時代、ディケンズの面白さを知ってもらうためには、翻訳であれ粗筋であれ、とにかく読んでもらわねばならない。ディケンズ研究者を育てるのは大学でできるが、そのレーゾンデートルを世間に認めてもらうには、少しでも多くの人に関心を持ってもらわないといけないし、そのために何をしなければならないかを考える時が来ているように思えてならない。

今回の付録CD-ROMの制作で途轍もないエネルギーと時間が必要だったのは、宮丸氏担当の「人物」と西垣氏担当の「地名」である。「人物」で取り上げられたのは全部で2,410項目。複数の呼び方がある登場人物を一人と勘定しても2,057人。ここで数字として書けば一行で済む

が、ABC順と作品順の二つのファイルは、それぞれA4で169頁と180頁にも及ぶ。*The Dickens Encyclopedia* や *The Dickens Index* といった参考図書が利用できたとはいえ、これだけの人物をリストアップするだけでも気が遠くなる作業であるのに、宮丸氏は人物のすべてに日本語名、発音とアクセント、登場する（作品とその）章数、そして端役でないかぎりには詳しい説明をつけてくださった。聞いた話では、参考図書には少なからず間違いがあり、重複のない見出しを作るだけでも大変だったそうだ。固有名詞のカタカナ表記における問題は、『大事典』本体との統一の問題もあって編集長と意見の衝突もあった（決して言い争いではない）が、結局は編集長が宮丸氏の情熱にほだされて譲歩されたようである。宮丸氏の思い入れが強いのは発音表記で、例えば「M'Choakumchild, Mr. HT. マクチョーカムチャイルド [ムチョウカムチャイルド]」のように、原音のカタカナ表記の中で第一アクセントの部分を太字にするなどの工夫がなされている。発音に関しては7冊の発音辞典と4～5名のイギリス人にあたり、映画までチェックするという徹底ぶりである。また、主な登場人物は画像へのリンクが張っており、ユーザにとっては嬉しい限りだ。PDFファイルにリンクの設定をするのは泥臭いマニュアル作業であったが、その苦労は一般読者には想像できないだろう。200枚になるまで画

像の収集とリンクの設定を手伝った筆者には、その苦労がよく分かる。この根気のいる仕事を宮丸氏は博士論文執筆と同時進行でしてくださった。しかし、スリアリーの親爺に言わせれば、これは宮丸氏にとって恰好の息抜きとなって、むしろ博士論文を捗らせることになる娯楽のようなものだったに違いない。

西垣氏が担当された「地名」も80頁を超える大変な作業であった。それぞれの地名がディケンズのどの作品の何章に出ているかについてのチェック — これには特に骨身を削られたようだ。地名に対応した画像は600枚で、これをすべて探し出すのに夏休みが完全に潰れてしまい、自分の仕事ができなかったと聞いている。版權がなくて画質も閲覧に耐えるものを見つける辛労は並大抵のものではなかったはずだ。複数の作品で使用されている地名に関しては（例えばSB, DC, LDなどで使用されている“Adelphi”では、具体的にどのような場面で使われているかが説明されているので）、その地名に関して作品ごとに何らかの共通点や相違点を見出すことができる。また、地名の歴史的由来も載せられているので（“Barnard's Inn”はGEで独身者用住居として使われているが、もともとは法学院の一つであったなど）、地名と何らかのテーマを絡めた研究をする場合には、とても役立つと思われる。英語の地名をカタカナで表記する際の苦しみは宮丸氏の「人名」と

同じであった。このような試練に両氏を耐えさせたのは、ディケンズに対する汲めど尽きせぬ愛としか考えられない。

野々村氏がABC順に並べた「ディケンズの交友関係」も、134人をリストアップして解説した34頁に及ぶ力作だ。こちらも76枚の画像ヘリンクが張ってある。クリックして現れた画像を見ていると、ディケンズと交友があったという理由だけで、私たちにとっても「互いの友」のように思えてくるから不思議である。この「交友」も前述の「人名」と「地名」も、そして後述の「分冊」と「年譜」も、PDFファイルの左端には「しおり」が付いている。ユーザ側の設定によっては「しおり」が左端に表示されない場合があるので、その時はPDFファイルの「表示」メニューから「ナビゲーションタブ」へ行き、「しおり」にチェックを入れると表示される。一刻でも早く目的の情報をゲットしたい気短で性急なディケンズアンに対しては、この「しおり」の使用をお勧めしたい。

連載出版が多かったディケンズの情報として「分冊」（『大事典』本体に入れると20頁が必要）は欠かできなかった。武井氏がアバディーン大学で博士論文の追い込み中だったことを知っていた筆者は、よりよい博論を書いていただくためには宮丸氏のように息抜きが必要だろうと思って、何の躊躇もなく依頼した。シュリッケ先生のおられるアバディーン

大学の図書館には *Household Words*, *All the Year Round*, *Bentley's Miscellany*, *Master Humphrey's Clock* が全部そろっていて、先生の文献アドヴァイスもあって武井氏は「分冊」を即座に作成して送ってこられた。これでは息抜きにならないと思って「年譜」もお願いした。こちらは、すでに日本支部のホームページ上にあった小池滋氏の『ディケンズ — 19世紀信号手』（冬樹社、1979）の「ディケンズ略年譜」に、「政治・経済」「社会・文化」「文学・思想」の3項目を新たに追加したものである。

「系図」担当の矢次氏には「父方の祖先」「母方の祖先」「一親等の家族とホガース家」「子孫」という4つのエクセル・ファイルの作成を依頼した。「系図」の場合、すべてが1頁に収まらないうとユーザの腹の虫も収まらない。非常に見づらくなるからである。頭は少しも使わないのだが（とは矢次氏の弁で、そんなことは絶対ないと思うが）、細かくて神経を使う作業なので肩は凝るし、目はちかちかするし、ちょっと気を抜くと何処まで入力したのか分からなくなるといことで、これはとても息抜きになったとは思えない。「系図」の人名から「交友」の画像へリンクを張ればよかったのだが、これを失念していたのはすべて筆者の責任だ。申し訳ない気持ちでいっぱいである。

筆者の担当は「文献」。これは「ディケンズ文献一覧（洋書）」「日本で出版されたディケンズ関連図書」「デ

イケンズ作品の翻訳」「日本におけるディケンズ研究書誌」という4つのファイルからなっている。膨大な情報量にもかかわらず、基本的に日本支部のホームページ上で過去8年にわたって蓄積してきたデータをまとめ直しただけなので、大した作業ではなかった（長年の地道な努力が報われた）。ここ数年は「洋書の文献一覧」と「ディケンズ研究書誌」の更新を怠っていたので、これを契機に新しい情報を加えたが、前者の方はスクルージ並みのケナガイタチの目（ferret eyes）を持つという宮丸氏にチェックしてもらった。後者の方は、日本支部会員が書かれたディケンズ関連の最近の論文が、完全にデータベース化されていないので、不満がないわけでもない。今後のディケンズ研究者のためには、自動的にホームページに（少なくとも書誌情報としては）公開されるシステムを構築する必要があるようだ。

最後に、ディケンズを鑑賞するには絶対必要だが、『大事典』本体に入れてしまうと価値が半減してしまうロンドンの「地図」について、その担当を編集委員長の西條氏にお願いした。地図がよく見えるように拡大して『大事典』本体に入れるとなると、*London A-Z* のように数頁に分割しなくてはならない。また、むりやり1頁に収めると、街路名などは小さすぎて読み取れない。クリックするたびに目的地が拡大または縮小される電子媒体の地図こそ、今回の付録

CD-ROM で最も威力を発揮するものである。西條氏はロンドンの地図3葉、つまり1823年の *A Guide through London and the Surrounding Villages*, 1843年の *A Street Map of London*, 1862年の *Stanford's Library Map of London and Its Suburbs* の使用許可を取られ、電子化のために業者へ高額製作費を個人で払われた。ディケンズに対する愛情のなせる業である。これらの地図は高画質のJPEGファイル（それぞれ11MB, 13MB, 18.3MB）なので、クリックし続ければ、いくらでも目的地を拡大表示できる。拡大も度が過ぎるとぼやけてしまっで見づらくなるが、下のように適度に拡大すれば、東の Russell Square と西の Gower Street, そして両者をつなぐ Keppel Street がはっきりと（ここではコピー&ペーストしているので幾分ぼやけて）見える。



「地図」の項目には「その他」もあって、ここには日本支部のホームページにある「Maps」のサイトが再現されており、様々な古いロンドンやディケンズ関連の地図へリンクが

張ってある。特に UCLA の疫学科がクリックابل・マップとして再現した「Map of John Snow's London in 1859」<<http://www.ph.ucla.edu/epi/snow/1859map/map1859.html>> の拡大した時の鮮明さは一驚を喫する。

この付録 CD-ROM のデータはコンピュータの CD/DVD ドライブから直接に読み出すことも可能だが、コンピュータに負荷をかけたり、動作を鈍くさせないために、全部を内蔵ハードディスクに保存してから使うべきである。使用するたびに出し入れするのは面倒だし、取り扱う時に傷がつくこともあるので、付録 CD-ROM はハードディスクに保存してから、バックアップ用に『大事典』本体の袋に戻すか、どこか別の場所に保管しておくがよい。データの総量はおよそ100MB。10年前のコンピュータであれば、ハードディスクに保存するのに1日かかったかも知れないが、性能がよい最近のコンピュータであれば、1分ほど待つだけでよい。ゴミ箱に入れて空にするには1秒もかからない。とはいえ、古代ローマと同じように、付録 CD-ROM は1日でできたわけではない。これは制作班の全員が長い時間をかけて作った愛（もちろんディケンズに対する愛）の結晶である。

二人の先哲

To the Memory of my Dear Two Professors:
Shigekiyo Kawahara and Sylvère Monod

寺内 孝

Takashi TERAUCHI



戦中・戦後の激浪に翻弄され、飢えと乾きを覚えて成長した。あの当時、多かれ少なかれ、だれでもそういう状況にあっただろう。だがわが家は、不運な運命のめぐり合わせで深刻。生きることで精一杯。だから、「バスに乗り遅れるな」なんて思考はなかった。気がつけば、バスは去ってしまった後。あわてて追いかける。

肉体の飢えと乾きは、精神のそれ。そういう状況で大学に入り、なお癒されず、夜の高校に就職がなかったのを機に大学院を求め、その年の秋、大教大の入試に受かった。当時大阪に住んでいたから教育大は電車で10分、通勤途上にあったし、学費は安価、秋から勉強できるのなら有り難い、と。だが、入学は春、とは合格後に知った。「勉強したい」が唯一の動機。

ここで故河原重清教授に出会い、最初の授業が *Hard Times* 読解。使用テキストはどこかの機関からの寄贈だったようで、以下のノートン版、

Norton Critical Editions, Charles Dickens, *Hard Times: An Authoritative Text, Backgrounds,*

Sources, and Contemporary Reactions, Criticism. Edited by George Ford and Sylvère Monod. New York: Norton, 1966.

授業は夏休みも続いた。「バス乗り遅れ」で、「飢えと乾き」が癒されることがなかったから一生懸命に勉強した。先生も真剣そのもの。授業は研究室で、チャイムなしでつづいた。ある酷暑の日、先生は「ビタミン」と言って休憩時間に粉薬を飲まれたことがある。そして後日、「ぼくは広島で原爆にあっている・・・友人の小児科医に日赤病院へ同行してもらって・・・」と。それが何を意味するのか分からなかったが、先生の体に異変が起きていたようだ。

大学院2年目のとき、先生は、ディケンズのシミリーを蒐集して辞典に、と明かされた。不肖の「弟」にはそれがどれほどの意味があるのか理解できず、この点で「師」の逆鱗に触れたことがある。だが、ぼくには「乾き」があったから、礼節欠如はおおうべくもないが、独創的なことを、という強い想いがあった。

大学院3年目のころ、*Hard Times*

の原稿・校正刷りなどを英国からマイクロフィルムで1つ1つ取り寄せていた。電子メールはもちろん、ファックスさえままならない時代だったから、郵便でやり取りして。今では、どこから購入したのか、古い資料を調べないとわからない。

マイクロフィルムが手に入れば、マイクロフィルム・リーダーが必須。これは大学の図書館にあった。つぎに、フィルムを焼き付けるための用紙 (Dry Silver Paper) が必要で、これは新大阪駅近くの住友スリーエムで購入した。滋賀県に移ってからは、京大近くのプリント屋に焼付けを注文した。

大学院を了えたあとの81年 (昭和56年)、『ディケンズ・フェロウシップ会報』 (第4号) に『『ハード・タイムズ』のテキスト』を投稿し、ノートン版にいくつかの不備があることを指摘した。そして、この資料と、他に得ていた資料があったので、これらを一括してノートン社経由で編集者のシルベール・モノ教授にお送りした。

しばらくして、モノ教授からご返事を賜った。今では珍しい航空書簡 (aerogram) を使用されている。9月24日付で、「8月7日」の書簡ありがとう、と先生がタイプされておられるから、それがぼくの書簡の日付。先生は、送られてきた資料に、‘you eagle eye’ の評言を交えながら丁寧に対応して下さった。

同年10月、河原先生のお勧めで日本英文学会中国四国支部第34回大会

(於、高知大学) において『『ハード・タイムズ』における言葉の照合』というタイトルで研究発表した。ぼくは学会員でなかったから先生の照会書を携えて。そして11月、その発表を先生の指示で録音してあったので、この録音テープと、前述のモノ先生の書簡とをもって研究室へ出向いた。先生はたいへん喜んでくださり、書簡の方はそのまま預かってしまわれた。そのときは「・・・？」だったが、後になって自分なりに憶測することがあった。

マイクロフィルムの資料を読み漁り、多くの修正事項を見つけたので11月26日付で再びモノ先生にお送りし、「ぼくは単なる高校教師、楽しみで勉強しているだけですのでどうぞご修正を」と書き添えた。できれば、論文のような大げさな形を取りたくなかったから。ご返信は12月7日付で頂戴し、こうタイプされてあった。

I am afraid I cannot do it again; at least not now, when I have so much other urgent work to accomplish. And, when you show me that I cannot entirely trust myself, would it not be even more unscholarly to trust another scholar's findings implicitly and introduce all of your suggestions into future editions?

On the other hand, you would be fully justified in writing an article criticizing the inadequacies of our edition & proposing improvements. That would in fact be a way of mak-

ing sure that credit goes where it is due, and of assuming responsibility for your discoveries.

この書簡を拝読させて頂いたとき、ヨーロッパという学問の肥沃な大地における学者の品格、良心、潔さを感じた。不名誉にさらされながらも責任を正面から受けとめられる姿勢など、ぼくのような青二才の遠くおよぶところでなかった。無位無官の相手とあれば、もっと別な対応をされる方がおられたかもしれない、などと品の良くない空想をしたことがある。こういう経緯で、ノートン版テキストの修正作業に没入することになったのだが、その過程ですべてを投げ捨てていた。

翌82年1月、大学院の研究誌発行案が浮上した。生みの苦しみを伴ったが、結果として、*Studia Anglistica* が誕生し、2月、先の研究発表が No. 1 に載った。このとき、河原先生が日赤病院に入院されているのを知り、即刻お見舞いに上がったのだが、非常に驚いた。つい先ごろまで、すこぶるお元気だったのに表情が一変されていたのだ。先生はいくらかのことを話されたあと、

「おそろしいことになる。・・・あとを継いで欲しかったのだ」と、動揺された。ぼくは声にならなかった。これ以上先生を疲れさせるのは良くないと思い、辞去しようとする、先生は制止され、少し間を置いて、

「いま何をしている？」

「ノートン版の修正です」

「素晴らしい！君は×××なる。○○○○だ」と、口をやや曲げて言われた。感情を強く含められるときの表情である。先の発表に続くノートン版の修正ということで、先生は非常に喜んでくださった。退室のとき、ご病気が、原爆の話とかかわりがあるのを知った。

4月12日、先生は54歳の若さで逝去された。それから何日後の新聞のコラムで（『読売新聞』だったと記憶する）、先生のご容態の急変時期はともかく、ご発病自体はぼくの入学年より前であるのを知った。

先生のお弔いがすんだ後、教育大学のある先生から連絡を頂き、研究室に出向いたことがある。用件は、河原先生が録音テープを残されているので必要なものがあれば頂いて帰りなさい、と。このとき、その先生は二言三言話されたあと、「河原先生がもう少し長く生きてくださっていたら・・・」と悼まれ、憔悴のご様子であった。

「河原先生がもう少し・・・」は、忘れられない言葉となった。先生が被爆の後遺症に苦しんでおられることなど、不肖・不徳の「弟」に分かることではなかった。ぼくは「師」のご指導のまま、3年、4年と「院」に在籍し、ときに過労と不眠に苦しみながらも全力を傾倒していた。「もう少し・・・」と、何度思うことがあったことか。「学生のころは先生の内面を付度するゆとりはなく」とは、先般、新聞の紙上対談で、四方田犬

彦氏が述べられていたことだが、首肯できる述懐といえる（「鶴見俊輔さんと語る」、『朝日新聞』2007年3月6日）。河原先生の急逝は堪えた。その余韻が残る中でノートン版の修正作業に没頭し、その結果が82年9月、‘For a Better Norton Critical Edition of *Hard Times*’ のタイトルで *Studia Anglistica* No. 2 に収録され、河原先生追悼号となった。

これをモノ先生にお送りし、83年2月17日付でご返答を頂戴した。お礼を述べられるとともに、今は忙しくて改訂作業に取り組めないが、いずれは・・・、との主旨であった。

その後、ぼくは勤務のかたわら孤独な読書にふけっていた。知的に潤いのない日々など、空虚で耐えられなかったのだ。自分で言うのは気が引けるが、実際、寸暇を惜しんで読み、メモ書きをつくった。

87年のこと、もし河原先生がご存命ならぜひお見せしたい、と思えるものができた。つぎに掲げる書簡は、ディケンズ学の泰斗、元レスター大学教授フィリップ・コリンズ (Philip Collins; Professor of English at Leicester University from 1964 to 1982) から頂戴したもの。日付は ‘7 January 1987’, 署名は ‘Philip’ だが、タイプは「エル」が1つ多い。

Dear Mr. Takashi Terauchi,

Many thanks for sending me those five essays of yours, on aspects of *Hard Times*. You must be not only the champion Japanese scholar on

these topics, but also in many areas of verbal and textual detail the world champion! [...]

Clearly you have put scholars, not only in Japan but elsewhere, in your debt. I offer you my congratulations and my thanks – and my best greetings for the New Year.

Yours sincerely,

(signature)

PHILLIP COLLINS

コリンズ教授は残念ながら、今年(2007年)5月6日、レスターでお亡くなりになった。享年83歳。

モノ先生との通信は5年間途絶えていたが、88年に先生からとつぜん書簡がとどいた。3月26日付で、こう記されている。

I may find occasion to write in greater detail later. But I wanted to let you know at once. What is by now certain: that your efforts will have contributed in a considerable improvement of the Norton *Hard Times*. Even if, for various reasons, not *all* your suggestions are adopted, a considerable number will be. And, of course, your help will be gratefully acknowledged in print.

有り難い！ あの猛暑、むんむんとする小部屋で原稿・校正刷りなどを耽読し、河原先生が「素晴らしい」と言ってくださったことが、ついに！ 本当に嬉しかったし、モノ先生の

誠実な対応に感銘した。ノートン版の初版には確かに不備があったが、人間だれしも終生、神のように存在できない。人生のどこかで、誤り・過ちを犯すことがある。ただ、そういうときに、どう対処すべきかの方法を先生から教わった気がした。

ノートン版 *Hard Times* の第2版 (W. W. Norton, 1966; 1990) は90年の刊行。そして翌年、これの書評が出た (Joel J. Brattin, "Recent Norton Critical Editions." *Dickens Quarterly* (December 1991), 179-87)。

この時点で、もう1人の「師」野口俊一先生の学恩に触れておかなければならない。先生なくして *Studia Anglistica* はなく、従って、コリンズ教授の評価も考えられないからだ。

93年12月、日ごろ書き溜めていた資料を英文で著すことができたのでモノ先生にお送りした。94年1月29日付で批評を下さったのだが、その書き出しが 'Dear Takashi' とファーストネーム。そして括弧書きで、もう長い間文通を続けているのだから、これからは英米式に、互いにファーストネームでいきましょう、と。

このころ、ぼくは *Hard Times* の注釈作業を再開していた。何度か挫折したあとのことで、過分なものと自覚しながらも英語をもっと読めるようになりたいと渴望して。その過程で、ノートン版第2版になお誤記があるのに気づいた。今度はモノ先生の領域でない。これ以上、本文批評に立ち入ることは好ましくないので意図的に避けていた。誤記の責任は、

共同編集者ジョージ・H・フォード教授 (Professor George H. Ford) の領域。94年11月にこれをモノ先生にお送りすると、同月30日付でご返事を頂戴し、フォード教授に送る、と。

12月に入って間もなくのこと、初めてモノ先生にクリスマス・カードを書いた。先生からは1月19日付、書簡の形で賜ったのだが、その中で、ジョージ・フォードとはもう連絡がとれない、'He died on the 6th of December, 1994'。

それから4年後の98年、先生から頂戴したカードに、2人の名が連名されてあった。先生のおそばに 'Annie' と。ぼくも翌年からそれに倣った。

2001年にノートン版の第3版 (Norton, 1966; 1990; 2001) がでた。上述の書評を受けとめられたのだ。ただし、この版は、ジョージ・フォード教授が故人となられたので、Edited by Fred Kaplan and Sylvère Monod。

クリスマス・カードは出しつづけた。2003年、先生はいつものようにカードを下さったのだが、署名欄を拝見して「・・・？」文末に 'Annie' がなかった。先生はこう記されていた。'2003 has been a sad year for me. Annie died on the 28th of January. My whole life is as it were crippled.'

この悲報で、ぼくの中に蓄積されていた欲求が噴出した。先生にいつかお会いできれば、と漫然と思い続けていたのが沸騰したのだ。奥様は80歳で天に召され、先生は82歳。勇を鼓して書簡を出した。以後、先生との通信は電子メール。1月16日

付で、「OK! わたしのアパートか近くのレストランで」

3月19日、パリの空へ飛んだ。格安のバック旅行をみつけて。ド・ゴール空港着、バスでホテル直行。翌日の午前中はパリ旧市街のバスツアー。滋賀県の田舎で、つましい暮らしに慣れている者にとって、旧市街はあまりに眩しかった。午後はフリータイム。モノ先生とのお約束は午後1時。セーヌ川沿いに上流方向へ。お住まいを見つけた。そしてついにお会いできたのだ! それまでに何度空想したことだろう。ミッテランかシラクか、はたまたド・ヴィルパンか、と。だが、その誰でもなかった。モノ先生はモノ先生。温顔で精悍、同時に物静かで優しさをたたえられた慈父。すこぶるお元気で、なおも現役の学者。ぼくたちのような無骨な田舎者でも実に親切に接してください、奥様のお写真も見せてくださった。先生の書齋に飾られてあったから、いつもご一緒されていたのだろう。

先生との通信はもうかなわなかった。2006年8月8日、悲しくも昇天された。享年84歳。長年にわたってご厚情を頂きましたことに感謝し、衷心より哀悼の意を捧げます。

2007年 梅雨の候

付記 以下に、シルベール・モノ教授の業績などを記します。すべてインターネットで得た情報です。

先生はわが国では一般にディケンズ学者として知名であるが、実際

には非常に幅広い研究分野を持っておられる。まずディケンズ研究では、著書 *Dickens the Novelist* (1966, 68), ノートン版権威テキスト (*Bleak House* と *Hard Times*)、ディケンズ関係の諸論文があり、さらにディケンズ作品のフランス語訳およびその書での緒言、注釈、参考書誌等に単独または複数で関わっておられる。それらの作品を例示すれば、*Sketches by Boz*, *Pickwick Club*, *Oliver Twist*, *Old Curiosity Shop*, *Barnaby Rudge*, *Martin Chuzzlewit*, *Pictures from Italy*, *David Copperfield*, *Christmas Stories* 等である。そして *Dickens Romancier* (1953), *Charles Dickens* (1958, 1967), *Dickens* (1993; Peter Ackroyd 著のフランス語訳), *Studies in Charles Dickens* (1984; 英仏語での研究書で、編著) などである。

ディケンズ研究に勝るとも劣らないのがコンラッド (J. Conrad) 研究。コンラッド作品のフランス語訳、作品集の編集、そこでの前書き、後書き、注釈などを単独または複数で関わっておられる。他には、Shakespeare, W. Scott, C. Brontë, E. Brontë, W. M. Thackeray, A. Trollope, Galsworthy, E. A. Poe の作品のフランス語訳およびその書での緒言、注釈、書誌等に、やはり単独または複数で関与されているし、R. Kipling のマザー・グース *Wee Willie Winkie* の選集 (selected stories) のフランス語訳があり、*Histoire de la littérature anglaise: de Victoria à Elisabeth II* (1970), *George Orwell* (1797; フランス語・編著) も

ある。

以上の作家・作品はわが国では馴染み深いといえるが、以下に取り上げる対象はわが国ではほとんど未開拓分野だろう。アイルランド作家カールトンに関する書 *William Carleton 1794-1869* (1973)、イギリスの神学者で犯罪作家 (crime writer) ノクスに関する書 *Ronald Knox (1888-1957)*、イギリスの小説家・作曲家・批評家のバージェスに関する書 *Anthony Burgess* (1980; 共著) (以上3書、フランス語) がある。そしてイギリスの芸術家・諧謔家・旅行家リア (Edward Lear; 1812-88) のナンセンス詩 (nonsense poems) のフランス語訳と年表、緒言、書誌をつけた *Poems sans sens* (1974)、アメリカ現代作家でジャーナリストのシャコーチス (Bob Shacochis, 1951-) の最初の物語集で、アメリカ著作賞 (the American Book Award) 受賞の *Easy in the Islands* (1985) のフランス語訳 *Au bonheur des îles*、同作家の *Swimming in the Volcano* (1993) のフランス語訳 *Sur les eaux du volcan*、さらにアメリカ在住の科学ジャーナリスト、バリー・ワース (Bally Werth) の *The Billion-Dollar Molecule: one company's quest for the perfect drug* (1994) のフランス語訳 *Vertex* (2000; 共訳) 等がある。

67歳のとき、小説 *Madame Homais* (1988) を創作されているし、フランス作家バルザックにかかわる書

Balzac dans le monode (1950; 共著) もある。

最近の業績では、2003年12月、ソルボンヌ大学で開催のコンラッドの作品 *Lord Jim* (1900) の研究会に参加され、議事録 *Lord Jim Day at the Sorbonne* (2004) を編著の形で刊行されている。挙げるべき業績はまだあるかもしれないが、ここまで記すだけで先生の偉業は十分に感得されるだろう。

ちなみに、先生はフランス・ユグノーの偉大なご一族、モノ家の末裔でいらっしゃる。ぼくはこの情報の糸口を、フランスから帰国後に、下記1のサイトで得た。ノーベル生理学・医学賞の受賞者ジャック・モノ (Jacques Lucien Monod; 1910-76) のサイトで、そこに 'a Huguenot' の語がある。下記2以下のサイトは、'monod' などをキー・ワードにサーチしているうちに達した。ただ、4のサイトは、2004年当時、故人と現存者とが同レベルで記録されていて扱いにくかったが、今日では、現存者は単に 'privacy' とだけ記されているから心置きなく紹介できる。

1 http://nobelprize.org/nobel_prizes/medicine/laureates/1965/monod-bio.html

2 http://en.wikipedia.org/wiki/Th%C3%A9odore_Monod

3 <http://huguenots-france.org/english/pastors/pag48.htm>

4 <http://mapage.noos.fr/genealogie-monod/www/mono0031.html>

Dickens Glossary

清水 英秋

Hideaki SHIMIZU



5年前に都立高校を退職して、現在65歳です。2年前にディケンズを読み始めて20冊読み終わったところでディケンズ・フェローシップのお仲間に入れてもらいました。ディケンズアンとしては1番の若造です。孤独だとばかり思っていたディケンズ修行が入会と同時に日本全国に仲間が増えたと思うと、目がくらむ程の興奮を覚えています。

今年の冬は4回八ヶ岳に挑戦しました。しかし強風や大雪や大雨で1度も頂上に立つ事が出来ませんでした。諦めて引き返す事も老人の特権です。これを「老人力」がついたと言うのだそうです。こんな事がありました。急な山道を登り切り、途中の山小屋で休憩して、歩き始めると両足の太股がつり始めたのです。深雪の上に正座して筋肉を延ばし、また歩き始めます。10分もするとまた正座です。こんな事を繰り返しながら考えました。「ディケンズと山は両立しないな。」実はこの頃15冊目の『アメリカ紀行』、16冊目の『マーティン・チャズルウィット』、17冊目の『ドンビー父子』を必死に読んでいて、デ

ィケンズ読書にはずみがついていたのです。従って日課の長距離散歩もさぼりがちだったのです。この冬から右手指がしびれ、上腕部の痛みが加わり、さらに首が寝違えたように痛くなりました。暖かくなっても治りません。しかたなく大嫌いな病院に行きました。レントゲン撮って、「頸椎の骨と骨の間の軟骨がすり減って、神経を刺激している」との診断でした。原因が分かって一安心でした。「1日中固まったようになって、首を一定の角度に曲げているからよ」とは女房の言。僕は「ディケンズ首」と命名しました。この首と仲良く付き合って行こうと思っています。

僕は自分を「辞書引き職人」と呼んでいます。ディケンズ修行を始める直前にアメリカの19世紀作家メルヴィル (Herman Melville) の『モウビー・ディック』 (*Moby Dick*; 1851) を読んでいました。大学の夏休みの宿題で、最後まで読み通せないで、いいかげんなレポートを提出したのを思い出したからです。鯨学の蘊蓄に辟易しながらも、どうにか体力だけで読み通しました。「辞書引き職人」

と思えばなんでもないと自分に言い聞かせながら…おかげで多数の海洋語が頭に残りました。‘oakum’ (まいはだ：古い麻縄をほぐしたもの、甲板などの隙間に詰めて漏水を防ぐ) もその1つです。その前に読んだデフォー (Daniel Defoe) の『ロビンソン・クルーソー』 (Robinson Crusoe; 1719) やスウィフト (Jonathan Swift) の『ガリヴァー旅行記』 (Gulliver's Travels; 1726) にも出てきて頭に残ったものです。それが『オリヴァー・トゥイスト』の救貧院 (workhouse) の仕事場の場面で出てきました。沢山の少年たちが ‘oakum’ 作りをしている。教区吏 (beadle) のバンブル氏 (Mr Bumble) がオリヴァーを連れてくる。オリヴァーが怪訝な顔をする。バンブル氏が ‘oakum’ の説明をする。ロマン・ポランスキーの映画でもこの場面は重要に扱われていました。もう1つ。ピークオッド号が航海に出てしばらく経った後でようやくエイハブ船長が船室から姿を現し、全乗組員を甲板に集めて「この航海の目的は白鯨を倒すことだけだ。その外の事には一切目もくれない」と言う、それに皆が同意し宣誓する。これが ‘affidavit’ (宣誓供述書) でした。この単語を『我らが共通の友』のライダーフッド (Riderhood) は ‘Alfred David’ と発音する事など思わず笑ってしまいました。もう1つ「辞書引き職人」の面目躍如の話。『大いなる

遺産』の最初の場面。主人公のピップが沼沢地の古びた教会の墓地で、脱獄囚から ‘file’ (やすり) と ‘wittles’ を持って来いと言われる。‘wittles’ はいくら辞書を引いても出てこない。下層民は ‘v’ を ‘w’ と発音しているので ‘vittle’ で引いても出てこない。仕方なく先に読み進むと、ピップは「やすり」と「食物」を家から持ち出す。僕は「あ!」と思いました。‘victual’ (食物) を思い出したからです。しかもこの単語は [vitl] と発音するので。僕の得意満面の顔を、皆さん、想像して下さい。ちなみにこの *GE* は僕の5冊目で、ディケンズ修行ではまだ駆け出しの頃の事でした。

「辞書引き職人」の話をもうすこし続けます。9冊目の『ピクウィック・ペーパーズ』を読み終わったところで僕ははたと考えました。同じ単語を10回も20回も引いているのです。それまでは老人の楽しみの読書だからこれでいいや、と思っていました。しかし余りにも効率が悪いのです。同じ単語を20回以上もチェックして、これからもまだ引き続けるだろうと思うと、悔しいやら情けないやらの気持ちが増大してきました。そこで一大決心をしました。10冊目の『ニコラス・ニクルビー』と11冊目の『ボズのスケッチ集』で単語ノート作りをして、僕自身の為の ‘Dickens glossary’ を作ろうと。アルファベットの項目毎にノート2ページづつ使

って単語の採集を始めたのです。これが大きな間違いでした。実際には2ページに収まらない項目が多数出てきました。余白を詰めて書き込んでも大幅にはみでてしまいます。そこでそれらは後ろへ後ろへと送りました。どんどん未整理状態が増大していくのです。心の中にまで混乱が沸いてきました。今年の夏の事です。

梅雨明けを待って北アルプス縦走 (立山-五色が原-越中沢岳-薬師岳) に妻を連れて出掛けました。下界は毎日35度を超す真夏日というのが嘘のようで、涼しい空気のなかを快適に歩きました。毎日快晴で北アルプスの全山が見渡せました。この連峰の全てに僕の汗と足跡が何重にも残っていると思うと、感慨はひとしおでした。

ここで信じられないような話になります。山小屋の夜は早いのです。夕飯を食べて6時すぎには寝入ってしまいます。すると決まって10時過ぎに目が覚めます。上着を着て外に出てタバコに火をつけ満天の星を眺めます。布団に戻ってもなかなか寝つけません。うつらうつらという中で毎日同じ夢を見ました。僕のディケンズ・ノートの中の未整理の単語群が僕を襲って来るのです。その恐ろしい勢いに僕はたじたとって叫び出しそうになるところで目が覚めます。隣の妻の寝顔を窺って、寝言までは言っていなかったなと安心して、

またうつらうつらすると、また同じ夢に悩まされます。1日目と2日目はバラバラの単語攻撃でした。3日目は単語たちが2語・3語と連結し始めました。4日目はついに文らしき物になりました。どうにかして意味を読み取ろうと苦悩していると、別の自分が「日本語に訳すな、英語のまま読み進め」などと叫ぶのです。あまりにも生々しい悪夢なので妻には話せませんでした。後日学校の図書室の司書さんに話したところ、若い司書は「まあ、受験生みたい!」とケラケラと笑いました。定時制の50代の司書は「先生のディケンズ読書もいよいよ壁越えにさしかかっているのですよ。それを越えれば広い地平が見えるようになりますよ」と言ってくれました。

『ボズのスケッチ集』を読み終わったところで、ABCの項目の中をさらにアルファベット順に並べ替える作業を始めました。手作業なので膨大な時間がかかりました。B5の用紙で58枚、別項目で「植物名」と「動物名」を加えて60枚。表紙に ‘DICKENS GLOSSARY’ と拡大文字で打ち込んだ時には、飛び上がるような喜びが沸き上がりました。これが第1集です。続いて16冊目の『マーティン・チャズルウィット』と17冊目の『ドンビー父子』から単語を採集して第2次 glossary を作り上げました。第1集の落穂拾いなので作

業は淡々と進み、「悪夢」を見る事はありませんでした。今度は別項目の「馬車の種類」と「ゲームの種類」を加えても18ページに収まりました。今は第3集の別項目で「仕事の種類」を集めています。

今2回目読みを始めています。勿論今度は発行年代順です。『ボズのスケッチ集』を読み始めてびっくりしました。最初の30ページで1回目にアンダーラインを引いた単語が180個、そのうち、もうすでに辞書を引かなくても頭のなかに完全に入っている単語が126個でした。なんと70パーセントの定着率です。1度も覚える努力をしたことはありません。淡々と glossary にチェックをしていただけなのです。おい、やるじゃないか、65歳の化石頭！しかしそれでもなお高校生や大学生の頃の柔軟な頭脳が羨ましくてなりません。若い頃もっと徹底して読み込んでいたらなあと悔やむことしきりです。今都立高校（農産高校）の嘱託で英語を教えています。ディケンズの話をして誰も興味を示してくれません。しかし農作物の育て方、草花の種類、肥料の種類などには羨ましい程の知識を持っていますし、自分達の作った味噌やジャムやパンの味は日本一だという自信を持っています。そこで僕は教室で静かに言います。「君達の専門は農業だ。誰にも負けない農業のスペシャリストになれ。僕は英語の

スペシャリストになる。It's never too late to learn!」

最近現代語にも通じておく必要を感じて英字新聞を読み始めました。New York Times の社説と Asahi Shimbun の社説と署名入り論文記事を幾つか毎日読んでいます。そこで気がついた事があります。‘albeit’（たとえ～でも、～にもかかわらず）という単語は僕がディケンズを読み始めて初めて出会った単語で、辞書にも（文語）とあり喜んで glossary に採録した単語ですが、現代語でも盛んに使っているのです。ちょっとショックでした。しかしそういう幾つかの例外を除けば、僕の glossary と現代語とはダブリは少なく別範疇にあります。ディケンズに多用されている‘quit’（〔古〕＜人・場所を＞去る、立ち退く）、‘repair’（〔文語〕～へ行く、おもむく（to））、‘suffer . . . to’（〔文語〕＜人に＞することを許す、＜黙って人に＞～させる）、‘give . . . to’（＜人に＞～させる）などは現代語とは無縁のようです。僕の glossary の中で静かに眠っていなさい。

僕の高校教師現役時代で大学（東京外語大）の延長で勉強出来たのは、最初の数年だけでした。あとは次第に多忙化の波に呑み込まれ、担任・校務分掌・部活指導（女子バレー）などで土日・祭日もなくなりました。長期休業中も練習試合で連戦の遠征です。好きな山にも行けなくなりました。

勿論自分の勉強をする時間的余裕も精神的余裕もありませんでした。なんとか定年退職まで頑張ろうと努力したものの、その先は全く見えませんでした。

退職して、膨大な時間とストレスのない精神的余裕が僕の目の前にありました。「よし、学生に戻ろう！」と僕は心に決めました。目を本棚に向けると40年間静かに眠っていた本達が僕を呼んでいました。僕はその1冊1冊を手にとって、いとおしむようにページをめくりました。紙質疲労で1枚1枚はがれていくような状態です。丁寧に丁寧に辞書を引いてやり、読み進みました。主にアメリカ文学です。（僕は本来アメリカ文学専攻です）50数冊読み終わったところで、本棚の『我が共通の友』（上・中・下巻、間二郎訳、ちくま文庫）が目に入りました。間二郎先生（創価大学名誉教授）が寄贈して

くれたものです。間先生は僕の高校の恩師です。授業中にディケンズの話をよくしてくれました。僕は胸をドキドキさせながら丸善に飛んで行きました。『我が共通の友』を読み終わったところで、先生に「読書報告」を送りました。先生から「OMFを読んでもらえた事を嬉しく思います。ディケンズとともに訳者として感謝します。全巻（まして原文で）読み通す人は、手に入れた人のせいぜい10分の1くらいかと思っていますから。」との返事が来て、小躍りしました。それからは1冊読み終わる毎に「読書報告」を送っています。これが僕のディケンズ修行の大きな励みになりました。

研究者でもない僕をディケンズ・フェロウシップの会員に快く受け入れてくれた日本支部の皆様にもとても感謝しています。ありがとうございました。

ディケンズの作品におけるイジメの問題

Bullying in the Works of Dickens

松岡 光治

Mitsuharu MATSUOKA



「超国家主義の論理と心理」(1946)の中で丸山眞男は、価値と規範の体系が天皇 — 精神的権威と政治的権力の専有者で究極的価値たる天皇 — への相対的な近接の意識に基づいて成立していた戦時下の日本では、自分に対する主体的な責任がないために、上から受けた抑圧を下へ譲り渡すことによって精神の均衡が保たれていたと述べている。国と時代は異なるが、このような「抑圧の移譲による精神的均衡の保持」¹は、女王を頂点としたピラミッド型社会の厳格な階級制度と家父長制度に支配される一方で、ラマルクやダーウィンの自然淘汰による進化学説によって社会制度としてのキリスト教の基盤が脆弱化していたヴィクトリア朝でも、強者による弱者への様々な形のイジメを通して現れている。ヴィクトリア朝の作家の中でイジメの場面をもっとも数多く、もっとも興味深く描いたのは恐らくディケンズであろう。以下、彼の作品に焦点を絞ってイジメの問題を考察してみたい。

1 階級的なイジメ

クリークル校長の無知と鞭に象徴されるセイレム・ハウスでは、校長が病気で家に引きこもった日に、さながら「千頭もの犬からイジメを受ける牛か熊のように」(DC, 7), メル先生が生徒たちの喧騒に悩まされる。このイジメを彼らにけしかけたのは、校長でさえ手出しする勇気がない富裕階級の息子、スティアフォースである。陸軍士官学校で先輩から13分の逆さ吊りという焼きを入れられたバグストック少佐は、イジメに耐え忍ぶことを「タフ」と「ズル」の美学に昇華した奇骨のある御仁だが、そんな少佐でさえ虚弱な息子をパブリック・スクールにやる決心がつかないドンビー氏に理解を示している(DS, 10)。つまり、どんな種類の学校であれ、イジメの実情については大同小異だったのである。ましてや、全寮制の寄宿学校では必然的に心理的距離が狭められるので、弱者はボス(ひと昔の言葉を使えば、番長)とその腰巾着たちへの隷従を強いられる傾向が強い。当時のパブ

リック・スクールには下級生が上級生の雑用をする暗黙の制度(fagging)があって、それがイジメの温床となっていた。パブリック・スクールを戯画化した低級な寄宿学校、セイレム・ハウスにも類似した内規がある。7シリングを献上できるデイヴィッドはスティアフォースの庇護を受け、いつも校長に鞭で打たれているトラドルズは、メル先生のために泣いたという理由で彼のイジメを受ける。聖職者養成を目的とした中世のグラマー・スクールから発展したパブリック・スクールでは、18世紀後半になると自分の屋敷で教育を受けていた貴族階級の子弟が増え始め、その結果として暴力、飲酒、喫煙、賭博などの横行でモラルが低下するようになった。理由の一つとしては、そうした子弟たちが紳士階級でもない教師の権威を歯牙にもかけず、我が物顔に振舞っていたことが挙げられる。²下級生たちを煽動してメル先生をいびらせたスティアフォースが、卑怯者と非難された時に、私設救貧院(alms-house)にいる先生の母親に言及して口答えをした(挿絵参照)



背景にも、そうした階級意識を反映した事情がありそうだ。

ディケンズは、大いなる遺産相続の見込みによって一躍お大尽になったピップの金力に対し、「弱者イジメのパンブルチュック(bullying old Pumblechook)」(GE, 9)が媚へつらう時の豹変ぶりを通して、自己保存のために強大なものに従う〈事大主義〉という人間の本能を喜劇的に描いている。にわか成金のピップと青猪亭で暖炉を背にして押し合っているとき、ドラムルは何気なく沼沢地や鍛冶屋に言及している(43)。これは成り上がりの青年紳士に対する「准男爵の次の次の世継ぎ」(23)による意図的なイジメである。また、父親が醸造業で財をなした中産階級のミス・ハヴィシャムの養女、エステラはピップを「働いている下品な子」(8)と呼んで軽蔑しているが、この階級的なイジメに対しては、彼女が(貴族ではないものの)階級が上のドラムルと結婚し、ドメスティック・ヴァイオレンスを受けることで仕返しをなされる。その意味で、ピップにとってはドラムルもまた、実姉の虐待に対して代理で復讐してくれたオーリックと同じように、自分の分身なのである。

訴訟依頼のない怠惰な法廷弁護士レイバーンは、三角関係による嫉妬に駆られて自分を追跡してくるヘッドストーンに対し、逆に彼をロンドン中さんざん引き回して楽しんでいる

(OMF, 3: 10). この真綿で首を締めるようなイジメは、世紀末の退廃的な紳士の先駆けとなる男にとって、セルフメイド・マンの学校教師に対する単なる退屈しのぎにすぎないのだろうか。これは、レイバーンが厳格な父権社会の中で結婚問題を除いて人生のほとんどを M. R. F. (我が尊敬せし父上) に牛耳られている点を考えると、退嬰的な紳士が世代的なイジメを階級的なイジメへ無意識的にすり替えた抑圧の移譲のように思えてならない。

以上の3つの例は個人の個人に対する階級的なイジメである。逆説めいた言い方をすれば、ディケンズが歴史小説で描いた階級の階級に対するイジメもまた個人的レヴェルで考える必要がある。フランスの旧制度において、特権階級が第三身分の平民に極貧の生活を強いた行為は、確かに集団的なイジメだと言える。貴族に対する平民の階級闘争となったフランス革命では、カトリックの聖職者が特権階級に属していたためにキリスト教も弾圧され、「目には目を」の法理を超えた何倍(時には何十倍)もの報復がなされた。「飢えた連中は草を食えばよい」(TTC, 2: 22)と言った財務長官フーロンが、サントアヌの民衆から口に草を詰め込まただけでなく、リンチに加えて街灯を利用した絞首刑までも受ける(挿絵参照)のは、その典型例だと言える。フランス革命のような



〈下克上〉では、それまで潜在化していた恨みや悪意が解き放たれ、個人の責任が集団の中に埋没されて消滅してしまう。実際に『二都物語』では、民衆のすべてが「自由、平等、博愛」をスローガンとして掲げていたわけではなく、多くは迫害を受けた返報として貴族を処刑していたように描写されている。この小説におけるフランス革命が、革命を体現するドファルジュ夫人の長年の宿怨を晴らすための個人的な報復行為の様相を帯びて見えるのは、そのためである。『バーナビー・ラッジ』でも、娘を見つめた罰として親方からイジメを受けた徒弟(BR, 8)が、のちにタパーティット隊長の副官となり、カトリックに対するプロテスタントの集団的なイジメと言えるゴードン騒乱で暴れている。革命や暴動は、上を下への馬鹿騒ぎの中で狼藉を働いた責任を藁人形に転嫁して最後に火刑に処した昔のカーニヴァルのように、加担者の多くにとっては個人的な意趣返しや犯罪行為が不問に付される恰好の憂さ晴らしの場なのである。

同じ集団的なイジメであっても暴力を伴わない場合もある。それは弱い立場の個人に対する集団の〈シカト〉という(日本の学校ではお馴染みの)陰湿なイジメである。労働組合に入るのを拒んだブラックプールは、煽動者スラックブリッジの口車に乗った仲間の労働者たちから村八分というイジメを受ける。ブラックプールは「これから先、追い詰められたって、見放されたって、シカトされたって不服はねえ」(HT, 2: 4)と言うが、それは彼が貧乏ゆえに酒びたりの妻と離婚できず、彼女が死んでレイチェルと一緒にいるまでは、組合に加入せずに働き続けなければならないからであろう。特定の非組合員が組合員たちに爪弾きされるのはもちろん階級的なイジメではない。しかし、このような泥沼状態(muddle)にブラックプールを陥らせた張本人は、労働者たちを「計算の数字や機械」(2: 5)のようにしか考えない工場主バウンダビーである。それゆえ、これはやはりプロレタリアートに対するブルジョアジーの階級的なイジメだと言わねばならない。貧者を救うために訪れた紳士たちの寄付の依頼に目もくれないスクールジのように、バウンダビーは貧乏なブラックプールが離婚の相談を持ちかけても横を向いてしまう。バウンダビーは、個人の自由な利益追求活動に対する干渉を排除する自由放任主義の信奉者であるだけで

なく、その主義を悪用して労働者たちの貧困や苦悩に対する放置までも正当化しているように思える。労働者たちの貧苦に対する資本家の無視という階級的なイジメの問題を解決するためにディケンズが唱道したのは、近代的な階級制度の中でとかく忘れられがちな父親的温情主義、カザミアンの言葉を借りれば「キリスト教的干渉主義(Christian interventionism)」³である。ここで確実に言えるのは、いかなる階級のイジメであれ、強者の側に〈想像力〉が枯渇しているかぎり、社会的弱者の悲惨な状況に介入することも、その心中を理解することもできず、問題は永久に解決されないということだ。ディケンズは抑圧の移譲がはびこる社会で芸術や娯楽の価値を訴え続けたが、その理由は想像力に内在する無限の可能性にあったのである。⁴

2 なぐるか、ひるむか

日本の古きよき時代における学校での生徒のイジメは、先生の権威が絶大だったこともあってか、その陰湿さや執拗さは今ほどではなく、なんとか我慢できたような気がする。同じ高温でも多湿の東アジアよりは乾燥したアメリカ西海岸の方が我慢しやすいのと同じ論理であろうか。カラッとした許容範囲のイジメであれば、ほほえましく思える情景がディケンズ文学の中にも幾つか見られ

る。例えば、無商旅人は学校時代に実家から祝いの詰め籠が送られてくる自分の誕生日の数日前に、「目覚めた良心をなだめる正義の行為として、懲罰のために証人の前で瘤を作ってもらいたいと言ったイジメっ子のグロブソン」(UT, 20)の気高い行為を懐かしく思い出している。『クリスマス・ストーリーズ』の「学校生徒の物語」では、チーズマン爺さんと呼ばれる生徒が副教員になったせいで裏切り者としてイジメに遭うが、そのために彼が遺産を相続して姿を消した時も自殺の噂が流れる。しかし、チーズマン先生は遺産相続後も学校と良好な関係を持ち続け、過去のイジメを水に流して生徒たちに大盤ぶるまいをしてくれる。

このような生徒同士のイジメはともかく、教師の生徒に対するイジメは（特に、その教師が無知蒙昧な独裁者の場合は）、ディケンズの微笑が憤怒の形相に変わる。スクウィアーズの学校に付けられた名前(Dotheboys Hall)以上に、教師の生徒に対する暴力的なイジメを鮮明にイメージさせるものはない。田辺洋子氏の訳によれば「ショーネンジゴク学院」⁵だが、スクウィアーズが手当たり次第に生徒を鞭打っている(NN, 8)ので、「聖トベンダ学園」という訳でもよいだろう。一方、「制御できない欲望を満たすにも似た少年に対する鞭打ち」(DC, 7)に快楽を見出すセイレム・ハウス—こちらは魔女狩

りを連想させるので「聖トガリ学院」—のクリーク校長の嗜虐的性向は、その声が部下のタンゲイを拡声器として使わねばならないほど小さいので、むしろ大声のスクウィアーズの場合よりも無気味で恐ろしい。

スクウィアーズにとってイジメの道具である鞭は「力、優越、勝利」⁶の象徴である。また、鞭はファリック・シンボルであるから、ニコラスがスクウィアーズを打ちのめすために鞭を奪い取ったこと(挿絵参照)は、後者が去勢されて臆病者になる(正確には、臆病者に戻る)ことを意味する。「頑丈で、太い手」のガージャリー夫人がピップを「手塩にかけて」育てるために使う「くすぐり棒(Tickler)」(GE, 2)もまた、先づきを蠟で固めた懲罰用の鞭である。ドメスティック・ヴァイオレンスが男女逆転の形で横行する村の鍛冶屋では、ガージャリー夫人の鞭はもちろん夫のジョーを去勢して奪い取った〈男



根〉の象徴だ。一方、リテラシーが欠如した無知なジョーにとって、彼が話をする時に握る暖炉の「火かき棒」(12)は、音声に意味を与えるロゴスだと言えよう。しかし、彼に反抗の兆候が少しでも見えると、たちまちガージャリー夫人は彼に飛びかかり、火かき棒を奪い取って隠してしまう。この棒が何のシンボルかは瞭然として明らかだ。このような彼女のイジメはクリーク校長と同じ加虐性愛の要素に満ちている。彼女がオーリックの暴行後に彼に対して従順な態度を見せたことについては、サディズムとマゾヒズムは表裏一体をなすという意見がある。⁷しかし、彼女の仕草には「厳しい先生に対する子供の態度に浸透しているような、卑下して相手の機嫌を取るような態度」(16)が見られたと語り手ピップは述べている。そうであれば、エステラとドラムルの結婚生活に関する弁護士ジャガーズの意見に従い、すべての人間関係は「なぐるか、ひるむか(either beats or cringes)」(48)と考えるべきだろう。

弁護士について言えば、ピクウィック対バーデルの結婚不履行事件を担当したドッドソンとフォッグをはじめ、ディケンズが描く一連の弁護士には、活殺自在の権を握っている依頼人たちを恫喝し、金を巻き上げる(PP, 20)という共通点がある。刑事専門のジャガーズは「ウェミックに金を返させるぞ」(GE, 20)と言っ



て依頼人たちを威嚇している(挿絵参照)が、彼のイジメの対象は人間だけではない。昼食にサンドイッチを食べる時も、それは「サンドイッチそのものに対するイジメ」のようにピップには見える。『大いなる遺産』は「手」のイメージが支配的な小説であるが、イジメの問題も同じイメージによって提示される。持ち前の演技力によって村の居酒屋を支配していたウォプスルを「弱者イジメのような反対尋問形式で」(18)顔色なからしめる時も、「弱者イジメをするような、うさん臭そうな態度で」ピップの徒弟契約をジョーから解除してやる時も、ジャガーズは人差し指を相手に投げかける。殺人を犯した家政婦モリーの強靱な手首を押さえつけるジャガーズの人差し指(26)は、相手に対する支配力の象徴である。そのようなジャガーズも、権力と金力に屈服しないジョーから「お前さんがオレを牛か熊みてえにイジメに來たんじゃったら、かかって來やがれ！」(18)と威喝されて、尻込みしてしまう。「なぐるか、ひるむか」

というジャガーズの直截簡明な人間観が説得力を持っているのは、このように彼自身が自分の行動で実証しているからである。

慈善学校に通ったクレイボールにとって、救貧院育ちのオリヴァーの髪を引っ張ったり、耳をつねったりするイジメは、空腹のせいで立腹している時の腹いせとなる無邪気な遊びにすぎない。そうした肉体的なイジメは教区吏のバンブルに鍛えられたオリヴァーには我慢の許容範囲だが、母親の悪口という精神的なイジメは彼の堪忍袋の緒を切ってしまう。オリヴァーがクレイボールを床の上に殴り倒し、「今や彼の足元に這いつくばった臆病な弱い者イジメ」(OT, 6)を見下ろしている姿から言えるのは、彼は決して蒲柳の質に生まれたわけではなく、実は心身ともに強健な少年だということだ。確かにオリヴァーは主人公としてデイヴィッドやピップのような奥行きに欠けるが、それは彼がイジメ、暴力、犯罪にあふれた小説で悪の諸相を際立たせる〈触媒〉の役割しか与えられていないからではなかろうか。「なぐるか、ひるむか」の人間関係は、オリヴァーとクレイボールの例で明らかのように、ディケンズの勸善懲悪の思想に従って反転することが多い。彼の信念によれば、弱い者イジメとは自分の臆病さを隠蔽するために虚勢を張って相手を脅すことなのである。

3 臆病者の弱い者イジメ

ディケンズの作品における弱い者イジメの横綱として真っ先に思い浮かぶのはバンブルであろう。だが、その露払いとして『ボズのスケッチ集』には「気むずかしく、獣のようで、怒りっぽい、目下の者に威張り散らし、目上の者にへいこらす小粒な暴君の立派な見本」(SB, “Our Parish” 1)として、一人の救貧院長が登場する。この露払いが「教区吏の威光と権威に嫉妬している」点から判断すると、教区吏のバンブルが救貧院の婦長だったコーニー夫人と結婚して救貧院長になったということは、地位の格下げを意味する。従って、結婚後のバンブルが救貧院の連中の前で女房に打^{ちようちやく}擲されて面目を失い、「堂々たる教区吏の高みから完全に尻に敷かれた恐妻亭主のどん底へ転落してしまった」(OT, 36)のも、当然の報いだと言わねばなるまい。

バンブルの場合、その役職の権威を高めているのは彼自身の威張り散らし(すなわち脅し)で、これがディケンズの作品で数多く描かれる弱い者イジメの最大の特徴となっている。しかし、ほとんどの弱い者イジメには、“A bully is always a coward.”という英語の諺が当てはまる。これはエッジワースの『オーモンド』(1817)の第24章でマクルール夫人について最初に言及された諺だが、デ

イケンズがバンブルについて「彼は弱い者イジメが大好きで、ちょっとした残虐行為をして途方もなく楽しんでいたので、(言うまでもなく)臆病者だった」(OT, 36)と書いたことで、人口に膾炙するようになったのではあるまいか。

ディケンズの作品における多くのイジメの実例から帰納して言えば、弱い者イジメをする目的は個人的な利益(特に金もうけ)であり、その際に一番必要となるのは威張り散らすための大声である。ニューヨーク港に上陸したマーティンが、ダイヴァー大佐に紹介されたポーキンズ少佐の下宿屋で確信したことは、金もうけ第一主義のアメリカ人にとって、「もっとも大きな声で怒鳴り立て、もっとも礼儀を顧慮しない人物が最高の愛国者」であり、「直接的な個人攻撃で怒鳴りつけ、威張り散らし、相手を脅すのが愛国的行為だ」(MC, 16)という点であった。しかし、アメリカ人の多くがイギリス人と同じ一喝するように大きな声で自分の意見を一方的にしゃべり、相手に話をさせない—アングロ・サクソン人の末裔であることを考えれば、マーティン青年のアメリカ人に対する蔑視的な印象(ということはディケンズの印象)は、目糞が鼻糞を笑う類と言わざるを得ない。

ディケンズは「昔の無知と貧困をいつも吹聴している」バウンダビーを「卑下自慢の威張り屋 (the Bully of

humility)」(HT, 1: 4)として嘲罵している。同じように卑下を自己防衛の戦略として使うヒープの小声とは違い、バウンダビーの過去の虚構を支えているのは、その「真鍮製のメガホンのような大声」である。実際に、奥様の浮気で青菜に塩のバウンダビーは、同情的なスパーシット夫人に元気を出してと言われ、雷のごとき蛮声で「従業員の雑魚どもを怒鳴り」(2: 11)つけ、元気なところを見せ付けている。バウンダビーが現在の地位を輝かせるために自分の卑しさを大声で吹聴するのに対し、ヒープは将来の地位を確実にすべく自分の卑しさを小声で相手に告げる。共通するのは、どちらの場合も「卑下も自慢のうち」という点だ。「慇懃で謙虚だが、とても狡猾で、こそこそした」(BR, 35)態度のガッシュフォードがゴードン卿の信頼を得ながら彼を食い物にしたように、ヒープもまた同じ卑下の戦略でウィックフィールドとその娘に対するヒープのイジメの特質は、声高なバウンダビーには見られない陰湿さにある。ヒープは最後にミコーバーによって犯罪を暴かれ、悔し紛れに「この弱い者イジメが!」(DC, 52)と罵倒するが、彼の陰湿なイジメが朗々とした声の主によってピリオドを打たれた(挿絵参照)ところに、ディケンズの鮮やかな手並みを感じずにはおれない。

ボールドウィック大尉は、狩猟パ



ーティーで冷たいパンチを飲みすぎたピクウィック氏が自分の地所で眠り込んでいるのを見て、「あんな奴に威張らせてたまるか！」(PP, 19) と叫び、彼を手押し車で獣の囲い場に運ばせて恥をかかせている。彼のように威張り散らす人間は自分が同じことをされるのを極端に嫌うようだ。ブランウンロー氏の反論を威嚇と思い、「治安判事を脅すとは何て生意気な！」(OT, 11) と怒ったファンク判事殿の場合も同断である。無商旅人は街にあふれる無法者について「弱い者イジメの背後に臆病者が潜んでいる」(UT, 30) と述べ、悪漢を野放しにしている治安判事を批判している。無商旅人の視点から見れば、街の無法者と大差ないアル中のファンク判事殿も酒で臆病神を追い払っているとしか思えない。なぜ、彼らは他人に威張り散らされることに対して、かくも敏感なのか。おそらく、食うか食われるかの弱肉強食・適者生存・自然淘汰の動物社会のように、人間社会もまた優勝劣敗の原理によって弱者が強者の餌食となる社会だということを本能的に悟っているのだら

う。これはもちろん社会ダーウィニズム的な世界観に対するディケンズの諷刺である。しかし、人間は動物であると同時に社会的な存在であるから、人間社会も弱肉強食型から共生型へ転換すべきだというヒューマニズムの精神は、勝組と負組とを分ける考えが依然として優勢な現代社会を見るに、ヴィクトリア朝当時からほとんど進化していない。どころか、むしろ退化している感がある。

セルフメイド・マンを諧謔化した名前を持つ「頑張り屋」ならぬ「威張り屋」のストライヴァーは、いつも「怒鳴って高飛車に出る」(TTC, 2: 5) 男である。彼が法廷弁護士として前列に出て成功しているのは、同僚として実質的な仕事を引き受けて後列で彼を支えるカートンの存在があるからだ。カートン (Carton) には「標的の白星」という意味がある。それは標的の中心点である黒星 (bull's eye) を囲む白星であり、ストライヴァーを守ってやる彼の立場を適切に示すネーミングだと言える。ストライヴァーは、民衆のために財産も地位も捨ててしまったのに革命の先頭に立とうとしないダーネイの臆病さについて、指をパチンと鳴らしながら非難している。しかし、彼のような張子の虎は（カートンが「山犬」であれば、むしろ眠った「獅子」と呼ぶべきか）、自分自身の臆病さを意識に受け入れることができないので、それを意識下に抑圧し、他者である

ダーネイに投影して非難するしかないのだ。虎の威を借りたキツネのような臆病者による弱い者イジメには、不快や苦痛を伴う認識を投影の形で処理しようとする、いわゆる〈自我の防衛機制〉が働いているのである。

グリーンバー博士の寄宿学校における早期詰め込み教育と同じイジメを自宅で受けているグラッドグラインド家の子供たちが、“that famous cow with the crumpled horn who tossed the dog who worried the cat who killed the rat who ate the malt” (HT, 1: 3) というイジメの報いを歌った童謡、「ジャックの建てた家」を知らないのは皮肉である。「牛が角で犬を投げ上げる」と言えば、囲いの中で雄牛に猛犬をけしかけて噛みつかせる残酷な見世物としての牛イジメ（挿絵参照）が思い浮かぶ。牛イジメ (bullbaiting) は中世時代に貴賤上下の別なく流行し、ヘンリー八世の頃に始まった熊イジメ (bearbaiting) とともに、残虐さゆえにピューリタンたちの反対を何度か受けたが、結局は1835年の「動物虐待法案 (Cruelty to Animals Act)」まで人気を博していた。ちなみに、サ



イクスが虐待している犬の名前、ブルザイ (Bull's-eye) は上で述べたように黒色の「標的の中心点」という意味であるが、もともとは牛イジメで客が「雄牛の目」にお金 — 通例は、この動物の目とほぼ同じ大きさの1クラウン銀貨 — を賭けたことに由来している。⁸

牛イジメや熊イジメに使われる猛



犬よりも恐ろしいのがクウィルプである。彼は猛犬そのものへのイジメを楽しんでいる（挿絵参照）。この小さな男は短い鎖につながれた大きな猛犬に対し、「俺様に噛みつかねえのか？ ずたずたに引き裂かねえのか？ この臆病者め！（中略）貴様は怖がってるんだ、この威張り屋め！ 怖いんだ、それが分かっているんだ、貴様は！」(OCS, 21) と笑いながら叫んでいる。笑っている時のクウィルプは「あえいでいる犬」(3) にたとえられているが、ここでは彼の臆病な性格についての暗示を読み取る必要がある。⁹ どんなに短くても、鎖のおかげでクウィルプと猛犬との間には距離

という安全網が設けられる。しかし、この鎖が切れた瞬間に、猛犬を臆病者と呼んだクウィルプ自身が臆病者に反転することは、どんな読者でも容易に想像できるはずである。

娯楽としての牛イジメや熊イジメは、観客が自分の臆病さを意識せずに済むように、自己と猛犬を同一視して楽しむ集団的なイジメである。ここで問題となるのは、集団的なイジメの対象が猛獣ではなく、人間（特に、いたいけな子供）の場合だ。集団でオリヴァーを追跡する際の「泥棒！ (Stop thief!)」という叫びには魔法にも似た力がある。この声を聞いた街中の商売人は商売道具を、子供はオモチャを放り出し、「みんな疾走しながら喚き、絶叫し、角を曲がる時には通行人を突き倒し、犬を吠え立たせ、鶏を驚かせ、その音を街路に、広場に、路地に響き渡らせる」（挿絵参照）。ディケンズは「人間の心の奥底には何かを追いかけていたいという激しい感情が根づいている」（*OT*, 10）と言い、狩猟民族の流れを汲むアングロ・サクソン人の特質を道破して



いる。群集によるオリヴァーの追跡と「泥棒！」という叫びは、害獣退治や野外スポーツという美名で正当化されるキツネ狩りと「出たぞー！ (View-halloo!)」という叫びを読者に想起させるはずだ。ここでは、キツネ狩りという紳士階級の集団による弱い者イジメが、その舞台を労働者階級へ移すことで、同じような本能的衝動に後押しされ、「泥棒！」という追跡の快楽を伴うサディスティックな娯楽へと変換されているのである。

4 恐喝と脅迫

イジメが相手の公表できない秘密や弱みを握って脅迫するところまで進むと、それは法的に処罰される恐喝 (blackmail) となる。ゴミの山をつついて老ハーモンの遺書を見つけたウェッグはボフィンに恐喝するが、「弱い者イジメをする弁護士」(*OMF*, 4: 3) のような彼の恐喝は臆病さに支えられた虚勢にすぎない。実際、ウェッグはヴィーナスの寝返りによって形勢が不利になると、途端に「脅すような態度に尻込みするような態度が見え始める」(4: 14)。従って、雇ってもらった恩を忘れ、主人の目をかすめて悪事を働いたドブネズミが、法律に照らして投獄される代わりに、汚い「ゴミ集めの馬車 (scavenger's cart)」に投げ込まれたことは、この臆病な弱い者イジメにふさわしい処

罰だと言えよう。

厳格な父から堅苦しい教育を受けたクレナム夫人は自己の抑圧を美德として強調しているが、実際には父の抑圧を移譲してアーサーにカルヴィニズムの情け容赦ない教育を受けただように、その美德は偽善的な彼女が自己正当化のために行なった悪徳の言い換えに他ならない。¹⁰ フランスの悪党リゴーはクレナム夫人の偽善と悪徳を見抜いており、彼女の遺言補足書に関する秘密を握って彼女を恐喝する。似非紳士のリゴーは、女性に慇懃なふりをしながら、実は恐喝というイジメを通して女性への支配力の行使を楽しむ男である。そんなリゴーをアーサーは「弱い者イジメの臆病者」(*LD*, 2:28) と呼び捨てているが、臆病な父から引込み思案な性格を受け継いだ彼が、今まさに窮地に陥っている義理の母を恐喝から救うことができない、その腑甲斐なさの方がむしろ問題であるように思える。リゴーの恐喝はクレナム夫人の家の崩壊によって中途半端なままで終止符を打たれるが、これはむしろアーサーの（特に女性に関する問題で顕著になる）消極的な姿勢を目立たせるだけである。

デドロック家の顧問弁護士タルキングホーンの住所が、ディケンズの盟友で法廷弁護士の資格もあったフォースターと同じリンカーンズ・イン・フィールズ (58 番地) であったことは、つとに知られている。ディ

ケンズがフォースターの様々な助言に感謝していたことは事実だが、余計な助言にむかついたことは何度もあったはずだ。フォースターはディケンズの妻とも仲がよかった。その親密さが原因で二人の間には相当な口論があったし、マクフリーディなどは二人の友情が壊れるのではないかと恐れたほどである。¹¹ 自己満足と尊大さを代名詞とするポドスナップは、彼と同じ名前を持つフォースターがモデルだと言われているが、山崎勉氏が指摘したように、¹² タルキングホーンもまたディケンズのフォースターに対するイジメのために創造された人物として捉えることができる。タルキングホーンは『荒涼館』の校正段階でトーキングホーン (Talkinghorn) に間違えられたが、この弁護士にディケンズは「口うるさい拡声器」のような（または、それに類した否定的な）イメージを持たせ、心の中でフォースターに意趣返しをしていたに相違ない。しかしながら、タルキングホーンは「職業上の相談を受けた時以外は決して話をしない」(*BH*, 2) 沈黙の弁護士である。彼がレディー・デドロックの秘密を突き止めてから開始する謎めいた脅迫は、多弁で能なしのウェッグや饒舌を弄するリゴーと違って寡黙を特徴としているので、そこには底知れない薄気味悪さがある。タルキングホーンの脅迫理由については甲論乙駁しているが、デドロック家の

家名を汚さないという動機は別にして、第一にリゴーやジャガーズへとつながる支配欲、第二にジャスパーへとつながる追跡の快楽が、有力な動機として考えられる。ただし、タルキングホーンは勘定高さが原因でオルタンスに殺害され、その恐喝もリゴーの場合のように未遂で終わってしまう。タルキングホーンが早々に自業自得の罰を受けたために、脅迫の真の動機は特定できなくなってしまった。だが、この特定不可能性は、読者の説得力ある多様な創造的解釈を誘発するかぎり、むしろ歓迎すべきことなのかも知れない。

目による催眠術と囁き声とでローザを呪縛したジャスパーは、邪悪な脅迫の表情を浮かべて狂気じみた愛を告白する際に、「私はあなたを死ぬまで追跡する」(MED, 19)と最後に言っている(挿絵参照)。この脅迫を伴うセクハラ発言は、恐怖におびえる少女ネルに執念深く付きまとうクウィルプのように、追跡によって加虐的な興奮を高めたいというジャスパーの邪悪な欲望の発露に他ならない。しかし、この欲望は現実世界のこと



であり、幻想の世界では逆の傾向を呈示する。ローザの愛を求めているジャスパーにとって、愛とは被虐的な依存の合理化にすぎない。彼は彼女の面影を腕に抱いて幻想の世界に突入し、絞殺強盗団が死と破壊の女神(Kali)を崇拝するように、ローザなる神に隷属することで激しい興奮を伴う被虐性の快楽を享受しているのだ。エドウィンと一緒に散歩するローザをジャスパーがストーカーよろしく密かに追跡した(13)あと、即座にロンドンへ阿片吸飲に行った理由は、まさにそこにあるのだ。

* * * * *

適者生存と自然淘汰こそ進歩であり、弱肉強食こそ自然の摂理であるという考えは、ヴィクトリア朝の繁栄を支えた中産階級の指導原理であった。ラマルクやダーウィンの進化論によってキリスト教が弱体化していた社会の中で、ディケンズは権力と金力に執着する強者による弱い者イジメを様々な作品で執拗に描いている。その主たる目的が何であるかを解く鍵は、秘書ロックスマスを解雇する際に、ボフィンが彼の身分の低さと貧しさを理由にイジメのふりをする場面(OMF, 3: 15)にある。それは、ボフィンが弱い者イジメを演じることでベラの同情心を呼び起こし、金よりは愛に価値を置くべきことを彼女に悟らせる場面(挿絵参照)



である。ディケンズは社会に蔓延する弱い者イジメを活写することによって、強者の非人間的な悪行を指弾すると同時に、読者の涙(特に満都の子女の紅涙)を絞ることで、ベラと同じような反応を求めているはずである。どのディケンズの作品においても、弱い者イジメをした強者は最後に多かれ少なかれ因果応報の罰を受ける。勧善懲悪のエンディングに拘泥するディケンズは批判されることも多いが、そのような批判は差し控えるべきではなからうか。強者が環境の激変によって常に滅びてきたこと、そして抑圧に慣れている弱者が激変した環境の中でもたくましく生き抜いてきたことは、過去の歴史が証明しているからである。

注

- 1 丸山眞男「超国家主義の論理と心理」『現代政治の思想と行動(新装版)』(1964; 未来社, 2006) 25.
- 2 伊村元道『英国パブリック・スクー

ル物語』(丸善ライブラリー, 1993) 71-72.

- 3 Louis Cazamian, *The Social Novel in England 1830-1850*, trans. Martin Fido (London: Routledge, 1973) 211.
- 4 社会の抑圧と想像力の問題については、拙論「ディケンズと芸術 — 社会の抑圧とそのイメージ」『名古屋大学言語文化研究叢書』(第1号, 2002) 103-22を参照のこと.
- 5 田辺洋子訳『ニコラス・ニクルビー(上)』(こびあん書房, 2001) 52.
- 6 Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam: North-Holland, 1974) 498.
- 7 ディケンズの作品における臆病者の弱い者イジメには、ほとんどの場合「なぐるか、ひるむか」の両方が内面化されており、サディズムとマゾヒズムの共存が見られる。例えば、プラスはクウィルプがキットへの復讐として古い船首像を鉄棒で打ち据えている姿を見て、この船首像はクウィルプに似ているので家庭用の肖像として買い求められたのだろうかと思う(OCs, 62)。この場面(挿絵参照)でディケンズがサディズムの権化に見えるクウィルプの自虐的なイジメの嗜好を暗示していることは間違いない。
- 8 井上義昌編『英米故事伝説辞典(増補版)』(富山房, 1980) 108.
- 9 この場面をグレイは役割が逆転した

牛イジメや熊イジメのグロテスクなパロディー版として捉えている。Beryle Gray, "Man and Dog: Text and Illustration in *The Old Curiosity Shop*," *Dickensian* 103.2 (Summer 2007): 127–28.

- 10 ヴィクトリア朝小説における抑圧の問題を分析したキューシッチは、社会的権威を得る戦略として抑圧を受けているように見せかける悪

党の系譜にクレナム夫人を位置づけている。John Kucich, *Repression in Victorian Fiction* (Berkeley: U of California P, 1987) 255.

- 11 Paul Schlicke, *Oxford Reader's Companion to Dickens* (Oxford: Oxford UP, 1999) 246.
- 12 山崎勉『ディケンズのこころ』(英宝社, 2003) 185.



"Is it like Kit—is it his picture, his image, his very self?" cried the dwarf, aiming a shower of blows at the insensible countenance, and covering it with deep dimples.

News and Reports



第101回ディケンズ・フェロウシップ国際大会

The 101st International Dickens Fellowship Conference in Philadelphia
(19–24 July 2007)

西條 隆雄

Report by Takao SAUO

2007年の国際大会は、支部創設(1907)100年を記念してフィラデルフィアで開催された。会場はペンシルヴァニア大学、140名(内フィラデルフィア支部会員33名)が集い、盛りだくさんの講演、朗読、演劇、ツアーを楽しんだ。フィラデルフィアはディケンズが好感を抱いて訪れた都市で、『アメリカ紀行』や朗読旅行

に好意的な印象を残している。また、エルウェル(Frank Elwell)作の「ディケンズとネル」の銅像(1893年のシカゴ万博に出展された後ディケンズ家に寄贈されたが、銅像や墓を作ってはならないとのディケンズの遺言に反するとして返送された)がクラーク公園に建っていて、支部の大きな誇りとなっている。



ディケンズとネルの銅像

今大会には、5月に上梓したばかりの『ディケンズ鑑賞大事典』を携えてゆき、期間中、今年の‘new book’として英語版目次をそえて会場のヒューストン館で展示していただいた。函の装丁美とディケンズの全体像を求めるアプローチは好評を博したが、さまざまな方から「英語版は何時出るのか」との質問が相次いだ。‘buyers’ market’の形成次第だと答えるほかなかったのは残念だが、諸般の事情でこれは止むを得ない。

日本支部からは私一人の参加だったので、以下、大会の様様を詳しく伝えたい。昨年のオランダ大会はやや迫力に欠け参加者の失望を買ったが、今大会は創意と工夫に満ちており、充実感は大きなものがあった。

参加者がほぼ集まった7月19日、夕食後にレセプションが開催された。ワインと贅沢なつまみの数々を前に支部長ヴァインチ女史 (Patricia Vinci)



パトリシア・ヴァインチ支部長

の開会挨拶につづき、州知事のレンデル氏 (Edward Rendell) が歓迎挨拶。そのあと杖をもつ老人が「私はディケンズなんて聞いたこともないし、読んだこともありません。でもいい作家らしいので、永らく読まれることを期待しています」と挨拶をした。どうしてこんな人を招き、しかもお粗末なスピーチをさせたのかと思っていたが、まわりでは皆さん笑っている。そう、本大学の創立者はベン

ジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin), つまり彼の ghost が現わ



シュリッケ博士

れて歓迎挨拶をしたというわけだ。この席でマイケル・スレイター (Michael Slater), ポール・シュリッケ (Paul Schlicke), それにマーガレット・ブラウン女史 (Margaret Brown; 書簡集編者) とともに親しく接することができたし、いろいろな方と旧交を温めることもでき、うれしい幕開けであった。

2日目 (7月20日) からスケジュールは多彩であった。まず9時15分にポール・シュリッケの講演 'Imagination and Brotherly Love' がはじまる。ディケンズ作品の中から多くの 'brotherly love' の例を取りだし、それがうまく実っていない場合は (たとえばリジー (Lizzie) とチャーリー (Charlie) の場合) 'imagination' が欠けていたり他人への思いやりが欠けているからだとして述べる。「想像力」は人間の価値、真の人間生活をもたらすもので、これを育み活性化することが大切であることをディケンズの作品は示している。スクルージの幼年期の回想とか「公爵夫人」のキッ

ト救出場面などは、「想像力」が何を引き出しうるかを如実に示す例だと捉える。

ティー・ブレイクなしですぐさま第2講演がはじまる。この日予定されていたマルコム・アンドルーズ (Malcolm Andrews) が出席できなくなり、急遽ピンチヒッターとして講演を引き受けたのがロバート・パットン (Robert L. Patten) であった。'Where and what is London in *Bleak House*' と題し、この作品における語り手の立場も、ロンドンの年代も、*Bleak House* も特定できない点を詳細なデータとともに論じてゆく。その結果、ディケンズは過去よりも現在の姿を捉えているのではないかと、つまり *Bleak House* は 'social house' であると、著書と同様、実証的に語る興味深い講演であった。

午前中3番目の演目は 'Dickens and Sisterly Love' で、これはトニー・ポイントン (Tony Pointon; 物理学教授) が対話脚本を書き上げ、これを彼と女優のヒーリー (Healey) が朗読するもので、「殺人大将」(UT) にはじまり、TTC, OMF, DC, BH, GE, DS, MC の場面がつぎつぎに披露された。脚本が多すぎて、やや単調になった感はあるが、いい催しである。

お昼から、大学図書館所蔵のディ

ケンズ関係の稀覯本を見せてもらった。しかし *Charles Dickens by Pen and Pencil*, *Fletcher's London* および TTC 初版本の3点のみを展示し、ティーとケーキを用意しているだけで、少々肩透かしを食らった感じだ。

第4講演は、ブルース・クロフォード (Bruce Crawford) によるフィラデルフィア支部の創立に大きな役割を演じた3名の人物 — ジョン・パタースン (John Patterson; 1874生, 判事), ジョン・エッケル (John Eckel; 1885生, 初代支部長), チャールズ・セスラー (Charles Sessler; デイケンズ関係資料400点をエッケルに提供した古書商) — の紹介。つづ



The Liberty Bell

く第5講演は、ジョセフ・ロンドネリ (Joseph Rondnelli) によるディケンズのフィラデルフィア訪問を詳細に説明するもの。1842年の訪問目的と旅程 (Market Street, The Merchant's Exchange, The Athenaeum House, The Eastern State Penitentiary, Girard College, The Waterworks 等) ににつき、1867年に泊まったコンティネンタルホテル (The Continental Hotel)、ペンシルヴァニア大学での朗読公演、およびオペラハウス (The Opera House) がスライドを使って詳しく語られた。このスライドショーで紹介された建築物のほとんどは、翌日ツアーで案内してくれた。有難い企画である。

夕食後には支部創設以来の100年の歩みがスライドを用いて紹介された。講演、コンサート、'Birthday Dinner'、[ディケンズとネル]の銅像への献花式、ドルード殺人事件裁判の上演、*Buzfuz Bulletin*の刊行等が相ついで行なわれ、2004年にはB



オーモンド新会長

C が 'Dickens in America' のロケのために訪れたこと、また2005年に

は荒井良雄氏が歌舞伎役者である佐藤昇、薮英治氏とともに支部を訪れ、すばらしい2時間公演を披露したことを誇らしい歴史の一駒として語った。

第3日(7月21日)。この日は会長のメダル引継式。Gerald Dickensが所用で欠席されたので、前々会長のシュリック博士から新会長オーモンド教授 (Prof. Leonee Ormond; King's College, London) にメダルが渡され、つづいてオーモンド女史の挨拶が行われた。

引継式につづいてAGMが開かれ、コリンズ (Philip Collins; 2007)、モノ (Sylvère Monod; 2006) をはじめとする物故者に対して黙祷をささげたのち、諸報告があった。トニー・ウィリアムズ (Tony Williams) がバーミンガム大学の研究員 (research fellow) となり、ドルー博士 (Dr. John Drew) 主幹のもとでディケンズ雑誌のオンライン化を進めているとのこと。本部では2012年(生誕200年)の行事を計画しているが、できれば各支部の計画についても教えてほしいとのこと。Dickensianのインデックスが完成間近であるとのこと。'Gad's Hill School' 改築をめぐるニュース、および今後の国際大会スケジュールが発表された。ちなみに2008



ネルに扮した子どもたち (銅像前)

年 (Durham, July 30–Aug 4), 2009年 (Cleveland, USA, July 30–Aug 5), 2010年 (Eastbourne, UK), 2011年 (New Zealand), 2012年 (Portsmouth, UK) である。議題では、役員の再選、本部役員が外国で開かれる国際大会に出席する際に£200 (3名分) の支出を承認する件が可決された。

昼からはバスツアー。先ずクラーク公園に行き、ここでネルに扮した子供たちより接茶のもてなしを受けたあと、ミリアム・マーゴリーズ (Miriam Margolyes) による献辞とともにディケンズとネルの銅像に花輪を飾った。次いでウォリックホテル (Warwick Hotel) で昼食 (贅沢な企画だと不思議に思っていたとこ

ろ、ここで支部の月例会が開催されているらしい) をすませ、すぐ近くのローゼンバック博物館 (Rosenback Museum) にてディケンズの稀観資料 ('The O'Thello' の手稿本、書簡, *Not So Bad As We Seem* のポスター) を拝見した。

この夜は晩餐会。どのような席順になるのかとっていると、なんと席は自由、しかも来賓の招待はなく、新会長の挨拶もぬきで、ヴィンチ支部長とシュリック前々会長の挨拶だけという、いたってアメリカ的な民主的晩餐会だった。最後に女王陛下に乾杯をささげ、つづいて 'Immortal Memory of Charles Dickens', 'Dickens Fellowship', そしてフィラデルフィ



グギンズ教授

は、多少戸惑いを覚えたようだ。

4日目(7月22日)。第1講演はロバート・グギンズ(Robert Googins; コネティカット大学法学部教授)の‘Dickens as A Legal Historian’で、私の見る限りこれは大会随一の名講演であった。できれば日本でリピートしてほしいと思ったほどだ。

「どんな会社にも41名までなら‘Doctors’はいるかもしれないが、ディケンズの小説には51名の‘Doctors’がいる」と述べつつ、ディケンズが自身の豊かな法曹界経験を通して法律の人間的、非人間的側面を正確に描き出していること、また1885年までロンドンの法曹界は中心になるところがなく、それゆえにばらばらに裁判が行われていて、そのことがディケンズの小説のあちこちに明白に記されていることを指摘した。民法法廷(Doctors’ Commons), ‘the Prerogative Office’, ‘the Insolvent Debtors’ Court’, ‘police courts’, ‘com-

mon pleas’を扱う‘Guildhall’, ‘the High Court of Chancery(ここは、とりわけ‘medieval practice’を継続していることで有名)など、当時の法曹界の営みが正確に描かれていて、ディケンズは‘legal historian’として高く評価されるとする。たとえば‘brawling case’(SB, ‘Doctors’ Commons’)を引用し、これがうそ偽りでないことを証し、また‘Pickwick vs. Bardell’では、当事者双方が理由を説明できないときは、弁護士が推測で状況を説明することになるので、訴訟の展開は小説どおりに進むと述べた。更に、ディケンズは実際の事件審理をそのまま小説の中に再現することもあり、当時の‘Melbourne vs. Norton’事件の裁判記録がいかにPPの記述と一致しているかを引き合いに出し、その文書とPPを読み比べた。なるほど、音読すればこのようなリズムになるのかと、裁判でのやりとりの再現に大きな興味を覚えた。

第2講演はデイヴィッド・パーカー(David Parker)による‘The Topicality of Pickwick’で、鉄道の‘smooth running’や‘cockney sportsman’出現の新しさを述べるとともに、作品の枠組みをなぜ1827年に設定したのかを追う。「改正法案」(1832)により選挙権が‘property middle class’に与えられるものの、20

歳のディケンズには投票権はない。そこで彼は1834年にファーンニヴァルズ・イン(Furnival’s Inn)に加入し、会員資格取得によって投票権を手にし、中産階級の新しい責任、見通し、期待を確信するのだ。同時に奴隷廃止、工場法改正も行われ、時代には自由、平等の精神が広がる。ところがミドルタウン(Middletown = Maidstoneの仮名)では、時代錯誤が(実際には‘mayor’は‘freemen’によって選ばれ、中産階級に投票権はなかった)行われており、ディケンズはかつて国会に対して放たれた‘Humbug’なる誹謗の声を採用し、ここに人民の声を反映させている。また、レオ・ハンター(Leo Hunter)のエピソードには当時流行したバーバールドの詩(Barbault poems)が反映されており、中産階級が着実に地位を確保している姿の中に、小説の売れる環境が整っていると指摘する。

昼食をはさんで開催された第3講演は、ヴァレリー・レスター(Valerie B. Lester; great great granddaughter of Hablôt K. Brown)によるスライド講演で、フィズ(Phiz)がネル(Nell)をやや色っぽい女性に描いている点を取り上げた。それにつづいて演じられたのは、フィラデルフィア支部会員による‘The Lamplighter’の楽しいお芝居であった。



ブラウン女史およびジョーン／ジェフリー・ディックス夫妻

夕食後、クライスト・チャーチ(Christ Church; 1695年創建、現在のものは1744年竣工)にバスで出かけ、ここでディケンズ追悼礼拝を行った後、フィラデルフィアの旧市街見学があった。

第5日(7月23日)。この日の第1講演はマイケル・スレイターの‘Dickens at Work on American Notes’で、現在彼が執筆している『ディケンズ伝』の『アメリカ紀行』の部分、自らのフィラデルフィアにおけるさまざまなエピソードを交えながら面白く語って聴衆を沸かせた。次の演目は‘Boots at the Holly Tree Inn’の朗読。昼からはバスツアーが計画されており、先ず‘Eastern State Penitentiary’を見学し、そのあとディケンズ稀観本コレクションで有名なフィラデルフィア無料図書館(The Free Library of Philadelphia)を訪れた。「無料図書館」では稀観本室において



ミリアム・マーゴリーズ
PPの分冊本(メアリ・ホガース(Mary Hogarth)に贈ったディケンズ署名入り本),TTCの分冊本,グリップ(Grip)の絵,ディケンズの使った机と椅子,‘Empty Chair’の絵画などをじっくり眺めた。そしてこの日,スレイター氏およびブラウン女史のすすめもあって,日本より持ってきた『ディケンズ鑑賞大事典』を文芸部長の手を通して同図書館に寄贈した。

夕食を終えたあと,7時半より閉会式をかねた‘Entertainment’が行われた。チャタムの‘Dickens’s World’のアピールや‘A Dinner at Poplar Walk’

の朗読もそれなりによかったが,何よりも俳優ミリアム・マーゴリーズ演じるバンブル求愛の一人芝居が大喝采を浴びた。バンブルに負けぬほど恰幅のあるミリアムが胸を波打たせながらコーニー夫人に言い寄る,あのすばらしい演技は,参加者すべてに忘れがたい興奮を与えた。

楽しかったフィラデルフィア大会もこれで終了。シカゴ,フィラデルフィア,トロント,ノッティンガムの支部長,それに本部のジョーン,マイケル等々,多くの方々に別れの挨拶をし,またの再会を期して別れた。日本開催を望む声もあるが,できれば多くの支部会員諸氏には大会を何度か経験し,ディケンズが,そしてまた大会が(学ぶところも大であるが)いかに楽しいものであるかを知ってほしいと思う。そして各位が日本のどこでどんな大会を開いてみたいか,そんな冗談も飛交うような国際交流の気軽さを,是非味わってほしいと思う。

2006 年度秋季総会

Annual General Meeting of the Japan Branch 2006

at Tohoku University, Sendai

日時：平成 18 年 10 月 7 日 (土)
会場：東北大学 川内南キャンパス
文化系総合研究棟 11 階会議室

Digital photography by Mitsuharu Matsuoka and Fumie Tamai

2006 年度の秋季総会は 10 月 7 日 (土), 支部長の所属する, 仙台の東北大学にて開催されました。台風並みに発達した巨大低気圧の接近で前日から嵐となり, 当日も午前中は在来線が軒並み運休になるなどして, とくに遠方からの会員の足に影響しました。それでも 40 名を越える参加者があり, 例年より少なめでしたが, 充実した内容でした。会場は, 旧仙台城(通称青葉城)二の丸跡の東北大学川内南キャンパス。文科系総合棟 11 階の会議室からは仙台平野と太平洋が遠望できます。嵐も午前中にはおさまリ, すばらしい眺望となりました。



「重役会議みたい」(?) という声もあった総会風景

研究発表 Papers

司会：田中 孝信（大阪市立大学教授） Moderator: Takanobu TANAKA



渡部智也氏の研究発表について

『オリヴァー・ツイスト』を読んでいると、オリヴァーが夢を体験する場面に出くわす。それはそれで、現実と想像力から成る作品世界の融合状態との関連で興味深いのだが、渡部氏はむしろ、「眠り」そのものに焦点を当て、「眠り」が果たす役割をオリヴァーのみならず、サイクス、フェイギンの眠りをも視野に入れて比較検討を加える。そして、「眠り」には生命力を与える癒しの力があると結論づける。洞察力に富む理路整然とした論展開で、今後ディケンズ文学における「眠り」の全体像の解明を期待させる発表であった。

大森幸享氏の研究発表について

大森氏はカートの自己犠牲に至る強い自意識について、ダーネイ、ストライヴァー、ルーシーとの関係に注目しながら、彼の言葉や行動の考察を通して、説得力のある論を展開する。彼の自己犠牲は究極の愛情表現であるとともに、現世の苦しみからの解放や精神的な安堵を求める行為だとする点は、首肯せざるを得ない。今後は、死という英雄的行為の背後に潜むルーシーを巡るダーネイへの嫉妬心を詳細に分析することで、カートの一面的には捉え切れない人間像を浮き上がらせるであろうことが期待できる発表であった。

(田中 孝信)

Oliver Twist における
「眠り」についてSleep in *Oliver Twist*

渡部 智也（京都大学大学院生）

Tomoya WATANABE

(The Graduate School of English,
Kyoto University)

本発表は、ディケンズの初期の名作 *Oliver Twist* における、ディケンズの「眠り」の扱い方について、三名の主要登場人物の眠りを元に論じたものである。まず主人公オリヴァー・ツイストには、場所の移動、環境の変化を経験した後に眠り込む、という特徴がある。そしてその描写からは、その眠りが彼の疲労を癒し、また辛い現実を忘れさせることで、彼に生きる力を与えていることが伺える。

次に、サイクスの眠りからも同様のことが感じられる。彼の場合、元々はたびたび眠りを享受することで体力気力を回復できていたのだが、ナンシーの殺害を境に眠れなくなり、最終的に死に至るのである。デイヴィッド・パロイシアン (David Paroissien) やフィリップ・コリンズ (Philip Collins) が指摘しているように、彼は後半たびたびマクベスにたとえられ、それによ



り、彼の不眠から死へと至るプロセスはより強調されている。

一方もう一人の悪人フェイギンは、作品中で眠ることがなく、逆に「眠らない」ことで、眠る他者の眠りを利用し、自らに有利な状況を作り上げる悪魔的な人物である。その典型は、サイクスをけしかけてナンシーを殺害させる場面であるが、ここで彼は、ノア・クレイボールが寝ぼけていることを巧みに利用し、ナンシーの裏切り行為を誇張することでサイクスの怒りを極限にまで高め、目的を達したのである。しかし、そんな彼が最終的に牢獄を脱出して死を免れようと試みる際に頼るのは、それまで一度も頼ることのなかった、自らの「眠り」であった。このように主要な三名の登場人物の眠りの描写を考察することで、本作においてディケンズが一貫して「眠りには人を生かす力がある」という主張を行っていることを明らかにした。

『二都物語』論

— カートの自己犠牲にみる

自意識の働き —

A Study of *A Tale of Two Cities*: The Dynamics
of Self-consciousness in Carton's Self-sacrifice

大森 幸享（甲南大学大学院生）

Yukitaka OMORI

(The Graduate School of English,
Konan University)

シドニー・カートの自己犠牲とそれにもなう死が、ルーシーへの叶わぬ愛と過度な感受性による死というメロドラマの筋書きに則っているととしても、その死にいたるプロットの描写のなかに彼の強い自意識の働きを見過ごすことはできない。ノーマン・ページが、物語の最後でカートが断頭台で死ぬ場面について、彼の死は個人的な動機による死であると述べているように、



カートンの心の内に形成されていく自己犠牲への意識は、ルーシーに対する恋愛感情だけでなく、ダーニーに対する嫉妬や愛憎、さらにはカートン自身に向けられた自己否定や自己嫌悪という否定的な自意識にまで及ぶ。

カートンがダーニーという他者を媒介として自分を見つめる行為は、ふたりの外見的相似と運命的相違を浮き彫りにする。ま

た、ジョン・フォースターが、カートンを十分に表現するために必要な人物であると評したストライヴァーとの対比から、自分の運のなさをストライヴァーに責任転嫁しながらも、自らの人生の過ちにその根本的原因を見て嘆くカートンの姿がある。ルーシーへの愛の告白の場面はカートンの自己嫌悪と自己否定が入り混じり悲哀に満ちている。とはいえ、告白の最後で使われる‘sacrifice’という言葉は死を連想させる否定的な言葉というよりも、むしろ究極の愛情表現としての意味合いが強い。

物語の最後でカートンが述べる独白は、誰かと自分とを比較するものでもなく、ルーシーへの愛情表現でもなく、また人生を後悔する言葉でもない。それは最後の行動に対する彼の強い自意識の世界ではないか。カートンの最期が悲劇的ではないのは、彼の死に不条理性や暴力性がないためだけでなく、カートン個人の意識の世界で、死ぬことを肯定的に捉え、精神的に救われたという一定の解決がなされたからに他ならない。



講演 Lecture

司会：原 英一（東北大学教授） Introduction by Eiichi HARA

ディケンズと素人演劇活動

Dickens and Amateur Theatricals

講演者：西條 隆雄（甲南大学教授）

Lecture by Takao SAJO (Professor of Konan University)

今回の特別講演は前日本支部長の西條隆雄氏に行っていただきました。テーマはディケンズの素人演劇活動。ディケンズなら誰でもよく知っているはずのことですが、実はその実際の内容についてはほとんど知らないというのが真実でしょう。どのような脚本により、どのような形で興業が行われたのか、西條氏は持ち前の情熱と根気で上演脚本を丹念に収集し、ディケンズの素人演劇活動の実際を詳細に語ってくださいました。緻密なリサーチに裏づけられたお話しはさまざまな示唆に富み、私たちに新たな視点でディケンズの創作活動全体を考える可能性を示してくれました。

（原 英一）



* この講演については 159-70 ページの特別寄稿論文をご覧ください。

懇 親 会

マイクロバスで会場の勝山館（しょうざんかん）へむかいました。ここは仙台の財閥である伊澤家の本家があったところで、今では洒落た宴会場・レストランになっています。ご都合で出席のできなかった方を除き、30 数名が参加し、いつものように楽しい時間を過ごしました。

二次会は仙台の繁華街、国分町へ地下鉄で移動し、イギリス風パブ・レストランで行われましたが、こちらにも総勢 20 名が参加、ますます盛り上がりしました。



2007 年度春季大会

The Japan Branch Spring Conference 2007

at Tokyo University of Science, Noda

日時：平成 19 年 6 月 9 日（土）

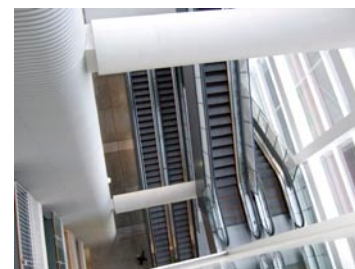
会場：東京理科大学 野田キャンパス 大講義棟

Digital photography by Yuji Miyamaru

2007 年度の春季大会は 6 月 9 日（土）、松本靖彦氏のお世話で東京理科大学野田キャンパスにて開催されました。50 名を超える聴衆が集まり、充実した内容の 3 つの講演に熱心に耳を傾けました。

開会を前に昨年急逝した日本支部理事故村山敏勝氏への黙祷が捧げられました。

支部長挨拶では、日本支部としての大事業である『ディケンズ鑑賞大事典』がいつに刊行されたことが報告されました。



研究発表 Papers

司会：金山 亮太（新潟大学准教授） Moderator: Ryota KANAYAMA

大島カレン氏の研究発表について

大島氏は「ハード・タイムズ」の中でもっとも大きなテーマである「教育」と「家族関係」を軸に据え、産業資本家グラッドグラインドが代表する「勝ち組」志向の世界と、スリアリーのサーカスが代表する「ニッチ」担当の世界との対比を今一度再確認しつつ、教育の基本は家庭における安定した人間関係にあるという主張を流麗な英語で発表された。昨今話題になることが多い、家庭の教育力の低下と教育現場における混乱との関係を想起させる、興味深い発表であった。



加藤匠氏の研究発表について

加藤氏は「我らが共通の友」に登場する女性たち、特にベラ・ウィルファーとリジー・ヘクサムに焦点を当て、彼女たちが担わされている「女性らしさ」の正体を探るためにヴィクトリア朝のコンダクト・ブックの著者たちの言説を再検討された。結果的に、彼女たちがこの小説で占めている位置は、自己主張を試みたりもするものの、結局は男たちに都合の良い振る舞いをする「受け手」としてのそれであることが明らかになった。作者の女性観の本質に迫る鋭い論考であった。

(金山 亮太)



The Muddled State of Education and Relationships in *Hard Times*

Karen OHSHIMA

(Associate Professor
of Shimane University)

大島カレン（島根大学准教授）

Although *Hard Times* is considered Charles Dickens' industrial novel, the state of education and its effect on society is arguably the main focus of the novel. Dickens takes to task the prevailing trend that stressed memorization of isolated facts and figures to the detriment of the imagination and warns about the consequences of this kind of education. As his division titles for the three parts of the novel

suggest ("Sowing," "Reaping," "Garnering"), Thomas Gradgrind, the proponent of fact, will reap and garner what he sows. His experiment with his "model" children, Louisa and Thomas, with which he intends to show the validity of his educational theory backfires and brings about tragic consequences. The tragedy not only destroys the lives of his children but also that of Stephen Blackpool, an innocent factory worker whose sad refrain "It's aw a muddle" echoes throughout the novel. Dickens shows the devastating effect that the "muddled" state of education has on the family, and by extension, society itself. He links the failure of education to nurture children and their creativity to producing a society of unfeeling adults without compassion or moral values. Dickens' warning remains relevant and should be a wake-up call to educators of today as well.

「完全なるイギリスの主婦」を
目指して

—Our Mutual Friend から考える
ディケンズの女性表象—

To Be a Perfect English Wife: The

Representation of Women in *Our Mutual Friend*

加藤 匠 (明治大学非常勤講師)

Takumi KATO

(Part-Time Lecturer of Meiji University)

ヴィクトリア朝期において、中流階級女性の理想像が前景化する場となったのがコンダクトブックであり、家政の手引書であった。ディケンズが当時支配的であった女性観といかに対峙したかを如実に物語るのが、ベラ・ウィルファーが「完全なるイギリスの主婦」をひとつの契機として、コンダクトブックで喧伝されていた愛他主義を軸とした女性へと変遷を遂げる『我ら共通の友』である。両者はともに理想の女性像だけでなく、書物を通じた自己形成という可能性を提示しており、ディケンズが中流階級女性の理想像を踏まえた女性表象を行っていたことを示唆している。一方で、コンダクトブックが主に中流階級の読者を想定して書かれていたのに対し、ディケンズは愛を前景化させることで階級を隠蔽し、階級を超えた理想として「家庭の天使」的な女性像を機能させようとするのだ。女性表象の比較から浮上するのは、ディケンズの階級をめぐる認識のあり方に他ならない。



講演 Lectures

司会：松村 豊子 (江戸川大学教授) Introduction by Toyoko MATSUMURA

ディケンズの速記と人物造形

Characterization as a Result of the Use of Shorthand in Dickens's Writing

講演者：松本 靖彦 (東京理科大学准教授)

Lecture by Yasuhiko MATSUMOTO

(Associate Professor of Tokyo University of Science)

ディケンズの想像力豊かな世界へのアプローチが多様性に富むことは、ここで繰り返すまでもないだろう。今回の二つの講演では小説家ディケンズの多面的要素を浮き彫りにする独創的な研究方法がとられていた。松本氏は速記記者としてのディケンズに注目し、ディケンズがことばというより、アルファベット文字の描き方にいかに想像力を刺激され、細部にこだわり続けたかを、ディケンズのほぼすべての主要作品に言及しつつ、精力的に考察された。そして、武井氏は慈善家としてのディケンズを論ずるにあたり、まず、彼の資金面での援助者であったアンジェラ・バーデット・クーツに着目し、次に、ユーレニア・コテージの設立・運営方法をめぐるディケンズの姿勢について、膨大な歴史的資料に言及しつつ詳細に論じられた。

講演内容が斬新で充実していただけでなく、フロアから寄せられた数多くのコメント・質問も示唆にとみ、積極的であった。ディケンズ・フェロウシップ日本支部の質の高さを今さらながら実感した講演であった。

(松村 豊子)



* この講演については 171-82 ページの特別寄稿論文をご覧ください。

司会：松村 豊子（江戸川大学教授） Introduction by: Toyoko MATSUMURA

慈善活動家としてのディケンズ
—Urania Cottage の関わりを中心に—

Dickens and Charity: His Involvement in Urania Cottage

講演者：武井 暁子（山口大学准教授）

Lectured by Akiko TAKEI (Associate Professor of Yamaguchi University)

* この講演について
は 183-200 ページの
特別寄稿論文をご覧
ください。



懇 親 会

大会終了後、キャンパス内のカナ
ル会館に場所を移して懇親会が開か
れました。30 名ほどが参加しました。
その後、柏駅前に移動しての二次会
でも 16 名ほどが参加、フェロウシップ
精神の横溢する飲食、歓談の時間はあ
っという間に過ぎていきました。





Dickens and Gad's Hill Place

Takeshi TERAUCHI

Charles Dickens took two heavy traumas in his life; one was in his poor childhood, the other in the period of 1857-58. He raised his status in life by the first trauma, and purged his own spirit by the second, and at the core of the traumas there was Gad's Hill Place. This will be revealed in the present paper.

1 The first trauma

John Dickens, a clerk in the Royal Navy Pay Office, was very sloppy with money. He borrowed £200, though his salary rose to £441, during the period of 1817-22 when he was posted to Chatham Dockyard, Kent; he spent too much money on parties, social gatherings, the theater, and things like clothes, furnishing, food and drink for his growing family. It was at such a hard time that he often brought his eldest son Charles to the Gad's Hill of Higham by Rochester, and he often said, looking up at the Place on the summit of the Hill, to Charles, 'If you were to be very persevering, and were to work hard, you might some day come to live in it' (Forster 1: 4-5; *Letters* 8: 265-66 and nn; Dickens, *Traveller*, Ch. 7). The Place had been built by a self-made who rose from an ostler into a brewer of Rochester and into Mayor of Rochester (*Letters* 7: 531n; *Letters* 8: 265 and n).

John, who was transferred back to London in 1822, wasted more and more money, and, in debt for £40, he was arrested and imprisoned in the Marshalsea Debtors' Prison in February 1824; soon his wife Elizabeth with her four small children moved into his prison room. So Charles had to work at Warren's Blacking warehouse, and on Sundays he and his elder sister Fanny would visit them in the Prison. At a certain time John broke down in tears in front of Charles, and so did Charles from his despair. In April 1824 John's mother happened to die, and he inherited £450 through her Will, all of which he had to spend paying his creditors to be released in May 1824.

In June, Charles was able to leave the warehouse to go into the Wellington House

Academy, but in November 1826 his family's financial difficulties grew worse, and John could pay neither rent nor schooling expenses for Fanny and Charles. In 1827 the family moved into a cheaper lodging at Somers Town, and Charles, fifteen years old, left the Academy to go out into the world. He could never forget these hard, dreadful days all his life: viz, it was a great trauma, in which Gad's Hill Place occupied a great space, he later recalled it as 'a dream of [his] childhood' (*Letters* 7: 531).

2 Marriage

Charles Dickens worked very hard following his father's words; he, during the period of 1827–34, had jobs such as a clerk at solicitor's office, a freelance reporter at Doctor's Commons, a reporter of Parliamentary proceedings, a polling clerk for a Parliament member, a regular contributor to the *Monthly Magazine*, and a Parliamentary reporter for the *Morning Chronicle* in 1834. At the *Morning Chronicle* he met George Hogarth (1783–70), who was to be editor of the *Evening Chronicle*, and in those days Dickens earned £275 a year.

Hogarth urged him to write sketches, and adopted his twenty sketches in the *Evening Chronicle* by September 1835, and often invited him to his home. It was thus that Dickens got engaged to his eldest daughter Catherine Thomson Hogarth at the age of 19, and married her in 1836.

Dickens was proud of the Hogarth family; George Hogarth, when in Edinburgh, was not only the legal adviser of Sir Walter Scott, but also an amateur violoncellist and music critic. He had married in 1814 Georgina Thomson (1793–1863), whose father was George Thomson (1757–1851), a musician, publisher of collections of Scottish, Welsh and Irish songs, and friend of Robert Burns (*Letters* 1: 134n; Schlicke 270 and 507). In 1830 George Hogarth decided to be a journalist, wishing to extricate his big family from financial difficulties, and finally settled in 1834 in London to get a job as a music critic of the Liberal *Morning Chronicle* (*Letters* 1: 54–55n).

Dickens, before the marriage, had begun to write *Pickwick Papers*, being continuously assisted in his career by George Hogarth, who, for instance, introduced him to the publisher Richard Bentley in 1836 (*Letters* 1: 54–55n). Within the year Dickens got the editorship of *Bentley's Miscellany* for one year. In this way Hogarth was a benefactor in Dickens's youth.

3 Becoming rich

Dickens became highly popular as a very talented writer, getting rich rapidly, as we can know from his houses. He was a tenant of Furnival's Inn in 1834–37, moved to 48 Doughty Street in 1837, and to 1 Devonshire Terrace in 1839 for which he paid £800 for a 14-year lease and £160 for rent per year.

One of the works he wrote in Devonshire Terrace was *Personal History of David Copperfield* (1849–50), a rather autobiographical novel with a first-person narrator, in which he described the narrator David Copperfield as 'The Eminent Author' (Ch. 63). Then he moved in 1851 to Tavistock House for which he paid £1,542 for a 45-year lease.

4 Happy days

He wrote *Bleak House* during the period of 1851–53 and *Hard Times* in 1854 in Tavistock House. He peacefully spent the new-year days of 1855 at his home, writing to his friend W. W. F. De Cerjat of Lausanne in Switzerland a letter dated 3 January 1855: 'The whole nine (i. e. his nine children) are well and happy. Ditto Mrs. Dickens. Ditto Georgina.' They were very busy with preparing for the fairy play of *Fortunio and his Seven Gifted Servants* by James Robinson Planché. The play was to come off five days later at the House, which was full of 'spangles, gas, Jew theatrical tailors, and Pantomime Carpenters' (*Letters* 7: 497). In the Playbill were introduced actors and actresses like Charles Dickens, all his children including two-year-old Edward Bulwer Lytton Dickens, and 14-year-old Mark Lemon, Jr. and 10-year-old Betty Lemon. The Dickensses were all filled with happiness, joy and hope.

Among the guests of the Performance of January 8th were James Robinson Planché, who had received an invitation from Dickens, and undoubtedly Mrs. Dickens, Georgina, and Mr. and Mrs. Mark Lemon, and the neighbors, too (*Letters* 5: 616n; *Letters* 7: ii, xxi, and 510 & nn; M. Dickens, *CD* 132). How blissful those days of the Dickens family!

5 Victory and release from trauma

On February 1, 1855, the Rev. James Lynn (1776–1855), the then-owner of Gad's Hill Place, died, and his daughter Miss Eliza Lynn (1822–98) decided to sell the Place, though it was rented those days to the Rev. Joseph Hindle, vicar of Higham (?1795–1874; vicar of Higham, 1829–74). Naturally, it was Dickens who bought the Place, which was 'a dream of [his] childhood,' for £1,790. He paid the money on Friday, 14

March 1856, which Dickens, born on Friday, himself believed to be a lucky day. The motive of his for the purchase was for an investment and for summer residence. The Rev. Joseph Hindle, who had abided there for 26 years, desired to stay until Lady Day the next year, i. e. March 25 (*Letters* 8: 53).

With the coming of the year 1857 Dickens's amateur theatricals performed Wilkie Collins's *The Frozen Deep* at Tavistock House four times in January.

His forty-fifth birthday came round on February 7, when he held a party at Tavistock House with guests like Thomas Beard and Wilkie Collins, and on February 13 Dickens at last did possess Gad's Hill (*Letters* 8: xxiii and 292). How bright a smile he showed!

On April 9, 1857 he was at Waite's Hotel, Gravesend, with Mrs. Dickens, Georgina, and his two little boys, staying there until April 15; during which time he went out to watch the little repairs at Gad's Hill carefully (*Letters* 8: 310–11).

On May 12 he finished *Little Dorrit*, and on May 19, when it was Mrs. Dickens's birthday and her first visit day to Gad's Hill Place, he held a house-warming party there with guests like Thomas Beard, Wilkie Collins, and William Wills (*Letters* 8: 326–27; Page, *Chronology* 94). Dickens, who was 'very persevering' and 'work[ed] hard,' was now 'the Inimitable Kentish Freeholder' and a man of 'Victory' (*Letters* 8: 327).

From June 1 to July 17 Dickens and his family enjoyed the summer holidays at Gad's Hill, during which he, it is likely, often got drunk not only on spirits but on the feeling of Victory, remembering the looks of his father who had died in 1851. During the holidays he frequently went over to London to prepare for the next performances of *The Frozen Deep*.

On July 4 he played it before the Queen and Prince Consort, and the King of Belgium at the Gallery of Illustration. The Queen, after the performance, begged Dickens to 'go and see her and accept her thanks' (*Letters* 8: 366), and further she recorded in her Journal, 'The Play was admirably acted by Charles Dickens,' and Colonel Phipps in a letter, dated July 5th, 1857, to Dickens from Buckingham Palace for the Queen, wrote that 'the Queen and Prince Consort, and the whole of the Royal party were delighted with the rich dramatic treat of last night. I have hardly ever seen Her Majesty and HRH so much pleased' (*Letters* 8: 366n). Another Victory to Dickens!

Now he was admired not only as a novelist and editor of *Household Words* but as a stage director and actor; furthermore he was respected as a moralist and philanthropist, and was even called 'a man of genius' (*Letters* 8: 748). He, having got sufficient fortune, station and reputation, had been entirely disengaged from the trauma he had

suffered in his poor childhood, though the trauma itself had been the source of his diligence, morals and faith.

6 Peripeteia and a second trauma

There were performances of *The Frozen Deep* following on July 11, 18, 25, and August 8, bringing him more and more cheers and applause; for which he was made up over and over into the self-sacrificing hero, Richard Wardour, who threw out his life for the rival lover Frank Aldersley.

The last performances were to be played on August 21, 22, and 24 at the big Manchester Free Trade Hall, for which Dickens hired the three professional actresses, Mrs. Thomas Lawless Ternan (1803–73), her second daughter Maria Susannah Ternan (1837–1904), and her third Ellen Lawless Ternan (1839–1914), instead of the amateur ones.

It went without saying that the actresses brought him a great success. The Ternan family, made up of Mrs. Ternan and her three daughters, was rather poor; and Dickens, now a hero of self-sacrifice, assisted them as a matter of course; more than that, he, 45 years old, was flattered by Ellen Ternan who was 18 years old, the same age as his second daughter Kate, and made her a mistress secretly.

For nearly a year he could not but struggle against his wife Catherine and the Hogarths, the problem having become a scandal by journalism; he persistently insisted on his innocence, sending a letter of 25 May 1858 to his intimate friend Arthur Smith, with a note giving his permission to show it to any one who wished to do him right:

Two wicked persons who should have spoken very differently of me, in consideration of earned respect and gratitude, have (as I am told, and indeed to my personal knowledge) coupled with this separation the name of a young lady for whom I have a great attachment and regard. I will not repeat her name—I honour it too much. Upon my soul and honour, there is not on this earth a more virtuous and spotless creature than this young lady. I know her to be innocent and pure, and as good as my own dear daughters. Further, I am sure quite that Mrs. Dickens, having received this assurance from me, must now believe it, in the respect I know her to have for me, and in the perfect confidence I know her, in her better moments to repose in my truthfulness. (*Letters* 8: 741; emphases added)

The 'young lady' referred to above was none other than Ellen Ternan (Forster 2: see

note 19 of page 454; Wagenknecht 373), whom he was to hide for the rest of his life from the world.

In June his relation with Ellen Ternan was known among the 'literary and artistic circles,' as *Reynolds's Weekly News* reported on June 13:

The names of a female relative, and of a professional young lady, have both been, of late, so freely and intimately associated with that of Mr. Dickens, as to excite suspicion and surprise in the minds of those who had hitherto looked upon the popular novelist as a very Joseph in all that regards morality, chastity, and decorum. (*Letters* 8: 745n)

Catherine left Tavistock House around the middle of May with her eldest son Charley, who chose to live with her, to go to a new home (70 Gloucester Crescent, Regent's Park), which was near Tavistock House. At that time Dickens was 'like a madman' (Storey 94) though he had blamed her cruelly in some letters. Catherine, who had borne him ten children plus two miscarriages, signed the Deed of Separation in June 1858. Dickens, 46 years old; Catherine 43.

Dickens broke with his close friends Mark Lemon, editor of *Punch*, and Frederick Evans, a partner of Bradbury and Evans, because they, who both were Catherine's trustees, refused to print the 'Personal' statement, which Dickens wrote to justify the separation, in *Punch*, whose owner was Bradbury and Evans. Dickens distinctly committed a great sin; he was one of those who 'know not what they do.'

The problem was not finished yet; *New York Tribune* dated August 16 exposed the Letter to his friend Arthur Smith without Smith's permission, and criticized Dickens severely. The Letter, which Dickens later called the 'Violated Letter,' was reprinted by English newspapers on 31 August (*Letters* 8: xxv).

Dickens, in those days, was earnestly urging George Eliot, whose principal publisher was Blackwood's, to write for his new magazine *All the Year Round*. One of the examples of how Dickens was discussed behind his back can be found in a letter of 16 Nov 59 to Joseph Munt Langford, Blackwood's London manager, by George Simpson, Blackwood's Edinburgh manager, who wrote: 'I have no doubt the tempter is that fallen angel C.D.' (Haight 310; *Letters* 6: 461n; *Letters* 9: 160–61n; emphasis added).

Thus Dickens, who might be said to have known nothing but praise, was exposed to the harshest criticism and the deepest disgrace he had never experienced, which could not but have caused a new trauma within him.

7 Dickens's defeats and conversion

Dickens's third boy Frank, who was studying in Germany to be a doctor, came home at the latest by August 1859, giving up being a doctor because of his stammering. So Dickens was in deep affliction for him, writing in September to the Rev. Matthew Gibson, Frank's teacher in France, 'I am a little puzzled to know what to do with Frank' (*Letters* 9: 120). His anguish was doubled by his beloved daughter Kate's engagement, of which she told him by October 1859, to the sickly painter and writer Charles Allston Collins (1828–73), a younger brother of Wilkie Collins and eleven years older than she. It would perhaps be those days that she often spent days with boy-friends and was talked about as 'a flirt' or 'the fast Miss Dickens' (Hawksley 142).

Annie Adam Fields, who was invited on May 6, 1860, with her husband to Tavistock House, wrote in her diary, 'A shadow has fallen on that house, making Dickens seem rather the man of labor and of sorrowful thought than the soul of gaiety we find in all he writes' (Curry 5). A month later, i. e. around on July 2, Dickens moved into Gad's Hill Place, putting up Tavistock House, near which Catherine lived, for sale, and on July 17 Kate married Charles Collins despite her father's opposition, to escape from the 'unhappy house' (Storey 105). After the couple's departing for a honeymoon, Dickens, who was in her bedroom, sobbed 'with his head buried in Katie's wedding-gown,' saying, 'But for me, Katey would not have left home' (Storey 106).

He would have been obliged to gaze at his own inward ugliness, which he himself had often criticized in his works. Dickens suffered severe defeats, which would have made his second trauma much greater.

On September 3 Dickens burnt 'the accumulated letters and papers of twenty years' in the field at Gad's Hill, making Kate and her two brothers help in the work (*Letters* 9: 304 and n; Storey 106–07). Obviously, two big spiritual changes would have happened within him. One was a complete separation from Catherine, following Christ's preaching: 'No man can serve two masters'; the other was to purge his tainted, sinful, ungodly soul, through which he wished to regenerate himself. He had expressed his will in *A Tale of Two Cities* (30 Apr.–26 Nov. 1859) through Sydney Carton, who had 'deep wounds in' his heart: 'I am the resurrection and the life, saith the Lord: he that believeth in me, though he were dead, yet shall he live: and whosoever liveth and believeth in me, shall never die' (TC 198).

Dickens became clearly conscious of his sin and was converted. Tavistock House was sold on August 21, 1860, and the Dickens's family transferred to Gad's Hill completely in October.

8 Improvement

After the purchasing of Gad's Hill Place, Dickens got to work on repairs, additions, alterations, and refurbishments, often superintending those renovations himself (Forster 2: 211). In relation to them he frequently used words like 'improve' or 'improvement.' According to his eldest daughter Mary, he was constantly making improvements to the House from 1860 until his death, as she wrote,

but in 1860 Tavistock House was sold, and all the pictures and ornaments, &c., were removed to Gad's Hill, which now became the one permanent home. And from this time until his death Charles Dickens was constantly making some improvement to "the little freehold" he was so fond of [. . .]. (M. Dickens, *CD* 140–41)

And as each was completed he showed it to Kate, who was a constant visitor. So Kate had to come down and 'inspect'; he would say to her, 'Now, Katie, you behold your parent's latest and last achievement,' and the 'last improvements' became quite a joke between them (M. Dickens, *My Father* 132). In fact he was pleased with 'showing [her] the beauties of his "improvement" ' (M. Dickens, *My Father* 136).

The truly last 'improvement' was the building of a conservatory, which was completed around on January 13, 1870 (*Letters* 12: 464–65), and the partitioning of the Vinery in the conservatory would have been finished around June 5. Dickens was very proud of the conservatory, and showed the beauties of it, on June 5, to Kate, who had visited the Place the day before, saying, 'Well, Katey, now you see POSITIVELY the last improvement at Gadshill' (Forster 2: 213; M. Dickens, *CD* 166; Storey 133).

Here we should not overlook that it was to his own improvement or his self-improvement that he had tacitly referred through the 'improvement.' He had surely been doing his self-improvement, which we could perceive from a speech he made at the Birmingham Midland Institute on September 27, 1869, as President for the year:

To the students of your industrial classes generally, I have had it in my mind, first, to commend the short motto, in two words, 'Courage, Persevere'. [*Applause*] This is the motto of a friend and worker. Not because . . . ; nor because . . . ; not because . . . ; not because self-improvement is at all certain to lead to worldly success, but because it is good and right of itself [hear, hear]; and because, being so, it does assuredly bring with it, its own resources and its own rewards. (Fielding 405; emphasis added)

His sixth son Henry ('Harry'), who followed his father then, wrote, 'he told his audience "that they should value self-improvement, not because it led to fortune, but because it was good and right in itself" ' (H. Dickens, *Memories* 21; *Recollections* 59). The very speech could not have been made to the students unless he himself had practiced his self-improvement; he, it can be said, was improving himself by identifying the Place with himself.

We might find some of his self-improvements in cases like the reconciliations with William Makepeace Thackeray in 1863 and with Mark Lemon in 1867, in the words 'I don't forget that this is Forster's birthday—or that it is another anniversary [i. e. his own wedding one]!' in a letter to Georgina of 2 April 1868 from Boston (*Letters* 12: 89 and n), and a much politer letter of 5 November 1867 to Catherine than in the former two letters of 6 August 1863 and 11 June 1865:

To Mrs Charles Dickens, 6 August 1863

Dear Catherine

When I went to America (or to Italy: I cannot positively say which, but I think on the former occasion) I gave your mother the paper which established the right in perpetuity to the grave at Kensal Green. [. . .] The Company's office used to be in Great Russell Street Bloomsbury.

CHARLES DICKENS.

To Mrs Charles Dickens, 11 June 1865

Dear Catherine

I thank you for your letter.

I was in the carriage that did not go over the bridge, but which caught on one side and hung suspended over the ruined parapet. I am shaken, but not by that shock. Two or three hours work afterwards among the dead and dying surrounded by terrific sights, render my hand unsteady.

Affectionately
CHARLES DICKENS

To Mrs Charles Dickens, 5 November 1867

My Dear Catherine

I am glad to receive your letter, and to accept and reciprocate your good wishes. Severely hard work lies before me; but that is not a new thing in my life, and I am content to go my way and do it.

Affectionately Yours
CHARLES DICKENS
(emphases added)

The last letter was too short, but he could not write more than what was needed because he was with Ellen following Christ's words.

One more instance may be added to prove his self-improvement by quoting a letter to his youngest son Edward of 26 September 1868:

Never take a mean advantage of anyone in any transaction, and never be hard upon people who are in your power. Try to do to others, as you would have them do to you, and do not be discouraged if they fail sometimes. It is much better for you that they should fail in obeying the greatest rule laid down by our Saviour, than that you should.

Here we should read his sincere repentances for those insolent, cruel attitudes he had taken towards the Hogarths including Catherine, Mark Lemon and Frederick Evans, and for the treacherous attitude he took towards the world. The letter continues,

I put a New Testament among your books, for the very same reasons, and with the very same hopes that made me write an easy account of it for you, when you were a little child; because it is the best book that ever was or will be known in the world, and because it teaches you the best lessons by which any human creature who tries to be truthful and faithful to duty can possibly be guided. As your brothers have gone away, one by one, I have written to each such words as I am now writing to you, and have entreated them all to guide themselves by this book, putting aside the interpretations and inventions of man.

You will remember that you have never at home been wearied about religious observances or mere formalities. I have always been anxious not to weary my children with such things before they are old enough to form opinions respecting them. You will therefore understand the better that I now most

solemnly impress upon you the truth and beauty of the Christian religion, as it came from Christ Himself, and the impossibility of your going far wrong if you humbly but heartily respect it.

Only one thing more on this head. The more we are in earnest as to feeling it, the less we are disposed to hold forth about it. Never abandon the wholesome practice of saying your own private prayers, night and morning. I have never abandoned it myself, and I know the comfort of it. (*Letters* 12: 187–88; emphasis added)

From this letter we could confirm that Dickens had been converted long before, asking Christ for salvation. The first of Edward's brothers who had 'gone away' was Sydney, the seventh child and fifth son of Dickens's, who, a midshipman or naval cadet, had left for America by Frigate Orlando in December 1861 (*Letters* 9: 309, 542–43 and 551). So we might specify the time of Dickens's conversion, as Mary had written 'from this time (i. e. from 1860),' as 1860 when he moved to Gad's Hill, when Kate departed from his home by marriage, and when he burnt his letters and papers.

9 Dickens's Reconciliation with Kate

Kate visited Gad's Hill on June 4, 1870, to get her father's advice on whether she, whose husband was ill in bed, should go on the stage to earn some money or not. It was at about eleven o'clock in the evening of June 5 that they could talk each other about the question in the new conservatory, and he dissuaded her from going on the stage '[w]ith great earnestness,' saying 'there are some who would make your hair stand on end' (Storey 133). This very advice, we could be sure, came from his own irrevocable, remorseful experience. He went on to speak of many other things that 'he had scarcely ever mentioned to her before [. . .] as though his life were over and there was nothing left' (Perugine 652), adding that he wished that he had been 'a better father—a better man' (Storey 134).

It was because of his being not 'a better father' that she had escaped from his 'unhappy house.' She could never be happy by the marriage; her husband Collins remained sickly; now he had stomach ulcer, and was even suspected of tuberculosis; besides he might have been impotent (Gasson 30).

Dickens's consciousness of sin had been made decisively clear by her; and then he would have resolved to improve himself or to purge his spirit, and he would have intimated his self-improvement and made her 'inspect' 'the beauties' of his own

improvements indirectly when showing her the 'the beauties' of the improvements of the Gad's Hill proudly. He, it seems, completed his 'self-improvement' by confessing his sin in the conservatory, which was 'POSITIVELY the last improvement,' and at the very moment he would have been wholly freed from his second trauma.

In the morning of July 6 Kate was waiting for the carriage in the porch to go home in London with her sister Mary, who was to spend a few days there, without saying good-bye to her father because he disliked the two words. But, suddenly seized with an irresistible impulse, she ran to him, who was writing *Edwin Drood* in the Châlet (Storey 134–35). He, seeing her, pushed his chair, and 'opened his arms, and took her into them . . . ' (Perugini 654). The blank Kate left there would probably have been thus: 'Father . . . !' 'Katie, forgive me . . . !' He hugged Kate tightly, and they both would have shed all of the tears that would have been stored in their eyes for twelve years. He could be reconciled with her at last, though not with Catherine because he served Christ. But still we could imagine that Kate, who was the cordial sympathizer of her mother and continued to visit her, would have told her mother of her father's words, 'a better father—a better husband.' From the context, situation and dash, we could suppose that 'man' must have been 'husband,' whether by his word or in his mind, but Kate could not make Storey write so because there was Ellen.

Only on her deathbed did Catherine protest against the cruel treatment she had got from Dickens; and Kate may have 'succeeded' in a way in softening her feelings by telling her mother her father's words of 'a better father . . . ' and what his last hug would have told Kate (Slater 158 and 411).

Two days later, on June 8, Dickens fell unconscious at dinner, and died on June 9, undoubtedly as a penitent Christian, as he had written in his Will, 'I commit my soul to the mercy of God through our Lord and Saviour Jesus Christ, and I exhort my dear children humbly to try to guide themselves by the teaching of the New Testament,' and also as a resurrectionist, as he had written 'the Resurrection and the Life' in *Two Cities* and in the chapter 23 of *Edwin Drood*, the chapter he wrote right before losing his consciousness.

Dickens had written in his Will to 'proceed to an immediate sale' of all his 'real and personal estate.' The destiny of Gad's Hill Place must have been done together with his; it was a symbol of his material desire in the first half of his life, and was the place for the purgation of his spirit in the latter by identifying the Place with himself. Dickens had two bad traumas in his life, and the first was dissolved by the Place; the second was healed by the Place; his life was with Gad's Hill Place.

Note

This paper is a development of part of the one read at the General Meeting of the Japan Dickens Fellowship held at Yamaguchi University on June 10, 2006, and some of the matter mentioned in the above '8 Improvement' and '9 Dickens's Reconciliation with Kate' was posted in a recapitulative form on 29 Nov. 2006 to the Dickens Forum conducted by Professor Patrick McCarthy of University of California, Santa Barbara.

Thanks are due to Laura Thompson (Tokyo) for improving the style of this paper, but all responsibility is the present writer's.

Bibliography

- Adrian, Arthur A. *Georgina Hogarth and the Dickens Circle*. 1957. New York, Kraus, 1971.
- Bowen, William Henry. *Charles Dickens and His Family*. Cambridge: Heffer, 1956.
- Brannan, Robert Louis, ed. *Under the Management of Mr. Charles Dickens, His Production of "The Frozen Deep"*. New York: Cornell UP, 1966.
- Collins, Wilkie. *The Frozen Deep and Other Stories*. 1874 Boston: Media, rpt. of 1874, n.d.
- Curry, George. *Charles Dickens and Annie Fields*. Henry E. Huntington Library, 1988. Rpt. from *Huntington Library Quarterly* 51 (Winter 1988).
- Gasson, Andrew. *Wilkie Collins: An Illustrated Guide*. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Davis, Paul. *Charles Dickens A to Z*. New York: Checkmark, 1998.
- Dexter, Walter, ed. *Mr. and Mrs. Charles Dickens, His Letters to Her*. London: Constable, 1935.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. 12 vols. Oxford: Clarendon Press, 1982–2002.
- . *The Letters of Charles Dickens*. CD-ROM edition. Charlottesville: Intalex, 1992.
- . *A Tale of Two Cities*. 1859. London: Oxford UP, 1970.
- . *The Mystery of Edwin Drood*. 1870. London: Oxford UP, 1979.
- Dickens, Henry F. *Memories of my Father*. London: Gollancz, 1928.
- . *The Recollections of Sir Henry Dickens, K. C.* London: Heinemann, 1934.
- Dickens, Mamie. *My Father As I Recall Him*. New York: Dutton, 1898.
- . *Charles Dickens*. London: Cassell, 1911.
- Dickens on Disk*. Wilmette: Hall Design, 2001.
- Fielding, K. J. *The Speeches of Charles Dickens*. Hemel Hempstead: Harvester-Wheatsheaf, 1988.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Ed. A. J. Hoppé. 2 vols. Everyman's Library. London: Dent, 1969.
- Haight, Gordons S. *George Eliot: A Biography*. Harmondsworth: Penguin, 1985.
- Hawksley, Lucinda. *Katey, The Life and Loves of Dickens's Artist Daughter*. London: Doubleday, 2006.
- Hughes, William R. *A Week's Tramp in Dickens-Land*. London: Chapman, 189.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. London: Hamilton, 1952.
- Kaplan, Fred. *Charles Dickens' Book of Memoranda*. New York: New York: Public Library, 1981.

- Nisbet, Ada. *Dickens and Ellen Ternan*. Berkeley: U of California P, 1952.
- Oppenlander, Ella Ann. *Dickens' "All the Year Round": Descriptive Index and Contributor List*. New York: Whitston, 1984.
- Page, Norman. *A Dickens Companion*. London: Macmillan, 1984.
- . *A Dickens Chronology*. London: Macmillan, 1988.
- Perugini, Kate. "“Edwin Drood,” and the Last Days of Charles Dickens” *Pall Mall Magazine* 1.32 (June 1906): 642–54.
- Robinson, Kenneth. *Wilkie Collins, A Biography*. New York: Macmillan, 1952.
- Schlicke, Paul. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: Dent, 1983.
- Storey, Gladys. *Dickens and Daughter*. New York: Haskell, 1939. 1971.
- Tomalin, Claire. *The Invisible Woman, The Story of Nelly Ternan and Charles Dickens*. London: Penguin, 1991.
- Wagenknecht, Edward. "Dickens the Scandalmongers." *College English* 11.7 (Apr. 1950): 373–82.
- Wright, Thomas. *The Life of Charles Dickens*. London: Jenkins, 1935.
- . *Thomas Wright of Olney*. London: Jenkins, 1936.
- <http://www.dickenslive.com/> No name of the editor nor e-mail address.

ディケンズと素人演劇活動

—演劇活動と創作の新領域—

Dickens and Amateur Theatricals:

Their Effects on his Novel Writing

西條 隆雄

Takao SAJO

1 素人演劇活動に使った脚本

ディケンズと演劇の関係は深い。幼い頃に打ち興じた紙芝居やパントマイムをはじめ、街灯で目にしたさまざまな芸当や余興、アストリー座の曲馬、マッシュューズのワンマンショー、あるいは『ボズのスケッチ集』に見られる小劇場での演劇風景、そしてまた自ら観劇した数え切れないほどの当時の芝居は、ディケンズ文学を形成する大きな基盤を成している。加えてディケンズは戯曲6点（うち2点は共同執筆）をも著している。

同時に、彼には俳優として、舞台監督として、また番組を編成し興行を成功させる座長として腕を振るった素人演劇活動のあることもよく知られている。ところで、この演劇活動については、脚本やスーリーをも含めて詳しく解説をした文献は少ない。実際に素人劇団の一員に加わり、回想録を残したカウデン・クラーク夫人 (Mary Cowden Clarke, 1809–98) とか、その活動を目のあたりにして記録した R・H・ホーン (R. H. Horne, 1802–84) はいるが、いずれも部分的な記録に終わっている。ほぼその全貌を描いたのは W・デクスター (Walter Dexter, 1877–1944) であるが、これもディケンズの演技の巧みさ、采配ぶり、観客の反応は伝えるとして、創作と演劇活動の相互関係についてはさほど触れていない。

無謀ながら、ディケンズの素人演劇活動を追い、それと小説執筆がどのように関わっているかを調べてみたいと思いついたのは1980年代の半ばであった。何はさておき、ディケンズの用いた演劇脚本を手に入れるのが先決問題で、フォーセット (Fawcett) が作成した20数篇の演劇リスト (Fawcett 255–56) を片手

に探しはじめた。しかし戯曲集をいくらめくっても、探している脚本は何一つ出てこない。Inchbald ed., *The British Theatre* (25 vols., 1808), *The British Drama Illustrated* (12 vols, 1864), *London Stage* (4 vols., 1824-27) のページをめくってわずか2編を見つけ、*Planché's Extravagnzas* (5 vols., 1898) を購入した時、ここに1篇を見つけたにすぎない。

19世紀戯曲集には他に次のようなものがある。

Cumberland's Minor Theatre (1828-40)

Dicks' Standard Plays (1880s)

Duncombe's Edition of the British Theatre (c. 1850)

French's Acting Edition (1850-60)

Lacy's Acting Edition of Plays (1850-60)

Richardson's New Minor Drama (1828-31)

これらはどこにでもあるという訳ではない。たまたま訪れたスタンフォード大学やカリフォルニア大学にも所蔵はされていなかった。そこで、より正確に突き止めることができるよう、Allandyce Nicoll, *A History of Early Nineteenth-Century Drama 1800-1850* (Cambridge, 1930) および *The Player's Library: the Catalogue of the Library of the British Drama League* (British Drama League, 1950) を用いて脚本名とその収録戯曲集の特定を急いだ。

このとき、『ナショナル・ユニオン・カタログ』に *List of Dicks' Standard Plays and Free Acting Drama* (London: J. D. Dicks, n.d.) がカンザス大学の稀覯本のなかにあることがわかり、これをマイクロフィルムにとって送ってもらったところ、1,057点の戯曲リストを一望することができた。

時間はかかったが、自ら探し当てたり、在外研究に行っている方の手を煩わしたり、またヨーク大学大学院に留学していた娘に大英図書館に出かけて *Dicks' Standard Plays* から5点をコピーしてもらったりして、1点を除いてほぼ脚本が揃った頃、アメリカのReadex社が英米の著名図書館の協力を得、30年をかけて編集した *19th Century British Drama* がマイクロフィッシュ版で出版された。これは早速購入した(文部科学省助成金および平生太郎基金科学研究奨励助成金)。だが、この1万点を越す戯曲集にも“The Lighthouse”のみは入っていない。これは手稿の形でしか存在せず、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 (Victoria & Albert Museum)、大英図書館 (The British Library)、ニューヨーク公立図書館 (The New York Public Library) の3ヶ所に保存されているのみである。VAのコリンズ直筆の原稿には一時挑んだが、途中から訂正

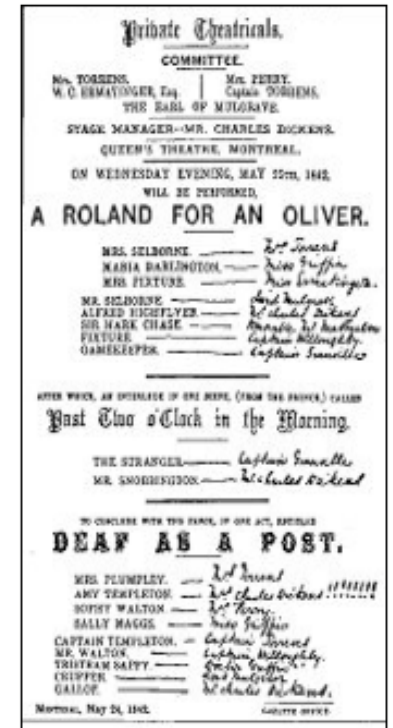
や加筆が随分多くなり、しかも有名な悪筆とあって、これを写しとるのは諦め、大英図書館のMSをマイクロフィルムで送ってもらってこれを書き写すことにした。こうして揃った戯曲集をリストアップすると、別表のようになる。

2 俳優および舞台監督として

ディケンズがはじめて素人芝居を演じたのは、ジョン・ハワード・ペイン作の『クラリ、またはミラノの乙女』(*Clari; or, the Maid of Milan*)であった。この作品は1823年5月8日にコヴェント・ガーデン劇場で初演されるや大ヒットとなり、おそらくこれを見たディケンズは深い感銘を覚えたにちがいない。1833年、彼はこれを家族と友人仲間で演じたのである。初回リハーサル(4月13日)から音楽・衣装をそろえた本稽古(4月19日)を経て27日に上演するまで、21歳のディケンズがすべてを取り仕切った。番組編成も本格興行にならって喜劇オペラ、幕間劇、笑劇の3本立てとし、ディケンズ自身、番組すべてに出演するとともに、舞台監督としても敏腕を振るった。

初回上演から数えてほぼ10年後、『ピクウィック・クラブ』、『オリヴァー・トウィスト』、『ニコラス・ニクルビー』、『骨董屋』の成功で文壇の寵児となったディケンズは、1842年の1月、アメリカに渡る船上で知り合ったマルグレーヴ伯爵に請われ、5月にモントリオール駐屯部隊の士官が組織する素人劇団を率いて、慈善公演の全指揮をとることになった。彼は1ヶ月前に、『しっぺ返し』(*A Roland for an Oliver*)、『全く聞こえず』(*Deaf as a Post*)、『午前2時過ぎ』(*Past Two O'Clock in the Morning*)を選んで3本立ての編成とし、脚本の取り寄せ、舞台装置、道具の調達およびリハーサルはすべて自分の手でやってのけた。

舞台監督として全指揮を執る一方で、ディケンズは自らも後の2本に出演し、招待客500～600人を前に、扮装、所作、発声においてはプロ顔負けの演技を



モントリオール公演プログラム

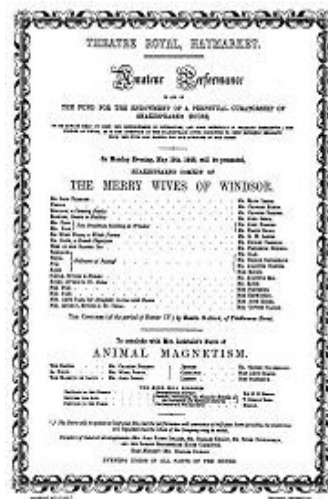
披露した。慈善興業は大成功を収めた。

モントリオールで自信を深めたディケンズは、イギリスにおいてこれと似た企画を立ててみたいと考え、1845年、友人のジョン・フォースター、マーク・レモン、ヘンリー・メイヒュー、ダグラス・ジェロルド、ジョン・リーチ、ギルバート・ア・ベケット等と呼びかけて素人劇団を結成した。結成の手はじめにベン・ジョンソン作の『十人十色』(Every Man in His Humour)とフレッチャー作の『兄』(The Elder Brother)を選んで準備を重ね、ソホーにある「ケリー嬢の劇場」を借りて、600～700人の招待客を前に上演した。ここでディケンズはボバディル大尉をみごとに演じ、プロ級といわれるマーク・レモンのブレインワーム役を凌いで、並み居る人々の心を捕えた。素人興行であるにもかかわらず『タイムズ』紙をはじめとして、紙上で絶賛を浴び、リー・ハントもまた、ボバディル役に深く感銘し、「この役をこれほど知的に理解した俳優はいなかった」(Fawcett 146)と褒めた。

しかし、演技の巧みさとは比較にならないほどすばらしかったのは、ディケンズが舞台監督、舞台背景係、大道具係、小道具係、進行係、楽団指揮をすべて兼ね、衣装・ポスターの考案、リハーサル立案とその実行にいたるまで、公演の指揮・運営を一手に引き受けた実務の才であった。彼はこの事業全体の「生命であり魂であった」とフォースターは記している(Forster 5: 1)。

『ドンビー父子』執筆中の1847年、ディケンズは同じ脚本を用いて老齢に達したリー・ハントおよびジョン・プールの生活支援を行なうため、慈善興行を行なった。女性役にはプロの俳優を配し、入場料を1シリングに定めて7月26日にマンチェスター、7月28日にリヴァプールで『十人十色』を演じたところ、それぞれ£440.12、£463.8.6の収入をあげた。幕間劇と笑劇は、26日が『形勢逆転』(Turning the Tables)と『熟睡』(A Good Night's Sleep)、28日が『形勢逆転』と『快適な宿』(Comfortable Lodging)であった。

この慈善興行の一環としてロンドン公演のために準備していた『ウィンザーの陽気な女房たち』が、政府の芸術家に対する年金下賜によって上演の必要を免れると、シェイクスピア協会のメンバーであったディ



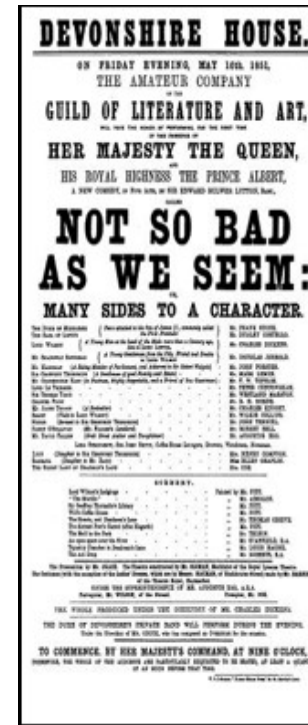
『ウィンザーの陽気な女房たち』

ケンズは、この脚本を用いてシェイクスピア生家博物館館長職の基金設立興行を思い立ち、今回はジョージ・クルークシャンクやG・H・ルイスをメンバーに加え、プロの女優カウデン・クラーク夫人は召使クイックリー夫人役としてこの劇団に加わった。1848年5月から7月にかけて、ハイマーケットで演じた2回(うち1回は女王夫妻が臨席)を含め、マンチェスター、リヴァプール、エディンバラ、バーミンガムおよびグラスゴーでの公演をあわせて計9回上演し、£2541.8の収入をあげた。

この巡業の間、ディケンズは一貫して舞台主任に徹し、リハーサルでは登場人物の対話や舞台入場の仕方、舞台上の仕草・位置を指示するとともに、公演に支障の出ないようにあらゆる気配りを行なった。のち、回想記の中でカウデン・クラーク夫人はディケンズのリハーサルにおける真剣さと指示の巧みに賛辞を送っている(Clarke 708-13)。

次いで1851年、世界初の万国博覧会がはじまって早々の5月16日、ディケンズは女王とアルバート公をはじめ、多くの貴顕を前に『見かけほど悪くない』(Not So Bad As We Seem)を演じた。この公演計画は、以前より行ってきた文人互助計画を、恒久的な制度にできないかと考えたディケンズが、「文学と芸術のギルド」設立を提唱し、文人仲間であるリットン卿に新作の戯曲を書いてもらって実行に移された。その趣旨は、作家や芸術家の労に報い、老後は生活苦に追われずゆくり過ごせる制度と施設を作ろうというものである。ディケンズは、リットン卿が5幕物の喜劇を書き、自分は笑劇を書いて、これをロンドンおよび地方で公演し、ある程度の基金を手にした段階で計画の詳細を文書化して、各方面に働きかける計画であった。

依頼を受けたリットン卿はすぐさま執筆に取りかかり、1月1日には原稿を送ってきた。ディケンズは一読して感動し、ただちに4月30日の本番にむけて作業を開始した。200名の観客を選び、入場料を設定し(5ポンド)、設立趣意書の起草をはじめ全企画の準備と運営を引き受けるとともに、自分も



『見かけほど悪くない』

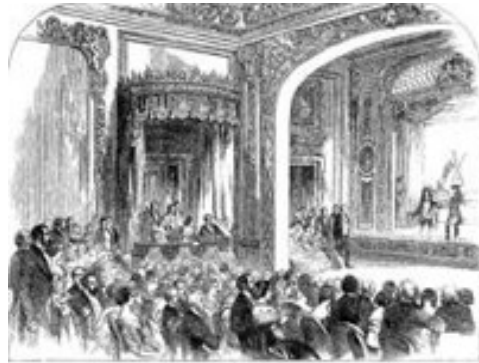
笑劇の執筆に取りかかった。ところが折悪しく父と娘をなくする不幸に見舞われ、一時は公演の見通しが立たなくなったが、女王より2週間の公演延期許可を得、16日に上演にこぎつけた。初演には女王夫妻とウェリントン公爵も臨席され、女王からは150ポンドの慈善寄付金がよせられた。

笑劇の執筆はマーク・レモンとの合作に切り替え(5月1日に完成)、ディケンズはそのなか

に洒落や、ギャンプ夫人並みの老女や威勢のいい靴磨きのおもしろさ、おかしさをふんだんに盛り込んだ。出来上がった『ナイチンゲール氏の日記』は、『見かけほど悪くない』と組み合わせて第2回目の公演(5月27日)で初披露され、1人6役を演じるディケンズの名演技は爆笑を巻き起こした。この日は芝居のあとに夕食会と舞踏会が計画され、ふたたび満席となって、企画は2日間で£2,500の基金を手にする。そしてこれを皮切りに、1年半にわたる地方巡業が始まるのであった。



「退屈男」



「デヴォンシャー公爵邸における上演」

計22回の公演のうち、最終回(リバプール)は『見かけほど悪くない』に代えて『退屈男』(Used Up)を用いた。それまでのさして面白みのないウィルモット役から解放されたディケンズは、いろんな人物に変装するサー・チャールズ・コールドストリーム役を演じることになり、まるで魚が水を得たかのように精彩を放つのであった。

巡業は大きな成功を記録した。しかし、華やかな成功の陰でディケンズの嘗めた苦労は並大抵のものではなかった。日々の舞台設営、舞台装置の点検、また急ごしらえの劇場の倒壊危機に晒され、恐怖と戦いながら細心の注意と努力を傾けるディケンズの姿があった。

3 小説の新領域

1855年、コリンズが『灯台』の脚本を持ってきたとき、ディケンズは新しい長編小説の構想に苦しんでいた。だが脚本に目を通すなり、彼はすぐさま上演を決め、数日後にはロイヤル・アカデミー会員であるスタンフィールドに舞台背景画を依頼し、マーク・レモンをはじめ知人・友人に配役を割り振ると練習日程を組み、6月中旬には上演にこぎつけた。

「世界でもっとも小さい劇場」と銘うったタヴィストック劇場(ディケンズ邸の子供勉強部屋)における上演は、ディケンズが多くの新聞・雑誌の劇評家を招待していたこともあり、評判はすこぶる高く、多くの人々が是非見たいと希望した。とにかく観客席が25席しかないのととても要請に応えきれず、そこでやむなく1ヶ月後にケンジントンにあるウォー大佐の邸宅(キャムデン・ハウス)で、結核患者療養施設の募金活動を目的として上演することを決定した。

この演劇のすべてはディケンズの演技の妙にある。暴風雨に遭って難破した船から乗組員を救出したまではよかったものの、灯台守(Dickens)はその中に自分がかつて殺害したはずの女性を認める。夢にうなされて過去の悪事を口走った父の言葉に不審を抱いた息子が父と言い争っているさ中に、その女性が、突然二人の前に立ちあらわれる。欺瞞の露呈とともに灯台守は失神して倒れる。その燈台守は、まるで死の世界からよみがえってくるかのように、ゆっくり意識を回復する。その意識回復過程をディケンズは、まるで神業のように演じるのであった。観客席でこれを目にしたかつての俳優イエイツ夫人は、芝居が終るなり目を真っ赤にはらしてディケンズのもとに駆け寄り、「あ、ディケンズさん、あなたにほかのことができるなんて、なんて残念なことでしょう」(バーデット=クーツ宛書簡、1855年6月19日)と述べた。



「灯台」

“O Mr. Dickens what a pity it is you can do anything else!”

これだけの演技力をもちながら、なぜそれを職業とせずに作家などになったのかと驚くとともに、その妙技を称えたのであった。ディケンズの演技のすばらしさを要約する名言である。

彼の演技に対して、カウデン・クラーク夫人もまたこう記している。

すばらしい演技だった。実に想像豊かで、独創に満ち、狂乱した、印象的な演技だった。崇高なほどに知的な二つの目は、うつろにさまよい、悲しげで怯え、うろたえたまなざしは、まるで魂が身体から抜け落ち、がらんどうになった人のそれであった (Pemberton 128)。

この『灯台』上演は、ディケンズの単なる余技としてではなく、創作活動との補完関係において眺めてみたい。1855年の1月、かれは新しい小説『誰の責任でもない』(“Nobody’s Fault”)の構想を温めていた。ディケンズは週刊誌上でロンドンの衛生問題および労働者の良質な住宅政策について提言をしていたが、政府はこうした提言を頑迷に拒み、新年に入ってからクリミア戦争でおびたらしい失策を繰り返していた。業を煮やしたディケンズは、「おびたらしい愚策」という記事を誌上に連載し、パーマストン内閣を批判し、ひたすら行政改革を促そうと試みた。しかし政府はへつらいや世辞をうけ入れ、無能者を重要ポストに任命して改革に踏みだそうとはせず、それを見たディケンズは、官僚機構の腐敗をどのような形で作品に反映できるかを悩みつづけていたのである。

同年5月に『誰の責任でもない』の執筆にとりかかるが、重苦しい政治批判を前面に出せば出すほど筆は進まない。前回の月刊小説(『荒涼館』)では、開巻章に重厚な社会批評を掲げて成功したので、この度も急進的な社会批評を展開したいと考えた。それだけに作品の全体構想はまとまらず、開巻章で行き詰まっていたのである。折りしもコリンズから新しい脚本が届いた。出来はいいし、行詰り打開にはうってつけの気晴らしとばかり、上演に飛びつく。プロローグを一気に書き上げ、昔読んだ「グロヴナー号」難破の物語を歌詞に仕立て上げ、これを「リトル・ネル」(バラッド)の節まわしでフィービ役をやる娘のメアリに歌わせることにした。リハーサルと本番でこれを耳にしているうちに、この歌の余韻がディケンズに閃きを与え、構想を練っていた新小説の題名が『誰の責任でもない』から『リトル・ドリット』に変更される。作品全体を統括する象徴的存在が可憐なる少女ネルによって触発され、これまでの政治批

判から大きく転向し、人間および人間社会の欺瞞と救いを扱う作品に変更された。これが9月の半ば、そして12月には『リトル・ドリット』の題名で第1分冊が出版されるのである。

『灯台』上演は創作の苦しみから抜け出す一時的な衝動ではなく、ディケンズの小説をより高い次元に推し上げ、作品構成の重厚さに貢献していることに注目したい。そしてまた灯台守の意識回復過程は、欺瞞の権化ともいえるウィリアム・ドリットの、過去の亡霊との戦い、失神、絶命の過程とつながっている。とりわけ、絶命したあと、リトル・ドリットの見守る中で彼の顔から偽りのヴェールが一枚また一枚と剥げ落ちてゆく場面には、ディケンズの深い人間心理の洞察が見てとれるのである。そして、これが演劇人であったディケンズの心理描写の方法でもある。

成功を重ねたディケンズの素人興行は、1857年、コリンズの三幕物『凍れる海』(*The Frozen Deep*)の上演をもって幕を閉じる。そしてこの作品の主人公が、彼に新たな小説の領域を開拓させるのである。

場面はニューファウンドランド沿岸の洞窟、背景には北極の海に座礁した軍艦が描かれている。脚本はディケンズが相当に手をいれ、カットして、恋人を奪ったオールダーズリ(Frank Aldersley)を殺害しようとするウォーダー(Richard Wardour)の性格が入念に練り上げられている。艦が氷に閉じ込められて3年、食糧も底をつき、あとは助けを求める以外にとる方法がなくなって、この二人が選ばれて氷雪原の中へと旅立つ。途中、ウォーダーは何度か眠っている間に相手を遺棄しようとするが、そのたびに良心が抵抗してその考えを押しとどめる。空腹と疲労に苛まれながらも、彼は眠る相棒を残し水と食料を求めつづける。その彼の前に、偶然にも、国に残してきた人々を乗せた救出艦が現われる。しかもそこには、捜しつづけてきたかつての恋人が乗り合わせていた。朦朧とした意識の中でひと目彼女を見た彼は、引き返すとぐったりしたオールダーズリを抱えてあらわれ、彼を彼女に預けると「あなたのために、彼を助けました。私の仕事はもう終わりました」と述べてそのまま安らかに息を引き取る。愛する女性のために命を捨てる気高さは、ディケンズが既成のモラルに縛られぬ新しいヒーロー像を探求する中で、生まれてきたと思われる。もちろんこれが次の小説『二都物語』(1859)のテーマになっていることはいうまでもない。

1月5日、本番リハーサルをかねて召使いや出入りの人々の前で演じると、6日には子供部屋と庭を改造して作った劇場に、90名を招待して上演した。死が刻々と迫る主人公の最期の様子は、観客を深い感動で包み、『リーダー』紙は「ディケンズの演技は新時代の幕を開く」と書いた(*Letters* 8: 254n)。またサッカレーは、「彼なら年収2万ポンドを手にする俳優になろう」と述べている

(*Letters* 8: 261n). 再校の礼賛である。次いで8日, 12日, 14日に演じて公演はすべて終了, タヴィストック劇場はそれをもって解体された。

ところが6月8日にダグラス・ジェロルドが亡くなって事態は変わった。二日後の10日に弔問したディケンズは, すぐさま追悼事業委員会を発足させ, 追悼事業の一つとして『凍れる海』の上演を行なうことにした。7月4日にギャラリー・オブ・イラストレーションで女王および付添いの人々のために私的に上演したあと, 1週間後より4回, つまり7月11, 18, 25日, および8月8日に, ジェロルドの追悼興行として, 『凍れる海』を上演した。

ところが『凍れる海』を見ることのできなかったマンチェスターの人々から, 是非とも当地で公演をしてほしいとの要請が届いた。一時はためらったものの, 結局はこれを受け入れ, 8月21, 22, 24日, フリー・トレイド・ホールにおいて素人演劇活動の最後となる『凍れる海』を演じた。

要請を受けたとはいえ, ここは3,000人収容のホールなので, プロの俳優でなければ声が届かない。探しているうちに, 紹介されたのがターナン一家であった。ディケンズは短期日で演技を教えこみ, すばらしい成功を手にする。8月24日のチラシには, ターナン夫人とエレン, マライアの二人の娘が『凍れる海』および『ジョン伯父さん』(*Uncle John*)に出演している (Tomalin 101)。芝居のクライマックス, いままさに死なんとするディケンズの顔を両の手にとり膝にのせたマライアは, 彼が本当に死んでしまうと思って, その顔の上に涙の雨を降らす。するとディケンズは小声で「あと2分で終わるから, 気持ちを静めて」と下からささやいたが, 「もうすぐこと切れるなんていや, 私をこんな悲しい目にあわせたまま先立たないでください」と, 哀願するのであった (ワトソン夫人宛書簡, 1857年12月7日)。この心情吐露は, ディケンズをことのほか喜ばせた。これ以後, ディケンズは姉エレンとの関係を深め, 1858年, ついに22年間連れ添った夫人と離縁を決意する。

その離縁をめぐるこれまで一緒に巡業してきた友人仲間は二分し, もはや演劇活動はつづけることができなくなった。ディケンズの演劇活動は, これ以後, そのほけ口を公開朗読に求めるのである。

参考文献

- Brannan, Robert Louis, ed. *Under the Management of Mr. Charles Dickens: His Production of "The Frozen Deep."* Ithaca: Cornell UP, 1966.
- Clarke, Mary Cowden. "Charles Dickens and His Letters." *Gentleman's Magazine* (1872): 708–13.
- Dexter, Walter. "For One Night Only: Dickens's Appearances as an Amateur Actor." *Dickensian* 35 (1939): 231–42; 36 (1940): 20–30, 90–102, 130–35, 195–201.
- Fawcett, F. Dubrez. *Dickens the Dramatist on Stage, Screen and Radio*. London: Allen, 1952.
- Horne, R. H. "The Guild of Literature and Art at Chatsworth." *Gentleman's Magazine* (1871): 246–62.
- Langton, Robert. *Childhood and Youth of Charles Dickens*. Manchester: Albert Chambers, 1883.
- Morley, Henry. *The Journal of a London Playgoer*. 1866; Leicester UP, 1974.
- Pemberton, T. E. *Dickens and the Stage*. London: George Redway, 1888.
- Tomalin, Claire. *The Invisible Woman: The Story of Nelly Ternan and Charles Dickens*. NY: Knopf, 1991.
- Van Amerongen, J. B. *The Actor in Dickens*. 1926; Haskell, 1970.
- Yates, Edmund. *Edmund Yates: His Recollections and Experiences*. 2vols. London: Richard Bentley, 1884.
- "Charles Dickens's Acting in 'The Lighthouse'." *Dickensian* 5 (1909): 91–94.
- "Mr. Dickens's Amateur Theatricals." *Macmillan's Magazine* 23 (1871): 206–15.
- "The Devonshire-House Theatricals." *Bentley's Miscellany* 29 (1851): 660–67.

参考資料

ディケンズの演じた素人演劇脚本一覧表

	劇作家	戯曲 / 所在	種類
1833	Payne/Bishop	<i>Clari, or, the Maid of Milan</i> 『クラリ, またはミラノの乙女』 (<i>Cumberland's British Theatre</i> , XXIV)	Light Opera
1833	O'Callaghan	<i>The Married Bachelor</i> 『独身者の結婚』 (<i>Cumberland's Minor Theatre</i> , x)	Comedy
1833	R. B. Peake	<i>Amateurs and Actors</i> 『素人役者と俳優たち』 (<i>Cumberland's British Theatre</i> , XVI)	Mus. Farce
1842	Morton	<i>A Roland for an Oliver</i> 『しっぺ返し』 (<i>Lacy's Acting Edition of Plays</i> , lxxv)	Comedy
1842	J. Poole	<i>Deaf as a Post</i> 『聞こえぬふりをして』 (<i>Dicks' Standard Plays</i> , No. 343)	Farce
1842	Mrs. Gore	<i>Past Two O'clock in the Morning</i> 『午前二時すぎ』 (<i>Dicks' Standard Plays</i> , No. 403)	Farce
(This last piece was afterwards billed as <i>Two O'Clock in the Morning</i> , then as <i>A Good Night's Rest</i> by Mrs Gore.)			

170	ディケンズと素人演劇活動―演劇活動と創作の新領域			『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』 第30号（2007年10月）	
1842	J. Townley	<i>High Life below Stairs</i> 『召使たちの豪華な生活』 (<i>The London Stage</i> , vol. 1)	Farce	ディケンズの速記と人物造形 Characterization as a Result of the Use of Shorthand in Dickens's Writing 松本 靖彦 Yasuhiko MATSUMOTO 断片的記述とイメージとを結びつけるという点で、速記術とディケンズの想像力の働きには共通点がある。ディケンズと速記との関係を考えるのなら、音声言語を「写し取る」という速記本来の機能に着目するのが本筋だろうが、本稿においては、速記とディケンズの想像力との中のアナロジーに焦点をあてて、彼が断片をイメージやキャラクターに結びつけるプロセスを追ってみたい。 「ちょっとしたしるし」―速記的人物描写 私の知る限り、速記をディケンズの芸術を表す比喩として初めて効果的に用いたのは、作家のツヴァイク（Stefan Zweig）である。 小説を書きはじめの前議会の速記者であったディケンズは、その何年かのあいだ、一点一点で一つの単語をあらわしたり、短いラセン模様で一つの文を表現する方法、複雑な内容を記号に押しこむ訓練を積んだわけであるが、後にはこれを文学に応用して、いわば現実の速記を練習することになった。ちょっとしたしるしをあげて叙述に肩替りさせ、千変万化の事実から観察のエキスを蒸留した。（ツヴァイク 76）	
1845	B. Jonson	<i>Every Man in his Humour</i> 『十人十色』 (London: Yale University Press, 1969)	Comedy		
1845	Fletcher	<i>The Elder Brother</i> 『兄』 (<i>The Works of Beaumont and Fletcher</i> , 1969)	Comedy		
1846	Peake	<i>Comfortable Lodgings, or Paris, in 1750</i> 『快適な宿』 (<i>Cumberland's British Theatre</i> , XXIX)	Farce		
1847	J. Poole	<i>Turning the Tables</i> 『形勢逆転』 (<i>Dicks' Standard Plays</i> , No. 380)	Farce		
1848	Shakespeare	<i>The Merry Wives of Windsor</i> 『ウィンザーの陽気な女房たち』	Comedy		
1848	Kenney	<i>Love, Law and Physic</i> 『恋人、弁護士、医者』 (<i>Dicks' Standard Plays</i> , No. 673)	Farce		
1848	Mrs. Inchbald	<i>Animal Magnetism</i> 『催眠術』 (<i>London Stage</i> , vol. 4)	Farce		
1848	Boucicault	<i>Used Up</i> 『退屈男』 (London: National Acting Drama Office, n.d.)	Comedy		
1851	Bulwer Lytton	<i>Not So Bad As We Seem</i> 『思ったほど悪くない』 (London: Chapman and Hall, 1851)	Comedy		
1851	Dickens	<i>Mr. Nightingale's Diary</i> 『ナイチンゲール氏の日記』 (<i>Complete Plays</i> , 1970)	Farce		
1851	Mrs. Kemble	<i>A Day After the Wedding</i> 『結婚式翌日』 (<i>Cumberland's British Theatre</i> , XXIX)	Interlude		
1854	Fielding	<i>Tom Thumb</i> 『親指トム』 (<i>British Drama</i> , vol. 2)	Burlesque		
1855	Planché	<i>Fortunio and His Fairy Seven Gifted Servants</i> 『フォーチュニオと七人の供侍』 (<i>Extravaganzas</i> , vol. 2)	Extravaganza		
1855	W. Collins	<i>The Lighthouse</i> 『灯台』 (MS, British Museum)	Melodrama		
1857	W. Collins	<i>The Frozen Deep</i> 『凍れる海』 London: C. Whiting (private), 1866	Romantic Drama		
1857	J. B. Buckstone	<i>Uncle John</i> 『ジョン伯父さん』 (<i>Dicks' Standard Plays</i> , No.826)	Farce		

確かに、ディケンズはしばしば断片的な特徴でもって人物を表現する。例えば、『ドンビー父子』のカーカーは輝く歯で、『大いなる遺産』のジャガーズ弁護士は無敵の人差し指で、そして彼の右腕ウェミックはポストのように開閉する口で、それぞれ繰り返し描写されている。

ミラー（J. Hillis Miller）もツヴァイクと同様、「速記的」なディケンズに着目したことがある。彼は1970年のある論考で、ディケンズの描写にみられる、「断

片」が「人物全体」を表すパターンについて論じているのだ。『ボズのスケッチ集』の中で、履いているブーツの種類によって人物が名指しされる場面、注文した飲み物の種類と値段が客の呼び名になっている場面、また『マーティン・チャズルウィット』のギャンプ夫人の夫が、彼女の想像力によって木の義足に変えられてしまう場面等、「部分」が「全体」に結びつく例をミラーは丹念に拾っている。それらを「提喩 (synecdoche)」あるいは「換喩 (metonymy)」として扱っているミラーは、「速記」という言葉は用いていないが、実質的にツヴァイクのいう「ちょっとしたしるしをあげて叙述に肩替りさせ」る、というディケンズの「速記的」側面を論じている、と言ってよいと思われる。

「断片」で以て「人物全体」を肩代わりさせる描写の特質を「速記的」と呼ぶのが許されるならば、ある人物が頻繁に口にする「お決まりの台詞」を用いて、その人物「らしさ」を表現する手法もまた「速記的」と言うことが可能だろう。例えば、「私はしががない (umblé) 人間ですから」と言い続けるユライヤ・ヒープの「アンプル攻撃」、何かにつけて直ぐに「ハリスの奥さん」を引き合いに出すギャンプ節、そして「なあ、ピップ (“You know, old chap”)」というジョーのピップへの呼びかけ、等々まさに枚挙に遑がない。

なぜ「断片」で人物を表すのかというと、それで事足りるからである。ディケンズが読者の想像力に働きかけ、特定の人物の姿を呼び出すのには、わずかな描写でも充分だった。ある決まった言い回しを耳にした瞬間（小説の場合は目にするわけだが）、そこにキャラクターがたち現れる。このような人物造形が、ディケンズが観客としても演技者としても多くを吸収した、演劇に多くを負っていることは想像に難くない。「ちょっとしたしるし」でキャラクターを呼び起こす。それと同じことは、起ち居振る舞いのわずかな描写によっても可能だった。

言葉数が少なくても充分描写できた、というばかりでなく、ディケンズは意図的に多くを語らないこともあった。その方が、むしろ効果的な描写になるからである。パロイシーン (David Paroissien) は、ディケンズの人物造形について、ドンビー氏やデッドロック夫人の描写を例に挙げながら、「行動を通して、感情、気質、そして欲望を描くには、特にわずかなジェスチャーが適していた」と述べている (77)。少ない情報、乏しい描写の方が、かえって人物造形に深みを与える場合もあったのだ。

目に触れる部分が断片的だからこそ、深みと味わいが出る。これは、『骨董屋』冒頭に現れる語り手の態度そのものである。夜毎、街路をうろついて人間観察に耽る習慣の持ち主である彼は、こう述べている — “a glimpse of passing faces caught by the light of a street lamp, or a shop window, is often better for my purpose

than their full revelation in the daylight” (OCS 1)。部分的な露出ししかない方が、想像力を働かせる余地がある。断片的なイメージしか与えられていないからこそ、自由に思いを巡らして人物造形を楽しむことができるのだ。これは、『ボズのスケッチ集』の中で、古着屋で見かけたブーツや古着に次々と息を吹き込み、キャラクターに膨らませてみせた、あの「モンマス・ストリート随想」の語り手がしていることと同じである。

「キャラクター」の最初の萌芽 (the first germ of “a character”)

断片的な描写で人物の全体像の肩替りをさせただけでなく、ディケンズは、ツヴァイク風に言えば、「ちょっとしたしるし」それ自体に息を吹き込み、人物像へと膨らませてみている。断片的な特徴が人物像に成長していくというパターンは、極めてディケンズ的な想像力の働き方である。バジヨット (Walter Bagehot) も、ディケンズのユーモアの特質に触れた際、彼が外的特徴に息を吹き込み、人物へと膨らませていく点を指摘している。バジヨットの表現を借りるならば、ディケンズは、「キャラクターに、というよりもむしろ、特徴そのものに生命を吹き込む」のである (176)。ごく瑣末なものからディケンズのキャラクターが生み出される、という点には、ホーン (R. H. Horne) も着目している。画家のホガースとディケンズを並べて論じたホーンは、両者の作り出した、雑多な人間たちでごった返す、賑やかな世界では、至るところに、「「キャラクター」の最初の萌芽 (the first germ of “a character”) が顔を覗かせる」と述べている (95)。つまり、ディケンズの世界では、そこかしこにキャラクターの種が撒かれているのだ。これは勿論、ディケンズが至るところにキャラクターに発展しそうなものを見て取ることのできる、鋭い眼をもっていたということの証でもある。

ホーンの言う「キャラクターの最初の萌芽」にあたるとされる例をあげよう。まず、『荒涼館』第31章の一場面。エスタは、自分の女中になったチャーリーに字を教えたときのことを次のように書いている。“It was very odd, to see what old letters Charley’s young hand had made; they, so wrinkled, and shrivelled, and tottering; it, so plump and round” (BH 427)。チャーリーの書く字は一応アルファベットとして判読可能なのだが、同時に人間的な特徴を備えてもいるのだ。これにいくらか通じているのが、デイヴィッド・カパフィールドがアルファベットについて語るときの態度である。彼はこう語っている — “To this day, when I look upon the fat black letters in the primer, the puzzling novelty of their shapes, and the easy good-nature of O and Q and S, seem to present themselves again before me as they used to do” (DC 53)。デイヴィッドはアルファベットを文字として読むと同

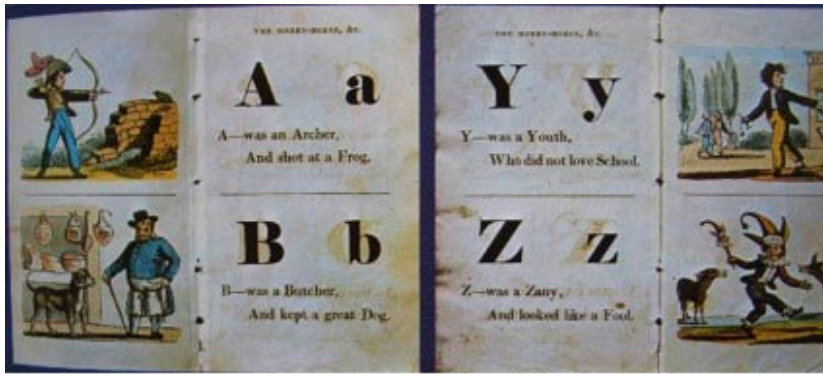


図1 (Wilson 25)

時に、懐かしい友に対するようなまなざしで — つまり、人間に対するように — 描写している。アルファベット本の例にみるように（図1）、文字が人物像を孕んでいるという発想自体は、ディケンズの独創ではないが、彼が生み出した世界では、文字と人とが結びつけられたり、文字から人物像が紡ぎ出されることが多い。

平たく言えば、文字と人物（像）が結びつけられるというのは、擬人法的一种には違いない。ディケンズが、その鋭い眼を向けるそこかしこでキャラクターが生まれるというのも、つまるところアニミズムではないか、と言ってしまえばそれまでの話なのだが、彼が文字に息を吹きこむ場合はアニミズムとは分けて論じる価値があると思われる。なぜなら、ディケンズが文字の内に「キャラクターの最初の萌芽」を見て取るとき、彼は文字を文字として読みながら、同時に絵柄のように観るという、ハイブリッドな眼差しで臨んでいるからであり、この一通りでない情報処理の方法こそが文字に生命を吹き込んでいるからである。

「ちょっとしたしるし」からイメージ、人物像へ — 速記術

断片（的記述）から人物像を取り出してみせる際の、ディケンズの想像力の働き方については、彼による速記学習の描写以上に大きな光をあててくれるものはない。その描写は、『デイヴィッド・コパフィールド』第38章冒頭にみられるものであり、ディケンズ自身の体験に裏打ちされていると考えて差し支えないものである。

I bought an approved scheme of the noble art and mystery of stenography [.

..] and plunged into a sea of perplexity that brought me, in a few weeks, to the confines of distraction. The changes that were rung upon dots, which in such a position meant such a thing, and in such another position something else, entirely different; the wonderful vagaries that were played by circles; the unaccountable consequences that resulted from marks like flies' legs; the tremendous effects of a curve in a wrong place; not only troubled my waking hours, but reappeared before me in my sleep. When I had groped my way, blindly, through these difficulties, and had mastered the alphabet, which was an Egyptian Temple in itself, there then appeared a procession of new horrors, called arbitrary characters; the most despotic characters I have ever known; who insisted, for instance, that a thing like the beginning of a cobweb, meant expectation, and that a pen and ink sky-rocket stood for disadvantageous. (DC 545)

この記述からまず窺えることは、速記という世界では、どんなに「ちょっとしたしるし」も、必ず何らかのイメージや概念に膨らんでいく潜在性を孕んでいるということである。わずかな点の位置の違い、曲線の微妙な曲がり具合の差などがすべてきちんとした意味をもつ。点と線がみせるありとあらゆる微細な特徴が潜在的には何かを表しているわけであり、無意味な特徴など何もない。素人目にはどんなに出鱈目な点と線の行列に見えようとも、訓練を積んだ速記者の目には、速記文字は常に何らかの意味のある表情を見せるのである。ひょっとしたら、ディケンズほどの奔放な想像力の持ち主なら、速記など全く学ばなかったとしても、やっぱり『荒涼館』のエスタはチャーリーの筆跡の内に「年寄りじみ」た表情を見てとったかもしれない。しかし、速記を修得することを通して、元々鋭かった彼の観察眼に一層磨きがかけられたことは考えられるし、ありとあらゆる点や線のもっている表情（physiognomy）に対する彼の感覚も一段と研ぎ澄まされたのではなかっただろうか。

実際、ディケンズは時折、文字を読むと同時に、その表情（physiognomy）にも敏感に反応していて、それが書かれた文字を非常に人間臭くさせるのである。例えば、『ハード・タイムズ』では、バウンダビー宅のドアには、「バウンダビー」という文字が（性格をそのまま映し出したような字体で）書かれている（ディケンズ 130）。ドア・プレートの文字の字面に、バウンダビーの人柄が見てとれるのである。デイヴィッド少年も、セイラム学園での初日、ドアに刻まれた生徒たちの名前の彫り具合から、本人たちに会う前に1人1人の性格をイメージしていた。『荒涼館』でも、手書きの文字の physiognomy が、プロット上重要な役割を果たしている。そもそも物語の発端の1つは、かつての恋

ディケンズがイメージに変換するのは、個々の文字の字面だけにとどまらない。『リトル・ドリット』では、彼はドリット氏の手紙の文体を視覚的なイメージに翻訳して表現している。

In his epistolary communication, as in his dialogues and discourses on the great question to which it related, Mr. Dorrit surrounded the subject with flourishes, as writing-masters embellish copy-books and ciphering-books: where the titles of the elementary rules of arithmetic diverge into swans, eagles, griffins, and other calligraphic recreations, and where the capital letters go out of their minds and bodies into ecstasies of pen and ink. (*LD* 600)

この突然のイメージの狂い咲きは、ドリット氏のもったいぶった言い回しをヴィジュアル化したものである。速記文字の変化の様と同様に、形式ばったドリット氏の文体が、突如、白鳥や鷺などの姿と絡み合う装飾文字に化けている。この変化の様にも、シルク・ハットからウサギを取り出してみせるような、手品めいたところがある。この「手品」が可能なのは、語り手が flourishes という言葉を「文飾」と「装飾文字」の2重の意味で使っていて、2つ目の意味を即座にイメージに変換したからである。言い換えれば、ディケンズは flourishes という単語を介して、「言葉の彩」を視覚化したのである。先ほどみた『大いなる遺産』の冒頭でも、ピップが亡くなった両親のイメージを紡ぎ出す際、そのよすがとなったのは墓碑銘の文字の flourishes だったと思われる。レヴェルは異なれども、言葉に息が吹き込まれ、テキストからイメージが飛び出している点は同じである。

「細部」「断片」とヴィクトリア朝

物語の本筋と直接関係のない、いわば周縁的な細部においてイメージの華が咲き誇るの、実はディケンズ独りの特質ではなく、他のヴィクトリア朝芸術にも共通する傾向だった。先ほどの『リトル・ドリット』から引用した文章で、テキストの細部からイメージが弾け出している様子は、細部が無節操に膨らみすぎることが、ヴィクトリア朝芸術に共通する特徴だとする、コンラッド (Peter Conrad) の議論を思い起こさせる。コンラッドは、ディケンズの本領が発揮されるのは、『オリヴァー・トゥイスト』ならフェイギンやサイクス、『マーティン・チャズルウィット』ならベックスニフ、といったグロテスク装飾のような脇役たちにおいてである、と考えていて、(ディケンズ作品においては)「グロテスクなものが小説を乗っ取り」、「細部が全体に反抗する」と論じている (Conrad

38)。この「細部が全体に反抗する」という点では、ラスキン (John Ruskin) がゴシック建築に関して同じことを述べている、とコンラッドは指摘しているが、彼も長々と引用している、『ヴェネツィアの石』における次のようなラスキンの筆致は、装飾 (flourishes) の悦ばしい変化の様を描写している点で、先ほどの『リトル・ドリット』の1場面におけるディケンズのそれに通じるものがある — “as if in ecstasy, the crests of the arches break into a marble foam, and toss themselves far into the blue sky in flashes and wreaths of sculptured spray, as if the breakers on the Lido shore had been frost-bound before they fell, and the sea-nymphs had inlaid them with coral and amethyst” (qtd. in Conrad 151)。ペンとインクによるものか、建築物の一部か、という違いはあるが、ディケンズとラスキンはいずれも細部の装飾のエクスタシーに魅せられたのである。一方、ヴィクトリア朝にはまた、明らかに「やりすぎ」といえるくらい装飾が肥大化することもあった。1851年のロンドン万博に出品されたものの中には、装飾過多のあまり実用性が損なわれている品々があった。その中のひとつ、「装飾が重すぎて食卓では使えない」ナイフやフォーク類にはコンラッドも触れているが、これなどは、『荒涼館』のプリンス・ターヴィドロップの筆跡に似ている — “he put so many unnecessary letters into short words, that they sometimes quite lost their English appearance” (*BH* 195)。オーウェル (George Orwell) は、ディケンズのことを “He is all fragments, all details” と評した上で続けて、“rotten architecture, but wonderful gargoyles” と述べているが (750)、ヴィクトリア朝においては、細部が肥大化したり、その意匠が凝ったものになることは珍しくはなかった。

文字がそれ自体として機能する一方で、イメージやキャラクターの源泉でもあるというのも、ヴィクトリア朝においては特別奇異なことではなかった。テキストとイメージとが互いを排除することなく、時には絡み合いながらページ上で共存するのは、ヴィクトリア朝人にとっては自然なことだった、とカーティス (Gerard Curtis) は述べている。テキストからイメージが紡ぎ出されるような表現も、中世の彩色写本にまで遡ることができる1つの伝統だし、また18世紀から19世紀にかけての初等教育においても、文字からイメージを紡ぎだすような柔軟な想像力を育むことが奨励されてさえた。しかし、ヴィクトリア朝初期にはページ上で肩を並べていたテキストとイメージとの共存関係は、1850年代にパラダイム・シフトを迎え、世紀の終わりまでには、(文化の表舞台においては) テキストがイメージを駆逐していくことになる。そのようにカーティスは論じている。

しかし、1830年代、駆け出しの物書きとしてディケンズが飛び込んだのは、テキストとイメージが肩を並べるところか、はるかにイメージ優位の世界だっ

た。まず彼の出世作からして言葉で描かれた『スケッチ集』であるし、次に彼が依頼されたのも、人気画家の描いた絵に合わせて短いコメントを提供するという、悪く言えば「刺身の具」のような仕事だった（松村 16-17）。ディケンズが、当時のイメージ上位の慣習を覆しつつ、作家としての地歩を固めていく経緯は、カーティスが言う、ヴィクトリア朝においてテキストがイメージを凌駕していく過程そのものだったといえる。従って、結果的にみれば、ディケンズはテキストの地位向上に貢献した立役者といえるかもしれない。だが、既にみたように、あれだけ豊かなイメージの宝庫を自らの内に抱え込んでいた彼を、テキスト対イメージ、小説対視覚芸術の構図で捉えること自体、あまり意味がない。後に『ピクウィック・クラブ』に発展した「ニムロッド・クラブ」の構想を聞かされたとき、ディケンズは、当初の「絵に合わせて書く」という案に反対し、「テキストから図版が自然に出てくる方がはるかによいだろう」と述べたという（Kitten 34）。無論、この言葉には才能ある新進作家の自負が窺える。しかし同時に、これは、文字がイメージやキャラクターに化ける世界を幾つも知っていた彼にとっては、ごく自然で正直な言葉ではなかっただろうか。確かにディケンズは絵とテキストの力関係を逆転させたが、その一方で彼は、テキストから自由にイメージの華を咲かせた作家でもあった。いずれの点においても、彼は同時代の想像力を体現していたのである。

初めの方でみた、断片でもって読者に人物の全体像を思い浮かべさせるといふ、ディケンズの速記的な表現についても、それに似た傾向をヴィクトリア朝人の想像力の中に見出すことが出来る。ボズ（つまりディケンズ）の想像力について、先ほどみたのと同じ論考の中で、ミラーは次のように述べている。

“*Ex ungue leonem*—as the whole beast may be conjured up from a single claw, or as an archaeologist reconstructs a vanished civilization from a few potsherds, so Boz can tell a man and all his life from even so small and peripheral a part of him as his door knocker” (100; 強調は原文による)。

この文脈でミラーは、考古学者を比喩として引き合いに出しているだけで、その実例を挙げてはいないが、ヴィクトリア朝文化において「断片」がどう扱われたか、数々の実例を挙げているのがハッター（Albert D. Hutter）である。1983年の『互いの友』を扱った論考の中で、ハッターは断片から全体像を構築する想像力を刺激する事例が、ヴィクトリア朝文化の異なった分野に散見するものであったことを示している。例えば、猟奇的殺人の被害者ハナ・ブラウンの切断された胴体を調べた外科医が、彼女の生活、生い立ち、素性を割り出

したばかりでなく、犯人像についても幾らか語り得た、という事実にはハッターは触れている。この事件の新聞報道を読んだ読者は、ディケンズの「モンマス・ストリート随想」の語り手のように想像を膨らませて、断片から人物像を思い描いたに違いない。手がかりとして与えられた断片から全体像を構築するという点では、古生物学も、考古学も、科学的犯罪捜査も、歴史学も、そしてホームズのような探偵も、みな同じである。ヴィクトリア朝文化において、断片を全体像へと膨らませることへの関心は高かったのであり、当時の人々はしばしば断片を見せられて全体を思い浮かべるように求められたのだ、とハッターは示唆している。

ハナ・ブラウン殺人事件の場合、ハッターが論じているように、切断された身体は蹂躪された正義の象徴であり、断片から被害者の全体像を再構築する作業には、損なわれた社会秩序を取り戻すという意味があった。ディケンズもまた、作家としての想像力を用いて、ヴィクトリア朝社会に生じた亀裂を埋めようとしたのだ、といえる。例えば、ピケット（Lyn Pykett）が指摘しているように、『ハウスホールド・ワーズ』創刊の目的のひとつは、バラバラになった社会階層をひとつにまとめることであった（124）。しかし、ディケンズは常にあるべき秩序や全体性のためだけに執筆したわけではない。人の営みやロンドンの情景が断片的にしか捉えられないからこそ、怪しさと危うさにも彼は魅惑され続けた。断片に惹かれ、断片をこの上なく面白くしてくれるディケンズの想像力の働きは、特に本稿で「速記」をとっかかりにして取り上げた部分の多くに関しては、「空想」と訳され、概して *imagination* に劣るとされる *fancy* に近いのかもしれない。しかし、この *fancy* があればこそ、デイヴィッドが証言しているように、無味乾燥な速記の勉強が、「エジプトの寺院」での冒険に変貌するのであり、禍々しい事物がおとぎ話の中のキャラクターに変わるのであり、つまりは味気なく陰鬱な世界にもロマンティックなものが生れるのだ。Fancy を働かせることができれば、世界は思いがけなくも、ごく局所的な、「ちょっとした」ところから変わり得るのかもしれないのである。

* 本稿は、2007年度ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会（2007年6月9日、於東京理科大学）で発表した同名の講演原稿に加筆・修正したものである。

参考文献

- ディケンズの作品からの原文による引用はすべて The Oxford Illustrated Dickens 版による。
- Bagehot, Walter. "Charles Dickens." *National Review* 7 (1858): 458–86. Rpt. in Hollington 167–92.
- Baumgarten, Murray. "Calligraphy and Code: Writing in *Great Expectations*." *Dickens Studies Annual* 11 (1983): 61–72.
- Carlton, William J. *Charles Dickens, Shorthand Writer*. 1926. Ed. Norman Page. London: Routledge, 1999. Vol. 3 of *Charles Dickens: Family History*. 5 vols. 1999.
- Conrad, Peter. *The Victorian Treasure-House*. London: Collins, 1973.
- Curtis, Gerard. *Visual Words: Art and the Material Book in Victorian England*. Aldershot: Ashgate, 2002.
- Hollington, Michael, ed. *Charles Dickens: Critical Assessments*. Vol. 1. Mountfield: Helm Information, 1995.
- Horne, R.H. "Charles Dickens." *A New Spirit of the Age*. Vol. 1. London, 1844. Rpt. in Hollington 94–101.
- Hutter, Albert D. "Dismemberment and Articulation in *Our Mutual Friend*." *Dickens Studies Annual* 11 (1983): 135–75.
- Kitton, F.G. *Dickens and His Illustrators*. London, 1899.
- Kreilkamp, Ivan. "Speech on Paper: Charles Dickens, Victorian Phonography, and the Reform of Writing." *Literary Secretaries / Secretarial Culture*. Eds. Leah Price and Pamela Thurschwell. Aldershot: Ashgate, 2005. 13–31.
- Miller, J. Hillis. "The Fiction of Realism: *Sketches by Boz*, *Oliver Twist*, and Cruikshank's Illustrations." *Dickens Centennial Essays*. Eds. Ada Nisbet and Blake Nevius. Berkeley: U of California P, 1971. 85–153.
- Marcus, Steven. "Language into Structure: *Pickwick* Revisited." *Daedalus* 101 (1972): 183–202.
- Orwell, George. "Charles Dickens." *Inside the Whale*. London, 1940. Rpt. in Hollington 717–55.
- Paroissien, David. "Characterization." *Oxford Rearder's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. 1999. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Pykett, Lyn. *Charles Dickens*. Basingstoke: Palgrave, 2002.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. 1970. New York: Viking, 1972.
- ツヴァイク, シュテファン. 『三人の巨匠』柴田翔他訳, みすず書房, 1961.
- ディケンズ, チャールズ. 『ハード・タイムズ』山村元彦・竹村義和・田中孝信共訳, 英宝社, 2000.
- フォースター, ジョン. 『チャールズ・ディケンズの生涯 上巻』宮崎孝一監訳, 研友社, 1985.
- 松村昌家. 『ディケンズの小説とその時代』研究社, 1989.

慈善活動家としてのディケンズ —ユーレイニア・コテージへの評価—

Dickens and Charity:

An Evaluation of Urania Cottage

武井 暁子

Akiko TAKEI

1. 始めに

チャールズ・ディケンズが、創作、雑誌出版、公開朗読など作家本来の活動のほか、慈善活動に精力的に取り組んできたことはよく知られている。なかでも、ディケンズと彼と公私にわたって親しい友人且つ慈善家であったアンジェラ・バーデット＝クーツ (Angela Georgiana Burdett-Coutts, 以下クーツと略記) が共同で行った売春婦更生のための施設、ユーレイニア・コテージ (Urania Cottage, 以下コテージと略記) の運営は、ディケンズが1847–57年までの長期にわたって継続的に専念した活動であり、彼の慈善活動家としての一面を知るために非常に重要である。Household Words (以下HWと略記) 刊行ほどワンマン運営ではなかったが、ディケンズは、既存施設の視察、専門家からの情報収集、場所探し、家主との契約、スタッフの採用、収容者の面接、手に負えない収容者の処分、建物の増築、メンテナンスなど、設立から軌道に乗るまで、コテージ運営を全面的に仕切った。ディケンズがコテージに関わっていた時期は壮年期で、作家としての全盛期と重なり、気力体力両面で充実していた時期であった。

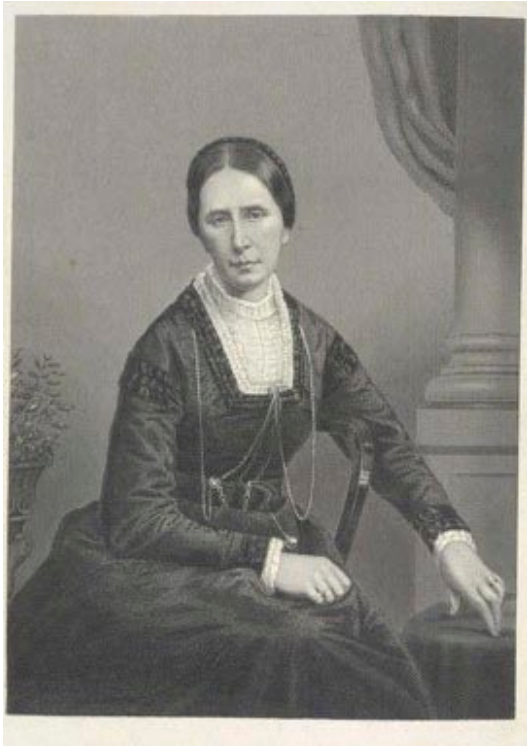
売春はヴィクトリア朝のジェンダーと性規範を考える上で不可欠な問題で、ディケンズも複数の作品で取り上げている。にもかかわらず、ディケンズのコテージ運営は、これまでに、フィリップ・コリンズ (Philip Collins)、ノリス・ポープ (Norris Pope)、マイケル・スレイター (Michael Slater)、パメラ・ジェインズ (Pamela Janes) らの研究はあるものの、¹⁾ コテージの発案、運営の実務、収容者たちの生活、成果までを包括的に論じたものは少なく、その全貌は依然

わかりにくい。この論では、ディケンズからクーツに宛てた書簡、HWに掲載したエッセイを精査し、コテージの活動の全体像を明らかにした上で、評価したい。さらに、ディケンズのコテージ運営はフィクションにあまり影響をあたえていない、とよくいわれるが、経営管理者ディケンズと作家ディケンズの乖離についても考察したい。

2. クーツの略歴

論を始めるにあたって、クーツの経歴を簡単に紹介し、ディケンズとクーツの交友の実態を明らかにしたい。クーツはディケンズより2歳年下で、1814年4月24日に生まれた。父フランシス（Sir Francis Burdett）はウィリアム・ピット（William Pitt the Younger）と対立したことで知られる革新派の政治家であった。母方の祖父トマス・クーツ（Thomas Coutts）はエディンバラの銀行家一族出身で、父の銀行の支店をロンドン、ストランド59番地に開設し、‘Coutts and Co.’の母体を作り、財を築いた。ディケンズはクーツ銀行に口座を持っていた。

1837年、クーツ23歳のとき、祖父トマスの莫大な財産を相続し、「イングランドで最も裕福な女相続人」として、あまねく知られるようになった。財産相続の条件に、クーツ姓を名乗ることがあり、以来バーデット＝クーツを名乗る。クーツは、絵画のコレクターとして知られ、大規模なパーティを催し、ウィリアム・グラッドストーン（William Gladstone）、ベンジャミン・ディズレイリ



Angela Georgiana Burdett-Coutts (1814–1906)

（Benjamin Disraeli）らと親交があった。彼女には求婚がひきも切らなかったが、長いあいだ結婚しなかった。コテージ設立時には、クーツはナポレオン戦争の英雄で45才年上のウェリントン公（the Duke of Wellington）と恋愛関係にあった。彼女のウェリントン公への求婚は断られたが、二人の関係はウェリントン公が1852年に死ぬまで続いた。1871年、クーツ67歳のとき、37才年下の秘書ウィリアム・アシュミード・バーレット（William Ashmead Barlett）と結婚し、ヴィクトリア女王をして「狂気の沙汰」と言わせしめた。

このように、クーツの私生活は華やかだったが、彼女は敬虔であり、財産の大部分は、慈善事業と寄付に費やされた。クーツの事業には、コテージ設立のほかに、ロンドンの貧困地区スピタルフィールズに女性のための裁縫学校設立、やはり貧困地区のノヴァ・スコシャ・ガーデンズに低所得層向けの共同住宅建設、禁酒協会（The Temperance Society）、国立子供虐待防止協会（The National Society of the Prevention of Cruelty to Children）、王立動物虐待防止協会（The Royal Society of the Prevention of Cruelty to Animals）の設立がある。クーツの活動はイギリス国外にもおよび、オーストラリア先住民民族アボリジニーへの支援、トルコ＝ロシア戦争のトルコ人難民への援助、さらに、フロレンス・ナイティンゲール（Florence Nightingale）らと提携して看護活動への支援などを行なった。これらの功績により、1871年、クーツはバロネスに叙せられた。ベスナル・グリーンに残る‘Baroness Road’という地名は彼女のパロネス叙勲に由来する。

3. ディケンズとクーツの出会い

ディケンズとクーツとの初対面は、文献によって1835–40年と異同がある²。この間、1836年にディケンズは新聞記者をやめ、作家に専念することを決意、結婚、1837年にクーツが財産相続して、双方にとって人生の節目になる出来事が起こるので、二人の出会いが人生の節目の前と後では、意味合いが違ってくる。本論では、ディケンズからクーツ宛の書簡選集編者エドガー・ジョンソン（Edgar Johnson）の1835年説を採用する。ジョンソンによれば、ディケンズとクーツの出会いの仕掛け人はクーツの祖父トマスの共同経営者エドワード・マーチバンクス（Edward Marjoribanks）で、二人をディナーに招待した。このとき、ディケンズは23歳で、新聞記者の傍ら、*Monthly Magazine*, *Bells Life in London*, *Evening Chronicle*などに短編を発表していた。クーツは財産相続前であった。マーチバンクスがディケンズを自分の銀行の創立者の孫娘に引き合わせた意図は不明だが、ディケンズはこの日の出会いに運命的なものを感じていたようだ。ディケンズとマーチバンクスとの交友はディケンズが名を成してからも続き、1857年1月14日付の手紙で、ディケンズは、マーチバンクス

が『凍れる海』(*The Frozen Deep*) の上演を楽しんだと聞いてうれしい、と書いている。³

ディケンズの直感を裏付けるかのように、ディケンズとクーツとの親交は公私にわたり長く続いた。コテージ運営に加え、ディケンズはクーツのために、ひっきりなしに来る寄付の依頼を吟味、取捨選択し、慈善活動に関して助言をあたえ、プランを練るなど、秘書兼アドバイザーとして無償で働いた。クーツはディケンズに報いるために、彼の長男チャーリーのイートン校での学費を支払い、次男ウォルターに陸軍士官候補生のポストを提供した。ディケンズはクーツ宛にチャーリーとウォルターの学業成果や人生設計について頻繁に手紙を書き、『マーティン・チャズルウィット』を献呈し、他の小説の執筆状況も書いている。ディケンズが妻キャサリンと別居したことをきっかけに、二人の親交は終わったというのが定説になっているが、これは半分正しく半分間違っている。確かに、別居以降ディケンズがクーツの慈善活動に関わることはなく、キャサリンとの関係を修復しようとのクーツの申し出をディケンズは頑として受け付けなかった。しかし、頻度は少なくなったが、クーツのコンパニオン、ブラウン夫人 (Mrs Brown) を通して、ディケンズは親愛と敬意をこめた手紙をクーツに書いた。

4. ディケンズとクーツの最初の共同慈善事業

ディケンズとクーツの慈善活動での最初の提携は、1843 年 9 月 14 日夜、クーツの依頼で、ディケンズがロンドン最下層地区の一つホーボン (『オリヴァー・トウィスト』のフェイギン (Fagin) の巣窟がある)、サフロン・ヒル所在、フィールド・レーン貧民学校 (Field Lane Ragged School) を視察したことから始まる。⁴ 2 日後の 9 月 16 日、クーツに書いた報告は、「ひどい光景でした。オリヴァー・トウィストを引き合いに出すのは恥ずかしいのですが、まさに、あのユダヤ人 [フェイギン] が住んでいそうな場所でした」と始まり、住環境が劣悪で、70 人近くいる子供たちが不潔で、衣類が粗末なことを指摘し、教師たちの熱意は評価するが、愛情や親切を知らない子供に、神の存在を教え込むだけでも困難である、と説く。そして、子供たちのほとんどは文字を読めないため、教師は善悪の区別から教えるのだが、彼らは昼間物売り、物乞い、窃盗をして疲れきった状態で学校にやってくるので、物事を覚えるのが非常に遅い、子供たちが来るだけでもたいしたものだ、と述べる。ディケンズは、子供たちが長男チャーリーと同年代ということもあって、あまりの惨状に大変ショックを受けたようだ。学校は、教師たちの手弁当で運営されているため、非常に貧しく、せめてもっとよい部屋と洗濯設備があればよいが、果たしてこの努力が続くかはわか

らず、子供たちが改善されるのは不可能ではないのか、しかし、クーツの慈善を受けるにはふさわしい試み (experiment) であるから、必要ならまた訪問すると結ばれている (‘experiment’ という語は、ディケンズからクーツ宛の手紙でたびたび使われた)。後年、ディケンズはコテージへの収容者を募るため貧民学校を訪れたが、貧民学校出身者はあまりにも惨めで救いようがないと思ったらしい。

このとき、ディケンズの不屈の意志を物語るエピソードがある。子供たちは、ディケンズが白いズボンと明るい色の靴を身につけているのを見て、大笑いした。同行者のスタンフィールド氏 (Mr Stanfield) は、あまりの悪臭に耐えかねてすぐ退去してしまい、ディケンズは好意的とはいいいかねる子供たちの中で、孤軍奮闘だったが、踏みとどまり、子供たちに質問をして答えさせた。子供たちは、ディケンズが彼らの返答に興味を持っているのがわかったと、行儀良くなった。ディケンズは、少年の一人は「賢くて見事な答えをした」と書いている。

この報告には、貧困層の道德と品位向上のためには、まず衣食住の保証が肝要であり、精神論だけを強要しても無意味である、生活環境が整えば彼らの精神面が向上する可能性はある、個人の善意に頼った支援には限界がある、などの主張がみられ、監獄、精神病院の改善、公衆衛生などへのディケンズの考えと共通する。以降、ディケンズはこの学校を数回訪問し、1852 年 3 月 13 日、HW に “A Sleep to Startle Us” というタイトルで寮の視察結果を書いた。⁵ このとき、学校は職業訓練校になっていて、ホーボンよりはましなファリンドン・ストリートに移転していた。寮には、換気装置や水道が設置されるなどの改善はあったが、食事は量が少なく、滞在者が 167 人もいて過密状態だった。ディケンズは、政府が無能なことを批判し、財政援助により、ちゃんとした訓練と教育をすれば訓練生は有能な労働者になると主張した。

5. コテージの発案と設立

貧民学校から始まったディケンズとクーツの慈善事業は、コテージで、長期スパンの本格的な形で行われることになった。クーツが売春婦の救済と更生を思いついたのは、1. ビカディリーにある彼女の邸宅の玄関前で商売をする女性たちを見て大いに同情した、2. 尊敬する父親に私生児がいたことにショックを受けた、の理由からであった。

売春婦のための施設設立のアイディアは、1846 年 5 月 26 日付のディケンズからクーツ宛の手紙に最初に登場する。施設の最終目標は、更生した女性を植民地に移住させ、現地在住のイギリス人男性と結婚させることだった。エドナ・ヒーリー (Edna Healey) によると、クーツは、売春婦更生と結婚をセットにす

る発想をそもそも理解できなかったが、ディケンズは、収容者に悔悟と再教育の褒美として結婚をあたえるべきだと力説して、クーツを説得した。⁶ クーツの考えは、莫大な財産を持ち、結婚にはいたらなかったものの、ウェリントン公と恋愛関係にある、物心両方に恵まれた独身女性ならではの発想といえようが、庶民感情を全く理解しないものだ。このことをはじめとして、ディケンズはクーツとの共同事業を通して、世間知らずのクーツに巷の実情を知らせ、プラクティカルな発想をさせるように心を砕いていたが、クーツがディケンズのアイデアを採用しないこともあった。

手紙は、具体的且つ時間と資金を有効活用するアイデア満載で、結局このとき書かれたプランがほとんど実行された。クーツは施設の新築を考えたらしいのだが、ディケンズは時間と経費の節約のため、ロンドン市内もしくは近郊の家の改築を提案した。収容者は、ロンドン市内の刑務所所長が、受刑者の中から、面接と本人の意志確認を経て選び、刑期終了後、ただちにコテージに収容する。収容者を探す手間が省けるし、刑務所を出てから再度悪の道に陥るのを防ぐことができて、一石二鳥である。コテージに入所後、収容者は、まず保護観察を受け、その後、本格的な更生にむけて訓練と教育を受ける。そして、刑務所管理のエキスパートでありノーフォーク・アイランド刑務所所長を務めたアレクサンダー・マコノキー (Alexander Maconochie) 考案のマーク・システムを応用し、収容者の行動にポイントをつける (後で詳しく説明する)。ちなみにクーツはマーク・システムには反対だった。女性たちは、コテージで秩序、時間厳守、清潔の習慣を身につけ、洗濯、裁縫、炊事などの家事を学ぶ。

コテージの教育方針は、親切と寛容によって、女性たちの自尊心や自制心を回復することだった。懲罰、威圧、彼女たちの人格と素行を非難することは当然厳禁である。入所時に、女性は、あなたは墮落して道を踏み外したが、このシェルターがあることによって、まだ可能性は失われていない、幸福を再び得る手段はあなたの手の中にあり、あなた自身の行いにかかっている、との説明を受ける。社会復帰が認められるには、彼女は自制心、真摯さ、周囲の信頼に答えるために努力する決意があることを証明しなければならない。自己努力と他人に評価されたい願望に働きかけて、中流階級の規範から外れた人間を、中流階級のスタンダードに基づいて再教育し、社会復帰させることは、ヴィクトリア朝中期に精神病患者を治療するのに使われたモラル・トリートメント (moral treatment) と同じである。⁷ コテージの場合、保護観察の期間をポイントによって決定する、累計ポイントは、1,000 ポイントあたり 6 シリング 6 ペンスに換算し、再教育修了者に、再出発の資金としてあたえるなど、非常にわかりやすい形でよい行いが褒章に結びついている。

コテージの生活とモラル・トリートメントのもう一つの類似点は、贅沢三昧ではないものの、衣食住をよくし、女性たちに抑圧と不自由をあたえないようにしたことである。ディケンズは、自らトタナム・コート・ロードの卸売店シュールブレッズ (Shoolbread's) に服と生地を買いに行き、手ごろな値段で、きちんとし、しかも明るく見えるように仕立てさせた。このとき、4 種類の色パターンを買い、収容者が同じ服装で外出して、近所の目を引かないようにと、細かいところまで気をつかった。クーツは女性たちの服装を明るい色彩のものにすることは非行につながると考えたが、ディケンズは、教育の最終段階ではすべての誘惑から遠ざけられるべきではない、と主張した。⁸ 衣服が人間の心理状態に影響することを熟知していた点で、ディケンズに分がある。部屋は相部屋だったが、ベッドは個別で、女性たちは喜んだ。施設の名前は、既存施設のように 'penitent', 'reformatory' などの、明らかに素行不良者の更生施設だとわかる名前ではなく、天体の名前をつけて、コテージは収容者の家 (home) であると言った。ここにも、中流階級の家と同じ環境で女性たちを更生させようとの意図がみられる。そして、衛生面の配慮も抜かりがなかった。コテージの排水設備が汚水層に直結していて、1850 年 9 月と 1857 年 2 月にディケンズは工事を依頼した。1853 年、コテージは増築され、1857 年にガスが引かれた。

物質面だけではなく、コテージの雰囲気作りにもディケンズの注意は及んだ。家庭的な雰囲気を重視したのは前に述べたとおりである。彼がもっとも気を使ったのは、コテージの雰囲気が明るく希望に満ちた感じになるように、別の言い方をするなら、既存施設のように、悔悟を強要して、陰鬱で堅苦しい雰囲気にならないようにという点だった。そのため、ディケンズは、女性たちと牧師の個別面談は行わないことに決め、彼女たちにあたえる読み物は説教がましいものは避けた。彼は中古ではあったがピアノを買い、女性たちは花壇で花を育てることができた。この類の施設にピアノを置くのはまれなことで、後に驚嘆された。ディケンズの運営教育システムを、例えばシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の『ジェイン・エア』(Jane Eyre; 1847) に登場するローウッド・スクール (Lowood School) と比べると、いかに進んでいるかわかる。

6. コテージの生活

1 年半の準備期間を経て、1847 年 11 月、コテージはロンドン西部、シェファーズ・ブッシュ 1817 番地で開所した (地図 1, 2 の矢印の場所)。この場所を選んだのは、郊外で税金が安く、人目につかず、誘惑が少ないからであろう。ジェインズはコテージの 1 ヶ月あたりの経費は 41-43 ポンドと推定する。⁹ 1861 年出版のビートン夫人 (Mrs Beeton) の家政読本によると、住み込み家政婦の



地図 1

年収が20-45ポンドだった。¹⁰ コテージの年間経費を定員いっぱいの15人で割ると34ポンドで、家賃、光熱費、食費を差し引くと、家政婦の最低ラインより少し上の年収ほどの年間経費だろうか。コテージは、少なくとも安かろう悪かろうのひどい待遇ではなく、女性たちの暮らしはまずまず快適だった。賃貸契約の際、ディケンズは物件を施設に改装すると言ったが、施設の趣旨や収容者の身分については詳細を明かさなかった。以降、施設のプライバシーを守る努力は続けられた。

コテージは、監督者2人と収容者13人が住むのに十分な広さがあり、保護観察用と本期間用のスペースに分かれていた。初期のころは、収容者の大半はコールドバス・フィールズ刑務所やトットヒル・フィールズ・ブライドウェル刑務所の受刑者の中から、所長が本人の意志を確認して選んだ女性だった。1853年4月23日に、ディケンズがHWに掲載したエッセイ“Home for Homeless Women”（以下 Home for と略記）は、コテージ開所から5年半経過し、軌道にのってから書かれたもので、成功例を数件紹介している。¹¹ この時点で、収容者累計56人のうち、30人がコテージでの生活を全うし、オーストラリアをはじめとする植民地へ移住（内7人が結婚）、10人が素行不良により強制退去、7人が保護観察中に自主退去、7人が逃亡、3人が移住途中再び元の生業に戻った。半分が更生したので、まずまずの成果である。ヒーリーによれば、ディケンズはコテージの成果について過大な期待や幻想は持っていなかったの

の結果にまずまず満足していた。¹² 成功例の滞在期間は最短7ヶ月、最長18ヶ月とかなりの幅があるが、おおむね1年だった。コテージの運営は1847-62年までの15年間で、収容者のトータルは150人であった。脱落者を勘定に入れても、常時10人の収容者がいた。

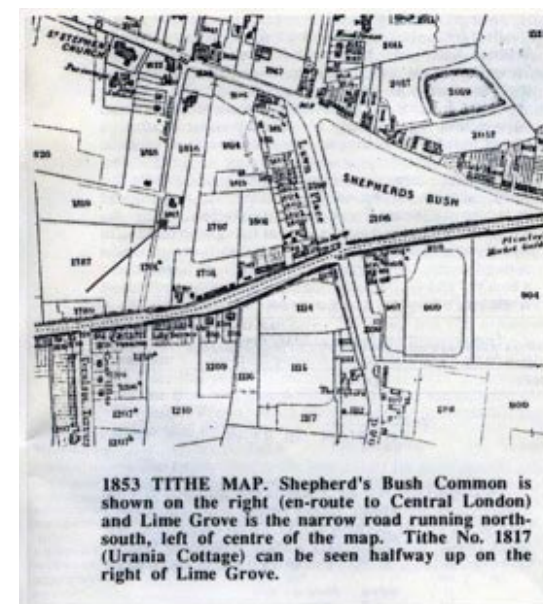
Home for によると収容者たちの平日のスケジュールは下記のとおりである。

6:00	起床
7:45	礼拝 朝食
10:30-12:30	学習
13:00	昼食
	針仕事、運動など
18:00	ティータイム
	夕食
20:30	礼拝
21:00	就寝

土曜：大掃除、衣類支給、入浴

日曜：午前教会、午後は監督者と宗教の勉強

このスケジュールの特徴は、早寝早起きであることと、時間配分に比較的余裕があることだ。早寝早起きは収容者に規則正しさ、秩序、時間厳守を身につけさせるために不可欠だった。学習とは読み書き算術であった。女性たちは、1週間交代で掃除、食器洗い、炊事、針仕事を分担して行い、1日おきに洗濯日が設けられた。パンは自家製だった。ディケンズは「備え付けのオーブンがあるのだから、パンを買うことは認めない」と書いている（1850.4.14）。経費節減のためでもあったろう。将来主婦として家庭を切り盛りする上で必要なことを最重視した教育内容である。



地図 2

既に述べたとおり、収容者の行動管理のため、マコノキー考案のマーク・システムが採用された。これは、もともと受刑者管理が目的だったが、ディケンズは、コテージの女性たちが覚えやすいように、マコノキーのシステムを簡略化した。¹³ コテージでは、行動の判断基準が、正直、勤勉、気質、慎みある行動と会話、秩序、時間厳守、節約、清潔、節制（中庸、辛抱、穏やかさなど）の9つに分かれ、それぞれの項目で0-4点までのポイントがついた。不適格な行為は他の女性にもわかるように赤字で失格マークがつき、40点マイナスになった。ポイント化することによって、善行がわかりやすい形で高い評価につながり、しかもポイントが金銭に換算されるため、女性たちはこのシステムを重視した。これは、懲罰や威嚇ではなく、自己努力と他人に評価されたい願望に働きかけて、理性や道德心の回復を促すモラル・トリートメントの巧みな応用である。

ちなみに、マコノキーのシステムでは、快適さを辛抱した受刑者に追加ポイントをあたえたが、ディケンズは「自発的な自己否定」は判断基準から除外した。自己否定といっても、極端なものではなく、洗濯の後ビールを飲まない、お茶や砂糖をとらないという程度のものだった。この項目を除外した理由について、ディケンズは、マーク・システムをよく理解する前に女性たちに不満と不信を抱かせる恐れがあるから、と述べた（1848.4.29）。飲食を我慢させるのは懲罰にほかならず、反抗心をあおるばかりで得策ではない、との明察である。

以上の事例であきらかなように、既存の刑務所や感化院に比べて、コテージの収容者管理はゆるやかで、情操面への配慮もあった。しかし、一方で、女性たちが放縦にならないような措置が次のとおり講じられた。日曜に教会に行くときは必ず監督者が同行した。両親との面会は月に1度、他の親戚や友人は3ヶ月に1度許可されていたが、監督者が立ち会い、会話の一部始終を聞いた。ディケンズは「女性たちと友達あまりしゃべることがなく、感情を表わすことはめったにない。彼女たちは面会が終わるとむしろほっとした感じである」と書いている。¹⁴ もっとも、頼りになる肉親や友人がいれば、非行に陥ることはないのだから、こういう機会はそれほど多くはなかっただろう。知人に手紙を書くのは、運営委員会の許可を得て月1回認められたが、コテージからの手紙はすべて監督者が目を通してから投函された。女性たちへの手紙は、監督者の前で本人が開封して読み上げた。門は常に施錠され、女性たちが副監督者の監視下で、交代で門番を務めた。この仕事は彼女たちにとって誇りであったようだ。10分以上姿が見えない女性は搜索対象になった。先に述べたように、女性たちはベッドを個別にあたえられたが、秘密にものを隠すことがないように、ベッドメイキングは他人が行った。このように、ディケンズは監督者の監

視に加えて、収容者間の相互監視を取り入れることによって、女性たちを効率的に管理した。ミシェル・フーコー（Michel Foucault）が『監獄の誕生』（*The Birth of Prison*; 1977）において、監督者の恒常的監視により、ごく平凡な空間が懲罰的空間になりうることを論じたことはよく知られているが、¹⁵ ディケンズは、100年以上前にフーコーの理論をより高度な形で実践した。コテージは、人道主義に基づいて設立され、収容者を寛大に扱っているように見えながら、その実、ディケンズ自身の言葉を借りれば、「収容者間で親愛の情が育つことはめったにない」ほどの、¹⁶ 緊張を強いられる懲罰的空間でもあった。

7. 女性たちとの戦い

ディケンズが取り入れた居住条件の整備、自己努力の重視、相互監視は、ヴィクトリア朝中期では非常に斬新な行動矯正システムであったが、理論通りに行かないのが世のならいである。コテージには、HWで報告されたような成功例と同数の失敗例もあった。ディケンズは1846年5月にコテージのプランを考えてから、1855年11月にHWの副編集長ウィリアム・ヘンリー・ウィルズ（William Henry Wills）をクーツの秘書に推薦して、コテージ運営のかなりの部分をウィルズに任せるまで、実にまめにクーツに手紙を書いて、経費や収容者たちの様子を報告した。手紙で、実名を挙げられている女性は、たいてい問題を起こして退去処分を受けた女性ばかりである。HWのどちらかという冷静で淡々とした報告を編集済みの録画とすれば、クーツへの手紙は、ディケンズには気の毒なようだが、手に負えない収容者相手に奮闘するディケンズの声や表情が生中継で伝わってくるようだ。ここで、失敗例を紹介したい。

イザベラ・ゴードン（Isabella Gordon）は1849年にトットヒル刑務所から入所した。同年2月10日にスタッフがゴードンの過去を尋問し、おそらく口論になったのだろう。収容者の前科を詮索することは禁止事項で、このスタッフは解雇された。5月16日に、ゴードンは他の収容者と口論し、8月12日に退去が決まりかけたが、このときは猶予された。だが、11月6日に他2名と共に謀して監督者に反抗を企てたため、退去が決定した。退去を言い渡されると、ゴードンは2階に上がってダンスの真似をして、服のすそをつまんでお辞儀をするという不敵な態度を取った。しかし、コテージを出るときは、挑戦的な態度はどこへやら、彼女は泣き、うなだれていた。このときの様子をディケンズは次のようにクーツに書いた。

The girl herself, now that it had really come to this, cried, and hung down her head, and when she got out at the door, stopped and leaned against the

house for a minute or two before she went to the gate — in a most miserable and wretched state. As it was impossible to relent, with any hope of doing good, we could not do so. We passed her in the lane, afterwards, going slowly away, and wiping her face with her shawl. A more forlorn and hopeless thing altogether, I never saw. (1849.11.6)

監督者と他の女性たちは、以前口論した者もふくめて、泣きながらゴードンのために許しを請うたが、処分が取り消されることはなかった。Home for に、「退去を脅しの手段として使うことはない」と書かれているとおり¹⁷、強制退去は本当に最終手段であり、本人がどんなに泣き喚こうが、覆ることは絶対なかった。懲罰や威嚇に頼らないことは、違反行為への例外なき厳格な処分と表裏一体のものだった。

ゴードンが退去後どうなったかは不明だが、彼女の追放の場面は『デイヴィッド・コパフィールド』第22章でマーサ・エンデル (Martha Endell) が故郷での白眼視に耐えかねてロンドンへ逃避を決意する場面のモデルになったとされている。ここでのマーサの様子は次のように書かれている (イラスト参照)。



Then Martha arose, and gathering her shawl about her, covering her face with it, and weeping aloud, went slowly to the door. She stopped a moment before going out, as if she would have uttered something or turned back; but no word passed her lips. Making the same low, dreary, wretched moaning in her shawl, she went away.¹⁸

『デイヴィッド・コパフィールド』第22章
マーサ出奔直前の場面

DC 分冊では、22–24 章は 1849 年 12 月刊行の第 8 号に掲載されたので、ディケンズが大いに感銘を受けたゴードン退去の場面を早速小説に活用したことは確かである。ピーター・アクロイド (Peter Ackroyd) が指摘するように¹⁹、コテージにいるときもディケンズは小説家の目を持ち続けた。

女性たちの行動は一見今のわれわれとは縁遠いものに見える。ところが、意外なことに、よく吟味すると、現代の青少年の行動とかなり似た点がある。ゴードンの例でわかるように、素行不良者は、単独ではなく、徒党を組んでトラブルを起こすのが常だった。例えば、1854 年に入所したフランセス・克蘭ストーン (Frances Cranstone) は、仲間を扇動するが、自分は決して尻尾を捕まえられず、ゴードンよりも一枚上手だった。同年 4 月 16 日付のディケンズからクーツ宛の手紙に、克蘭ストーンのやりたい放題にまともな収容者から苦情が出ている、新入りは克蘭ストーンの真似をする必要に迫られている、コテージの雰囲気は悪くなるばかりで監督者が手を焼いている、と書かれている。このような状況で、ディケンズは即座に克蘭ストーンの退去を決定した。ゴードンはコテージを出るとき意気消沈していたが、次の引用のとおり、克蘭ストーンは最後まで他の女性と大喧嘩をして、すごんだ。

Soon after I left, Cranstone broke out against Louisa Cooper with that violence, that Louisa Cooper (half frightened to death) entreated to be locked up for safety, which was done, Cranstone then demanding to go straightway, and Mrs Marchmont not knowing whether she ought to let her, Cranstone made proclamation to the establishment that she intended in the meanwhile “to be a Devil.” Upon which Mrs. Marchmont locked her up in another room. (1854.4.16)

克蘭ストーン追放後、取り巻きは後を追って自主退去した (この例が示すように、リーダー格が追放されると取り巻きはたいてい自主退去した)。自主退去の申し出があった場合、24 時間の猶予をあたえ、本人に熟慮させる規則であったが、このとき、ディケンズは即座に退去を言い渡した。克蘭ストーン一派を一掃するためである。

ゴードンをはじめとして、コテージを退去させられた収容者がその後どうなったかは、たいてい不明だった。しかし、克蘭ストーンの場合、ディケンズはウィルズを通して、消息を把握していた。彼女はホワイトチャペルの下宿屋に住む男性のところで、家政婦として働き、小さな子供 3 人の世話をしていた。コテージにいた頃と違って、ちゃんと働いていたが、洗濯は下手で、雇い主の

新しい妻か姉妹らしき女性と折り合いが悪かった。適当な口実を使って家を抜け出す、ウィルズとの面会をすっぽかすなど、克蘭ストーンのトラブルメーカーぶりは相変わらずであった。

この他、ゴードンの取り巻きで自主退去したハナ・マイアーズ (Hannah Myers) が、5ヶ月後の1850年4月、重罪で12ヶ月の刑を言い渡され、トットヒル刑務所で服役、さらに1854年1月、ディケンズと彼女が同所で再会した話、ディケンズいわく「非常に悪質で偽善的」(1850.4.17) なジェマイマ・ヒスcock (Jemima Hiscock) ともう1名がコテージのビール貯蔵庫をナイフでこじ開け、侵入し、泥酔する話などがあり、短編集ができそうなほどだが、ディケンズの名誉のために、成功例を紹介したい。ルイザ・クーパー (Louisa Cooper) は克蘭ストーンと同時期にコテージにいた女性で、実名が出てくる女性の中では、珍しいくらい物静かで素行がよい。そのため、先の引用でもわかるように、克蘭ストーンたちの標的になったが、コテージでの再教育を全うし、南アフリカに移住した。彼女が移住前にクーツに宛てた手紙には、クーツへの敬意と感謝が繰り返され、コテージで楽しい時間を過ごした、と訥々と書かれている。

As I am about to leave England I am most anxious that one of my last acts should be to thank you my kind Benefactress for all your goodness to me I cannot find words to express my gratitude but with the help of that kind Providence who will never leave me nor forsake me if I pray to him I will by my future life try to prove it I often think of your kind and gentle words and the thoughts of them has many times been a comfort to me and will be when I am in a far distant land we do not sail till the 10th of November Mrs Boyle goes to Plymouth a week before may every blessing be yours Dear and Honnored Lady and may all the young people at the Home prove deserving your bounty it is a comfort to know there is one placed over them who cares so much about them I can never forget how much I dreaded her coming or how soon I learned to love and respect her she has been so very kind in writing to me and given me good advice I often think of Urania Cottage and the many happy hours I have spent there I have taken the liberty to write to Mr Tennant to thank him for all his kindness to me with your permission I will take the liberty of writing on my arrival at the Cape may every blessing be yours' Honnored Madam is the prayer of your Humble Servant (1854.10.20, Cooper to Burdett-Coutts, ビリオド脱落等原文のまま)

クーパーは移住してから2年後の1856年11月、イギリスに帰国して、コテージを訪ね、ディケンズと再会した。このとき、彼女は、身なりがよく、すっかり落ち着いた感じになっており、ディケンズへの土産にぎょっとするようなダチョウの卵細工を持参した、という、ほっとする後日談がある。ディケンズは、素行がよい女性たちのことは“All was going on well”など、ごく簡単にしか書かないのだが、クーパーの更生と再出発は、克蘭ストーンに手こずったこともあって、よほどうれしかったのであろう。

このように、ディケンズが実生活で会った売春婦たちを検証すると、文学作品に登場する、田舎の純朴な女性が地主の息子に誘惑されて捨てられたあげく私生児を出産して、故郷を追われてロンドンに出て売春婦になり、最後はテムズ川に身投げする、というステレオタイプが、いかに現実とかけ離れたものであったかがわかる。ディケンズのクーツ宛の手紙に登場する売春婦たちは、反抗的で、徒党を組んで騒動を起こすほどの計画性と行動力があり、コテージを退去させられてからも犯罪を重ねるなど、いろいろな女性がいた。彼女たちは罪の意識が希薄であるから、悔い改めることはないし、深い考えもなく悪事を繰り返す。挑戦的で放縦なエネルギーすら感じさせる彼女たちが、世をはかなんで身投げするとはおよそ考えられない。このタイプの女性について、ディケンズは「他の女性たちの場所を奪っている」と怒りをこめて書く(1854.1.4)。

一方、ディケンズ作品の‘fallen women’は、前非を悔いて更生を願う、稼業を続けているが世間の白い目に打ちひしがれている、のいずれかである。²⁰ コテージの素行不良者のような、攻撃的もしくは罪悪感がなくあっけらかんとしている女性はディケンズの小説には登場しない。コテージにいた女性とディケンズがコテージ運営に携わっていた1847-57年に出版されたフィクションに登場する‘fallen women’が似ている点は、ゴードン退去とマーサ出奔のときに双方がすすり泣いて、ショールで涙をふく、マーサとエムリー (Little Em'ly) がオーストラリアで更生する (マーサは結婚)、クーパーとエムリーが、身を落としたのが不思議なくらいおとなしくて行儀がよい、くらいだ。『ドンビー父子』のアリス・マーウッド (Alice Marwood) の病死、『荒涼館』のレイディ・デッドロック (Lady Dedlock) の自殺は、‘fallen women’は死をもって罪を償うべしというヴィクトリア朝文学の公式通りである。『リトル・ドリット』に登場する名無しの売春婦は打ちひしがれており、反抗的、あっけらかんとは程遠い。このように、ディケンズの小説では、‘fallen women’はステレオタイプの中でも非常に限られた役割しかあたえられなかった。ディケンズが、ゴードン退去を早速マーサ出奔の場面にアレンジしたことからも考えても、彼はコテージの女性たちに文学的素材になりうる要素を見出していたと思われる。また、ディケン

ズが彼女たちとの関わりを創作活動において生かす技量がなかったとは考えにくい。にもかかわらず、ディケンズは読者の反応を気にするあまり、売春婦たちを一面的にしか書けなかった。リスpekタビリティを重視するヴィクトリア朝中流階級の読者マーケットは、ファニー・ヒル (Fanny Hill)、エミール・ゾラ (Émile Zola) のナナ (Nana) のようなヒロインを受け入れるには、あまりにも狭量だった。

8. 結び—コテージへの評価

ここまで、ディケンズのコテージ運営について論じてきて、コテージはディケンズとクーツの使命感と熱意、ヴィクトリア朝中期の人道主義、収容者の自助努力に重きを置いて道徳的覚醒を促す新しい素行矯正法が結びついた産物だということがわかる。ディケンズからクーツ宛の手紙、HWに掲載された彼のエッセイから浮かび上がるのは、受刑者管理のエキスパート顔負けに女性たちを教育、管理して、煩瑣な実務をこなし、最先端のセラピーを実践する実験家、有能かつ厳格な経営者としてのディケンズの一面である。コテージは家庭的に見える反面、巧妙な監視体制を取り入れた緊張を強いる空間でもあった。『ハード・タイムズ』と『互いの友』において、事実のみを重視する実利一辺倒のカリキュラムと断片的な知識の丸暗記のみが取りえの教員量産システムを批判的に描いたディケンズは、実生活では、一変して管理教育の権化と見まがうばかりである。ここに、よく指摘されるディケンズの二重人格的な側面を見ることができよう。

コテージの収容者は更生したものと脱落したものが1対1で、果たして成功だったのか失敗だったのか非常に曖昧である。だが、ディケンズが多忙なスケジュールをやりくりして、世間から白眼視されていた女性たちを立ち直らせることに継続的に取り組み、比較的短期間で目的を果たしたことは評価すべきである。精神論に傾いた説教や懲罰に訴えることなく、結婚と家庭生活をインセンティブにしたのは、ディケンズならではの深い読みである。ディケンズがコテージから手を引いたのは妻キャサリンとの別居とその後のスキャンダルが原因であって、熱意がなくなったわけでも、運営がうまくいかなかったわけでもない。ディケンズ退任後、クーツは別の人間にコテージ運営を委託したが、尻すばみになり、1862年、コテージは閉鎖された。いかにディケンズが存在が大きかったかの証である。しかし、更生した女性と同数の失敗例があった理由は考える必要がある。

刑務所や類似の施設から事前説明と意思確認を経て、コテージに入所したにもかかわらず、目的を果たせなかった女性が続出したのは、入所前の選別、ス

タッフ、教育カリキュラム、収容者に複合的に問題があったからで、原因を特定することは不可能であるし、無意味でもある。しかしながら、すべての女性に、売春は悪徳であるから悔悟し、更生して女性本来の居場所である家庭に戻ってよき妻、母になれるようにはげむべきである、という中流階級の価値観を一律に教え込むことがそもそも無理だったのではないか。もちろん、売春は道徳面、法律面、社会面、人道面すべてにおいて容認できないし、するべきでない行為である。しかし、ディケンズを手こずらせた女性たちは、規律正しい擬似家庭生活になじまず、すぐ街に戻り、あまり罪悪感がなく昔の稼業を再開した。結局のところ、彼女たちには家庭の居間や暖炉のそばが合わなかったのではないだろうか。クーツと違い、ディケンズにはこのような現実が見えていた。それでも、彼の中流階級の道徳観に基づいた事業への意欲は変わらなかった。

ディケンズが、作家としてもっとも脂がのり切った時期に、貴重な時間を割いて、コテージ運営にこれほどまでにのめりこんだ原因は、売春婦更生の意義と自己の才覚へのゆるぎない自信であったろう。それに加えて、売春婦たちの持つ放縦さやしたたかさといったものに惹かれ、だからこそ彼女たちを管理、再教育することに熱中したのではないだろうか。ディケンズの人道主義は決して浅薄なセンチメンタリズムではなく、彼には管理教育のエキスパートとしての顔もあったことを忘れてはならない。

注

* 本論は、2007年6月9日、ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会において行った講演に加筆したものである。コメントと助言を下された方々にこの場を借りて感謝したい。

¹ Philip Collins, *Dickens and Crime* (1962; Bloomington: Indiana UP, 1968); Norris Pope, *Dickens and Charity* (New York: Columbia UP, 1978); Michael Slater, *Dickens and Women* (Stanford: Stanford UP, 1983); Pamela Janes, *Shepherd's Bush. . . . The Dickens Connection* (London: Shepherd's Bush Local History Society, 1992).

² 主な説は次のとおりである: Edna Healey, 1838年; Collins, Janes, 1839年; John Forster, 1840年。

³ ディケンズ書簡からの引用は、Edgar Johnson, ed. *Letters from Charles Dickens to Angela Burdett-Coutts 1841–1865* (London: Cape, 1953) による。以下、文中または括弧内に年月日を記す。

⁴ 貧民学校は1818年にポーツマス の靴職人 John Pounds が貧しい子供たちを無料で教えたことに端を発する。1844年、シャフツベリー伯爵 (the 7th Earl of Shaftesbury) が貧民学校組合を創立して以来、イギリスに200以上貧民学校が設立され、クーツのような富裕層が財政支援をした。

⁵ Charles Dickens, "A Sleep to Startle Us," *'Gone Astray' and Other Papers from Household Words 1851–59*, ed. Michael Slater (London: Dent, 1998) 49–57.

- ⁶ Edna Healey, *Lady Unknown: The Life of Angela Burdett-Coutts* (London: Sedgwick, 1978) 118.
- ⁷ モラル・トリートメントについては次の文献による。Andrew T. Scull, “Moral Treatment Reconsidered: Some Sociological Comments on an Episode in the History of British Psychiatry,” *Psychological Medicine* 9 (1979): 421–28; Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830–1980* (1985; London: Virago, 1987) 30–33, 49; Akiko Takei, “Benevolence or Manipulation? The Treatment of Mr Dick,” *Dickensian* 101 (2005): 121–25, 128–30.
- ⁸ Collins 100.
- ⁹ Janes 10.
- ¹⁰ Isabella Beeton, *Mrs Beeton's Book of Household Management*, Abridged Edition, (1861; Oxford: Oxford UP, 2000) 16.
- ¹¹ Charles Dickens, “Home for Homeless Women,” *'Gone Astray' and Other Papers from Household Words 1851–59*, ed. Michael Slater (London: Dent, 1998) 127–41.
- ¹² Healey 117.
- ¹³ マーク・システムについては、Collins, chs. 4, 7 による。
- ¹⁴ Dickens, “Home for,” 131.
- ¹⁵ Michel Foucault, *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*, trans. Alan Sheridan (1977; Harmondsworth: Penguin, 1991) 227–28.
- ¹⁶ Dickens, “Home for,” 133.
- ¹⁷ Dickens, “Home for,” 135.
- ¹⁸ Charles Dickens, *David Copperfield*, ed. Trevor Blount (Harmondsworth: Penguin, 1986) 399.
- ¹⁹ Peter Ackroyd, *Dickens*, Abridged Edition (1990; London: Vintage, 2002) 295
- ²⁰ *OED* の ‘a fallen woman’ の定義は “one who has surrendered her chastity” である。日本語訳として通常使われる「堕ちた女」は不正確であるため、この論では ‘fallen woman’ という語を用いる。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部規約

Agreements, Japan Branch of the Dickens Fellowship

制定 1970 年 11 月 12 日

改正 2000 年 6 月 10 日

改正 2005 年 12 月 1 日

第Ⅰ章 総則

第 1 条 (名称) 本支部をディケンズ・フェロウシップ日本支部と称する。

第 2 条 (会員) 本支部は在ロンドンのディケンズ・フェロウシップ本部の規約に則り、日本に住み、チャールズ・ディケンズの人と作品を愛する人々を以って組織する。

第 3 条 (所在地) 本支部は支部事務局を原則として支部長の所属する研究機関に置く。

(2) 支部事務局とは別に、財務事務局を、財務理事の所属する研究機関に置くことができる。

(3) 本支部の所在地の詳細については付則に定める。

第Ⅱ章 目的および事業

第 4 条 (目的) 本支部はディケンズ研究の推進とともに支部会員相互の交流・親睦をはかることを目的とする。

第 5 条 (事業) 本支部は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 全国大会および研究会の開催。
2. 機関誌の発行。
3. ロンドン本部および諸外国の各支部と連絡を密にして相互の理解と便宜をはかること。
4. その他、本支部の目的を達成するために必要と認められる事業。

第Ⅲ章 役員

第 6 条 (役員) 本支部に次の役員を置く。

支部長 1 名、副支部長 1 名、監事 1 名、財務理事 1 名、理事 若干名。

第 7 条 (役員の職務) 支部長は理事会を構成し、支部の運営にあたる。

- (2) 副支部長は支部長を補佐する。
- (3) 監事は本支部の会計を監査し、理事会および総会に報告する。
- (4) 財務理事は、本支部の財務を管理する。

第 8 条 (役員の選出および任期) 役員の選出は、理事会の推薦に基づき、総会においてこれを選出する。

- (2) 役員の任期は 3 年とし、連続 2 期 6 年を越えて留任しない。
- (3) 財務理事の任期は支部長の在任期間とする。
- (4) 役員に事故がある場合は補充することができる。その場合、補充者の任期は前任者の残任期間とする。

第Ⅳ章 会議

第 9 条 (議決機関) 本支部には議決機関として総会、臨時総会、理事会を置く。

第 10 条 (総会) 総会は本支部の最高議決機関であり、支部長がこれを招集する。

(2) 総会は、役員の選出、事業の方針、予算、決算、規約の変更など、支部運営の重要事項を審議する。

(3) 総会の議決は出席会員の過半数による。

(4) 総会は原則として年に 1 回開催する。臨時総会は必要に応じて開催する。

第 11 条 (理事会) 理事会は本支部の執行機関として支部長が随時これを招集し、本支部の目的達成上必要な事項を審議する。

第Ⅴ章 会計

第 12 条 (経費) 本支部の経費は、会費、寄附金、その他の収入を以ってこれにあてる。

第 13 条 (会費) 会員は、本支部の運営のため、別に定める会費を負担する。

第 14 条 (会計報告および監査) 本支部の会計報告ならびに監査報告は、毎年 1 回、総会で行う。

第 15 条 (会計年度) 本支部の会計年度は 10 月 1 日より翌年 9 月 30 日までとする。

付則

(1) 本支部の支部長、副支部長、監事および財務理事は次の会員とする。

支部長	仙台市青葉区中山 9 丁目 16 番 16 号	原 英一
副支部長	京都市北区小山下内河原町 3 番 4 号	佐々木 徹
監事	広島市西区己斐中 3 丁目 2 番 17 号	植木 研介
財務理事	上市市大石 2 丁目 3 番 30 号	中村 隆

(2) 本支部の事務局は、仙台市青葉区川内 27 番 1 号、東北大学大学院文学研究科英文学研究室に置く。

(3) 本支部の財務事務局は、山形市小白川町 1 丁目 4 番 12 号、山形大学人文学部中村隆研究室に置く。

(4) 本支部役員の氏名、住所、所属研究機関に異動があったときは、この付則にある該当事項は、総会の議を経ることなく、変更されるものとする。

(5) この規約は 2005 (平成 17) 年 12 月 1 日から適用する。

* * * *

※ 会員にはロンドン本部機関紙 (*The Dickensian*) (年 3 回発行) および支部『年報』(年 1 回発行) を送ります。

※ 会費の支払いは、郵便振替でお願いいたします。(振替番号 00130-5-96592)

『年報』への投稿について

論文投稿規定

- (a) 論文は日本語、英語いずれも可 (英文の場合は事前にネイティブ・スピーカーによるチェックを受けてください)。
- (b) 論文の長さは、原則として、日本語の場合は 14,000 字 (400 字詰原稿用紙換算 35 枚) 以内、英語の場合は 7,000 語以内とします。
- (c) 論文原稿 (フロッピー・ディスクおよび清書原稿) の締切は 6 月 10 日 (必着)。理事の審査 (採・否・再提出) をへて受理・掲載します。
- (d) 投稿先は日本支部事務局宛。

論文の書式について

- (1) 書式の細部については、原則として、*MHRA Style Guide* (<http://www.mhra.org.uk/Publications/Books/StyleGuide/download.shtml>), または *MLA Handbook* の第 6 版 (<http://www.mla.org/style>) に従ってください。最終的な書式形式は編集で統一します。
- (2) 註については、脚註ではなく、尾註を用いて下さい。
- (3) 文献表については、引用した文献を、論文の末尾に付けて下さい。
- (4) 日本語論文で欧米人名を「サッカー」などと日本語表記する場合には「サッカー (William Makepeace Thackeray)」とカッコ内に原語を表記してください。
- (5) ディケンズの著作・登場人物名については、日本語表記する場合でも、原語を示す必要はありません。示す場合は、上記 (2) に従って一貫して表記してください。
- (6) 数字については原則としてアラビア数字としてください。(例:「一九世紀→19 世紀」,「一八一二年→1812 年」。ただし、「一人や二人」や「一度や二度」などは例外とします。) 章分けにはローマ数字を用いることができます。
- (7) ワープロ原稿の場合は、プリントアウト (清書) したものの 3 部 (コピー) の他に原稿ファイルの入ったフロッピー・ディスクを提出してください。ただし、Windows と Macintosh 以外 (ワープロ専用機など) でフォーマットされたディスクは、DTP システムでの読み込みができないため、不要です。
ワープロ清書原稿に手書きで書き込みを入れる場合は、書き込みのない清書原稿をさらにもう 1 部追加してください。
- (8) 手書き原稿の場合は、清書原稿 3 部 (コピー) のみを提出してください。

論文以外の随筆，書評，ニュース等

- (1) 締切は7月31日です。支部長または年報担当補佐宛に提出してください。
- (2) 書式については、論文とは異なり、原則として著者の自由です。ただし、数字表記については論文と同様アラビア数字とします。
- (3) 長さは自由。ただし、原則として、最長でも8,000字（400字詰原稿用紙換算20枚）を超えないようにしてください。写真の添付も自由です。
- (4) 編集上の都合により採用できない場合もあります。また、編集担当者の責任で内容を大幅に編集する場合があります。あらかじめご了承ください。
- (5) 提出にあたっては、清書原稿1部のほか、論文の場合と同様の要領により、ファイルの入ったフロッピーを添付してください。電子メールで提出していただいてもけっこうです（電子メールの場合は清書原稿とフロッピーは不要です）。手書き原稿の場合は清書原稿1部のみを提出してください。

※ 論文・一般記事等を問わず、すべての原稿に「英文タイトル」と「著者名のローマ字表記」を必ず付記してください。

お詫びと訂正

『年報』第29号（2006年）に下記の誤りがありました。ここにお詫びして訂正致します。

37頁，9，14，20行目

誤)

副支部長	佐々木 徹	京都大学大学院 文学研究科 助教授
理事	玉井 史絵	同志社大学 言語文化教育センター 教授
理事	山本 史郎	東京大学大学院 総合文化研究科 助教授

正)

副支部長	佐々木 徹	京都大学大学院 文学研究科 教授
理事	玉井 史絵	同志社大学 言語文化教育研究センター 助教授
理事	山本 史郎	東京大学大学院 総合文化研究科 教授

追悼 フィリップ・コリンズ教授

In Memoriam: Professor Philip Collins
(28th May 1923–6th May 2007)

西條 隆雄
Takao SAJO

ディケンズ研究の泰斗，コリンズ教授が5月6日に亡くなった。享年83歳。日本にも1983年（11月）と1986年（10月）に來られて講演と朗読をされたのでなじみの方も多いと思う。彼は、ディケンズの著作を同時代の膨大な資料で裏付けることによって、レズリー・スティーヴン（『英国人名事典』；1888）に要約される従来の歪んだディケンズ像を大幅に修正し、「ディケンズは英語圏のなかで最大の小説家」であり、文学の深さ、広がり、技法の新しさにおいては比類のない作家であると明記した（『ブリタニカ百科事典』；1974）。1950年代から1980年の間にディケンズ研究は世界中で質量ともに飛躍的に発展し、彼の評価は揺るぎのないものとなった。これはコリンズ教授の業績に負うところが大きい。コリンズ教授は‘The Age of Chesterton’（1900–20）にならない、‘The Age of Collins’（1960–80）を築いたといっても過言ではない。

彼は古典的名著となった『ディケンズと犯罪』（1962）、『ディケンズと教育』（1963）を相ついで著し、その後『ディケンズ — 批評の遺産』（1971）、『公開朗読台本全集』（1975）、および『ヴィクトリア朝小説



— 研究の手引き続編』（1978；[ディケンズの項目担当]）、『ディケンズ — インタビューと回想』（2 vols.；1981）の大著を出された。いづれも広範な文献と資料を駆使した、厳密な研究の成果である。

公開朗読の台本は散逸していて、その編集はほとんど絶望視されていた。それだけにコリンズ教授の想像を絶する努力で台本すべてが一冊にまとめられ、詳しい解説をつけて出版された時、ディケンズ晩年の、創作と並ぶ大きな活動の跡がはじめて明るみに出た。

もう一つ忘れてならない仕事は、『ディケンズ — 批評の遺産』（1971）である。これは19世紀のディケンズ書評や評論の肯定論と否定論の双方を偏ることなく収録しながら、そ

ここにどのような欠陥があったかを指摘する。つまり、ディケンズを悪しざまに論じる評論家たちは、文学的名声の高い作品ではなく、マイナーな作品のみを取り上げてディケンズを論評をしていたこと、また「学部生の偶像破壊」か「貴族の大衆侮蔑」程度の粗雑な評論（ジェイムズ・F・ステューヴンの『リトル・ドリット』論）を文芸誌が掲載しており、ディケンズ評価を誤らせる原因は、文芸誌の無責任と批評家たちのおざなりな批評態度にあったと指摘したのである。この書物は、従来の評価を根底から覆した。

私がレスター大学のコリンズ教授のもとで研究したのは1977-79年、先生は上記の書物をすでに出版し終え、50歳中ばにあって最も精力的に活躍しているときであった。個別研究の垣根を取り払って総合研究の必要性を説く先生は、レスター大学にいち早くヴィクトリア朝研究所を設立し(1966)、大学出版局より著名文献を復刻するとともに、内外の学術交流を活発化させていた。滞英中は、おかげで多くの碩学にお会いする機会に恵まれた。しかし、だからこそ、未熟なペーパーを提げて先生に定期的にお会いするのは辛い試練だった。

学問には厳しかったが、先生はじつに思いやり深い教師であり、よき父であり、熱心な演劇人であった。イギリスの祭りや伝統行事を子供たちに伝えるべく、地元の人と一緒に

なつて五月祭、ガイ・フォークス記念行事、クリスマス祭等かずかずの行事を催しては、かならず私の一家を招いてくださった。おかげでイギリス人の生活やものの考え方に大きな親しみを覚えた。あるときは院生の要求を入れてディケンズ朗読をやり（無料）、そのあとビールを飲みながら学生たちとお話していたかともうと、次にはレスターのヘイマーケット劇場やロンドンのナショナル・シアターで大勢の聴衆の前で有料朗読を行っている。休暇が来ると、たいていアメリカの大学へ朗読・講演に出かけていた。朗読は大好きで、ちっとも苦にならないらしい。

学恩を受けてほぼ30年、日本支部でようやく国際的な視野でディケンズを紐解く『ディケンズ鑑賞大事典』が企画された。出来上がれば誰よりも先に先生にお目にかけ評価をお願いしたいと思い、全力を傾けて作業を急いだが、とうとう間に合わなかった。レスター大学での葬儀(5月16日)にはサウサンプトン大学に勤めている息子に出てもらい、5月24日に『大事典』が出るとすぐ奥様にお送りしてこれを先生に献じてもらった。おそらくは日本支部最大の、そして先生のもっとも喜ばれる形での弔慰を表することができたかと思っている。先生のご冥福を心よりお祈りする。

追悼 村山敏勝博士

In Memoriam: Doctor Toshikatsu Murayama
(12th December 1967–11th November 2006)

宮丸 裕二

Yuji MIYAMARU

村山さんの夭折から一年が経つ。物事への関心を広く持つことは研究者であれば珍しいことではないかも知れないが、村山さんに特異であったのは、その広い関心を学術的に実践して見せたことだろう。それを執筆に確認することはまだ可能でも、実際に顔を出していた学会、研究会は奥様でさえ「把握し切れていない」ということであったから活動範囲を網羅的に知ることなどできないけれど、私の知る限りでも、その関心は、我々と同じディケンズに始まって、ヴィクトリア朝の他の小説研究、現代批評理論、文化研究、精神分析批評、ジェンダー研究（ないし、クウィア研究）、身体医文化論、科学史、映像論、経済学などと拡がって行き、そのどこでも片手間程度ではない結果を示していた。

村山さんの仕事は後々に残るだろうから、それを中途半端にここで書き連ねるよりも、活字には残り難い人間性の面について書くべきかと思う。まず村山さんの年齢を考えると、その顔の広さは大変なものだったと思う。これは明らかに、村山さんの側で人間関係を続け続けた結果であった。村山さんが亡くなってみて、私の周りでも、亡くなる一週間前にメールをもらったとか、一ヶ月前に

知り合ったばかりだったとか、一度だけ話したことがあるとかいう人の話を相当数耳にするが、実に最後までこの姿勢だったことが分かる。そうした「人を探す姿勢」には常々感心させられた。学術書籍をまるで雑誌の様に次から次へと目を通すだけでなく、多分野の紀要、大学院生発行の研究誌まで広く目を通し、本人を捜し出して自分から接触するのだ。村山さんくらいになったら下の人間など気にかかる必要はあるまいかと思うと、本人曰く逆だそうで、辺境で人知れず特定の関心を持って研究している大学院生などを自分の方から発見し、呼んで、適切な場を与えることに喜びを見出していたし、自分の役割だと考えていた。研究において学閥や年齢は一切関係ないとは誰もが口を揃えて言うだろうが、それが実践されるとき態度とは、こうしたものだろうと思う。人に聞くと、おかしなことに村山さんは自分の同世代だと思っている人は上下10歳くらいの幅でいて、これは恐らくその接触の仕方にあったのだろう。また、それでも目上の人には躊躇しそうなものだが、必要とあらば、なんらためらわず呼んでくる。そんな村山さんも一時期は学会が嫌いだったそうで、一切足を運ばなかった時



期があった。心境の変化の動機は分からないが、日本英文学会の関東支部会が、少なくとも発足した折には人的にも分野的にも幅の広さを見せ

ていたのは、村山さんが事務局長を務めることでその才を発揮したからに違いない。

村山さんの言動の特徴というのは、儀礼的挨拶やお世辞などおおよそ間接的なところを最低限に抑えた言葉の使い方をするとところだろうと思う。白いものは白いでしょという身も蓋もなさがある、同時に分かり易い。相手が目上だろうが目下だろうがびくつくところがない。それだけに信頼されていたし、上から見ると当然生意気な若者と映ることだって少なくはなかっただろう。私が村山さんに肩代わりしてもらって言い難い人に言い難いことを言ってもらったとかいう経験は一切ないけれど、しかし、若輩が自分でしたり言ったりしたらまずいかなと思うところを躊躇なくやってくれることで、結果的に我々若い方の人間は随分やりやすくしてもらっていたし、我々も随分と甘えさせてもらっていたのだろうと思う。例えば、指導教授も他の

学会の関連も顧みず若い人を集めて研究会を開いてしまう辺り、恐らく村山さんがいないと不可能ではなくとも、誰もしなかったことなのだろう。そして、身も蓋もない分かり易い喋り方は、恐らく村山さんが自分で意識的に選んでそうしていたことなので、必ずしも生まれつきにぶっきらぼうな質とも言えないだろう。感情的な好き嫌いとうるさみとが別物であることを認めつつ、だからこそ敢えてそうした面倒に目をつぶる方針が態度として表現されたものだろうし、そうした村山さんの効率的な喋り方に、我々が乗っかっていた面は実に大きいと思う。抑制されぶっきらぼうに見えるだけに、その言葉使いの範囲内で人を喜ばせようとしたり、笑わせようとしたりということ、を村山さんが試みる時に、どこか秘密めいた感じがあり、ひとときわ楽しかったのを思い出す。どんなに偉い人をも、「～先生」ではなく一律に「～さん」としか呼ばないことで知られる生意気な村山さんであったわけだが、実は60歳以上の人にはこっそり「～先生」と呼んでいると告白するような時の村山さんには、自分の人格を遊んでいる感覚があった。

村山さんの研究姿勢について思い出すのは二点である。一つは、特定の作家や研究者の名の下に集まる学会に見られがちな、神格化や崇拜傾向を徹底的に軽蔑していたこと。ファンクラブ的な目的の集まりならばそれで良いが、アカデミズムを標榜する限り、その手の愛着は対象を評

価、批評する上での邪魔にしかならないと見ていた。対象となる作家と距離を置かずに賛美を反復し、否定的側面の指摘を禁句になどしていたら、その作家の位置づけなどまずできないのだが、そうした学会をかなり散見する。おおかたでいうとそういうことを卒業しているディケンズ・フェロウシップの成熟を気に入っていた。今ひとつに、研究の目的意識についてである。とりわけ批評理論をやるのに何かに役立つということではなく、少なくとも自分の場合は、批評理論は何の役にも立たないと明言していた。だから論じる快楽だけが動機であるし、社会全体から見ると極めて自己本位な営みなのだということだ。現実には批評理論が結果的に社会に還元されないことばかりではないだろうし、その分野の大家になるほどこうした目的的部分を濁してしまうだけに、これは貴重な話で、この様に明言する人を私は周りであまり目にしない。

研究をもの凄い速度で進めていったとき、村山さんが自分の中に湧き起こる興味だけを頼りに進んで行ったことは本当なのだろう。学術書を雑誌並みに読んでいったこともそうだが、図書館購入、研究費購入以外にも、自費で毎月10万円前後を図書に費やししながら、おおよそ本人に禁欲的な求道者のようなところが見られない。興味があることに直接手を出すから必然速く読むことだって出来たのだろう。逆に、ヴィクトリア朝小説に取りかかる者であればきつと

一生涯気になるのが読破した本の分量であろうが、これをまるで気にせず、基本的な古典を抑えていないことを憚らず口にするという面も見せていた。当初より研究の枠組みがそこにはないからだろう。また日本語で書かれたクウィア研究の教科書ともなつてゆくであろう書籍を著した村山さんであるが、ゲイについて話すとその性向の基本も知らず感心して人の話を聞いていたというようなことがあった。これも自分の中に湧いた純粋なる興味だけをそのまま追っていったことの証拠だろうと思う。従って、性という学術的題目についても自分に直接関係する研究動機がはっきりと本人の中にあつたのだろう。上の代表作の中で、一行だけだがはっきりと自分自身にまつわる切実な問題であることを書いていた。

研究にどこまでも終わりは無いという常識に敢えて背を向けて言うならば、本来勉強しようと思っていたことを勉強し終えてしまう人生だつてあるのかも知れないと思うことがある。村山さんが生きていた場合の未来を思うと実に惜しいということが聞かれるがそれも分からないし、村山さんの意志を引き継いで我々がその後をきつと立派にというのも筋違いかも知れない。学術を対話の場としてのみ必要とし、そこに乗せる言葉を発信し続けながらも、自分の中に起こった興味だけをぶれることなく追究する例を見せてもらっただけにそう思うのである。

フェロウシップ会員の執筆業績

Publications by Members of the Japan Branch

(2006 ～ 2007)

著書・編書・共著

青木健（共著）、「文学の土壤」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、413-29頁
 荒井良雄（共著）、「公開朗読」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、515-33頁
 植木研介（編著）、「ジャーナリズム」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、475-93頁
 萩野昌利、「『もの言えば・・・』ヴィクトリア朝筆禍事件始末記 — 宗教と芸術」、英宝社ブックレット、英宝社、2007年
 小野章（共著）、「『オリヴァー・トゥイスト』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、77-94頁
 小野寺進（共著）、「『バーナビー・ラッジ』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、135-49頁
 甲斐清高（共著）、「『ニコラス・ニクルビー』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、95-113頁
 梶山秀雄（共著）、「『エドウィン・ドルードの謎』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、373-92頁
 要田圭治（共著）、「『リトル・ドリット』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、295-312頁
 金山亮太（共著）、「『ボズのスケッチ集』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、39-55頁
 川澄英男（共著）、「『アメリカ紀行』、『イタリア紀行』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、151-78頁
 小池滋（共著）、「ディケンズの生涯」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、15-35頁
 西條隆雄（編著）、「はしがき」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、1-4頁
 西條隆雄（編著）、「素人演劇活動」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、494-514頁
 西條隆雄（編著）、「評価の確立 — 1960-1980」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、715-32頁
 齋藤九一（共著）、「『マーティン・チャズルウィット』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、179-95頁
 斉藤健太郎（共著）、「『ダーバヴィル家のテス』における階級 — テス、エンジェル、アレクが抱える「二重性」について」、『問い直す異文化理解』、松柏社、2007年、3-26頁
 佐々木徹（編著）、「ディケンズと映画」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、580-95頁

佐々木徹（編著）、「揺れ動く評価 — 1870-1940」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、675-93頁
 篠田昭夫（共著）、「『クリスマス・ブックス』、『クリスマス・ストーリーズ』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、197-218頁
 武井暁子（共著）、「分冊出版表」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、付録CD-ROM
 武井暁子（共著）、「年譜」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、付録CD-ROM
 田中孝信、『ディケンズのジェンダー観の変遷 — 中心と周縁とのせめぎ合い』、音羽書房鶴見書店、2006年
 田中孝信（共著）、「『二都物語』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、313-31頁
 田辺洋子（共著）、「『ピクウィック・クラブ』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、57-75頁
 玉井史絵（共著）、「小説出版と挿絵」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、559-79頁
 中村隆（共著）、「『荒涼館』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、257-74頁
 新野緑（共編著）、「＜異界＞を創造する — 英米文学におけるジャンルの変奏」、阪大英文学会叢書3、英宝社、2006年
 新野緑（共著）、「『デイヴィッド・コパフィールド』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、237-55頁
 西垣佐理（共著）、「地名」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、付録CD-ROM
 野々村咲子（共著）、「交友」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、付録CD-ROM
 原英一（編著）、「『骨董屋』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、115-33頁
 原英一（編著）、「その他の作品」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、393-409頁
 原英一（編著）、「本格的研究のはじまり — 1940-1960」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、694-714頁
 久田晴則（共著）、「都市ロンドン」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、430-52頁
 廣野由美子（共著）、「『エマ』作品論 — 誤解を読み解く」、『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』、内田能嗣／塩谷清人編、世界思想社、2007年、181-93頁
 廣野由美子（共著）、「『ハード・タイムズ』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、275-93頁
 松岡光治（編著）、「『大いなる遺産』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、333-42頁
 松岡光治（編著）、「文献」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、付録CD-ROM
 松村豊子（共著）、「『ドンビー父子』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、219-36頁
 松村昌家（編著）、「夏目漱石における東と西」、思文閣出版、2007年
 松村昌家（共著）、「日本の作家たち」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、596-614頁
 松本靖彦（共著）、「『互いの友』」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、353-72頁
 宮丸裕二（共著）、「ディケンズ作品登場人物事典」、『ディケンズ鑑賞大事典』、南雲堂、2007年、付録CD-ROM

村山敏勝（共著）、「新しい展開 —1980–2002」,『ディケンズ鑑賞大事典』,南雲堂,2007年,733–48頁
 矢次綾（共著）、「系図」,『ディケンズ鑑賞大事典』,南雲堂,2007年,付録CD-ROM
 山本史郎（共著）、「社会活動」,『ディケンズ鑑賞大事典』,南雲堂,2007年,534–55頁

論文

金山亮太,「左側に転覆する列車 — ディケンズと脳梗塞について」,『JBBDF』,第29号(2006年),93–107頁
 川村恵子,「揺れる時間と空間 — Cranford と Cousin Phillis にみる中間の領域」,『ギヤスケル論集』,第17号(2007年),47–56頁
 西條隆雄,「ディケンズとニューゲイト監獄」,『甲南大学紀要文学編』,第145号(2007年3月),55–73頁
 佐々木徹,「ヘンリー・ジェイムズの『視点』」,『英語青年』,第152巻第6号(2006年9月),5–7頁
 [武井暁子] Takei, Akiko, 'General Tilney and Bath Water', *Persuasions*, 28 (2006): 264–29
 寺内孝,『ディケンズとキャサリンは和解できたか?』,『JBBDF』,第29号(2006年),108–19頁
 榎正行,「200頁中篇で試すインドの英語小説」,『英語青年』,第152巻第10号(2007年1月),14–15頁
 榎正行,「V・S・ナイポールの伝記的小説」,『中京大学教養論叢』,第47巻第3号(2007年1月),1–63頁
 榎正行,「V・S・ナイポール — 初めての雪」,『中京大学教養論叢』,第47巻第4号(2007年4月),1–40頁
 榎正行,「シヴァ・ナイポールの『潮干狩り』」,『中京大学教養論叢』,第48巻第1号(2007年7月),1–17頁
 榎正行,「V・S・ナイポール — 小説の終わり,自伝の始まり」,『中京大学教養論叢』,第48巻第1号(2007年7月),19–59頁
 新野緑,「テキスト分析とその『外部』 — ディケンズ批評と二人のミラー」,『英語青年』,第153巻第1号(2007年4月),5–7頁
 長谷川雅世,「ディケンズにおけるユダヤ人とキリスト教徒」,『中国四国英文学研究』(日本英文学会中国四国支部),第3号(2006年),33–46頁
 長谷川雅世,「『二都物語』の光と闇 — 主人公の死にある両義性」,『中部英文学』(日本英文学会中部支部)第26号(2007年),15–28頁
 原英一,「善の弱さ,アクの強さ」,『英語青年』,第153巻第3号(2007年6月),2–3頁
 藤井晶宏,「『ボズのスケッチ』 — Scenes の空間」『ふぉーちゅん』(新生言語文化研究会),第17号(2006年),13–21頁
 藤井晶宏,「『バーナビー・ラッジ』にみる国家の姿」,『JBBDF』,第29号(2006年),5–17頁
 松村昌家,「『倫敦塔』における歴史と絵画の融合 — 漱石とポール・ドラローシュ」,『大手前大学人文科学部論集』,第7号(2007年),85–106頁

水野隆之,「『二都物語』における秘密と語り」,『ふぉーちゅん』(新生言語文化研究会)第18号(2007年),25–35頁
 矢次綾,「『二都物語』におけるカーニヴァル — 革命空間の集団および個人」,『中部英文学』(日本英文学会中部支部),第26号(2007年),1–13頁
 吉田一穂,「日本における英語コミュニケーション(5) — 近畿大学における新統一テキストの導入と成果」,『近畿大学語学教育部ジャーナル』,第3号(2007年),181–94頁
 吉田一穂,「*Bleak House* — 階級がもたらす孤立状態と個人による孤立状態の超越」,『英米評論』(桃山学院大学総合研究所),第21号(2007年),83–104頁
 吉田一穂,「『我らが共通の友』 — ブラッドリー・ヘッドストンに見られる引き裂かれた自己」,『ふぉーちゅん』(新生言語文化研究会),第18号(2007年),15–23頁

翻訳

梅宮創造（共著訳）,ポール・シュリッケ,「ディケンズとシェイクスピア」,『ディケンズ鑑賞大事典』,南雲堂,2007年,615–35頁
 太田良子（共著）,『ガリヴァー旅行記』,もっと知りたい名作の世界6,木下卓／清水明編著,ミネルヴァ書房,2007年
 川本静子（共訳）,『英語圏女性作家の描く家族のかたち』,Minerva 世界文学選3,ミネルヴァ書房,2006年
 川本静子（訳）,トマス・ハーディ,『日陰者ジュード』上下巻,中公文庫,中央公論社,2007年
 小池滋（共訳）,デイヴィッド・ロス,『世界鉄道百科図鑑 — 蒸気,ディーゼル,電気の機関車・列車のすべて 1825年から現代』,悠書館,2007年
 佐々木徹（共訳）,『棄ててきた女』,異色作家短編集19,早川書房,2007
 田辺洋子（訳）,チャールズ・ディケンズ,『デイヴィッド・コパフィールド』,上下巻,あぼろん社,2006年
 田辺洋子（訳）,チャールズ・ディケンズ,『荒涼館』,上下巻,あぼろん社,2007年
 田村真奈美（共訳）,ジュリエット・バーカー,『ブロンテ家の人々』,上巻,中岡洋／内田能嗣監訳,彩流社,2007年
 榎正行（共著訳）,ポール・シュリッケ,「19世紀の大衆娯楽」,『ディケンズ鑑賞大事典』,南雲堂,2007年,453–71頁
 畑田美緒（共著訳）,アンガス・ウィルソン,「ディケンズとドストエフスキー」,『ディケンズ鑑賞大事典』,南雲堂,2006年,539–89頁
 原英一（抄訳）,チャールズ・ディケンズ,「『ボズのスケッチ集』3」,『川内レビュー』第6号(2007年),138–61頁
 廣野由美子（共訳）,ジュリエット・バーカー,『ブロンテ家の人々』,下巻,中岡洋／内田能嗣監訳,彩流社,2006年,59–116頁
 藤本隆康（訳）,G・T・クルック編,『ニューゲイト・カレンダー大全』,第4巻,大阪教育図書,2006年
 松岡光治（訳）,J・S・レ・ファニユ,「オンジェ通りの怪」,『言語文化論集』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科),第28巻第1号(2006年10月),1–25頁

松村昌家（共訳）、G・M・ヤング、『ある時代の肖像 — ヴィクトリア朝イングランド』、ミネルヴァ書房、2006 年
 宮崎孝一（訳）、ジェニー・ユエグロウ、『エリザベス・ギャスケル — その創作の秘密』、鳳書房、2007 年
 山本史郎（訳）、ローズマリ・サトクリフ、『血と砂 — 愛と死のアラビア』、上下巻、原書房、2007 年

書評

川澄英男、「チャールズ・ディケンズ、伊藤／下笠／隈元訳、『アメリカ紀行』」、『JBBD』、第 29 号（2006 年）、18–24 頁
 川澄英男、「大井浩二、『旅人達のアメリカ — コベット、クーパー、ディケンズ』」、『JBBD』、第 29 号（2006 年）、34–39 頁
 木村晶子、「新井潤美、『不機嫌なメアリー・ポピンズ — イギリス小説と映画から読む「階級」』」、『JBBD』、第 29 号（2006 年）、40–42 頁
 西條隆雄、「川本静子／松村昌家編著、『ヴィクトリア女王 — ジェンダー・王権・表象』」、『英語青年』、第 152 巻第 9 号（2006 年 12 月）、559–60 頁
 [佐々木徹] Sasaki, Toru, 'We Ask for More: A Note on Polanski's *Oliver Twist*', *Dickensian*, 102.3 (Winter 2006): 240–42
 楚輪松人、「ディケンズ（原作）、ボランスキー監督、映画／DVD『オリバー・ツイスト』」、『JBBD』、第 29 号（2006 年）、24–29 頁
 榎正行、「上石実加子、『もうひとりのキプリング — 表象のテキスト』」、『英語青年』、第 153 巻第 5 号（2007 年 8 月）、50 頁
 新野緑、「田中孝信、『ディケンズのジェンダー観の変遷 — 中心と周縁とのせめぎあい』」、『英語青年』、第 152 号第 11 巻（2007 年 2 月）、690–91 頁
 新野緑、「Catherine Gallagher, *The Body Economic: Life, Death, and Sensation in Political Economy and the Victorian Novel*」、『ヴィクトリア朝文化研究』（日本ヴィクトリア朝文化研究学会）、第 4 号（2006 年 11 月）、79–82 頁
 Holt, Jenny, 'Allan Conrad Christensen, *Nineteenth-Century Narrative of Contagion: Our Feverish Contact*', 『JBBD』、第 29 号（2006 年）、29–33 頁

エッセイ・その他

川村恵子、「イギリス通信」、『JBBD』、第 29 号（2006 年）、53–58 頁
 永岡規伊子、「国際大会に参加して」、『JBBD』、第 29 号（2006 年）、74–80 頁
 原英一、「ディケンズ・フェロウシップ第 100 回国際大会」、『JBBD』、第 29 号（2006 年）、67–73 頁
 松岡光治、「ディケンズにおける自殺の諸相」、『JBBD』、第 29 号（2006 年）、43–52 頁
 松本靖彦、「カンタベリー滞在・留学記」、『JBBD』、第 29 号（2006 年）、59–66 頁
 山本史郎（共著）、『Crown Plus English Series Level 2』、三省堂、2007 年

本誌『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』(*The Japan Branch Bulletin of the Dickens Fellowship*) を『JBBD』と省略して表記しています。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

お問い合わせ先

〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1 東北大学大学院文学研究科英文学研究室内
 電話 022 (795) 5961
 URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/dickens/>
 email: <hara_ei@sal.tohoku.ac.jp>

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動および会員について情報につきましては、上記のいずれかによりお問い合わせ下さい。
 また、新規入会希望の方も随時お待ちしております。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

役員一覧

ディケンズ・フェロウシップ日本支部では「支部規約」に従い、2005 年総会において選出された以下の役員および名誉職を以て、運営に当たっています。
 役員の任期は 2005 年 10 月より 2008 年 9 月までの 3 年間で、

名誉支部長	宮崎 孝一	成城大学 名誉教授
名誉支部長	小池 滋	東京都立大学 名誉教授
支部長（年報担当）	原 英一	東北大学大学院 文学研究科 教授
副支部長	佐々木 徹	京都大学大学院 文学研究科 教授
監事	植木 研介	広島大学大学院 文学研究科 教授
財務担当理事	中村 隆	山形大学 人文学部 准教授
理事	要田 圭治	広島大学大学院 総合科学研究科 准教授
理事	金山 亮太	新潟大学 人文学部 准教授
理事	玉井 史絵	同志社大学 言語文化教育研究センター 准教授
理事	新野 緑	神戸市外国語大学 外国語学部 教授
理事	廣野 由美子	京都大学大学院 人間・環境学研究科 准教授
理事（Net 担当）	松岡 光治	名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 教授
理事	松村 豊子	江戸川大学 社会学部 教授
理事	山本 史郎	東京大学大学院 総合文化研究科 教授
理事補佐（VOD 担当）	梶山 秀雄	島根大学 外国語教育センター 准教授
理事補佐（年報担当）	宮丸 裕二	中央大学 法学部 准教授

『ディケンズ・フェロウシップ支部年報』

総索引

Index of the Japan Branch Bulletin

of the Dickens Fellowship

(1978 ~ 2007)

出版掲載順

『会報』第1号(1978)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の歩み(1970年12月-1978年6月)

「ディケンズ回顧」山本忠雄

「ディケンズ・フェロウシップ東京支部創立のころ」宮崎孝一

「ディケンズと私」内山正平

「ディケンズ・フェロウシップ会報創刊に当たって」中西敏一

「読書旅行」田辺昌美

「ディケンズ文学の旅」伊藤廣里

1978年度春季大会報告

研究発表(司会:田辺昌美)

「表裏なす世界『オリヴァ・トウィスト』の構成について」久田晴則

『「マーティン・チャズルウィット」考』中村愛人

日本におけるディケンズ関係の研究書、翻訳書、ならびにフェロウシップ

会員による研究書、翻訳書等(1974年4月-1978年3月)

『会報』第2号(1979)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(1978年10月-1979年9月)

「これからどうする」米田一彦

「「ディケンズ」レールを走る」小池滋

「ハーンのディケンズ評」内山正平

「漱石の見たディケンズ」宮崎孝一

「滞英日記抄」松村昌家

日本におけるディケンズ関係の研究書、翻訳書、ならびにフェロウシップ

会員による研究書、翻訳書等(1978年4月-1979年8月)

「フィリップ・コリンズとマイケル・スレーター」西條隆雄

1978年度総会報告

研究発表

「ディケンズの描く女性像の変遷」滝裕子

書評

「田辺昌美著『記憶』」植木研介

「宮崎孝一著『随想コロラドの月』」横川信義

「広島読書旅行」久田晴則

「テーマを追って読む・書く・生きる」宇佐見太市

「編集後記」中西敏一

『会報』第3号(1980)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(1979年10月-1980年9月)

祝辞 Philip Collins

祝電 Michael Slater

「十年前のこと」内山正平

1979年度総会報告

研究発表

「ディケンズのアメリカ体験」亀井規子

「ディケンズの文体」川澄英男

1980年度春季大会報告

シンポジウム『「リトル・ドリット」の諸問題』(司会:米田一彦)

「エイミー・ドリットについて」間二郎

「ウィリアム・ドリットをめぐって」植木研介

「アーサー・クレナムの遍歴」西條隆雄

「二人の父親」北條文緒

「ナンシーは何故……」宇佐見太市

「チョークの村にて」伊藤廣里

「会発足の頃見た映画『デイヴィッド・コパフィールド』」中西敏一

「田辺先生の御逝去を悼む」久田晴則

「田辺先生を偲ぶ」篠田昭夫

「編集後記」中西敏一

『会報』第4号(1981)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(1980年10月-1981年9月)

「C.D.とD.C.の相貌」宮崎孝一

「ジョイスのディケンズ讃美論」鈴木幸夫

『「ハード・タイムズ」のテキスト』寺内孝

ディケンズ関係の研究書・翻訳とフェロウシップ会員の著訳書

1981年度春季大会報告 植木研介

シンポジウム『「ピクウィック」の魅力をさぐる』(司会:小池滋)

「われらが青春のためにー「ピクウィック讃」」白田昭

「ピクウィックの変貌」福村絹代

『「ピクウィック」と1830年代』西條隆雄

「ディケンズの「失われた時を求めて」」福島光義

「私の骨董探索」高井由利子

「ディケンズとひな菊」湯木満寿美

「研究姿勢動向」宇佐見太市
 「ディケンズの「心」」藤本隆康
 「ディケンズの表現技法」山本恒義
 「日々に疎し」山本忠雄
 「神戸の地より皆さんへ」田村哲也
 「辺地から」入江興太郎
 「編集後記」間二郎

『会報』第5号(1982)

ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動(1981年10月-1982年9月)
 「ディケンズと漱石」間二郎
 1981年度総会報告
 講演(司会:宮崎孝一)
 「ディケンズと児童文学」北條文緒
 1982年度春季大会報告
 講演(司会:米田一彦)
 「『ハウスホールド・ワーズ』について」小松原茂雄
 「*Bleak House* の Chancery について」山本史郎
 シンポジウム「*David Copperfield*」(司会:川本静子)
 「ある象徴的な夢について」亀井規子
 「デイヴィッドの成長」滝裕子
 「子供たちの夢と挫折」高井由利子
 「ディケンズの英国とところどころ」中西敏一
 「サイクスを追って」西條隆雄
 ディケンズ関係の研究書・翻訳とフェローシップ会員の著訳書
 「ディケンズの持つ現代的な意味」山本恒義
 「エステラ像」宇佐見太市
 「ディケンズ読書会」安富良之
 「編集後記」中西敏一

『会報』第6号(1983)

ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動(1982年10月-1983年9月)
 「ディケンズのことわざ」萩原文彦
 1982年度総会報告
 講演(司会:小池滋)
 「ディケンズの挿絵師たち」鈴木幸夫
 シンポジウム「*Great Expectations* を読む」(司会:間二郎)
 「エステラ像をめぐる」宇佐見太市
 「『ピップの物語』の構築と解体」原英一
 「遺産・期待・幻滅」野中涼
 1983年度春季大会報告
 講演(司会:小池滋)
 「ディケンズと酒」白田昭

「ヒューズ牧師のお墓」伊藤廣里
 「『ニコラス・ニッケルビー』の上演について」亀井規子
 「レイチェルはどこに」北條文緒
 「無気味な人間像」光永裕美
 「カリカチュアの名手」横川信義
 「ディケンズのことは遊び」吉田孝夫
 「初めて小説を書いて」村石利夫
 ディケンズ関係の研究書・翻訳とフェローシップ会員の著訳書
 「編集後記」間二郎

『会報』第7号(1984)

ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動(1983年10月-1984年9月)
 1983年度総会報告 西條隆雄
 講演(司会:宮崎孝一)
 「ディケンズにおける事実と想像」Philip Collins
 「『無商旅人』関連の地図」植木研介
 「ディケンズとオランダの画家」山崎勉
 「『ハード・タイムズ』の「登場人物一覧表」」寺内孝
 「女性読者とディケンズ」宇佐見太市
 1984年度春季大会報告
 研究発表(司会:西條隆雄)
 要田圭治「『オリヴァー・トゥイスト』における悪魔的なもの」
 溝口薫「*Dombey and Son* における女性と愛」
 シンポジウム「*The Old Curiosity Shop* をめぐって」(司会:松村昌家)
 光永裕美「*Illusion・Disillusion*」
 白田昭「『骨董屋』の特性」
 間二郎「ネルの裏側」
 ディケンズ関係の研究書・翻訳とフェローシップ会員の著訳書
 「編集後記」中西敏一

『会報』第8号(1985)

ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動(1984年10月-1985年9月)
 「一フェローからの平信」米田一彦
 「ディケンズと河川」湯木満寿美
 「ロンドンを歩く」久田晴則
 「デフォーの A Tour とディケンズランド」中西敏一
 「続・女性読者とディケンズ」野畑多恵子
 「読み手の「思い」」宇佐見太市
 「スクルージの自己喪失と人間復活」志鷹道明
 「*Mr. Dick's Kite* について」青木健
 1985年度春季大会報告
 シンポジウム『われらが共通の友』(司会:松村昌家)
 「『おかねが好きな』ベラ」間二郎

「ボフィン像」西條隆雄

「*Our Mutual Friend* における上昇と下降のイメージ」山崎勉

1984 年度総会報告

講演

「ディケンズと翻訳」小池滋

日本におけるディケンズ関係の研究書とフェローシップ会員の著訳書

「編集後記」中西敏一

『会報』第9号(1986)

ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動 (1985 年 10 月 -1986 年 9 月)

「ディケンズとサーカス」湯木満寿美

「『昼夜平分の夜明け』について」宮崎孝一

「『大いなる遺産』— 原作と映画」齋藤九一

「ディケンズ愛好家たち」宇佐見太市

「リトル・ドリットの肖像」増渕正史

1986 年度春季大会報告

シンポジウム『エドウィン・ドルード』(司会：臼田昭)

「『エドウィン・ドルードの謎』における犯人の記号学」小林司

「『エドウィン・ドルード』と世紀末」小池滋

「『エドウィン・ドルードの謎』—facts into fiction」松村昌家

1986 年度春季大会報告

研究発表 (司会：小松原茂雄)

「ジョージ・シルヴァーマンの著者性」金山亮太

「*Great Expectations* の空間構造」新野緑

1985 年度総会報告 青木健

講演

「『ドンビー父子』と『荒涼館』における感情表現」Barbara Hardy

日本におけるディケンズ関係の研究書とフェローシップ会員の著訳書

「編集後記」中西敏一

『会報』第10号(1987)

ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動 (1986 年 10 月 -1987 年 9 月)

「フェロウシップ創立とその後」宮崎孝一

「ディケンズの多芸な演出」山本忠雄

「老人にもディケンズ」内山正平

「『エドウィン・ドルード』のミュージカル化」小池滋

「ディケンズのセンチメンタリズム」鈴木健三

「He doesn't work here」北條文緒

「デイヴィッドとユライア」篠田昭夫

「窓に縁どられた空と海」亀井規子

「『ピクウィック・ペーパーズ』の注釈」中西敏一

「ディケンズ・クイズ」臼田昭

1987 年度春季大会報告

研究発表 (司会：西條隆雄)

「“The lame demon” のトポス — 『クリスマス・キャロル』構想の一背景」

松村昌家

「*Bleak House* における“語り”のパターン」船橋麻由美

シンポジウム「『ドンビー・アンド・サン』の世界」(司会：小松原茂雄)

「ドンビー氏とカトル船長 — 『ドンビー父子商会』における二つの世界」

山本史郎

「“When found, make a note of”」植木研介

「『ドンビー・アンド・サン』の世界 — 時間モチーフを中心に」青木健

1986 年度総会報告 野畑多恵子

講演

「ディケンズとデイヴィッドとピップ — 『デイヴィッド・コパフィール」

ド』と『大いなる遺産』における自伝的要素」Philip Collins

日本におけるディケンズ関係ならびにフェローシップ会員の著訳書等

「編集後記」中西敏一

『会報』第11号(1988)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1987 年 10 月 -1988 年 9 月)

「Coaching Age と Dickens」湯木満寿美

「アランとディケンズ」崎村耕二

「『背教者ユリアヌス』を読んで」宇佐見太市

1987 年度総会報告

研究発表 (司会：間二郎)

「『我らの互いの友』— 逆転した男女の力関係について」松村豊子

「ピクウィック氏の眼鏡」野畑多恵子

1988 年度春季大会報告

研究発表 (司会：荻野昌利)

「サム・ウェラーの面白さ」楚輪松人

「ディケンズとヘンリー・ジェイムズ — 出版事情をめぐって」太田良子

シンポジウム「『荒涼館』をめぐって」(司会：小池滋)

「『荒涼館』ができるまで」内田正子

「『距離』の誘惑 — 『荒涼館』のピクチュアレスクとグロテスク」要田圭治

「『荒涼館』— ディケンズと過去」西條隆雄

「テムズ川とその付近の風景二つ」中西敏一

日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書等

「編集後記」中西敏一

『会報』第12号(1989)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1988 年 10 月 -1989 年 9 月)

「Dickens と cholera」湯木満寿美

「神の見えざる手」那須正彦

『『荒涼館』と『ロウフィールド館の惨劇』』山崎まゆみ
 1988 年度総会報告 横川信義
 講演（司会：宮崎孝一）
 ‘Charles Dickens and Hans Andersen’ Elias Bredsdoff
 1989 年度春季大会報告
 講演（司会：松村昌家）
 ‘Dickens and Australia’ Michael Hollington,
 研究発表（司会：植木研介）
 「*Our Mutual Friend* をめぐって」石塚裕子
 「『リトル・ドリット』における「窓」」田中孝信
 「ディケンズと読者」宇佐見太市
 「米田一彦氏追悼」宮崎孝一
 「小松原茂雄さんの思い出」小池滋
 日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書等
 「編集後記」中西敏一

『会報』第 13 号 (1990)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動（1989 年 10 月 -1990 年 9 月）
 「Dickens に協力した Cruikshank」湯木満寿美
 「橋の上の往来」高井由利子
 「『いわひ歌』の謎」宇佐見太市
 「十九世紀中期 — 「手」が意識された頃」寺内孝
 「ディケンズとヘンデル」松岡光治
 1989 年度総会報告
 講演（司会：間二郎）
 「ディケンズとジャマイカ事件」富山太佳夫
 研究発表（司会：青木健）
 「『荒涼館』におけるエスターの物語の前景と後景」齋藤九一
 シンポジウム「『ボズのスケッチ』をめぐって」（司会：中西敏一）
 「都市と生活」野畑多恵子
 「『マンモス街の瞑想』と「幽鬼の街」」松村昌家
 「映画的表现」小池滋
 1990 年度春季大会報告
 研究発表（司会：松村昌家）
 「『クリスマス・キャロル』における「光」と「闇」の諸相」松岡光治
 「『辛い世の中』における社会風刺」三ッ星堅三
 シンポジウム『二都物語』（司会：小池滋）
 「『二都物語』— 動揺する物語世界」新野緑
 「『二都物語』— シドニーは英雄か？」山本史郎
 「『二都物語』の掘り起こされた過去 — Knitting, Writing, Burying, Digging
 を巡って」植木研介
 「臼田昭さんの思い出」松村昌家
 「亀井規子氏追悼」野畑多恵子

日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳等
 「編集後記」中西敏一

『会報』第 14 号 (1991)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動（1990 年 10 月 -1991 年 9 月）
 「二代目の弁」小池滋
 「『ピクウィック・ペーパーズ』とお屋敷文学」福村絹代
 「“In worldly matters I’m a hild.”— 『懐かしい年への手紙』の「僕」のある友人と Harold Skimpole」福島光義
 1990 年度総会報告
 講演（司会：松村昌家）
 「ディケンズ時代のミュージック・ホール — 「生き抜く」労働者から「息抜く」労働者へ」井野瀬久美恵
 研究発表（司会：久田晴則）
 「ディケンズを訪ねて」吉田孝夫
 1991 年度春季大会報告
 シンポジウム「*The Old Curiosity Shop* の新しい読みの可能性を探る」（司会：荻野昌利）
 「人形劇から人間劇へ」原英一
 「夢の中へ — déjà vu としてのネルの旅」藤田博
 「*The Old Curiosity Shop* とファミリー・ロマンス」小野寺進
 講演（司会：増淵正史）
 「ディケンズとカニバリズム」Harry Stone（報告：間二郎）
 日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書等
 「中西敏一氏追悼」宮崎孝一
 「山本忠雄先生を偲んで」松村昌家
 「編集後記」青木健

『会報』第 15 号 (1992)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動（1991 年 10 月 -1992 年 9 月）
 「『モンタージスの犬』など」西條隆雄
 「ディケンズと教育」藤村公輝
 「『変身』の視点」間二郎
 1991 年度総会報告
 講演（司会：北條文緒）
 「想像力を想像するディケンズ」Barbara Hardy（報告：齋藤九一）
 研究発表（司会：西條隆雄）
 「『つらい時』における「事実」と「空想」— 二項対立の形成と解体」榎本洋
 1992 年度春季大会報告
 研究発表（司会：原英一）
 「『リトル・ドリット』における虚構の構造」玉井史絵
 「『大いなる遺産』のウェミックについて」梅正行

シンポジウム「ディケンズと演劇」
 『『共通の友』と『せむし男』』西條隆雄
 『『ロンドン商人』と『大いなる遺産』—ステレオタイプからアーキタイプへ』楚輪松人
 『『リトル・ドリット』における「カーリタース・ローマーナ」』松村昌家
 日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書等
 「編集後記」青木健

『会報』第16号(1993)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(1991年10月–1992年9月)
 「債務者監獄と英国小説」原英一
 「中に入るとそこは外」榎正行
 『『ピックウィック症候群』について』金山亮太
 1992年度総会報告
 講演(司会:山本史郎)
 「オーウェルのディケンズ—あるエッセイとそのコンテキスト」Angus Collins
 朗読(司会:北條文緒)
 Robert Golding
 1993年度春季大会報告
 研究発表(司会:植木研介)
 「A Christmas Carolにおける「クリスマスの奇跡」」小寺理砂
 「Great Expectations—Pipと遺産相続の条件について」大口郁子
 講演(司会:間二郎)
 「ヴィクトリア時代の引越し」富山太佳夫
 日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書
 「編集後記」青木健

『会報』第17号(1994)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(1993年10月–1994年9月)
 「河原重清先生のこと」伊藤廣里
 1993年度総会報告
 講演(司会:西條隆雄)
 『『ドンビー父子』における帝国、境界、家庭』田中孝信
 1994年度春季大会報告
 研究発表(司会:田中孝信)
 「ワシントンのD・CのC・D」川澄英男
 講演(司会:佐々木徹)
 『『デイヴィッド・コパフィールド』—回想と前進と』Edward Costigan
 シンポジウム「ディケンズと挿絵画家を語る」
 「ディケンズとジョン・リーチ」松村昌家
 「“フィズ”の領分—挿絵製作のプロセスをめぐって」谷田博幸

「ルーク・ファイルズ」小池滋
 日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書・論文

『会報』第18号(1995)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(1994年10月–1995年9月)
 「マイケル・スレイター先生日本滞在記」佐々木徹
 「インターネット上のディケンズ」松岡光治
 1994年度総会報告
 研究発表
 『『マーティン・チャズルウィット』の医術と詐術』村山敏勝
 講演
 「南ロシアに実在した「ピックウィック・クラブ」について」今井義夫
 1995年度春季大会報告
 研究発表
 「Great Expectationsにおける階層と職業—「輪」と「層」の観点から」
 崎村耕二
 『『互いの友』における「相互性」について』田辺洋子
 講演(司会:松村昌家)
 ‘Creative Anger, Creative Writer: Dickens the Journalist and Dickens the Novelist’ Michael Slater
 フェロウシップ会員の著訳書・論文(1994–95年)

『会報』第19号(1996)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(1995年10月–1996年9月)
 「ボーツマスのディケンズ・カンファレンス」北條文緒
 書評
 「田辺(洋子)さんの『互いの友』上梓に寄せて」間二郎
 1995年度総会報告
 朗読
 「ディケンズの「すばらしき新世界」—朗読台本「ドクター・マリゴールド」に見るディケンズ像」佐藤真二
 講演
 「ディケンズと「ザ・デイリー・ニューズ」—鉄道政策」植木研介
 1996年度春季大会報告
 研究発表(司会:松岡光治)
 『『デイヴィッド・コパフィールド』における監獄的空間』木原泰紀
 「次の日の夕方?—『マーティン・チャズルウィット』の大団円に於ける混乱」佐々木徹
 講演(司会:西條隆雄)
 ‘Dickens and Drinking’ Paul Snowden
 「編集後記」青木健
 フェロウシップ会員の論文・編著訳書(1995–96年)

『会報』第20号(1997)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(1996年10月-1997年9月)
「ワーズワースの贈り物」伊藤廣里
書評

「間二郎訳『我らが共通の友』について」原英一
「中島孤島と『クリスマス・キャロル』」宇佐見太市
「ディケンズ・ユニバースに参加して」矢次綾

1996年度総会報告

研究発表

「ディケンズとアメリカーディケンズ文学の秘密」川澄英男
「Bleak Houseにおける「読むこと」ー時間・テキスト・主体」新野緑
「なぜディケンズはビデオ化されるのか?ー小説と映像」楚輪松人

1997年度春季大会報告

研究発表(司会:青木健)

「ディケンズの「子どもの視点」ー*Great Expectations*について」廣野由美子

「『リトル・ドリット』における家族神話の崩壊と再生」永岡規伊子
シンポジウム「ディケンズと監獄」

「Horsemonder Lane Gaol」松村昌家

「ニューゲイト獄をめぐる」西條隆雄

「『マーシャルシー・プリズン』を中心に」久田晴則

フェロウシップ会員の論文・著訳書(1996-97年)

「編集後記」青木健

『会報』第21号(1998)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(1997年10月-1998年9月)
「インターネットとディケンズ研究」松岡光治
「ハーディとディケンズ」宇佐見太市

1997年度総会

研究発表(司会:久田晴則)

「『リトル・ドリット』における束縛と、『リトル・ドリット』の解放」小野章

講演(司会:植木研介)

「ディケンズと演技する自我」Andrew Sanders

1998年度春季大会

研究発表(司会:青木健)

「逸脱する肉体ーピクウィック症候群の二症例」宮丸裕二
「『互いの友』に見るアイデンティティの混乱ー帝国主義,階級,ジェンダーの観点から」武井暁子

シンポジウム「ディケンズと狂気」(司会:原英一)

「狂気とグロテスクー『バーナビー・ラッジ』における躁暴の狂気と白痴の狂気の観点から」小野寺進

「ディックさんの狂気は何を暴いているのか」金山亮太

「監禁／群集／記憶／愛」松岡光治

「編集後記」青木健

フェロウシップ会員の論文・著訳書(1997-98年)

『会報』第22号(1999)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(1998年10月-1999年9月)
「多角的なディケンズを」西條隆雄

「支部長辞任の弁」小池滋

「『荒涼館』における隠喩としての伝染病」中村隆

「ディケンズと軍人」川澄英男

「ディケンズ祭」伊藤廣里

「ディケンズ・フェロウシップ,ヨーク大会に参加して」木村英紀

1998年度総会報告

研究発表(司会:荻野昌利)

「エイミー再考ードストエフスキーのソーニャを通して」小寺里砂
講演

「ディケンズと階級」Andrew Sanders(報告:佐々木徹)

1999年度春季大会

研究発表(司会:梅正行)

「逆転の構図ー*Great Expectations*にみる病と癒し」西垣佐理

「ピップは自分の人生の主人公になれるのかー精神療法の観点から」松本靖彦

シンポジウム「後輩作家から見たディケンズ」(司会:荻野昌利)

「トロロブから見たディケンズ」齋藤九一

「『フィーリックス・ホルト』ーエリオットはいかに『荒涼館』を書き直したか」天野みゆき

「ディケンズとコンラッドーHouseholdとEmpire」木村茂雄

「論文の電子化について」松岡光治

フェロウシップ会員の論文・著訳書(1997-99年)

「編集後記」原英一

『年報』第23号(2000)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(1999年10月-2000年9月)
巻頭言「30周年の幕開け」西條隆雄

論文

「Charles Dickensと5月7日」山崎勉

「『荒涼館』における病ーエスタとの関わり」矢次綾

「ピップは自分の人生の主人公になれるのか」松本靖彦

「『我らが共通の友』と『白痴』ー愛と破滅の物語」及川陽子

「通りから見た『エドウィン・ドルードの謎』」藤井晶宏

書評

「西條隆雄『ディケンズの文学ー小説と社会』」原英一

「松村昌家教授古稀記念論文集刊行会『ヴィクトリア朝ー文学・文化・

歴史』山本史郎

「田辺洋子『ディケンズ後期四作品研究：「視点」から脱「視点」へ — *Bleak House, A Tale of Two Cities, Great Expectations, Our Mutual Friend* を中心として』植木研介

「宇佐見太市『ディケンズと『クリスマス・ブックス』』小野寺進

「チャールズディケンズ（著）山村元彦・竹村義和・田中孝信（共訳）『ハード・タイムズ』金山亮太

Fellowship's Miscellany

「神の見えざる手（その2）— 経済学から文学へ」那須正彦

「ロンドン滞在記」青木健

「グロテスクな女性たち」山本まゆみ

News and Reports

「The 2000 Dickens Conference at Rochester 報告記」木村英紀

「The 2000 Dickens Conference at Rochester 報告記」宮丸裕二

1999 年度総会報告

研究発表（司会：原英一）

「『ニコラス・ニクルビー』におけるメロドラマ的自己表現」甲斐清高

講演（司会：楚輪松人）

「The Artistry of *Our Mutual Friend*」Michael Slater

2000 年度春季大会報告

研究発表（司会：松岡光治・要田圭治・村山敏勝）

「ディケンズとドストエフスキー — 『我らが共通の友』、『白痴』における愛ゆえの殺人の結末」及川陽子

「誰がエドウィン・ドルードを殺そうとかまうものか — 探偵小説『エドウィン・ドルードの謎』試論」梶山秀雄

「『荒涼館』における病 — エスタの病が象徴するもの」矢次綾

講演（司会：植木研介）

「The Theatre Dickens Knew」Paul Schlicke

フェロウシップ会員の論文・著訳書等（1999–2000 年）

「編集後記」原英一

『年報』第 24 号 (2001)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動（2000 年 10 月–2001 年 9 月）

巻頭言「充実と発展」西條隆雄

論文

「Agnes 再考 — “angel in the house” と “strong-minded woman” の狭間で」高橋沙央里

「マードル氏とメルモット氏」齋藤九一

「カートンという男」長谷川雅世

「『憂鬱な男』たち — 『互いの友』における Victorian masculinity 形成をめぐる」西垣佐理

「誰がエドウィン・ドルードを殺そうとかまうものか — 探偵小説『エドウィン・ドルードの謎』試論」梶山秀雄

書評

「身廊と袖廊の交わる場所 — 松村昌家『水晶宮物語』を読む」藤田博

特別寄稿

「“Delightful, Splendid, and Surprising”: The Theatre Dickens Knew」Paul Schlicke

Fellowship's Miscellany

「『アメリカ覚え書き』への覚え書き」川澄英男

「英国滞在日記」宮丸裕二

「イギリス版『北の国から』 — アバディーン大学留学レポート」武井暁子

News and Reports

「2000 年ディケンズ・ユニバース報告」矢次綾

「ディケンズ祭 — マイケルスレイター教授の退官を記念して」佐々木徹

「ジェラルド・ディケンズとサイモン・カロウ — 朗読と一人芝居」佐藤真二

「Mitsu Matsuoka Hits the Headlines?」E. H.

「95th International Conference of the Dickens Fellowship に出席して」荒井良雄

2000 年度総会報告

研究発表（司会：新野緑）

「Household Words における Dickens の編集方針 — “On Strike”, “Looked Out”, *Hard Times* における Preston ストライキを他誌と比較して」関田朋子

シンポジウム「ディケンズと帝国」

「『ドンビー父子』 — 中国への旅と新しい家族の誕生」松村豊子

「『荒涼館』のロンドンと帝国」要田圭治

「不安のとげ — 『エドウィン・ドルードの謎』と帝国」田中孝信

特別寄稿「ディケンズと帝国」

「『ドンビー父子』 — 中国への旅と新しい家族の誕生」松村豊子

「『荒涼館』のロンドンと帝国」要田圭治

「不安のとげ — 『エドウィン・ドルードの謎』と帝国」田中孝信

2001 年度春季大会報告

シンポジウム「ディケンズとホガース」（司会：青木健）

「貧困と犯罪という見せ物 — 『オリヴァー・トゥイスト』を中心に」中村隆

「ディケンズとホガースの造形術」松本靖彦

講演（司会：太田良子）

「ディケンズ文学の語り — 文体と朗読表現の関係」荒井良雄

フェロウシップ会員の論文・著訳書等（2000–2001 年）

「編集後記」原英一

『年報』第25号(2002)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(2001年10月-2002年9月)

巻頭言「小説執筆と演劇活動」西條隆雄

論文

『『骨董屋』と『賭博者』— 賭博者の悲劇』及川陽子

「ディケンズの『二都物語』とトロロプの『ラ・ヴァンデ』」齋藤九一

「新しいヒロイン—*Great Expectations*における Estella の物語」高橋沙央里

‘Miss Havisham and Victorian Psychiatry’ Akiko Takei

‘*Great Expectations*: Democracy and the Problem of Social Inclusion’ Fumie Tamai

「賢い道化ジョー—ジョーの赦しを乞うピップ」長谷川雅世

「ボズナップと水の帝国—『我らが共通の友』を『エドウィン・ドルードの謎』から読む」藤井晶宏

書評

「新野緑『小説の迷宮—ディケンズ後期小説を読む』」中村隆

「佐々木徹(監修)『ウィルキー・コリンズ傑作選』」梶山秀雄

「西條隆雄(編)『ヴィクトリア朝小説と犯罪』」村山敏勝

「松岡光治(編訳)『ギaskell短篇集』」天野みゆき

「谷田博幸『極北の迷宮—北極探検とヴィクトリア朝文化』」新野緑

特別寄稿

‘Slimming of Slumming? Dickens and the Shift from Monthly to Weekly Serialization’ Graham Law

Fellowship’s Miscellany

「カンタベリー留学物語」西垣佐理

「ディケンズとヴィクトリア朝信号技術」小池滋

News and Reports

「第96回ディケンズ・フェロウシップ国際大会」西條隆雄

「A Man for All Media: The Popularity of Dickens に参加して」佐々木徹

「Malcolm Andrews 先生特別講演」閑田朋子

2001 年度総会報告

シンポジウム「ディケンズ批評—古典時代」(司会:西條隆雄)

「G. K. Chesterton を中心に」佐々木徹

「George Gissing を中心に」小池滋

「George Orwell およびそれ以前」松村昌家

講演(司会:廣野由美子)

‘Slimming or Slumming? Dickens and the Shift from Monthly to Weekly Serialization’ Graham Law

2002 年度春季大会報告

研究発表(司会:佐々木徹)

‘The Challenger of *The Battle of Life*’ David Chandler

朗読(司会:荒井良雄)

「Reading from ‘Doctor Marigold」佐藤真二

シンポジウム「ディケンズ批評—発展の時代」(司会:原英一)

「J. Hillis Miller を中心に」原英一

「Humphry House を中心に」山本史郎

「Steven Marcus を中心に」植木研介

特別企画「ディケンズ批評—古典時代・発展の時代」

「再評価への道のり」西條隆雄

「ジョージ・ギッシング」小池滋

「チェスタトンのディケンズ論」佐々木徹

「ジョージ・オーウェルおよびそれ以前」松村昌家

「非凡な凡人—ハンフリー・ハウスとディケンズ」山本史郎

「J・H・ミラーのディケンズ批評」原英一

「Steven Marcus のディケンズ批評」植木研介

フェロウシップ会員の論文・著訳書等(2000-2002)

「編集後記」原英一

『年報』第26号(2003)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動(2002年10月-2003年9月)

巻頭言「1ポンド紙幣を追って」西條隆雄

論文

「‘エクセルシア’考—ディケンズとロングフェローの一接点」寺内孝

「ディケンズの読者と読者 Howitt—『幽霊屋敷』をめぐる論争」小野寺進

「ピップと二人の男たち」奥田真由子

「ディケンズとコリンズの精神科学—*Our Mutual Friend* と *Armada* における意識の諸相」野々村咲子

「『エドウィン・ドルードの謎』と『ムーンストーン』—ディケンズとコリンズの人種観」宮川和子

書評

「松村昌家『十九世紀ロンドン生活の光と影—リージェンシーからディケンズの時代へ』」原英一

「チャールズ・ディケンズ(著), 石塚裕子(訳)『デイヴィッド・コパフィールド』」松村豊子

「チャールズ・ディケンズ(著), 田辺洋子(訳)『ピクウィック・ペーパーズ』」梅宮創造

「Tadao Yamamoto, *Growth and System of the Language of Dickens: An Introduction to A Dickens Lexicon*」堀正広

「山崎勉『ディケンズのころろ』」永岡規伊子

Fellowship’s Miscellany

「ウスター編『英語辞典』とディケンズ」寺内孝

「続・イギリス版北の国から」武井暁子

「サイト内検索とコンコーダンス」松岡光治

2002 年度総会報告

研究発表 (司会: 要田圭治)

「『エクセルシア』考 — ディケンズとロングフェロウの一接点」寺内孝

朗読 (司会: 青木健)

‘Reading from *A Christmas Carol*’ David Rycroft

講演 (司会: Graham Law)

‘Unequal Partners: On Collaboration Between Dickens and Collins’ Lyllian R. Nayder

2003 年度春季大会報告

研究発表 (司会: 原英一)

「『リトル・ドリット』における正しい視点」水野隆之

「ディケンズとコリンズの精神科学 — *Our Mutual Friend* と *Armada* に
おける意識の諸相」野々村咲子

シンポジウム「1980 年以降のディケンズ批評」(司会: 村山敏勝)

「ディケンズと新歴史主義批評」村山敏勝

「ディケンズとポストコロニアル批評」新野緑

「Alexander Welsh のディケンズ批評」玉井史絵

特別企画「1980 年以降のディケンズ批評」

「ディケンズと新歴史主義批評」村山敏勝

「ディケンズとポストコロニアル批評」玉井史絵

「Alexander Welsh のディケンズ批評」新野緑

フェロウシップ会員の論文・著訳書等 (2002–2003)

「編集後記」原英一

『年報』第 27 号 (2004)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (2003 年 10 月–2004 年 9 月)

巻頭言「ディケンズとオーストラリア」西條隆雄

論文

「科学か、民衆の想像力か — ピクウィック氏のフォークロア」光沢隆

「『二都物語』論 — 天使の光と影」田中孝信

書評

「チャールズディケンズ (著), 田辺洋子 (訳)『バーナビ・ラッジ』」篠
田昭夫「チャールズディケンズ (著), 藤岡啓介 (訳)『ボズのスケッチ — 短
篇小説篇』」金山亮太「植木研介『チャールズ・ディケンズ研究 — ジャーナリストとして, 小
説家として』」西條隆雄「松岡光治 (編)『ギッシングの世界 — 全体像の解明をめざして』」吉
田朱美

「小池滋『英国らしさを知る事典』」要田圭治

「Masahiro Hori, *Investigating Dickens' Style: A Collocational Analysis*」今林
修

Fellowship's Miscellany

「『チャールズ・ディケンズの謎』」川澄英男

「ディケンズと『エクセルシア』(補遺)」寺内孝

「女性と結婚」山本まゆみ

「ディケンズ作品のハイパー・コンコーダンス」松岡光治

News and Reports

「第 98 回ディケンズ・フェロウシップ国際大会」西條隆雄

2003 年度総会報告

研究発表 (司会: 廣野由美子)

「ヴィクトリア朝の女性挿絵画家」木原貴子

講演 (司会: 青木健・原英一)

「ディケンズのクリスマス特集号と雑誌編集」植木研介

‘The Martyr in Dickens’ Adrian Poole

2004 年度春季大会報告

シンポジウム「ディケンズにおける想像力の原点を求めて」(司会: 松村
豊子)「*Barnaby Rudge* を中心に」原英一「*Martin Chuzzlewit* を中心に」梶山秀雄「*Dombey and Son* を中心に」松村豊子

講演・朗読 (司会: David Rycroft)

‘“This fiction of an occupation”: Mr Boffin’s encounter with Blight in *Our
Mutual Friend*’ Peter Robinson

講演 (司会: 川本静子)

「ディケンズと世紀末」松村昌家

特別寄稿

‘Dickens and Shakespeare’ Paul Schlicke

‘The Martyr in Dickens’ Adrian Poole

‘“This fiction of an occupation”: Mr Boffin’s Encounter with Blight’ Peter
Robinson

「ディケンズと世紀末」松村昌家

特別企画「ディケンズにおける想像力の原点を求めて」

「序」松村豊子

「『バーナビー・ラッジ』と徒弟のロマンス」原英一

「食欲不振の探偵 — 『マーティン・チャズルウィット』」梶山秀雄

「誰がドンビー氏を救済したのか? — 『ドンビー父子』再読」松村豊
子

フェロウシップ会員の論文・著訳書等 (2002–2003)

「編集後記」原英一

『年報』第 28 号 (2005)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (2004 年 10 月–2005 年 9 月)

巻頭言「国際化に向けて」西條隆雄

論文

「『バーナビー・ラッジ』における変化と不変 — 歴史小説家としてのディケンズ」 矢次綾

「『ハード・タイムズ』におけるシシーの役割」 中島彰子

書評

「荻野昌利『歴史をく読む> — ヴィクトリア朝の思想と文化』」 玉井史絵

「田辺洋子（訳）『リトル・ドリット』上下巻」 甲斐清高

「チャールズ・ディケンズ（著）、伊藤廣里（訳）『炉端のこおろぎ』」 宇佐見太市

「石塚裕子『ヴィクトリアンの地中海』」 井出弘之

「マイケル・スレイター（著）佐々木徹（訳）『ディケンズの遺産 — 人間と作品の全体像』」 松本靖彦

Fellowship's Miscellany

「ディケンズのサイレント映画を観る」 佐々木徹

「ディケンズ今わの言葉 — 「うん、地面にね」」 寺内孝

「エムリン・ウィリアムズの朗読」 荒井良雄

News and Reports

「第 99 回ディケンズ・フェロウシップ国際大会」 西條隆雄

「ディケンズ・フェロウシップのカンタベリー国際大会に参加して」 荒井良雄

「フィラデルフィアとニューヨークでの講演と朗読」 荒井良雄

「ディケンズ・プロジェクト 25 周年記念大会」 閑田朋子

2004 年度総会報告

研究発表（司会：植木研介）

「*Hard Times* における Sissy Jupe の役割」 中島彰子

「*The Old Curiosity Shop* — 都市と農村、そして帝国」 玉井史絵

シンポジウム「社会小説家としてのディケンズとギaskell」（司会：西條隆雄）

「*Dombey and Son* 前後におけるディケンズの社会小説」 西條隆雄

「社会小説家としてのギaskell — 「転落女性」問題に焦点をあてて」 足立万寿子

「社会問題小説としての『ハード・タイムズ』の魅力」 田中孝信

「*North and South* を中心に」 閑田朋子

特別講演（司会：松岡光治）

‘The Eagle and the Dove: Dickens, Mrs Gaskell, and the Publishing Culture of the Mid-Nineteenth Century’ Alan Shelston

2005 年度春季大会報告

講演（司会：荻野昌利）

「ディケンズを聴く」 佐々木徹

講演（司会：松岡光治）

「<橋>から見たロンドンの近代化」 片木篤

講演と朗読（司会：西條隆雄）

‘“Dickens and Australia” followed by a reading of “Sikes and Nancy”’ Alan Dilnot

特別寄稿

‘The Eagle and the Dove: Dickens, Mrs Gaskell, and the Publishing Culture of the Mid-Nineteenth Century’ Alan Shelston

「『橋』から見たロンドンの近代化」 片木篤

‘Dickens and Australia’ Alan Dilnot

フェロウシップ会員の論文・著訳書等 (2004-2005)

「編集後記」（原英一・宮丸裕二）

『年報』第 29 号 (2006)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動（2005 年 10 月 – 2006 年 9 月）

巻頭言 ‘Queen Mab’s Chariot over the Wasteland’ 原英一

巻頭言 「引継ぎを終えて」 西條隆雄

論文

「『バーナビー・ラッジ』にみる国家の姿」 藤井晶宏

書評

「チャールズ・ディケンズ（著）伊藤・下笠・隈元（訳）『アメリカ紀行』」 川澄英男

「チャールズ・ディケンズ（原作）ポランスキー（監督）映画 / DVD『オリバー・ツイスト』」 楚輪松人

‘Allan Conrad Christensen, *Nineteenth-Century Narrative of Contagion: Our Feverish Contact*’ Jenny Holt

「大井浩二『旅人達のアメリカ — コベット、クーバー、ディケンズ』」 川澄英男

「新井潤美『不機嫌なメアリー・ポピンズ — イギリス小説と映画から読む「階級」』」 木村晶子

Fellowship's Miscellany

「ディケンズにおける自殺の諸相」 松岡光治

「イギリス通信」 川村恵子

「カンタベリー滞在・留学記」 松本靖彦

News and Reports

「ディケンズ・フェロウシップ第 100 回国際大会」 原英一

「国際大会に参加して」 永岡規伊子

2005 年度総会報告

研究発表（司会：中村隆）

「*The Mystery of Edwin Drood* における平衡と不均衡」 吉田朱美

「*Great Expectations* — 作品のテーマと ‘self help’ のコンテキスト」 吉田一穂

講演（司会：山本史郎）

「左側に転覆する列車 — ディケンズと脳梗塞について」 金山亮太

- 講演（司会：佐々木徹）
 ‘Dickens’s Lives’ Michael Slater
 2006 年度春季大会報告
 講演（司会：小野寺進）
 「ディケンズはキャサリンと和解できたか？」寺内孝
 講演（司会：玉井史絵）
 「チャールズ・ディケンズの家、サマセット・モームの家」梅正行
 講演（司会：西條隆雄）
 ‘Dickens and “the Moving Age” ’ Tony Williams
 特別寄稿
 「左側に転覆する列車 — ディケンズと脳梗塞について」金山亮太
 「ディケンズとキャサリンは和解できたか？」寺内孝
 ‘Dickens and “the Moving Age” ’ Tony Williams
 フェロウシップ会員の執筆業績 (2005–2006)
 「編集後記」(原英一・宮丸裕二)
- 『年報』第 30 号 (2007)
 ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (2006 年 10 月–2007 年 9 月)
 巻頭言「ディケンズ生誕 200 周年に向けて」
 論文
 「『ピクウィック・ペーパーズ』の福音主義的側面」吉田一穂
 「『オリヴァー・ツイスト』における「眠り」について」渡部智也
 「フランス革命期を描く小説の歴史性 — 『二都物語』と『ラ・ヴァンデ』を中心に」矢次綾
- 書評
 「ディケンズ (原作) 土屋啓之助 (監督) テレビ放映／DVD ボックス『さすらいの少女ネル』」宮丸裕二
 「エリザベス・ジェイムズ (著) 高橋裕子 (訳) 『図説チャールズ・ディケンズ』」廣野由美子
 「Malcolm Andrews, *Charles Dickens and His Performing Selves: Dickens and the Public Readings*」松本靖彦
 「Osamu Imahayashi, *Charles Dickens and Literary Dialect*」堀正広
 「Jane H. Berard, *Dickens and Landscape Dicourse*」三宅敦子
 「田中孝信『ディケンズのジェンダー観の変遷 — 中心と周辺のせめぎ合い』」中村隆
 「G・M・ヤング (著) 松村昌家・村岡健次 (訳) 『ある時代の肖像 — ヴィクトリア朝イングランド』」宇佐見太市
 「川本皓嗣・松村昌家 (編) 『ヴィクトリア朝英国と東アジア』」井野瀬久美恵
- Fellowship’s Miscellany
 「『ディケンズ鑑賞大事典』の刊行を終えて」西條隆雄
 「The CD’s CD-ROM Was Not Built in a Day」松岡光治
 「二人の先哲」寺内孝

- 「Dickens Glossary」清水英秋
 「ディケンズの作品におけるイジメの問題」松岡光治
 News and Reports
 「第 101 回ディケンズ・フェロウシップ国際大会」西條隆雄
 2006 年度総会報告
 研究発表（司会：田中孝信）
 「Oliver Twist における「眠り」について」渡部智也
 「『二都物語』論 — カートンの自己犠牲にみる自意識の働き」大森幸享
 講演（司会：原英一）
 「ディケンズと素人演劇活動」西條隆雄
 2007 年度春季大会報告
 研究発表（司会：金山亮太）
 ‘The Muddled State of Education and Family Relationships in *Hard Times*’
 Karen Ohshima
 「『完全なるイギリスの主婦』を目指して — *Our Mutual Friend* から考える女性表象」加藤匠
 講演（司会：松村豊子）
 「ディケンズの速記と人物造形」松本靖彦
 「慈善活動家としてのディケンズ — Urania Cottage の関わりを中心に」
 武井暁子
- 特別寄稿
 ‘Dickens and Gad’s Hill Place’ Takeshi Terauchi
 「ディケンズと素人演劇活動 — 演劇活動と創作の新領域」西條隆雄
 「ディケンズの速記と人物造形」松本靖彦
 「慈善活動家としてのディケンズ — ユーレイニア・コテージへの評価」
 武井暁子
- 「追悼 フィリップ・コリンズ教授」西條隆雄
 「追悼 村山敏勝博士」宮丸裕二
 フェロウシップ会員の執筆業績 (2006–2007)
 「編集後記」(原英一・宮丸裕二)

『ディケンズ・フェロウシップ支部年報』

総索引

**Index of the Japan Branch Bulletin
of the Dickens Fellowship
(1978 ~ 2007)**

執筆順

あ

青木健	「 <i>Mr. Dick's Kite</i> について」	8
青木健	1985 年度総会講演報告	9
青木健	「『ドンビー・アンド・サン』の世界 — 時間モチーフを中心に」(1987 年度春季大会シンポジウム「『ドンビー・アンド・サン』の世界」報告)	10
青木健	1989 年度総会研究発表司会	13
青木健	「編集後記」	14
青木健	「編集後記」	15
青木健	「編集後記」	16
青木健	「編集後記」	19
青木健	1997 年度春季大会研究発表司会	20
青木健	「編集後記」	20
青木健	1998 年度春季大会研究発表司会	21
青木健	「編集後記」	21
青木健	「ロンドン滞在記」(Miscellany)	23
青木健	2001 年度春季大会シンポジウム「ディケンズとホガース」司会	24
青木健	2002 年度総会朗読司会	26
青木健	2003 年度総会講演司会	27
足立万寿子	「社会小説家としてのギヤスケル — 「転落女性」問題に焦点をあてて」(2004 年度総会シンポジウム「社会小説家としてのディケンズとギヤスケル」報告)	28
天野みゆき	「『フィーリックス・ホルト』 — エリオットはいかに『荒涼館』を書き直したか」(1999 年度春季大会シンポジウム「後輩作家から見たディケンズ」報告)	22
天野みゆき	「松岡光治 (編訳)『ギヤスケル短篇集』」(書評)	25
荒井良雄	「95th International Conference of the Dickens Fellowship に出席して」(News & Reports)	24

荒井良雄	「ディケンズ文学の語り — 文体と朗読表現の関係」(2001 年度春季大会講演報告)	24
荒井良雄	2002 年春季大会朗読司会	25
荒井良雄	「エムリン・ウィリアムズの朗読」(Miscellany)	28
荒井良雄	「ディケンズ・フェロウシップのカンタベリー国際大会に参加して」(News & Reports)	28
荒井良雄	「フィラデルフィアとニューヨークでの講演と朗読」(News & Reports)	28
石塚裕子	「 <i>Our Mutual Friend</i> をめぐって」(1989 年度春季大会研究発表報告)	12
井出弘之	「石塚裕子『ヴィクトリアンの地中海』」(書評)	28
伊藤廣里	「ディケンズ文学の旅」	1
伊藤廣里	「チョークの村にて」	3
伊藤廣里	「ヒューズ牧師のお墓」	6
伊藤廣里	「河原重清先生のこと」	17
伊藤廣里	「ワーズワースの贈り物」	20
伊藤廣里	「ディケンズ祭」	22
井野瀬久美恵	「ディケンズ時代のミュージック・ホール — 「生き抜く」労働者から「息抜く」労働者へ」(1990 年度総会講演報告)	14
井野瀬久美恵	「川本皓嗣・松村昌家 (編)『ヴィクトリア朝英国と東アジア』」(書評)	30
今井義夫	「南ロシアに実在した「ピックウィック・クラブ」について」(1994 年度総会講演報告)	18
今林修	「Masahiro Hori, <i>Investigating Dickens' Style: A Collocational Analysis</i> 」(書評)	27
入江興太郎	「辺地から」	4
植木研介	「田辺昌美著『記憶』」(書評)	2
植木研介	「ウィリアム・ドリットをめぐって」(1980 年度春季大会シンポジウム報告「『リトル・ドリット』の諸問題」)	3
植木研介	1981 年度春季大会報告	4
植木研介	「『無商旅人』関連の地図」	7
植木研介	「“When found, make a note of”」(1987 年度春季大会シンポジウム「『ドンビー・アンド・サン』の世界」報告)	10
植木研介	1989 年度春季大会研究発表司会	12
植木研介	「『二都物語』の掘り起こされた過去 — Knitting, Writing, Burying, Digging を巡って」(1990 年度春季大会シンポジウム「二都物語」報告)	13
植木研介	1993 年度春季大会研究発表司会	16
植木研介	1997 年度総会講演司会	21
植木研介	「ディケンズと「ザ・デイリー・ニューズ」 — 鉄道政策」(1995 年度総会講演報告)	19

植木研介	「田辺洋子『ディケンズ後期四作品研究：「視点」から脱「視点」へ — <i>Bleak House, A Tale of Two Cities, Great Expectations, Our Mutual Friend</i> を中心として』」(書評)	23
植木研介	2000 年度春季大会講演司会	23
植木研介	「Steven Marcus を中心に」(2002 年春季大会シンポジウム「ディケンズ批評 — 発展の時代」報告)	25
植木研介	「Steven Marcus のディケンズ批評」(特別企画「ディケンズ批評 — 古典時代・発展の時代」)	25
植木研介	「ディケンズのクリスマス特集号と雑誌編集」(2003 年度総会講演報告)	27
植木研介	2004 年度総会研究発表司会	28
宇佐見太市	「中島孤島と『クリスマス・キャロル』」	20
宇佐見太市	「チャールズ・ディケンズ (著), 伊藤廣里 (訳)『炉端のこおろぎ』」(書評)	28
宇佐見太市	「G・M・ヤング (著) 松村昌家・村岡健次 (訳)『ある時代の肖像 — ヴィクトリア朝イングランド』」(書評)	30
宇佐見太市	「テーマを追って読む・書く・生きる」	2
宇佐見太市	「ナンシーは何故 ……」	3
宇佐見太市	「研究姿勢動向」	4
宇佐見太市	「エステラ像」	5
宇佐見太市	「エステラ像をめぐる」(1982 年度総会シンポジウム「 <i>Great Expectations</i> を読む」報告)	6
宇佐見太市	「女性読者とディケンズ」	7
宇佐見太市	「読み手の「思い」」	8
宇佐見太市	「ディケンズ愛好家たち」	9
宇佐見太市	「『背教者ユリアヌス』を読んで」	11
宇佐見太市	「ディケンズと読者」	12
宇佐見太市	「『いわひ歌』の謎」	13
宇佐見太市	「ハーディとディケンズ」	21
白田昭	「われらが青春のために — 「ピクウィック讃」(1981 年度春季大会シンポジウム報告「『ピクウィック』の魅力さをぐる」)	4
白田昭	「ディケンズと酒」(1983 年度春季大会講演報告)	6
白田昭	「『骨董屋』の特性」(1987 年度春季大会シンポジウム「 <i>The Old Curiosity Shop</i> をめぐる」報告)	7
白田昭	1986 年度春季大会シンポジウム『エドウィン・ドルード』司会	9
白田昭	「ディケンズ・クイズ」	10
内田正子	「『荒涼館』ができるまで」(1988 年度春季大会シンポジウム「『荒涼館』をめぐる」報告)	11
内山正平	「ディケンズと私」	1
内山正平	「ハーンのディケンズ評」	2
内山正平	「十年前のこと」	3
内山正平	「老人にもディケンズ」	10

梅宮創造	「チャールズ・ディケンズ (著), 田辺洋子 (訳)『ピクウィック・ペーパーズ』」(書評)	26
榎本洋	「『つらい時』における「事実」と「空想」— 二項対立の形成と解体」(1991 年度総会研究発表報告)	15
及川陽子	「『我らが共通の友』と『白痴』— 愛と破滅の物語」(論文)	23
及川陽子	「ディケンズとドストエフスキー — 『我らが共通の友』, 『白痴』における愛ゆえの殺人の結末」(2000 年度春季大会研究発表報告)	23
及川陽子	「『骨董屋』と『賭博者』— 賭博者の悲劇」(論文)	25
大口郁子	「 <i>Great Expectations</i> —Pip と遺産相続の条件について」(1993 年度春季大会研究発表報告)	16
[大島カレン] Ohshima, Karen	「The Muddled State of Education and Family Relationships in <i>Hard Times</i> 」(2007 年度春季大会研究発表報告)	30
太田良子	「ディケンズとヘンリー・ジェイムズ — 出版事情をめぐる」(1988 年度春季大会研究発表報告)	11
太田良子	2001 年度春季大会講演司会	24
大森幸享	「『二都物語』論 — カートンの自己犠牲にみる自意識の働き」(2006 年度総会研究発表報告)	30
荻原文彦	「ディケンズのことわざ」	6
荻野昌利	1988 年度春季大会研究発表司会	11
荻野昌利	1991 年度春季大会シンポジウム「 <i>The Old Curiosity Shop</i> の新しい読みの可能性を探る」司会	14
荻野昌利	1998 年度総会研究発表司会	22
荻野昌利	1999 年度春季大会シンポジウム「後輩作家から見たディケンズ」司会	22
荻野昌利	2005 年度春季大会講演司会	28
奥田真由子	「ピップと二人の男たち」(論文)	26
小野章	「『リトル・ドリット』における束縛と、『リトル・ドリット』の解放」(1997 年度総会研究発表報告)	21
小野寺進	「 <i>The Old Curiosity Shop</i> とファミリー・ロマンス」(1991 年度春季大会シンポジウム「 <i>The Old Curiosity Shop</i> の新しい読みの可能性を探る」報告)	14
小野寺進	「狂気とグロテスク — 『バーナビー・ラッジ』における躁暴的狂気と白痴的狂気の観点から」(1998 年度春季大会シンポジウム「ディケンズと狂気」報告)	21
小野寺進	「宇佐見太市『ディケンズと『クリスマス・ブックス』』」(書評)	23
小野寺進	「ディケンズの読者と読者 Howitt—『幽霊屋敷』をめぐる論争」(論文)	26
小野寺進	2006 年度春季大会講演司会	29

か

- 甲斐清高 「『ニコラス・ニクルビー』におけるメロドラマ的自己表現」(1999 年度総会研究発表報告) 23
- 甲斐清高 「田辺洋子(訳)『リトル・ドリット』上下巻」(書評) 28
- 梶山秀雄 「誰がエドウィン・ドルードを殺そうとかまうものか — 探偵小説『エドウィン・ドルードの謎』試論」(2000 年度春季大会研究発表報告) 23
- 梶山秀雄 「誰がエドウィン・ドルードを殺そうとかまうものか — 探偵小説『エドウィン・ドルードの謎』試論」(論文) 24
- 梶山秀雄 「佐々木徹(監修)『ウィルキー・コリンズ傑作選』」(書評) 25
- 梶山秀雄 「Martin Chuzzlewit を中心に」(2004 年度春季大会シンポジウム「ディケンズにおける想像力の原点を求めて」報告) 27
- 梶山秀雄 「食欲不振の探偵 — 『マーティン・チャズルウィット』」(特別企画「ディケンズにおける想像力の原点を求めて」) 27
- 片木篤 「<橋>から見たロンドンの近代化」(2005 年度春季大会講演報告) 28
- 片木篤 「『橋』から見たロンドンの近代化」(特別寄稿) 28
- 加藤匠 「『完全なるイギリスの主婦』を目指して — *Our Mutual Friend* から考える女性表象」(2007 年度春季大会研究発表報告) 30
- 要田圭治 「『オリヴァー・トゥイスト』における悪魔的なもの」(1987 年度春季大会研究発表報告) 7
- 要田圭治 「『距離』の誘惑 — 『荒涼館』のピクチュアレスクとグロテスク」(1988 年度春季大会シンポジウム「『荒涼館』をめぐる」報告) 11
- 要田圭治 2000 年度春季大会研究発表司会 23
- 要田圭治 「『荒涼館』のロンドンと帝国」(2000 年度総会シンポジウム「ディケンズと帝国」報告) 24
- 要田圭治 「『荒涼館』のロンドンと帝国」(特別寄稿「ディケンズと帝国」) 24
- 要田圭治 2002 年度総会研究発表司会 26
- 要田圭治 「小池滋『英国らしさを知る事典』」(書評) 27
- 金山亮太 「ジョージ・シルヴァーマンの著者性」(1986 年度春季大会研究発表報告) 9
- 金山亮太 「『ピクウィック症候群』について」 16
- 金山亮太 「ディックさんの狂気は何を暴いているのか」(1998 年度春季大会シンポジウム「ディケンズと狂気」報告) 21
- 金山亮太 「チャールズディケンズ(著)山村元彦・竹村義和・田中孝信(共訳)『ハード・タイムズ』」(書評) 23
- 金山亮太 「チャールズディケンズ(著), 藤岡啓介(訳)『ボズのスケッチ — 短篇小説篇』」(書評) 27
- 金山亮太 「左側に転覆する列車 — ディケンズと脳梗塞について」(2005 年度総会講演報告) 29

- 金山亮太 「左側に転覆する列車 — ディケンズと脳梗塞について」(特別寄稿) 29
- 金山亮太 2007 年度春季大会研究発表司会 30
- 亀井規子 「ディケンズのアメリカ体験」(1979 年度総会研究発表報告) 3
- 亀井規子 「ある象徴的な夢について」(1982 年度春季大会シンポジウム「*David Copperfield*」報告) 5
- 亀井規子 「『ニコラス・ニクルビー』の上演について」 6
- 亀井規子 「窓に縁どられた空と海」 10
- 川澄英男 「ディケンズの文体」(1979 年度総会研究発表報告) 3
- 川澄英男 「ワシントンの D・C の C・D」(1994 年度春季大会研究発表報告) 17
- 川澄英男 「ディケンズとアメリカ — ディケンズ文学の秘密」(1996 年度総会研究発表報告) 20
- 川澄英男 「ディケンズと軍人」 22
- 川澄英男 「『アメリカ覚え書き』への覚え書き」(Miscellany) 24
- 川澄英男 「『チャールズ・ディケンズの謎』」(Miscellany) 27
- 川澄英男 「チャールズ・ディケンズ(著)伊藤・下笠・隈元(訳)『アメリカ紀行』」(書評) 29
- 川澄英男 「大井浩二『旅人達のアメリカ — コベット, クーパー, ディケンズ』」(書評) 29
- 川村恵子 「イギリス通信」(Miscellany) 29
- 川本静子 1982 年度春季大会シンポジウム「*David Copperfield*」司会 5
- 川本静子 2004 年度春季大会講演司会 27
- 閑田朋子 「*Household Words* における Dickens の編集方針 — ‘On Strike’, ‘Looked Out’, *Hard Times* における Preston ストライキを他誌と比較して」(2000 年度総会研究発表報告) 24
- 閑田朋子 「Malcolm Andrews 先生特別講演」(News & Reports) 25
- 閑田朋子 「ディケンズ・プロジェクト 25 周年記念大会」(News & Reports) 28
- 閑田朋子 「*North and South* を中心に」(2004 年度総会シンポジウム「社会小説家としてのディケンズとギャスケル」報告) 28
- 木原貴子 「ヴィクトリア朝の女性挿絵画家」(2003 年度総会研究発表報告) 27
- 木原泰紀 「『デイヴィッド・コパフィールド』における監獄的空間」(1996 年度春季大会研究発表報告) 19
- 木村晶子 「新井潤美『不機嫌なメアリー・ポピンズ — イギリス小説と映画から読む「階級」』」(書評) 29
- 木村茂雄 「ディケンズとコンラッド — *Household* と *Empire*」(1999 年度春季大会シンポジウム「後輩作家から見たディケンズ」報告) 22
- 木村英紀 「ディケンズ・フェロウシップ, ヨーク大会に参加して」 22
- 木村英紀 「The 2000 Dickens Conference at Rochester 報告記」(News & Reports) 23
- 小池滋 「『ディケンズ』ルールを走る」 2

小池滋	1981 年度春季大会シンポジウム『『ピクウィック』の魅力さを語る』司会	4
小池滋	1982 年度総会講演司会	6
小池滋	1983 年度春季大会講演司会	6
小池滋	「ディケンズと翻訳」(1984 年度総会講演報告)	8
小池滋	「『エドウィン・ドルード』と世紀末」(1986 年度春季大会シンポジウム『エドウィン・ドルード』報告)	9
小池滋	「『エドウィン・ドルード』のミュージカル化」	10
小池滋	1988 年度春季大会シンポジウム「『荒涼館』をめぐる」司会	11
小池滋	「小松原茂雄さんの思い出」	12
小池滋	「映画的表现」(1989 年度総会シンポジウム「『ボズのスケッチ』をめぐる」報告)	13
小池滋	1990 年度春季大会シンポジウム『二都物語』司会	13
小池滋	「二代目の弁」(巻頭言)	14
小池滋	「ルーク・ファイルズ」(1994 年度春季大会シンポジウム「ディケンズと挿絵画家を語る」報告)	17
小池滋	「支部長辞任の弁」(巻頭言)	22
小池滋	「ディケンズとヴィクトリア朝信号技術」(Miscellany)	25
小池滋	「George Gissing を中心に」(2001 年総会シンポジウム「ディケンズ批評 — 古典時代」報告)	25
小池滋	「ジョージ・ギッシング」(特別企画「ディケンズ批評 — 古典時代・発展の時代」)	25
光沢隆	「科学か、民衆の想像力か — ピクウィック氏のフォークロア」(論文)	27
小寺理砂	「A Christmas Carol における「クリスマスの奇跡」」(1993 年度春季大会研究発表報告)	16
小寺里砂	「エイミー再考 — ドストエフスキーのソーニャを通して」(1998 年度総会研究発表報告)	22
小林司	「『エドウィン・ドルードの謎』における犯人の記号学」(1986 年度春季大会シンポジウム『エドウィン・ドルード』報告)	9
小松原茂雄	「『ハウスホルド・ワーズ』について」(1982 年度春季大会講演報告)	5
小松原茂雄	1986 年度春季大会研究発表司会	9
小松原茂雄	1987 年度春季大会シンポジウム「『ドンビー・アンド・サン』の世界」司会	10
さ		
西條隆雄	「フィリップ・コリンズとマイケル・スレーター」	2
西條隆雄	「アーサー・クレナムの遍歴」(1980 年度春季大会シンポジウム報告「『リトル・ドリット』の諸問題」)	3
西條隆雄	「『ピクウィック』と 1830 年代」(1981 年度春季大会シンポジウム報告「『ピクウィック』の魅力さを語る」)	4
西條隆雄	「サイクスを追って」	5

西條隆雄	1985 年度総会報告	7
西條隆雄	1987 年度春季大会研究発表司会	7
西條隆雄	「ボフィン像」(1985 年度春季大会シンポジウム「われらが共通の友」報告)	8
西條隆雄	1987 年度春季大会研究発表司会	10
西條隆雄	「『荒涼館』 — ディケンズと過去」(1988 年度春季大会シンポジウム「『荒涼館』をめぐる」報告)	11
西條隆雄	「『モンタージスの犬』など」	15
西條隆雄	1991 年度総会研究発表司会	15
西條隆雄	「『共通の友』と『せむし男』」(1992 年度春季大会シンポジウム「ディケンズと演劇」報告)	15
西條隆雄	1993 年度総会講演司会	17
西條隆雄	1996 年度春季大会講演司会	19
西條隆雄	「ニューゲイト獄をめぐる」(1997 年度春季大会シンポジウム「ディケンズと監獄」報告)	20
西條隆雄	「多角的なディケンズを」(巻頭言)	22
西條隆雄	「30 周年の幕開け」(巻頭言)	23
西條隆雄	「充実と発展」(巻頭言)	24
西條隆雄	「小説執筆と演劇活動」(巻頭言)	25
西條隆雄	「第 96 回ディケンズ・フェロウシップ国際大会」(News & Reports)	25
西條隆雄	2001 年総会シンポジウム「ディケンズ批評 — 古典時代」司会	25
西條隆雄	「再評価への道のり」(特別企画「ディケンズ批評 — 古典時代・発展の時代」)	25
西條隆雄	「1 ポンド紙幣を追って」(巻頭言)	26
西條隆雄	「ディケンズとオーストラリア」(巻頭言)	27
西條隆雄	「植木研介『チャールズ・ディケンズ研究 — ジャーナリストとして、小説家として』」(書評)	27
西條隆雄	「第 98 回ディケンズ・フェロウシップ国際大会」(News & Reports)	27
西條隆雄	「国際化に向けて」(巻頭言)	28
西條隆雄	「第 99 回ディケンズ・フェロウシップ国際大会」(News & Reports)	28
西條隆雄	2004 年度総会シンポジウム「社会小説家としてのディケンズとギaskell」司会	28
西條隆雄	「Dombey and Son 前後におけるディケンズの社会小説」(2004 年度総会シンポジウム「社会小説家としてのディケンズとギaskell」報告)	28
西條隆雄	2005 年度春季大会講演司会	28
西條隆雄	「引継ぎを終えて」(巻頭言)	29
西條隆雄	2006 年度春季大会講演司会	29
西條隆雄	「『ディケンズ鑑賞大事典』の刊行を終えて」(Miscellany)	30

西條隆雄	「第 101 回ディケンズ・フェロウシップ国際大会」(News & Reports)	30
西條隆雄	「ディケンズと素人演劇活動」(2006 年度総会講演報告)	30
西條隆雄	「ディケンズと素人演劇活動 — 演劇活動と創作の新領域」(特別寄稿)	30
西條隆雄	「追悼 フィリップ・コリンズ教授」	30
齋藤九一	「『大いなる遺産』 — 原作と映画」	9
齋藤九一	「『荒涼館』におけるエスターの物語の前景と後景」(1989 年度総会研究発表報告)	13
齋藤九一	1991 年度総会講演報告	15
齋藤九一	「トロロブから見たディケンズ」(1999 年度春季大会シンポジウム「後輩作家から見たディケンズ」報告)	22
齋藤九一	「マードル氏とメルモット氏」(論文)	24
齋藤九一	「ディケンズの『二都物語』とトロロブの『ラ・ヴァンデ』」(論文)	25
佐々木徹	1994 年度春季大会講演司会	17
佐々木徹	「マイケル・スレイター先生日本滞在記」	18
佐々木徹	「次の日の夕方? — 『マーティン・チャズルウィット』の大団円に於ける混乱」(1996 年度春季大会研究発表報告)	19
佐々木徹	1998 年度総会講演報告	22
佐々木徹	「ディケンズ祭 — マイケル・スレイター教授の退官を記念して」(News & Reports)	24
佐々木徹	「A Man for All Media: The Popularity of Dickens に参加して」(News & Reports)	25
佐々木徹	「G. K. Chesterton を中心に」(2001 年総会シンポジウム「ディケンズ批評 — 古典時代」報告)	25
佐々木徹	2002 年春季大会研究発表司会	25
佐々木徹	「チェスタトンのディケンズ論」(特別企画「ディケンズ批評 — 古典時代・発展の時代」)	25
佐々木徹	「ディケンズのサイレント映画を観る」(Miscellany)	28
佐々木徹	「ディケンズを聴く」(2005 年度春季大会講演報告)	28
佐々木徹	2005 年度総会講演司会	29
佐藤真二	「ディケンズの「すばらしき新世界」 — 朗読台本「ドクター・マリゴールド」に見るディケンズ像」(1995 年度総会朗読報告)	19
佐藤真二	「ジェラルド・ディケンズとサイモン・カロウ — 朗読と一人芝居」(News & Reports)	24
佐藤真二	「Reading from 'Doctor Marigold'」(2002 年春季大会朗読報告)	25
志鷹道明	「スクルージの自己喪失と人間復活」	8
篠田昭夫	「田辺先生を偲ぶ」	3
篠田昭夫	「デイヴィッドとユライア」	10
篠田昭夫	「チャールズディケンズ(著), 田辺洋子(訳)『バーナビー・ラッジ』」(書評)	27

崎村耕二	「アランとディケンズ」	11
崎村耕二	「 <i>Great Expectations</i> における階層と職業 — 「輪」と「層」の観点から」(1995 年度春季大会研究発表報告)	18
清水英秋	「Dickens Glossary」(Miscellany)	30
鈴木健三	「ディケンズのセンチメンタリズム」	10
鈴木幸夫	「ジョイスのディケンズ讃美論」	4
鈴木幸夫	「ディケンズの挿絵師たち」(1982 年度総会講演報告)	6
楚輪松人	「サム・ウェラーの面白さ」(1988 年度春季大会研究発表報告)	11
楚輪松人	「『ロンドン商人』と『大いなる遺産』 — ステレオタイプからアーキタイプへ」(1992 年度春季大会シンポジウム「ディケンズと演劇」報告)	15
楚輪松人	「なぜディケンズはビデオ化されるのか? — 小説と映像」(1996 年度総会研究発表報告)	20
楚輪松人	1999 年度総会講演司会	23
楚輪松人	「チャールズ・ディケンズ(原作) ボランスキー(監督) 映画 /DVD『オリバー・ツイスト』」(書評)	29
た		
高井由利子	「私の骨董探索」	4
高井由利子	「子供たちの夢と挫折」(1982 年度春季大会シンポジウム「 <i>David Copperfield</i> 」報告)	5
高井由利子	「橋の上の往来」	13
高橋沙央里	「Agnes 再考 — “angel in the house” と “strong-minded woman” の狭間で」(論文)	24
高橋沙央里	「新しいヒロイン — <i>Great Expectations</i> における Estella の物語」(論文)	25
滝裕子	「ディケンズの描く女性像の変遷」(1978 年度総会研究発表報告)	2
滝裕子	「デイヴィッドの成長」(1982 年度春季大会シンポジウム「 <i>David Copperfield</i> 」報告)	5
武井暁子	「『互いの友』に見るアイデンティティの混乱 — 帝国主義, 階級, ジェンダーの観点から」(1998 年度春季大会研究発表報告)	21
武井暁子	「イギリス版『北の国から』 — アバディーン大学留学レポート」(Miscellany)	24
[武井暁子]	Takei, Akiko	
	「Miss Havisham and Victorian Psychiatry」(論文)	25
武井暁子	「続・イギリス版北の国から」(Miscellany)	26
武井暁子	「慈善活動家としてのディケンズ — Urania Cottage の関わりを中心に」(2007 年度春季大会講演報告)	30
武井暁子	「慈善活動家としてのディケンズ — ユーレイニア・コテージへの評価」(特別寄稿)	30
田中孝信	「『リトル・ドリット』における「窓」」(1989 年度春季大会研究発表報告)	12

田中孝信	「『ドンビー父子』における帝国、境界、家庭」(1993 年度総会講演報告)	17
田中孝信	1994 年度春季大会研究発表司会	17
田中孝信	「不安のとげ — 『エドウィン・ドルードの謎』と帝国」(2000 年度総会シンポジウム「ディケンズと帝国」報告)	24
田中孝信	「不安のとげ — 『エドウィン・ドルードの謎』と帝国」(特別寄稿「ディケンズと帝国」)	24
田中孝信	「『二都物語』論 — 天使の光と影」(論文)	27
田中孝信	「社会問題小説としての『ハード・タイムズ』の魅力」(2004 年度総会シンポジウム「社会小説家としてのディケンズとギャスケル」報告)	28
田中孝信	2006 年度総会研究発表司会	30
田辺昌美	「読書旅行」	1
田辺昌美	1978 年度春季大会研究発表司会	1
田辺洋子	「『互いの友』における「相互性」について」(1995 年度春季大会研究発表報告)	18
谷田博幸	「“フィズ”の領分 — 挿絵製作のプロセスをめぐって」(1994 年度春季大会シンポジウム「ディケンズと挿絵画家を語る」報告)	17
玉井史絵	「『リトル・ドリット』における虚構の構造」(1992 年度春季大会研究発表報告)	15
[玉井史絵]	Tamai, Fumie 'Great Expectations: Democracy and the Problem of Social Inclusion' (論文)	25
玉井史絵	「Alexander Welsh のディケンズ批評」(2003 年度春季大会シンポジウム「1980 年以降のディケンズ批評」報告)	26
玉井史絵	「ディケンズとポストコロニアル批評」(特別企画「1980 年以降のディケンズ批評」)	26
玉井史絵	「荻野昌利『歴史をく読む』 — ヴィクトリア朝の思想と文化」(書評)	28
玉井史絵	「The Old Curiosity Shop — 都市と農村、そして帝国」(2004 年度総会研究発表報告)	28
玉井史絵	2006 年度春季大会講演司会	29
田村哲也	「神戸の地より皆さんへ」	4
寺内孝	「『ハード・タイムズ』のテキスト」	4
寺内孝	「『ハード・タイムズ』の「登場人物一覧表」	7
寺内孝	「十九世紀中期 — 「手」が意識された頃」	13
寺内孝	「『エクセルシア』考 — ディケンズとロングフェローの一接点」(論文)	26
寺内孝	「ウスター編『英語辞典』とディケンズ」(Miscellany)	26
寺内孝	「『エクセルシア』考 — ディケンズとロングフェローの一接点」(2002 年度総会研究発表報告)	26
寺内孝	「ディケンズと『エクセルシア』(補遺)」(Miscellany)	27

寺内孝	「ディケンズ今わの言葉 — 「うん、地面にね」」(Miscellany)	28
寺内孝	「ディケンズはキャサリンと和解できたか？」(2006 年度春季大会講演報告)	29
寺内孝	「ディケンズとキャサリンは和解できたか？」(特別寄稿)	29
寺内孝	「二人の先哲」(Miscellany)	30
[寺内孝]	Terauchi, Takeshi 'Dickens and Gad's Hill Place' (特別寄稿)	30
梅正行	「『大いなる遺産』のウェミックスについて」(1992 年度春季大会研究発表報告)	15
梅正行	「中に入るとそこは外」	16
梅正行	1999 年度春季大会研究発表司会	22
梅正行	「チャールズ・ディケンズの家、サマセット・モームの家」(2006 年度春季大会講演報告)	29
富山太佳夫	「ディケンズとジャマイカ事件」(1989 年度総会講演報告)	13
富山太佳夫	「ヴィクトリア時代の引越し」(1993 年度春季大会講演報告)	16
な		
永岡規伊子	「『リトル・ドリット』における家族神話の崩壊と再生」(1997 年度春季大会研究発表報告)	20
永岡規伊子	「山崎勉『ディケンズのこころ』」(書評)	26
永岡規伊子	「国際大会に参加して」(News & Reports)	29
中島彰子	「『ハード・タイムズ』におけるシシーの役割」(論文)	28
中島彰子	「Hard Times における Sissy Jupe の役割」(2004 年度総会研究発表報告)	28
中西敏一	「ディケンズ・フェローシップ会報創刊に当たって」	1
中西敏一	「編集後記」	2
中西敏一	「会発足の頃見た映画『デイヴィッド・コパフィールド』」	3
中西敏一	「編集後記」	3
中西敏一	「ディケンズの英国とところどころ」	5
中西敏一	「編集後記」	5
中西敏一	「編集後記」	7
中西敏一	「デフォーの A Tour とディケンズランド」	8
中西敏一	「編集後記」	8
中西敏一	「編集後記」	9
中西敏一	「『ピクウィック・ペーパーズ』の注釈」	10
中西敏一	「編集後記」	10
中西敏一	「テムズ川とその付近の風景二つ」	11
中西敏一	「編集後記」	11
中西敏一	「編集後記」	12
中西敏一	1989 年度総会シンポジウム「『ボズのスケッチ』をめぐって」司会	13
中西敏一	「編集後記」	13

中村愛人	「『マーティン・チャズルウィット』考」(1978 年度春季大会研究発表報告)	1
中村隆	「『荒涼館』における隠喩としての伝染病」	22
中村隆	「貧困と犯罪という見せ物 — 『オリヴァー・トゥイスト』を中心に」(2001 年度春季大会シンポジウム「ディケンズとホガース」報告)	24
中村隆	「新野緑『小説の迷宮 — ディケンズ後期小説を読む』」(書評)	25
中村隆	2005 年度総会研究発表司会	29
中村隆	「田中孝信『ディケンズのジェンダー観の変遷 — 中心と周辺のせめぎ合い』」(書評)	30
那須正彦	「神の見えざる手」	12
那須正彦	「神の見えざる手 (その 2) — 経済学から文学へ」(Miscellany)	23
新野緑	「 <i>Great Expectations</i> の空間構造」(1986 年度春季大会研究発表報告)	9
新野緑	「『二都物語』 — 動揺する物語世界」(1990 年度春季大会シンポジウム『二都物語』報告)	13
新野緑	「 <i>Bleak House</i> における「読むこと」 — 時間・テキスト・主体」(1996 年度総会研究発表報告)	20
新野緑	2000 年度総会研究発表司会	24
新野緑	「谷田博幸『極北の迷宮 — 北極探検とヴィクトリア朝文化』」(書評)	25
新野緑	「ディケンズとポストコロニアル批評」(2003 年度春季大会シンポジウム「1980 年以降のディケンズ批評」報告)	26
新野緑	「Alexander Welsh のディケンズ批評」(特別企画「1980 年以降のディケンズ批評」)	26
西垣佐理	「逆転の構図 — <i>Great Expectations</i> にみる病と癒し」(1999 年度春季大会研究発表報告)	22
西垣佐理	「『憂鬱な男』たち — 『互いの友』における Victorian masculinity 形成をめぐる」(論文)	24
西垣佐理	「カンタベリー留学物語」(Miscellany)	25
野中涼	「遺産・期待・幻滅」(1982 年度総会シンポジウム「 <i>Great Expectations</i> を読む」報告)	6
野々村咲子	「ディケンズとコリンズの精神科学 — <i>Our Mutual Friend</i> と <i>Armada</i> における意識の諸相」(論文)	26
野々村咲子	「ディケンズとコリンズの精神科学 — <i>Our Mutual Friend</i> と <i>Armada</i> における意識の諸相」(2003 年度春季大会研究発表報告)	26
野畑多恵子	「続・女性読者とディケンズ」	8
野畑多恵子	1986 年度総会講演報告	10
野畑多恵子	「ピクウィック氏の眼鏡」(1987 年度総会研究発表報告)	11
野畑多恵子	「都市と生活」(1989 年度総会シンポジウム「『ボズのスケッチ』をめぐる」報告)	13

野畑多恵子	「亀井規子氏追悼」	13
は		
間二郎	「エイミー・ドリットについて」(1980 年度春季大会シンポジウム報告「『リトル・ドリット』の諸問題」)	3
間二郎	「編集後記」	4
間二郎	「ディケンズと漱石」	5
間二郎	1982 年度総会シンポジウム「 <i>Great Expectations</i> を読む」司会	6
間二郎	「編集後記」	6
間二郎	「ネルの裏側」(1987 年度春季大会シンポジウム「 <i>The Old Curiosity Shop</i> をめぐって」報告)	7
間二郎	「『おかねが好きな』ベラ」(1985 年度春季大会シンポジウム『われらが共通の友』報告)	8
間二郎	1987 年度総会研究発表司会	11
間二郎	1989 年度総会講演司会	13
間二郎	1991 年度春季大会講演報告	14
間二郎	「『変身』の視点」	15
間二郎	1993 年度春季大会講演司会	16
間二郎	「田辺(洋子)さんの『互いの友』上梓に寄せて」(書評)	19
長谷川雅世	「カートンという男」(論文)	24
長谷川雅世	「賢い道化ジョー — ジョーの赦しを乞うピップ」(論文)	25
原英一	「『ピップの物語』の構築と解体」(1982 年度総会シンポジウム「 <i>Great Expectations</i> を読む」報告)	6
原英一	「人形劇から人間劇へ」(1991 年度春季大会シンポジウム「 <i>The Old Curiosity Shop</i> の新しい読みの可能性を探る」報告)	14
原英一	1992 年度春季大会研究発表司会	15
原英一	「債務者監獄と英国小説」	16
原英一	「間二郎訳『我が共通の友』について」(書評)	20
原英一	1998 年度春季大会シンポジウム「ディケンズと狂気」司会	21
原英一	「編集後記」	22
原英一	「西條隆雄『ディケンズの文学 — 小説と社会』」(書評)	23
原英一	1999 年度総会研究発表司会	23
原英一	「編集後記」	23
原英一	「編集後記」	24
原英一	2002 年春季大会シンポジウム「ディケンズ批評 — 発展の時代」司会	25
原英一	「J. Hillis Miller を中心に」(2002 年春季大会シンポジウム「ディケンズ批評 — 発展の時代」報告)	25
原英一	「J・H・ミラーのディケンズ批評」(特別企画「ディケンズ批評 — 古典時代・発展の時代」)	25
原英一	「編集後記」	25
原英一	「松村昌家『十九世紀ロンドン生活の光と影 — リージェンシーからディケンズの時代へ』」(書評)	26

原英一	2003 年度春季大会研究発表司会	26
原英一	「編集後記」	26
原英一	2003 年度総会講演司会	27
原英一	「 <i>Barnaby Rudge</i> を中心に」(2004 年度春季大会シンポジウム「ディ ケンズにおける想像力の原点を求めて」報告)	27
原英一	「『バーナビー・ラッジ』と徒弟のロマンス」(特別企画「ディケ ンズにおける想像力の原点を求めて」)	27
原英一	「編集後記」	27
原英一	「編集後記」	28
原英一	‘Queen Mab’s Chariot over the Wasteland’ (巻頭言)	29
原英一	「ディケンズ・フェロウシップ第 100 回国際大会」(News & Re- ports)	29
原英一	「編集後記」	29
原英一	「ディケンズ生誕 200 周年に向けて」(巻頭言)	30
原英一	「編集後記」	30
原英一	2006 年度総会講演司会	30
久田晴則	「表裏なす世界『オリヴァ・トゥイスト』の構成について」(1978 年度春季大会研究発表報告)	1
久田晴則	「広島読書旅行」	2
久田晴則	「田辺先生の御逝去を悼む」	3
久田晴則	「ロンドンを歩く」	8
久田晴則	1990 年度総会研究発表司会	14
久田晴則	「「マーシャルシー・プリズン」を中心に」(1997 年度春季大会シ ンポジウム「ディケンズと監獄」報告)	20
久田晴則	1997 年度総会研究発表司会	21
廣野由美子	「ディケンズの「子どもの視点」— <i>Great Expectations</i> について」 (1997 年度春季大会研究発表報告)	20
廣野由美子	2001 年総会講演司会	25
廣野由美子	2003 年度総会研究発表報告	27
廣野由美子	「エリザベス・ジェイムズ (著) 高橋裕子 (訳) 『図説チャールズ・ ディケンズ』(書評)	30
福島光義	「ディケンズの「失われた時を求めて」」	4
福島光義	「“In worldly matters I’m a hild,”—『懐かしい年への手紙』の「僕」 のある友人と Harold Skimpole」	14
福村絹代	「ピクウィックの変貌」(1981 年度春季大会シンポジウム報告「『ピ クウィック』の魅力さをさぐる」)	4
福村絹代	「『ピクウィック・ペーパーズ』とお屋敷文学」	14
藤井晶宏	「通りから見た『エドウィン・ドルードの謎』」(論文)	23
藤井晶宏	「ポズナップと水の帝国—『我らが共通の友』を『エドウィン・ ドルードの謎』から読む」(論文)	25
藤井晶宏	「『バーナビー・ラッジ』にみる国家の姿」(論文)	29

藤田博	「夢の中へ— <i>déjà vu</i> としてのネルの旅」(1991 年度春季大会シン ポジウム「 <i>The Old Curiosity Shop</i> の新しい読みの可能性を探る」 報告)	14
藤田博	「身廊と袖廊の交わる場所—松村昌家『水晶宮物語』を読む」(書 評)	24
藤村公輝	「ディケンズと教育」	15
藤本隆康	「ディケンズの「心」」	4
船橋麻由美	「 <i>Bleak House</i> における“語り”のパターン」(1987 年度春季大会 研究発表報告)	10
北條文緒	「二人の父親」	3
北條文緒	「ディケンズと児童文学」(1981 年度総会講演報告)	5
北條文緒	「レイチェルはどこに」	6
北條文緒	「He doesn’t work here」	10
北條文緒	1991 年度総会講演司会	15
北條文緒	1992 年度総会朗読司会	16
北條文緒	「ポーツマスディケンズ・カンファレンス」	19
堀正広	「Tadao Yamamoto, <i>Growth and System of the Language of Dickens: An Introduction to A Dickens Lexicon</i> 」(書評)	26
堀正広	「Osamu Imahayashi, <i>Charles Dickens and Literary Dialect</i> 」(書評)	30
ま		
増淵正史	1991 年度春季大会講演司会	14
増淵正史	「リトル・ドリットの肖像」	9
松岡光治	「ディケンズとヘンデル」	13
松岡光治	「『クリスマス・キャロル』における「光」と「闇」の諸相」(1990 年度春季大会研究発表報告)	13
松岡光治	「インターネット上のディケンズ」	18
松岡光治	1996 年度春季大会研究発表司会	19
松岡光治	「インターネットとディケンズ研究」	21
松岡光治	「監禁／群衆／記憶／愛」(1998 年度春季大会シンポジウム「ディ ケンズと狂気」報告)	21
松岡光治	「論文の電子化について」	22
松岡光治	2000 年度春季大会研究発表司会	23
松岡光治	「サイト内検索とコンコーダンス」(Miscellany)	26
松岡光治	「ディケンズ作品のハイパー・コンコーダンス」(Miscellany)	27
松岡光治	2004 年度総会特別講演司会	28
松岡光治	2005 年度春季大会講演司会	28
松岡光治	「ディケンズにおける自殺の諸相」(Miscellany)	29
松岡光治	「The CD’s CD-ROM Was Not Built in a Day」(Miscellany)	30
松岡光治	「ディケンズの作品におけるイジメの問題」(Miscellany)	30
松村豊子	「『我らの互いの友』—逆転した男女の力関係について」(1987 年度総会研究発表報告)	11

松村豊子	「『ドンビー父子』 — 中国への旅と新しい家族の誕生」(2000 年度総会シンポジウム「ディケンズと帝国」報告)	24
松村豊子	「『ドンビー父子』 — 中国への旅と新しい家族の誕生」(特別寄稿「ディケンズと帝国」)	24
松村豊子	「チャールズ・ディケンズ (著), 石塚裕子 (訳)『デイヴィッド・コパフィールド』」(書評)	26
松村豊子	2004 年度春季大会シンポジウム「ディケンズにおける想像力の原点を求めて」司会	27
松村豊子	「 <i>Dombey and Son</i> を中心に」(2004 年度春季大会シンポジウム「ディケンズにおける想像力の原点を求めて」報告)	27
松村豊子	「序」(特別企画「ディケンズにおける想像力の原点を求めて」)	27
松村豊子	「誰がドンビー氏を救済したのか? — 『ドンビー父子』再読」(特別企画「ディケンズにおける想像力の原点を求めて」)	27
松村豊子	2007 年度春季大会講演司会	30
松村昌家	「滞英日記抄」	2
松村昌家	1987 年度春季大会シンポジウム「 <i>The Old Curiosity Shop</i> をめぐって」司会	7
松村昌家	1985 年度春季大会シンポジウム『われらが共通の友』司会	8
松村昌家	「『エドウィン・ドルードの謎』 — facts into fiction」(1986 年度春季大会シンポジウム『エドウィン・ドルード』報告)	9
松村昌家	「“The lame demon” のトボス — 『クリスマス・キャロル』構想の背景」(1987 年度春季大会研究発表報告)	10
松村昌家	1989 年度春季大会講演司会	12
松村昌家	「「マンモス街の瞑想」と「幽鬼の街」」(1989 年度総会シンポジウム「『ボズのスケッチ』をめぐって」報告)	13
松村昌家	1990 年度春季大会研究発表司会	13
松村昌家	「臼田昭さんの思い出」	13
松村昌家	1990 年度総会講演司会	14
松村昌家	「山本忠雄先生を偲んで」	14
松村昌家	「『リトル・ドリット』における「カーリタース・ローマーナ」」(1992 年度春季大会シンポジウム「ディケンズと演劇」報告)	15
松村昌家	「ディケンズとジョン・リーチ」(1994 年度春季大会シンポジウム「ディケンズと挿絵画家を語る」報告)	17
松村昌家	1995 年度春季大会講演司会	18
松村昌家	「Horsemonder Lane Gaol」(1997 年度春季大会シンポジウム「ディケンズと監獄」報告)	20
松村昌家	「George Orwell およびそれ以前」(2001 年総会シンポジウム「ディケンズ批評 — 古典時代」報告)	25
松村昌家	「ジョージ・オーウェルおよびそれ以前」(特別企画「ディケンズ批評 — 古典時代・発展の時代」)	25
松村昌家	「ディケンズと世紀末」(2004 年度春季大会講演報告)	27
松村昌家	「ディケンズと世紀末」(特別寄稿)	27

松本靖彦	「ピップは自分の人生の主人公になれるのか — 精神療法の観点から」(1999 年度春季大会研究発表報告)	22
松本靖彦	「ピップは自分の人生の主人公になれるのか」(論文)	23
松本靖彦	「ディケンズとホガースの造形術」(2001 年度春季大会シンポジウム「ディケンズとホガース」報告)	24
松本靖彦	「マイケル・スレイター (著) 佐々木徹 (訳)『ディケンズの遺産 — 人間と作品の全体像』」(書評)	28
松本靖彦	「カンタベリー滞在・留学記」(Miscellany)	29
松本靖彦	「Malcolm Andrews, Charles Dickens and His Performing Selves: Dickens and the Public Readings」(書評)	30
松本靖彦	「ディケンズの速記と人物造形」(2007 年度春季大会講演報告)	30
松本靖彦	「ディケンズの速記と人物造形」(特別寄稿)	30
水野隆之	「『リトル・ドリット』における正しい視点」(2003 年度春季大会研究発表報告)	26
溝口薫	「 <i>Dombey and Son</i> における女性と愛」(1987 年度春季大会研究発表報告)	7
光永裕美	「無気味な人間像」	6
光永裕美	「Illusion・Disillusion」(1987 年度春季大会シンポジウム「 <i>The Old Curiosity Shop</i> をめぐって」報告)	7
三ツ星堅三	「『辛い世の中』における社会風刺」(1990 年度春季大会研究発表報告)	13
宮川和子	「『エドウィン・ドルードの謎』と『ムーンストーン』 — ディケンズとコリンズの人種観」(論文)	26
三宅敦子	「Jane H. Berard, Dickens and Landscape Discourse」(書評)	30
宮崎孝一	「ディケンズ・フェローシップ東京支部創立のころ」	1
宮崎孝一	「漱石の見たディケンズ」	2
宮崎孝一	「C.D. と D.C. の相貌」	4
宮崎孝一	1981 年度総会講演司会	5
宮崎孝一	1985 年度総会講演司会	7
宮崎孝一	「「昼夜平分の夜明け」について」	9
宮崎孝一	「フェロウシップ創立とその後」	10
宮崎孝一	1988 年度総会講演司会	12
宮崎孝一	「米田一彦氏追悼」	12
宮崎孝一	「中西敏一氏追悼」	14
宮丸裕二	「逸脱する肉体 — ピクウィック症候群の二症例」(1998 年度春季大会研究発表報告)	21
宮丸裕二	「The 2000 Dickens Conference at Rochester 報告記」(News & Reports)	23
宮丸裕二	「英国滞在日記」(Miscellany)	24
宮丸裕二	「編集後記」	28
宮丸裕二	「編集後記」	29
宮丸裕二	「ディケンズ (原作) 土屋啓之助 (監督) テレビ放映 / DVD ボックス『さすらいの少女ネル』」(書評)	30

宮丸裕二	「追悼 村山敏勝博士」	30
宮丸裕二	「編集後記」	30
村石利夫	「初めて小説を書いて」	6
村山敏勝	「『マーティン・チャズルウィット』の医術と詐術」(1994 年度総会研究発表報告)	18
村山敏勝	2000 年度春季大会研究発表司会	23
村山敏勝	「西條隆雄(編)『ヴィクトリア朝小説と犯罪』」(書評)	25
村山敏勝	2003 年度春季大会シンポジウム「1980 年以降のディケンズ批評」司会	26
村山敏勝	「ディケンズと新歴史主義批評」(2003 年度春季大会シンポジウム「1980 年以降のディケンズ批評」報告)	26
村山敏勝	「ディケンズと新歴史主義批評」(特別企画「1980 年以降のディケンズ批評」)	26
や		
安富良之	「ディケンズ読書会」	5
矢次綾	「ディケンズ・ユニバースに参加して」	20
矢次綾	「『荒涼館』における病 — エスタとの関わり」(論文)	23
矢次綾	「『荒涼館』における病 — エスタの病が象徴するもの」(2000 年度春季大会研究発表報告)	23
矢次綾	「2000 年ディケンズ・ユニバース報告」(News & Reports)	24
矢次綾	「『バーナビー・ラッジ』における変化と不変 — 歴史小説家としてのディケンズ」(論文)	28
矢次綾	「フランス革命期を描く小説の歴史性 — 『二都物語と『ラ・ヴァンデ』を中心に」(論文)	30
山崎勉	「ディケンズとオランダの画家」	7
山崎勉	「Our Mutual Friend における上昇と下降のイメージ」(1985 年度春季大会シンポジウム『われらが共通の友』報告)	8
山崎勉	「Charles Dickens と 5 月 7 日」(論文)	23
山崎まゆみ	「『荒涼館』と『ロウフィールド館の惨劇』」	12
山本まゆみ	「グロテスクな女性たち」(Miscellany)	23
山本まゆみ	「女性と結婚」(Miscellany)	27
山本史郎	「Bleak House の Chancery について」(1982 年度春季大会講演報告)	5
山本史郎	「ドンビー氏とカトル船長 — 『ドンビー父子商会』における二つの世界」(1987 年度春季大会シンポジウム「『ドンビー・アンド・サン』の世界」報告)	10
山本史郎	「『二都物語』 — シドニーは英雄か?」(1990 年度春季大会シンポジウム『二都物語』報告)	13
山本史郎	1992 年度総会講演司会	16
山本史郎	「松村昌家教授古稀記念論文集刊行会『ヴィクトリア朝 — 文学・文化・歴史』」(書評)	23

山本史郎	「Humphry House を中心に」(2002 年度春季大会シンポジウム「ディケンズ批評 — 発展の時代」報告)	25
山本史郎	「非凡な凡人 — ハンフリー・ハウスとディケンズ」(特別企画「ディケンズ批評 — 古典時代・発展の時代」)	25
山本史郎	2005 年度総会講演司会	29
山本忠雄	「ディケンズ回顧」	1
山本忠雄	「日々に疎し」	4
山本忠雄	「ディケンズの多芸な演出」	10
山本恒義	「ディケンズの表現技法」	4
山本恒義	「ディケンズの持つ現代的な意味」	5
湯木満寿美	「ディケンズとひな菊」	4
湯木満寿美	「ディケンズと河川」	8
湯木満寿美	「ディケンズとサーカス」	9
湯木満寿美	「Coaching Age と Dickens」	11
湯木満寿美	「Dickens と cholera」	12
湯木満寿美	「Dickens に協力した Cruikshank」	13
横川信義	「宮崎孝一著『随想コロラドの月』」(書評)	2
横川信義	「カリカチュアの名手」	6
横川信義	1988 年度総会講演報告	12
吉田朱美	「松岡光治(編)『ギッシングの世界 — 全体像の解明をめざして』」(書評)	27
吉田朱美	「The Mystery of Edwin Drood における平衡と不均衡」(2005 年度総会研究発表報告)	29
吉田一穂	「Great Expectations — 作品のテーマと 'self help' のコンテキスト」(2005 年度総会研究発表報告)	29
吉田一穂	「『ピクウィック・ペーパーズ』の福音主義的側面」(論文)	30
吉田孝夫	「ディケンズのことば遊び」	6
吉田孝夫	「ディケンズを訪ねて」(1990 年度総会研究発表報告)	14
米田一彦	「これからどうする」	2
米田一彦	1980 年度春季大会シンポジウム報告「『リトル・ドリット』の諸問題」司会	3
米田一彦	1982 年度春季大会講演司会	5
米田一彦	「一フェローからの平信」	8
わ		
渡部智也	「『オリヴァー・ツイスト』における「眠り」について」(論文)	30
渡部智也	「Oliver Twist における「眠り」について」(2006 年度総会研究発表報告)	30
A-Z		
Bredsdoff, Elias	「Charles Dickens and Hans Andersen」(1988 年度総会講演報告)	12

Chandler, David	‘The Challenger of <i>The Battle of Life</i> ’ (2002 年春季大会研究発表報告)	25
Collins, Angus	「オーウェルのディケンズ — あるエッセイとそのコンテクスト」(1992 年度総会講演報告)	16
Collins, Philip	祝辞	3
Collins, Philip	「ディケンズにおける事実と想像」(1985 年度総会講演)	7
Collins, Philip	「ディケンズとデイヴィッドとビップ — 『デイヴィッド・コパフィールド』と『大いなる遺産』における自伝的要素」(1986 年度総会講演報告)	10
Costigan, Edward	「『デイヴィッド・コパフィールド』 — 回想と前進と」(1994 年度春季大会講演報告)	17
Dilnot, Alan	‘“Dickens and Australia” followed by a reading of “Sikes and Nancy”’ (2005 年度春季大会講演報告)	28
Dilnot, Alan	‘Dickens and Australia’ (特別寄稿)	28
Golding, Robert	1992 年度総会朗読報告	16
H., E.	‘Mitsu Matsuoka Hits the Headlines?’ (News & Reports)	24
Hardy, Barbara	「『ドンビー父子』と『荒涼館』における感情表現」(1985 年度総会講演報告)	9
Hardy, Barbara	「想像力を想像するディケンズ」(1991 年度総会講演報告)	15
Hollington, Michael	‘Dickens and Australia’ (1989 年度春季大会講演報告)	12
Holt, Jenny	‘Allan Conrad Christensen, <i>Nineteenth-Century Narrative of Contagion: Our Feverish Contact</i> ’ (書評)	29
Law, Graham	‘Slimming of Slumming? Dickens and the Shift from Monthly to Weekly Serialization’ (特別寄稿)	25
Law, Graham	‘Slimming or Slumming? Dickens and the Shift from Monthly to Weekly Serialization’ (2001 年総会講演報告)	25
Law, Graham	2002 年度総会講演司会	26
Nayder, Lyllian R.	‘Unequal Partners: On Collaboration Between Dickens and Collins’ (2002 年度総会講演報告)	26
Poole, Adrian	‘The Martyr in Dickens’ (2003 年度総会講演報告)	27
Poole, Adrian	‘The Martyr in Dickens’ (特別寄稿)	27
Robinson, Peter	‘“This fiction of an occupation”: Mr Boffin’s encounter with Blight in <i>Our Mutual Friend</i> ’ (2004 年度春季大会講演・朗読報告)	27
Robinson, Peter	‘“This fiction of an occupation”: Mr Boffin’s Encounter with Blight’ (特別寄稿)	27
Rycroft, David	‘Reading from <i>A Christmas Carol</i> ’ (2002 年度総会朗読報告)	26
Rycroft, David	2004 年度春季大会講演・朗読司会	27
Sanders, Andrew	「ディケンズと演技する自我」(1997 年度総会講演報告)	21
Sanders, Andrew	「ディケンズと階級」(1998 年度総会講演報告)	22
Schlicke, Paul	‘The Theatre Dickens Knew’ (2000 年度春季大会講演報告)	23

Schlicke, Paul	“‘Delightful, Splendid, and Surprising’: The Theatre Dickens Knew’ (特別寄稿)	24
Schlicke, Paul	‘Dickens and Shakespeare’ (特別寄稿)	27
Shelston, Alan	‘The Eagle and the Dove: Dickens, Mrs Gaskell, and the Publishing Culture of the Mid-Nineteenth Century’ (2004 年度総会特別講演報告)	28
Shelston, Alan	‘The Eagle and the Dove: Dickens, Mrs Gaskell, and the Publishing Culture of the Mid-Nineteenth Century’ (特別寄稿)	28
Slater, Michael	祝電	3
Slater, Michael	‘Creative Anger, Creative Writer: Dickens the Journalist and Dickens the Novelist’ (1995 年度春季大会講演報告)	18
Slater, Michael	‘The Artistry of <i>Our Mutual Friend</i> ’ (1999 年度総会講演報告)	23
Slater, Michael	‘Dickens’s Lives’ (2005 年度総会講演報告)	29
Snowden, Paul	‘Dickens and Drinking’ (1996 年度春季大会講演司会)	19
Stone, Harry	「ディケンズとカニバリズム」(1991 年度春季大会講演報告)	14
Williams, Tony	‘Dickens and “the Moving Age” ’ (2006 年度春季大会講演報告)	29
Williams, Tony	‘Dickens and “the Moving Age” ’ (特別寄稿)	29
	ディケンズ・フェローシップ日本支部の歩み (1970 年 12 月 – 1978 年 6 月)	1
	ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動 (1978 年 10 月 – 1979 年 9 月)	2
	ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動 (1979 年 10 月 – 1980 年 9 月)	3
	ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動 (1980 年 10 月 – 1981 年 9 月)	4
	ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動 (1981 年 10 月 – 1982 年 9 月)	5
	ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動 (1982 年 10 月 – 1983 年 9 月)	6
	ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動 (1983 年 10 月 – 1984 年 9 月)	7
	ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動 (1984 年 10 月 – 1985 年 9 月)	8
	ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動 (1985 年 10 月 – 1986 年 9 月)	9
	ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動 (1986 年 10 月 – 1987 年 9 月)	10
	ディケンズ・フェローシップ日本支部の活動 (1987 年 10 月 – 1988 年 9 月)	11

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1988 年 10 月－1989 年 9 月)	12
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1989 年 10 月－1990 年 9 月)	13
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1990 年 10 月－1991 年 9 月)	14
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1991 年 10 月－1992 年 9 月)	15
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1991 年 10 月－1992 年 9 月)	16
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1993 年 10 月－1994 年 9 月)	17
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1994 年 10 月－1995 年 9 月)	18
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1995 年 10 月－1996 年 9 月)	19
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1996 年 10 月－1997 年 9 月)	20
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1997 年 10 月－1998 年 9 月)	21
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1998 年 10 月－1999 年 9 月)	22
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (1999 年 10 月－2000 年 9 月)	23
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (2000 年 10 月－2001 年 9 月)	24
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (2001 年 10 月－2002 年 9 月)	25
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (2002 年 10 月－2003 年 9 月)	26
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (2003 年 10 月－2004 年 9 月)	27
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (2004 年 10 月－2005 年 9 月)	28
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (2005 年 10 月－2006 年 9 月)	29
ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動 (2006 年 10 月－2007 年 9 月)	30
日本におけるディケンズ関係の研究書, 翻訳書, ならびにフェロウシップ会員による研究書, 翻訳書等 (1974 年 4 月－1978 年 3 月)	1

日本におけるディケンズ関係の研究書, 翻訳書, ならびにフェロウシップ会員による研究書, 翻訳書等 (1978 年 4 月－1979 年 8 月)	2
ディケンズ関係の研究書・翻訳とフェロウシップ会員の著訳書4	
ディケンズ関係の研究書・翻訳とフェロウシップ会員の著訳書5	
ディケンズ関係の研究書・翻訳とフェロウシップ会員の著訳書6	
ディケンズ関係の研究書・翻訳とフェロウシップ会員の著訳書7	
日本におけるディケンズ関係の研究書とフェロウシップ会員の著訳書	8
日本におけるディケンズ関係の研究書とフェロウシップ会員の著訳書	9
日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書等	10
日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書等	11
日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書等	12
日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳等	13
日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書等	14
日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書等	15
日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書	16
日本におけるディケンズ関係ならびにフェロウシップ会員の著訳書・論文	17
フェロウシップ会員の著訳書・論文 (1994-95 年)	18
フェロウシップ会員の論文・編著訳書 (1995-96 年)	19
フェロウシップ会員の論文・著訳書 (1996-97 年)	20
フェロウシップ会員の論文・著訳書 (1997-98 年)	21
フェロウシップ会員の論文・著訳書 (1997-99 年)	22
フェロウシップ会員の論文・著訳書等 (1999-2000 年)	23
フェロウシップ会員の論文・著訳書等 (2000-2001 年)	24
フェロウシップ会員の論文・著訳書等 (2000-2002)	25
フェロウシップ会員の論文・著訳書等 (2002-2003)	26
フェロウシップ会員の論文・著訳書等 (2002-2003)	27
フェロウシップ会員の論文・著訳書等 (2004-2005)	28
フェロウシップ会員の執筆業績 (2005-2006)	29
フェロウシップ会員の執筆業績 (2006-2007)	30

編集後記

○今年で『年報』は第30号となり、『ディケンズ鑑賞大事典』もついに完成した。同時に過去一年の間に日本支部はかけがえのない人材を二人も失った。慶賀と惜別とが相次ぐということは、これまでも何度か経験した。いつの間にか自分もそれだけの年輪を重ねてきたということだろうか。村山敏勝氏とは彼が大学院生の頃からのおつきあいだったと記憶している。もうだいたい以前のことだが、京都であった大会か総会のときに、懇親会場に向かうバスの中で、現代の批評理論の動向についてどう思いますか、クウィア・スタディーズについて先生はどうお考えですか、と熱心に問いかけてきた若者が彼だった。急逝するまでの二年ほどの間、日本英文学会の大会準備委員会で一緒に仕事をしていたのだが、彼のアイデアと情報量の豊富さにずいぶん助けられた。間二郎先生は私の出身大学の先輩でもある。今から四半世紀以上も前、まだ駆け出しで尻込みする私を励まして、フェロウシップの大会に引っ張り出してくれた。ディケンズ関係以外でもいろいろお世話になっていた。穏やかで温かいお人柄で、ディケンズを深く愛した真のディケンズファンだった。

(原 英一)

○今回は出版が例年よりも遅くなりますが、冊子の厚さで埋め合わせになることを願っております。30年分の総索引を並べる際に改めて先達の蓄積に感銘を受けましたのは役得でありました。ただし、この厚さは索引ばかりではなく、寄稿が増えたことも大いに影響しているのです。充実しているのは過去ばかりではないことに喜びを感じつつ、予算を心配しております。

○会員業績の分量が増えたことに『鑑賞大事典』刊行の雇用創出効果の大きさを改めて感じます。同時に、文学研究が迎えている時代性を思うにこの種の総合事典が編まれることはもうあるまいと思うにつけ、個別の業績の蓄積が改めて今後重要になってゆくことを思います。

○昨秋仙台の大会に出向けなかったことは、留学時の一度を除いて休まず出席してきた身として残念でありましたが、松岡さんと玉井さんのお陰で文字だけのページになることを回避できました。

○そもそもは村山さんをお願いしていたDVD評でありましたが、掲載の通り代理のベンが誌面を汚すこととなりました。今後も活字以外のメディアも視野に入れて行ければと思っています。

(宮丸 裕二)

第30号投稿論文の審査結果

応募論文数 3 採用数 3

編集

原 英一 宮丸 裕二(補佐)

投稿論文審査担当理事

要田 圭治 金山 亮太 佐々木 徹 玉井 史絵

廣野 由美子 松村 豊子

ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報

第30号

発行 2007年11月20日

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1

東北大学大学院文学研究科英文学研究室内

電話 022 (795) 5961

印刷 株式会社 東北プリント

〒980-0822 仙台市青葉区立町 24-24